松本市文化財調査報告 No.105

松本市

SHIOKARA

塩辛遺跡 Ⅱ・Ⅲ

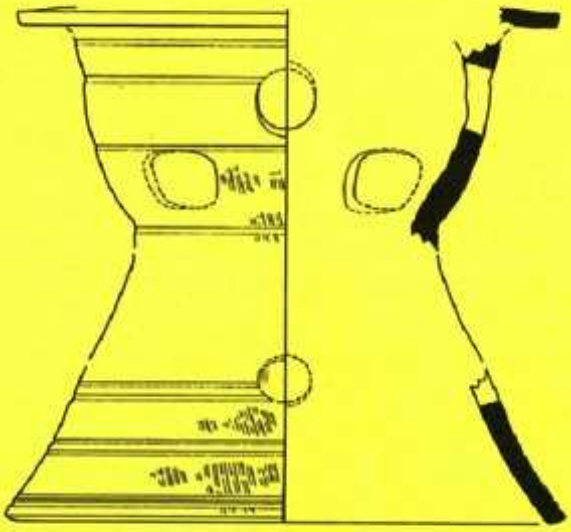
YAHAGI

矢作遺跡

SYOUINJI

松蔭寺遺跡

―緊急発掘調査報告書―



1993・3

松本市教育委員会

松本市

SHIOKARA

塩辛遺跡Ⅱ・Ⅲ

YAHAGI

矢作遺跡

SYOUINJI

松蔭寺遺跡

―緊急発掘調査報告書―

1993・3

松本市教育委員会

序

松本市北部に位置する岡田本郷地区は、開発に伴う発掘調査が何度となく行なわれており、さまざまな遺跡の存在が知られていました。このたび国道２５４号線バイパスの三才山トンネル有料道路松本トンネル工事が松蔭寺、矢作、塩辛の３遺跡に及ぶことになったため、松本市が長野県道路公社より委託を受け、松本市教育委員会が事業に先立って発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行なうこととなりました。

発掘調査は市教育委員会によって組織された調査団により、平成２年５月から平成３年７月まで数次にかけて行なわれました。作業は急な地形や夏の暑さ、冬の厳寒と凍結に悩まされるなど困難を極めましたが、参加者の皆様の御尽力により無事終了することができました。その結果、竪穴住居址のほか、掘立柱建物址などを発見し、また同時期の遺物を多数得ました。これらは今後地域の歴史解明に大変役立つ資料となることと思います。

しかしながら開発事業に先立って行なわれる発掘調査は記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた長野県道路公社の方々、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成５年３月

松本市教育委員会　教育長　守　屋　立　秋

例　言

1．本書は平成２年12月10日から翌３年７月27日にかけて行なわれた、松本市塩辛遺跡・矢作遺跡・松蔭寺遺跡の緊急発掘調査報告書である。塩辛遺跡は松本市岡田伊深、稲倉、洞の３地籍、矢作遺跡は松本市岡田伊深、松蔭寺遺跡は大字島内平瀬川東に所在する。

2．本調査は、国道 254号線建設事業に伴う緊急発掘調査であり、長野県より委託を受け、松本市教育委員会が実施したものである。

3．本書の作成は、松本市より委託を受けた㈶松本市教育文化振興財団が行なった。

4．本書の執筆は第１章：事務局、第２章第２節１：今村克、２：(1)①島田哲男、②竹内靖長、(2)竹内靖長、(4)新谷和孝、(5)(6)今村克、第３節１：森義直、２：三村竜一、高山一恵、３：(1)竹原学、(3)今村克、第４節：今村克、その他：三村竜一が行なった。

5．本書作成にあたっての作業分担は、次に掲げる通りである。

トレース：竹原久子、松尾明恵、横山真理、三村孝子、開嶋八重子、中村朝香、平出貴史、MIN AUNG TIIWE、村山牧枝、上條尚美、高山一恵、竹原学、直井雅尚、今村克

遺構図整理：石合英子

図版作成：今村克、林和子、竹原久子、石合英子、上條尚美、村山牧枝、堤加代子、倉科祥恵、高山一恵、竹原学、竹内靖長

遺物実測：竹原久子、松尾明恵、横山真理、三村孝子、新谷和孝、上條尚美、村山牧枝、吉沢克彦、久根下三枝子、平出貴史、望月映、直井雅尚、関沢聡、竹原学、竹内靖長、高桑俊雄、今村克

遺構写真：今村克、三村竜一

遺物写真：宮嶋洋一、市川温

一覧表作成：今村克、林和子、石合英子、高山一恵

6．本文中の遺構名は下記のように略した。

第○号竪穴住居址	→	○住	第○号竪穴状遺構	→	○竪
第○号建物址	→	○建	第○号土坑	→	○土
第○号溝址	→	○溝			

7．図中の濃い網目（スクリーントーン）は焼土、薄い網目は柱痕を示す。

8．本書の編集は、三村竜一が行なった。

9．委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は調査結果の記載を重視したために、本書から割愛したが、出土遺物、図類と共に松本市教育委員会が保管している。

目　次

序
例言
目次
第1章　調査経過
　第1節　調査に至る経過 …… 3
　第2節　調査体制 …… 3
第2章　調査
　第1節　調査の概要 …… 4
　第2節　塩辛遺跡II・IIIの調査
　　1.遺構
　　(1)竪穴住居址　①縄文時代 …… 5　②古墳時代以降 …… 7
　　(2)建物址 …… 7　(3)竪穴状遺構 …… 7
　　(4)土坑・ピット …… 8　(5)火葬墓 …… 8
　　(6)柱列 …… 8　(7)溝址 …… 9
　　2.遺物
　　(1)土器　①縄文時代 …… 9　②古墳時代以降 …… 11
　　(2)硯 …… 13　(3)瓦 …… 14
　　(4)土製品　①縄文時代 …… 14　②古墳時代以降 …… 15
　　(5)鉄器 …… 15　(6)銭貨 …… 15
　　(7)石器・石製品 …… 16
　第3節　矢作遺跡の調査
　　1.矢作遺跡の地形・地質 …… 80
　　2.遺構
　　(1)竪穴住居址 …… 81　(2)建物址 …… 82
　　(3)竪穴状遺構 …… 83　(4)土坑・ピット …… 84
　　(5)溝址 …… 86
　　3.遺物
　　(1)土器 …… 87　(2)土製品 …… 89
　　(3)銭貨 …… 89　(4)石器 …… 90
　第4節　松蔭寺遺跡の調査
　　1.遺構 …… 115
　　2.遺物 …… 115
　　3.周辺遺跡の調査　泣坂古墳 …… 116
第3章　調査のまとめ …… 121

遺跡の位置

周辺遺跡名　1.塩辛 2.矢作 3.松薩寺 4.出溝 5.竹之上 6.岡田町 7.向山 8.二反田 9.下出口 10.穴田前 11.宮の上 12.西裏 13.高の前 14.岡田神社裏 15.堀ノ内 16.田中 17.下屋敷 18.五反田 19.塩倉 20.丸山 21.天神の木 22.松岡 23.七日市場 24.杵坂 25.たて 26.北部古窯址群 27.神沢 28.峰の平 29.狐塚 30.トウコン原 31.西原 32.大輔原 33.原畑 34.塚田 35.寺山白鳥 36.老根田

古墳名　A：泣坂（坂下） B：山城 C：高根塚 D：十取場 E：塚田 F：中島 G：鳥居山 H：大屋敷1・2号 I：老根田 J：芥子坊主山 K：西原 L：下屋敷 M：猫塚 N：塚畑 O：水汲1～5号 P：松岡 Q：矢崎 R：塚山

第1図　遺跡の位置と周辺遺跡

第1章　調 査 経 過

第1節　調査に至る経過

塩辛遺跡・矢作遺跡・松蔭寺遺跡は周知の遺跡として、松本市の遺跡台帳及び地図に記載されている。これらの遺跡が松本市島内から岡田に抜ける国道 254号線建設事業用地に含まれ、破壊される恐れが生じた。そこで松本市教育委員会は、長野県松本建設事務所・長野県道路公社と埋蔵文化財保護協議を重ねた。協議の結果、松本市教育委員会は平成2・3年度に塩辛遺跡・矢作遺跡・松蔭寺遺跡の発掘調査を実施して、記録保存を行なうことにした。また、取りつけ道路にかかる泣坂古墳群でも、長野県松本建設事務所からの委託による調査が並行して進められた。このうち塩辛遺跡の調査は平成2～3年度に亘って行なわれ、平成2年度はほ場整備事業に伴う調査と並行して行ない、3年度は単独で実施している。尚、ほ場整備事業に伴う調査分については、平成3年度に刊行している。その他の調査は、平成2年度に実施した。

第2節　調査体制

【平成3年度】発掘調査

調 査 団 長　松村好雄(松本市教育長)

調査担当者　・塩辛遺跡II：今村克（社会教育課）

・塩辛遺跡III：今村克（社会教育課）

・矢作遺跡：三村竜一、今村克（社会教育課）

・松蔭寺経塚（泣坂古墳）：今村克（社会教育課）

調 査 員　森義直、三村巌、松尾明恵

協 力 者　青木雅志、赤羽章、赤羽包子、赤羽芳子、朝倉利子、浅輪敬二、新井卿一、新井静子、飯沼忠、五十嵐周子、池田稔積、石合英子、石合利加子、石川末四郎、石田久美子、因幡美津子、内澤紀代子、内田和子、大久保棟子、大久保たつ子、大久保知巳、大久保幸子、大澤真一、大田多賀一、太田千尋、大谷成嘉、大塚袈裟六、大月育英子、大堀一男、小笠原正、岡田美穂、岡部登喜子、奥原富蔵、開嶋八重子、上條ため子、上條尚美、上条益子、川上とよみ、川窪命子、神沢ひとみ、北澤清治、北沢達二、北林哲津子、北林緑、久根下三枝子、熊谷幸一、桑井まさ、小池愛子、小池直人、小岩井美代子、小島茂富、見玉春紀、小林謙次、小林文子、小林本子、小松正子、斉藤徳宝、坂下しげる、佐々木義次、佐藤幸司、下里末子、下里忠靖、下里千代子、下里みつへ、鈴木なつ江、瀬川長廣、袖山勝美、瀧澤隆男、滝沢直美、滝沢潤一、滝沢紫子、田口喜重、武田睦恵、田多井うめ子、田多井直、田中正治郎、田原一勇、田村秀夫、塚山つた江、塚田文子、堤加代子、鶴川登、寺島貞友、所園子、中木百合子、中島新嗣、中島千矢子、中島治香、中島好子、中條光子、中條基世、中村朝香、中村恵子、中村嵩、中村文一、新納道子、西川正雄、西牧洋忠、西村晴子、西村好、巾崎助治、林昭雄、林和子、原とみ、原澤一二三、平林薫、深井美登利、深井美代恵、藤井源吾、藤井久子、藤井マツエ、藤井道明、藤原昭義、藤本嘉平、藤本利子、降旗大太郎、洞沢文江、牧久雄、町田庄司、松尾さだ子、松山雅樹、松本英人、真々部まさ子、丸山安子、丸山恵子、三浦節子、三沢元太郎、見村芳子、宮川須磨、宮嶋洋一、村山牧枝、村山正人、百瀬一子、百瀬清子、百瀬綾代、百瀬二三子、百瀬正美、百瀬義友、百瀬亘、矢崎寛子、矢沢うめ子、山口順子、山崎力蔵、横山小夜子、横山恒雄、横山真理、横山保子、吉江和美、吉江園子、吉江孝子、吉沢克彦、吉田勝、吉原明子、米山禎興、我妻武夫

事 務 局　荒井寛（社会教育課長）、山口勝（課長補佐）、熊谷康治（課係長）、直井雅尚、関沢聡、木下守、竹内靖長（主事）、久保田剛（事務員）、荒井由美、山岸弥生

【平成4年度】報告書作成

教育委員会事務局：島村昌代（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、窪山雅之（主任）

財団法人松本市教育文化振興財団

事 務 局：深澤豊（事務局長）、牟禮弘（事務局次長）、青木孝文（事務局次長補佐）

松本市立考古博物館：神澤昌二郎（館長）、直井雅尚、関沢聡（主任）、久保田剛（主事）、荒井由美、藤原美智子

第2章　調　　査

第1節　調査の概要

1.塩辛遺跡II・IIIの調査

塩辛遺跡は松本市の北部、岡田・洞・稲倉の3地籍にある。今回の調査は県営ほ場整備事業に伴う調査（第I次）と並行して行なっている。I次調査の報告書は、本報告に先立ってH3年度に刊行した。今回のII・III次調査報告にあたっては塩辛遺跡全体の評価に務め、調査地区と遺構No.については本来1つの遺跡であるので一連のものを付けた。本遺跡の調査面積は、I次調査ではA地区2,340m²、II次ではB・C地区2,326m²、III次ではD～H地区1,104m²、合計5,770m²となる。表土剝去は重機を使用し、I～III次に亘る調査で確認した遺構は、竪穴住居址34（縄文時代19、古墳～平安時代12）、建物址13（古墳～平安時代）、竪穴状遺構5（縄文時代3、古墳～平安時代1）、土坑47（縄文時代3、古墳～平安時代6）、ピット530（縄文時代～中世以降）、火葬墓1（中世以降）、柱列2、溝址5（縄文時代1）、土器集中遺構1（縄文時代）である。尚、古墳～平安時代の時期については財長野県埋蔵文化財センター　1990『中央自動車道 長野線　埋蔵文化財発掘調査報告書4　総論編』の編年に従った。

2.矢作遺跡の調査

矢作遺跡は松本市の北部、岡田地籍にある。地形的には伊深城山から伸びる舌状台地上を中心に展開しており、北側は目前に伊深城山、西側には芥子坊主山が迫り、約700m東には女鳥羽川が東山山塊に沿って南流している。南は松本市街へ続く緩やかな傾斜地となる。今回の調査地の地番は岡田伊深632地他である。調査対象地の現況は水田・畑として利用されており、生活道路や用水路を残して調査地区A～D地区を設定した。実質調査面積は全体で5,040m²となる。

表土除去は、重機を使用して行なった。舌状台地上のA地区は耕作土を20～30cm削平すると、縄文時代～中世以降の遺構が同一検出面に確認された。他の地区は遺構検出面迄40～100cm程掘り下げている。検出した遺構には竪穴住居址、建物址、竪穴状遺構、土坑、ピットがある。

3.松蔭寺遺跡の調査

松蔭寺遺跡は、松本市北西部島内下田地籍にある。芥子坊主山（891.5m）西側山麓の斜面は斜度20°～30°の急傾斜であるが所々尾根状の地形が残り、松蔭寺遺跡もこの地形上にのる。眼下には安曇平が一望できる。現状は山林であった。ここから南西に直線距離で550m、標高で70m下った場所に泣坂古墳群があり、この周辺の調査も行なった。調査はどちらも山林で、すべて手作業で行なった。調査区は松蔭寺遺跡は1ヵ所、泣坂古墳群周辺はA・B・C地区を設定した。調査によって中世の遺構、遺物が得られた。調査面積は松蔭寺遺跡300m²、泣坂古墳群周辺で3,000m²である。

第2節　塩辛遺跡II・IIIの調査

1.遺構

今回の調査では、縄文時代の住居址6軒、平安時代の住居址1軒、建物址2棟、竪穴状遺構2個、土坑16個、ピット105個、火葬墓1基、溝址4本を検出した。以下個々の遺構について記述をするが、遺構の帰属時期については、I次調査の報告書と一部異なった部分がある。これはI次調査の報告書刊行後に遺物の整理がいっそう進んだために生じたことをここにお断わりしておく。

(1)竪穴住居址

①縄文時代

第30号住居址(第6図)

B地区南部、N30～35・E41～46に位置する。平面形は直径5.04mのほぼ円形を呈する。黄色土の地山を掘り込んで作られており、残存壁高10cmを測る。覆土は黒褐色土で、拳大の礫を若干含む。単層であり、自然埋没と考えられる。黄色土の地山を床面とし、固くしまっている。住居址中央北寄りに炉跡と思われる土坑がある。規模は長径120cm、短径115cmのほぼ円形で、深さ20cmである。覆土は2層に区分できI層は拳大～50cm位の礫を多く含む黒褐色土で、礫間に土器片が多く入り込んでいる。II層は焼土で骨片を含んでいる。大形の地床炉あるいは石囲炉の石が抜き取られた跡と考える。ピットは全部で16個検出した。P_1～P_5は直径30～40cmの円形で、深さ40～50cmを測り、柱穴とした。壁際には幅10cmの周溝が巡る。南東側で1ヶ所切れる他は全周を巡る。遺物は、住居址覆土中および床面上からの土器出土量は、あまり多くない。土器以外では石鏃、凹石がある。住居址の時期は遺物、炉の形態から縄文時代中期後葉2期（唐草文土器II新段階）をあてたい。

第31号住居址(第7図)

B地区南部、N36～41・E48～53に位置する。13建・P3・第1号柱列のP_{11}・P_{12}が切る。平面形は直径4.8mのほぼ円形を呈する。30住と同じく地山を若干掘り込んであるが、残存壁高は6～20cmと浅い。覆土は黒褐色土で1cm位の礫を若干含む。自然埋没と考える。黄色土の地山を床面としており、固くしまっている。住居址中央に長径160cm、短径130cm、深さ42cmの炉跡と思われる土坑がある。覆土は2層に区分される。I層は黒褐色土で拳大～20cm位の礫、土器片が多く混入する。II層は褐色土でそれらのものをほとんど含まない。大形地床炉あるいは石囲炉の石が抜き取られたあと、自然埋没したものと考える。ピットは21個検出した。P_1・P_2は直径35cm前後、深さ40cmを測る。P_3～P_5は直径35cm前後、深さ30cm前後で、これらを柱穴とした。周溝は住居址東半部の壁際に2重に巡る。幅15～20cm、深さ12～15cmである。遺物は30住同様、住居址覆土中、床面上からの土器出土量はあまり多くない。土器以外は、石鏃、凹石がある。本址の時期は、遺物・炉の形態から、縄文時代中期後葉3期（唐草文土器III段階）と考える。

第34号住居址(第8図)

B地区南部、N28～33・E50～56に位置する。切り合い関係はない。重機による耕作土除去により、西半部は住居址床面まで削平してしまったため、平面形・規模は確定できない。炉跡と考えられる土坑と埋甕、ピット、周溝の一部をもって住居址とした。炉跡は住居址のほぼ中央にあり、規模は長径150cm、短径130cm、深さ43cm、断面は摺鉢型を呈している。底部には厚さ4cmの焼土層が認められた。大型の地床炉か石囲炉の石が抜き取られた跡と考える。ピットは6個検出した。P_1～P_4は直径26～30cm、深さ16～22cmで柱穴とした。住居址西側には埋甕を検出した。直径30cm、深さ12cmのピット内に縄文土器深鉢の底部を正位に据えてある。この埋甕の外側に幅10cm、深さ6cmの周溝が巡るが、住居址東側では検出されなかった。遺物は住居址中央の土坑内から出土した土器と埋甕を主とし、わずかな出土量にとどまる。本址の時期は埋甕等の遺物から、縄文時代中期後葉3期（唐草文土器Ⅳ新段階）と考える。

第35号住居址(第9図)

B地区南部、N26～31・E46～51に位置する。住居址南西部を細長い溝状の遺構によって切られる。34住同様、重機によって床面まで削平してしまい住居址の平面形、規模は不確定である。炉址と考えられる土坑とピットをもって住居址とした。炉址と思われる土坑は住居址のほぼ中央にあり、規模は長径100cm、短径94cm、深さ36cmで断面は船底型を呈する。覆土は2層に区分され、上層の黒褐色土中には土器、礫等は含まない。下層の褐色土中には土器片が多く含まれている。焼土は観察されなかったが、大形の地床炉か石囲炉の跡と考えられる。ピットは6個検出した。P_1～P_5の直径は22～36cm、深さは5～16cmと浅いが柱穴とした。遺物は大半が炉跡と考えられる土坑から出土しており、土器、石器がある。本址の時期は遺物から縄文時代中期後葉4期（唐草文土器Ⅲ段階）と考える。

第41号住居址(第10図)

H地区中央北寄り、N167～171・E171～174に位置する。5溝に切られる。平面形は長径358cm、短径312cmの楕円形で黄色土の地山を掘り込んで作られている。覆土は黒褐色土の単層で自然埋没と考える。床は黄色土の地山を床面とし固くしまっている。周溝は検出されなかった。住居址の中央北寄りに埋甕炉があり、縄文土器深鉢の体部下半を用いて正位に据えてある。内部に焼土や炭化物は観察されない。周囲に長さ30～40cmの扁平な礫が数個あり炉の構築材と考えられる。ピットは5個検出された。P_1～P_4は直径12～16cm、深さ16～22cmあり柱穴とした。遺物は土器が床面から5～10cm程度浮いた状態で出土している。出土量は多くない。本址の時期は遺物から縄文時代中期前葉と考えられる。

第42号住居址(第11図)

C地区南西隅に位置する。重機によって検出面まで土を除去した段階で土器片、および焼土の広がりを確認した。検出作業で縄文時代の土器を伴う炉と埋甕を検出したが、床面、柱穴、ピット、

周溝は発見できなかった。炉と考えるピットは直径40cmのほぼ円形で、断面は船底型を呈する。覆土は3層に区分でき、Ⅰ層とⅡ層の間に土器片が内側へ倒れ込む様に入っている。さらに土器片の下、Ⅲ層は焼土が3cm程度堆積していた。このことから埋甕炉と判断した。また埋甕は直径40cmの円形の掘り方を持ち、中央に縄文土器の深鉢底部を正位に据えていた。本址の時期は土器から縄文時代中期後葉3期と考えられる。

②古墳時代以降

第40号住居址(第11図)

D地区南西隅、N82～84・E91～95に位置する。切り合いはない。調査D地区の端で住居址の一部分を検出した。調査区域外に遺構がのびるため平面形、規模は不明である。灰黄褐色土の床面が壁際から内側に向け落ち込む箇所があり、底に焼土が認められたため、カマドの火床部分と考えた。カマドの構造、規模は不明である。柱穴等のピットは検出されなかった。遺物は床面上から大形土錘状の形態をした土製品（第56図9）や須恵器杯片がある。本址の時期は3～4期と考える。

(2)建物址

第13号建物址(第12図)

B地区南部、N34～40・E43～49に位置する。31土に切られ、31住を切る。3間×2間の総柱式建物である。柱穴は黄色土の地山を若干掘り込んでおり、円形ないし楕円形の掘り方をもつ。覆土は黒褐色土である。柱間寸法は桁行、梁行とも1.3～1.9mを測る。遺物はP_6から須恵器蓋が出土している。本址の時期は古墳時代後期～奈良時代と考える。

第14号建物址(第13図)

D地区北部、N84～89・E112～116に位置する。切り合い関係はない。2間×1間の側柱式建物である。柱間寸法は、桁行2.8～3.2m、梁行1.3～1.4mを測る。柱穴は黄色土の地山を12～26cm掘り込み、柱痕が観察される。覆土は暗褐色土で柱痕の周囲の覆土は黄褐色粒を含む。遺物の出土はなく、本址の時期は不明である。

(3)竪穴状遺構

第6号竪穴状遺構(第14図)

H地区中央北寄り、N168～171・E174～177に位置する。切り合い関係はない。平面形は楕円形を呈し、黄色土の地山を浅く掘り込んで作られている。中央に直径46cm、深さ12cmの焼土の広がりある。他に柱穴となるようなピットはないため住居址とはせず竪穴状遺構とした。遺物の出土はないので本址の帰属時期は不明である。

第７号竪穴状遺構（第14図）

Ｈ地区中央南寄り、Ｎ152～156・Ｅ157～162に位置する。51土・52土・Ｐ８に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、地山を20cm程掘り込んで作られている。カマド等の施設および床下ピット、柱穴などはないので竪穴状遺構とした。本址中央部の床面上には、拳大～人頭大の礫が多く礫間から土器の破片が何点か得られた。遺物の出土量は少ないが、本址の時期は３～４期と考える。

(4)土坑・ピット（第15～16図）

Ｂ地区では土坑２個・ピット72個、Ｄ地区・土坑２個・ピット12個、Ｅ地区・土坑２個・ピット１個、Ｆ地区・ピット３個、Ｇ地区・ピット４個、Ｈ地区・土坑７個・ピット12個、Ｉ地区・土坑３個・ピット１個を検出した。土坑については全て掲載した（第15～16図)。ピットについては掲載していない。遺物の出土を伴う土坑がないため、土坑の時期、性格について言及できるものはない。遺物の切り合い関係から31土は奈良時代以降、51土・52土は平安時代前期以降と考えられる。わずかにピットではＢ地区Ｐ456から銭貨２（熙寧元宝、永楽通宝）が出土している。同じくＢ地区Ｐ458から北陸系の縄文土器、内面赤彩された縄文土器が出土している点が注意される。

(5)火葬墓（第15図）

Ｈ地区南部、Ｎ152～155・Ｅ150～152に第１号火葬墓がある。規模は長径230cm、短径140cm、深さ100cmを測る。土坑上面の黒褐色土を取り除くと、炭化材および焼土が土坑底部全面に厚く堆積していた。覆土中から骨片等は出土していないが、土坑の規模、形状から火葬墓とした。

(6)柱列（第４図、遺構配置図(1)）

第１号柱列

Ｂ地区中央に位置する。P_1～P_{12}から成り全長18mを測る。柱間寸法は1.7～2.3mで２mが一番多い。P_2-P_3-P_4の間隔が不規則である以外はほぼ等間隔である。ピットは直径55cm前後、深さ20～40cmを測る。遺物はP_4の覆土から須恵器片（器種不明）が出土している以外はない。遺構の帰属時期は不明だが、Ａ・Ｂ地区で検出された建物址群との関連が注目される。

第２号柱列

Ｂ地区北西隅に位置する。P_1～P_4からなり全長7.2mを測る。柱間寸法は2.20～2.45mである。第１号柱列にほぼ直交する位置にある。柱穴は直径78～80cm、深さ20cm前後を測る。遺物の出土は伴わず、帰属時期は不明である。大形建物址の可能性もあるが柱列として扱った。

(7)溝址(第17図)

B地区で2本、C地区で1本、G地区で1本、H地区で1本の溝址および自然流路を検出した。B地区の1・2溝とH地区5溝は、断面の形状、覆土の堆積状況から自然流路と考える。G地区で検出した4溝は幅170cm、深さ50cmを測る。断面は逆台形で底は平らである。覆土の堆積状況から自然埋没とみる。溝の幅が調査地区内で見る限り均一であることや、底の形状から人為的に掘られた溝であると思われる。溝内部から遺物の出土はなく帰属時期は不明である。

最後にC地区の調査についてふれてみたい。C地区は、現況は水田であった。他の地区と同様、重機によって耕作土以下の除去を行なったところ地表下80cmで黒褐色土の層に達した。更に平均40cm掘り下げると調査地の東西では地山が表れた。中央部分には更に厚く黒褐色土が堆積していた。このことからC地区の原地形は調査区の中央が窪みとなる谷地形であることが判明し、中央部分の黒褐色土の堆積は自然流路が存在したことを伺わせる。またこの黒褐色土中から大量の縄文土器が採集された。しかし調査区西側の標高の高い場所に炉址が検出されたのと、中央部に焼土の堆積が認められた以外は住居址の痕跡がなく、現場が谷地形であることなどからこれらの土器は土器捨て場に遺棄されたものと考え、土器集中遺構として扱った。C地区の調査は掘削後まもなく出水により水没してしまい、更なる調査を行なうことができなかった点が悔やまれる。

2.遺物

(1)土器

①縄文時代(第20～39図)

今回の数次に渡る調査では、A～C地区を中心に北側のH地区まで、縄文時代中期中葉・後葉の土器群を中心に、縄文時代早期末、中期前葉の土器が出土している。

本文の土器編年観については、遺構内から出土している土器で、一括性があると見られる土器を一型式と考える八ヶ岳西南麓の井戸尻編年に基づき、遺構での一括出土土器群を中心として記述する。また、一括土器群とは明らかに時期差があるものについては、混入遺物として切り離して考えた。中期前葉から中葉については井戸尻編年（狢沢式、藤内II式）を、後葉については、長野県の中南信地区に分布する唐草文土器編年Ⅰ～Ⅳ段階を使用する。唐草文土器編年については、Ⅰ段階（井戸尻III式末～曽利Ⅰ式期、加曽利EⅠ式～II式前半期）、II段階（曽利II式期、加曽利EII式期）、III段階（曽利III式～IV式前半期、加曽利EIII式期）、IV段階（曽利IV式後半～V式期及び後期初頭型式期、加曽利EIII式後半～IV式期及び称名寺式期）と考え区分し、古と新段階に分けられるものは分けた（唐草文土器編年については、中山地区の山影遺跡でも同様な時期の土器が出土しているので、これと合わせて見ていただければと思う)。以下、時期毎と遺構毎に概観して行く。

a)縄文時代早期末の土器

A地区（77)、B地区（75)、C地区（74)、H地区（76）など少量であるが、繊維を多量に胎土に含む深鉢が出土している。文様（縄文や条痕等）があったかどうか器壁が荒れておりはっきりとしないが、76には縄文と思われる薄い文様がみられる。

b)縄文時代中期前葉〈狢沢式期〉

H地区41住の土器群が該当する。その他にC地区でわずかに出土している（151)。61は隆帯の横位の楕円形の区画文が施され、全面に指頭圧痕が施された樽形の深鉢、59は無文の口縁に向かって開く深鉢、60は、北陸地方系の半載竹管による半隆起線の区画文で、中に格子目状の文様を充塡した新崎式系の深鉢、58は浅鉢である。

c)縄文時代中期中葉1〈藤内II式期〉

A地区に集中して出土し、19・27住（整理時に2棟重複の可能性が高いと判断されたが、遺物が混在しているためあえて分別しなかった。本期の特徴を示す一群は19住に帰属する可能性が高い)、26住が該当する。また、20住104は覆土中に混入した当期の土器である。ほとんど深鉢が主体で、104は有孔鍔付土器の胴部片である。文様は隆帯・沈線で、抽象的・具象的・幾何学的な文様を描くもの、縄文のみの施文のものの2種に大別される。12は藤内I式傾向の土器である。15は、所謂「焼町式土器」の口縁部である。

d)縄文時代中期中葉2〈井戸尻I式期〉

A地区19・27住（11・17・20・21・23、27住に伴う可能性が大)、B地区P458（62）が該当するが出土量は少ない。また、19住とされる土器群中に27住の土器が混じった可能性も考えられる。P458の62は、北陸地方の天神山式に近似する土器の把手で、この種の土器は焼町式土器とは施文手法・胎土等が異なっている。P458からは、この他に赤彩された有孔鍔付土器の胴部破片が出土している。

e)縄文時代中期後葉1〈唐草文土器I段階期〉

A地区23住（37）・29住（25）・土坑33（63）・検出面（73）等が該当する。23住の土器は口縁部にクランク状の隆帯文が付く加曽利EI式系である。29住、33土のものは、前段階の井戸尻III式的文様を強く残した深鉢である。

f)縄文時代中期後葉2〈唐草文土器II段階期〉

唐草文土器I段階の様相を強く残した古段階とIII段階のこの唐草文土器の名を象徴した土器文様である唐草文（渦巻文等）や腕骨文等と地文に綾杉沈線文・縦位条線文が施される土器が多くなる新段階に分けられるものと考えられる。古段階としては、A地区22住（32～36）・24住（22・39・40)、C地区土器集中（68・70～72)、A地区20住に混入したもの（29）等が該当する。新段階としては、A地区16住（2・3)、18住（4～8)、B地区30住（42～44）等が該当する。器種としては深鉢がほとんどで、24住22は有孔鍔付土器の胴部と考えられる。24住40は、I段階の様相を強く残す土器で、18住7・8などはIII段階に多くなる樽形の深鉢の器形の土器である。18住5なども文様的に

III段階のものに近い。22住32は隆帯の剣先文が貼付され、その周囲には列点文が施され、地文には縄文が転がされた当地方では数少ない深鉢である。22住34、24住39、C地区土器集中67は、加曽利E系と考えられる深鉢である。本段階の深鉢で特徴的なのは、口縁部が無文で、口縁端部が外側に肥厚化し、内側に口縁が折れるか、粘土紐が貼付され、蓋受けのようになる複合的な口縁端部の深鉢が特徴的と考えられる。

g)縄文時代中期後葉3〈唐草文土器III段階期〉

II段階的な様相を残す土器と樽形に代表される深鉢形の土器で標準的なIII段階の土器の古段階と、樽形の土器で口縁部無文帯の下に横位の文様帯を施さず、直下に渦巻文等の唐草文が施され、地文の綾杉沈線文の施文法も雑となる新段階に分けられると考えられる。古段階としては、B地区31住（47～50)、34住（51）等が該当し、新段階としてはA地区21住（31)、C地区42住（64・65）が該当する。新段階のものは比較的IV段階に近いものと考えられ、21住31や42住64などは加曽利EIII式でも新しい段階のものと考えられる。31住46は小形な有孔鍔付土器である。

h)縄文時代中期後葉4〈唐草文土器IV段階期〉

加曽利E式系の土器が多くなり、唐草文土器の施文は雑な施文や沈線というより凹線的な文様となり、古段階と新段階のものに分けられると考えられる（詳細については山影遺跡報告を参照されたい)。古段階としてはA地区15住(1)、37住（56・57)、C地区土器集中（69）などが該当し、新段階としてはA地区20住（27・28・30)、B地区35住（52～54）などが該当する。樽形の唐草文深鉢の施文は、古段階では、隆帯の渦巻文や懸垂文などの唐草文が残っているが、新段階だと沈線・凹線文の施文が主体となり隆帯は少なくなる。

②古墳時代以降(第39～48図)

今回の調査で出土した古墳時代以降の土器は、主として竪穴住居址・掘立柱建物址などの遺構からから出土している。時期的には、古墳時代末（7世紀末）～平安時代前半（9世紀前半）の様相を呈している。これらの土器の器種・器形は文献1、年代観は文献1・3を引用した。以下、土器の器種・器形の概要と各土器群の様相を述べる。

a)器種・器形

土師器：食膳具は、非ロクロ調整された杯E・杯F・内面黒色処理された高杯がみられる。煮炊具では、甕A・B・C、小形甕B・Dが出土している。

黒色土器A：食膳具の杯Aがみられる。

須恵器：食膳具では、無高台の杯A・有台の杯B、返りのある蓋A・口縁端部が屈曲する蓋B、高杯、高盤、鉢Aで構成される。杯Aには、底部調整がヘラ切り未調整のもの・ヘラ切りのちヘラ削り調整のもの・回転糸切り調整のものがある。蓋は、内面に返りが付く蓋A、口縁端部を屈曲させる蓋Bがみられる。貯蔵具では、長頸壺・短頸壺・甕が出土している。特殊品としては、器台（第39図-2）が出土している。この器形は、南西約300～400mに位置する岡田町遺跡D区（平成4年

度報告）においても出土している。岡田町遺跡の報告書においては、不明品として扱っており十分な図化・提示ができなかったので、本報告書において再提示している（第39図-1）。同種の器台は、愛知県小牧市篠岡78号窯から良好な資料が出土している（文献2，第39図-3）。篠岡78号窯は、萩野繁春氏による美濃・尾張地方の須恵器の編年（文献3）によると、7世紀末に比定されている。本遺跡から出土した2は、4住と2建から出土したものが接合しているため、所属土器群が判然としない。器形は、脚部が大きく下方に開いて体部は内彎して口縁部が大きく外反する。口縁内面は、ロクロ調整で引き上げられた後に粘土板状のもので上面を閉じている。脚部には円形、体部には円形・隅丸方形の透かしが2周にわたり穿たれている。透かしの単位は不明である。器面はロクロナデ調整され、脚部はタタキ目がみられる。また、体部から脚部には1～2条の沈線がある。

b)各土器群の様相

文献1における編年観に基づいてみると、本遺跡の土器群は1期～5期の範疇に納まる。これら各時期の様相と代表的な土器群についてみてみたい。

1期（7世紀末）：蓋A（内面に返りをもつ）を伴なう土器群である。本遺跡における当該期の土器群としては、1住・2・4・5・7・13建出土土器群があげられる。これらのうち、資料的に良好な土器群としては1住出土土器群があげられる。以下、1住出土土器群の様相を述べる。出土量は多く、33点を図化している。須恵器が主体をなしている。食膳具では、須恵器杯A・杯B・蓋A・蓋B・高杯、土師器杯D・杯Fがみられる。須恵器杯Aは、底部の調整が回転ヘラ切りのち回転ヘラ削り調整（11・12・17）と、回転ヘラ切りのちナデ調整（13）の2種類みられる。法量は、口径10～12cm前後の小形のものが主体である。体部の開きは弱く、箱形を呈する。須恵器杯Bは、高台部分が外側へ長く突き出るもの（19）や、短く台形を呈するもの（18）がみられる。須恵器蓋は、内面に返りのあるもの（蓋A）と、端部を屈曲させる（蓋B）の両者がみられる。蓋Aの返りは形骸化したものが多く、くの字状に僅かに引き出されたもの（2・3・5・6）と、突帯状に断面三角形を呈するもの（4・9・10）がみられ、共に宝珠つまみがつく。土師器杯D（21）・杯F（20）は、非ロクロ調整である。杯Dは、体部外面下半から底部にかけて手持ちヘラ削りが施される。20の杯Fは体部下半に稜をもち、内外面朱彩されている。煮炊具は土師器で構成され、甕A・Cがみられる。当該期の土器群は、概して煮炊具の割合が高い傾向にあるが、本址土器群ではむしろ食膳具の須恵器杯・蓋が多量に出土している。また、出土した須恵器片には窯壁や自然釉が付着した不良品が多くみられ、当該期の須恵器窯が周辺に存在する可能性もある。

2期（8世紀初頭）：須恵器杯D（口縁内面に立ち上がりをもつ杯）・蓋Aなどが消滅する時期である。当該期の土器群としては、2住出土土器群があげられる。以下2住の様相を述べる。出土量は少ない。食膳具が少なく、煮炊具の割合が高い。食膳具では、主として須恵器杯A・杯B・蓋A・蓋Bが出土しており、土師器はほとんどみられない。須恵器杯は、高台の付く杯Bが増加している。蓋は口縁端部が屈曲するものが主体である。34は、混入品か。煮炊具は、土師器甕B（42～

45）が出土している。

3期（8世紀中頃）：須恵器杯に、底部回転糸切りするものが出現する時期である。当該期の土器群は、3・9・28住出土土器群があげられる。これらのうち、3住土器群が比較的良好である。以下、3住について様相を述べる。合計19点を図化している。食膳具では須恵器杯A（47～49）・杯B（50～54）・蓋B（46）が出土している。杯Aは、底部回転ヘラ切り調整と回転糸切り調整の両方がみられるが、量的には回転ヘラ切りされるものが多い。51の杯Bは、胎土などから美濃須衛産の可能性が考えられる。煮炊具は、土師器甕A（64）、小形甕B（62）がみられる。55の土師器杯は混入品と考えられる。

4期（8世紀後半）：須恵器杯Aは、底部回転糸切り調整されるものが大部分となる。当該期では、4・6住出土土器群が相当する。これらのうち、4住出土土器群について述べる。31点図化している。食膳具の主体は須恵器で占められ、杯A（84～86・89）、杯B（87・88）、蓋B（77～79・81・82）の器形がみられる。83の蓋は、東信地方にみられる皿状つまみの付く蓋のつまみ部である。74～76の蓋Aは、混入品と考えられる。

5期（8世紀末～9世紀初頭）：須恵器が主体となり、杯Aの底部は回転糸切り調整のみとなる。5・8・10・17住出土土器群が該当する。これらのうち、良好な資料が出土している5住について述べる。食膳具では、須恵器杯A（113～117）、杯B（118～127）、高盤（128）が出土している。杯Aは、すべて底部回転糸切り調整である。杯Bは、底部回転糸切りのちヘラ削り調整している。図化していないが、黒色土器A杯Aもみられる。

参考文献

文献1：長野県埋蔵文化財センター1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4　総論編』

文献2：小牧市教育委員会1979『桃花台ニュータウン遺跡調査報告―小牧市藤岡古窯址群―』

文献3：荻野繁春　「7・8世紀代の須恵器編年―美濃国：尾張国―」『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会

(2)硯（第48図）

今回の調査では、計3点出土している。199・201は円面硯、200は提瓶形硯である。199は4住、200は2建、201は検出面から出土している。以下、個別に述べる。

199は、円面硯の硯面である。透かしは、30～32単位穿たれている。外堤径は、16.8cmをはかる大形品である。内堤はみられない。硯面には使用痕が認められるが、墨痕はみられない。201は、円面硯の圏台部分の小片である。透かしはみられなく、沈線により充塡している。200は、山中氏により

提瓶形硯として分類されているものの把手部分である（註）。ロクロ調整で仕上げられ、把手端部は粘土板で遮断されている。器面には穴が１ヶ所穿たれており、沈線が１条巡っている。提瓶形硯は、近在の岡田町遺跡や丸子町長瀬勝負沢からも出土している。

（註）　1983年の奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース』の山中敏史氏の分類による。

(3)瓦（第49図）

本遺跡からは１点が出土している。平瓦の小破片で、全体の大きさはわからない。厚さは2.2cmを測る。上面には１㎠あたり７×５本の布目痕、下面には縄目のタタキ痕が残る。胎土には白色・茶褐色砂粒が多量に含まれている。色調は上面は茶褐色、下面は橙褐色を呈している。焼成については酸化還元焔による須恵質のものであろう。瓦は31住の覆土中からの出土である。31住は縄文時代中期後葉に比定される住居で、瓦は混入品であろう。

(4)土製品（第56図）

①縄文時代

土偶６点、円盤状土製品１点、その他の土製品１点が出土している。土偶はいずれも縄文時代中期末～後葉のものである。包含層および他の時代の遺構の覆土から出土しており、遺構に伴なったものはない。５は下端部が拡がる座像型の土偶で、胴部の下半が遺存する。上部の折損面には、接合の芯材の空洞がある。正面の文様構成や、左側面および下面の押し引きによる沈線は、中期中葉の特徴を示すものであるが、右側面のＪの字状の沈線は新しい要素であり、中期中葉でも終わりに近い段階に位置付けられよう。1～4.6は中期後葉の唐草文系に伴った立像型土偶である。４は胴の上半部が遺存する。上下の折損部には芯材の痕跡の空洞がある。全体に沈線による文様が施され、胸も貼り付けでなく沈線で表現されている。胸が左右に張り出す形態の特徴より、中期後葉の古い段階に位置付けられよう。１は胴部下半が遺存する。上下の折損面には芯材の痕跡の空洞があるが、上下のものが貫通しているのかは不明である。小形で文様も簡略であり、時期は明確にできないが、中期後葉の中頃に位置付けられよう。６は胴の右半分が遺存する。左右の芯材を接合した部分で折損しており、この部分と上下の折損面には芯材の痕跡の空洞がある。上半部は上に向かって広がっており、腕が上に上がる特徴を持つ中期後葉Ⅲ期の新しい段階に位置付けられよう。２は右腕の破片である。形態や先端部の裏側のループ状の沈線より、６とほぼ同時期のものと思われる。３は頭部で、顔面の上半部を欠損する。頬にはいわゆる「ダブルハの字文」を有する。首は胴部に向かい幅広く造出され、表面は３条の沈線、背面には渦巻文を配する。

8は円盤状の土製品である。中央の穴は焼成前に開けられている。文様などはなく、全体の作りは雑である。使用による摩滅などは認められない。遺構外からの出土で、時期は不明である。

7は円筒状の土製品である。下端部は折損しており、元の形態は不明である。沈線がめぐった部分から先が平らにつぶれたようになっていて、この部分の片側に列点が入っている。時期は不明である。

②古墳時代以降(第56図)

40住より須恵質の土錘が1点出土している。中心に穴を持つ楕円の球状で、約半分が遺存している。芯の回りに粘土を巻きつけて成形しており、焼成は良好である。須恵器の窯で焼かれたものと思われる。

(5)鉄器(第49図)

5点の鉄製品が出土した。4点を図示した。他に鉄滓が3点ある。

1は釘である。先端部分と思われる。A地区2住覆土から出土しており、角釘であることから奈良時代前半の所産と考えてもよいが、時期が下るかもしれない。

2は環状鉄製品である。A地区9建P_4から出土している。9建はカエリをもつ蓋などの遺物から古墳時代後期の建物址と考えられることから、2は耳環の可能性がある。

3は紡錘車で、棒軸部分を欠く。A地区8住覆土から出土している。平安時代の所産と考える。

4は鉄斧である。A地区4住の床面より10cm浮いた状態で出土している。刃部をやや欠くが遺存状態は良い。平安時代の所産と考える。

(6)銭貨(第49図)

2点出土している。いずれもB地区P456から出土している。1は永楽通宝(明銭　1408年初鋳)で径25.0cm、重量1.7g、2は熙寧元宝(宋銭　1068年初鋳)で径23.4cm、重量2.1gである。

(7)石器・石製品

①石器(第50～55図)

今回の発掘調査で出土した石器類のうち、定形的な石器と原石・石核の点数（全体の構成比）以下の通りである。

1)石鏃	31点（23.1%）	5)打製石斧	35点（26.1%）
2)石錘	3点（2.2%）	6)磨製石斧	1点（0.7%）
3)ピエス・エスキーユ	6点（4.5%）	7)凹・敲・磨石	42点（31.3%）
4)スクレイパー	15点（11.2%）	8)石核	1点（0.7%）
		総　計	134点

このほかに2次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、砕片等が大量に出土しているが報告書では割愛している。定形的な石器についてはできるだけ多くのデータを提示するため、整理作業は以下の方針で行なった。

a)全ての石器について種類毎に出土地点・寸法・重量・石質・破損状況を一覧表に登載する。

b)実測は完形または全形をうかがえるもの、使用痕を残すもの、特殊なものを中心に行なう。

c)石器の分類及び一覧表中の略号は、松本市教育委員会『松本市坪ノ内遺跡－緊急発掘調査報告書－』1990に従った。

なお、石質鑑定は太田守夫氏のご教示を受けている。以下では石器の種類毎にその概要を述べることにする。文中の石器を説明する数字は図番号である。

1)石鏃（1～25）　31点出土している。石材はチャート19点、黒曜石12点が利用されている。松本市域の他の遺跡に比べ、チャート製の占める割合が多いといえよう。基部は破損品を除いた28点のうち、凹基25点、円基2点、平基1点である。茎部については、全て無茎鏃である。特徴的なものとして、側縁が鋸歯状の4と、両面に矢柄もしくは矢筈の着装痕と考えられる線条痕がみえる14がある。

2)石錘（26～28）　石材はチャート2点、黒曜石1点が利用されている。形態をみると26は棒状錐、28はつまみを持つもので、27は破損品のため不明である。このうち26は未成品であるが両側に錐部をもつ特殊なものである。錐部の剥離調整については、いずれも両面加工である。

3)ピエス・エスキーユ（29～34）　6点が出土している。石材は黒曜石3点、チャート3点が利用されている。チャート製のものは3cm前後の四辺形を呈する。剥離については、上下端に剥離をもつもの（I類）に31・33、上下端と左右いずれかにあるもの（II類）に29・32、上下端・左右端にあるもの（III類）に34がある。縁部のつぶれの位置については、上下端が30・32・33、上下縁と側縁が29・34、下縁31がある。

4)スクレイパー（35～48）　15点出土している。石材はチャート12点、黒曜石2点、硬砂岩1点を利用している。定形的なものはなく、剥片の縁辺部に連続する剥離を加え刃部としたものである。

素材剝片は縦長剝片が多い。刃部の形態は直刃6点、外湾刃7点、内湾刃2点がある。刃部の調整は両面加工8点、片面加工7点である。40は片面に顕著な使用痕を残している。

5)打製石斧（49～69）35点が出土している。石材は硬砂岩18点、硬砂岩（ホルンフェルス）5点、粘板岩（ホルンフェルス）5点、玢岩3点、砂岩（ホルンフェルス）2点、凝灰岩1点、砂岩1点である。平面形でみると撥形13点、分銅形12点、短冊形3点がある。刃部は偏刃8点、円刃3点、直刃2点である。破損状況をみると完形品が4点、着柄部を残すと考えられるA_1～A_3が11点、刃部を残すB_1～B_3は4点、頭・刃部を欠損する14点がある。使用痕については、刃部に使用痕と考えられる磨耗が4点、胴部に着柄痕と考えられるつぶれのあるものが6点含まれる。

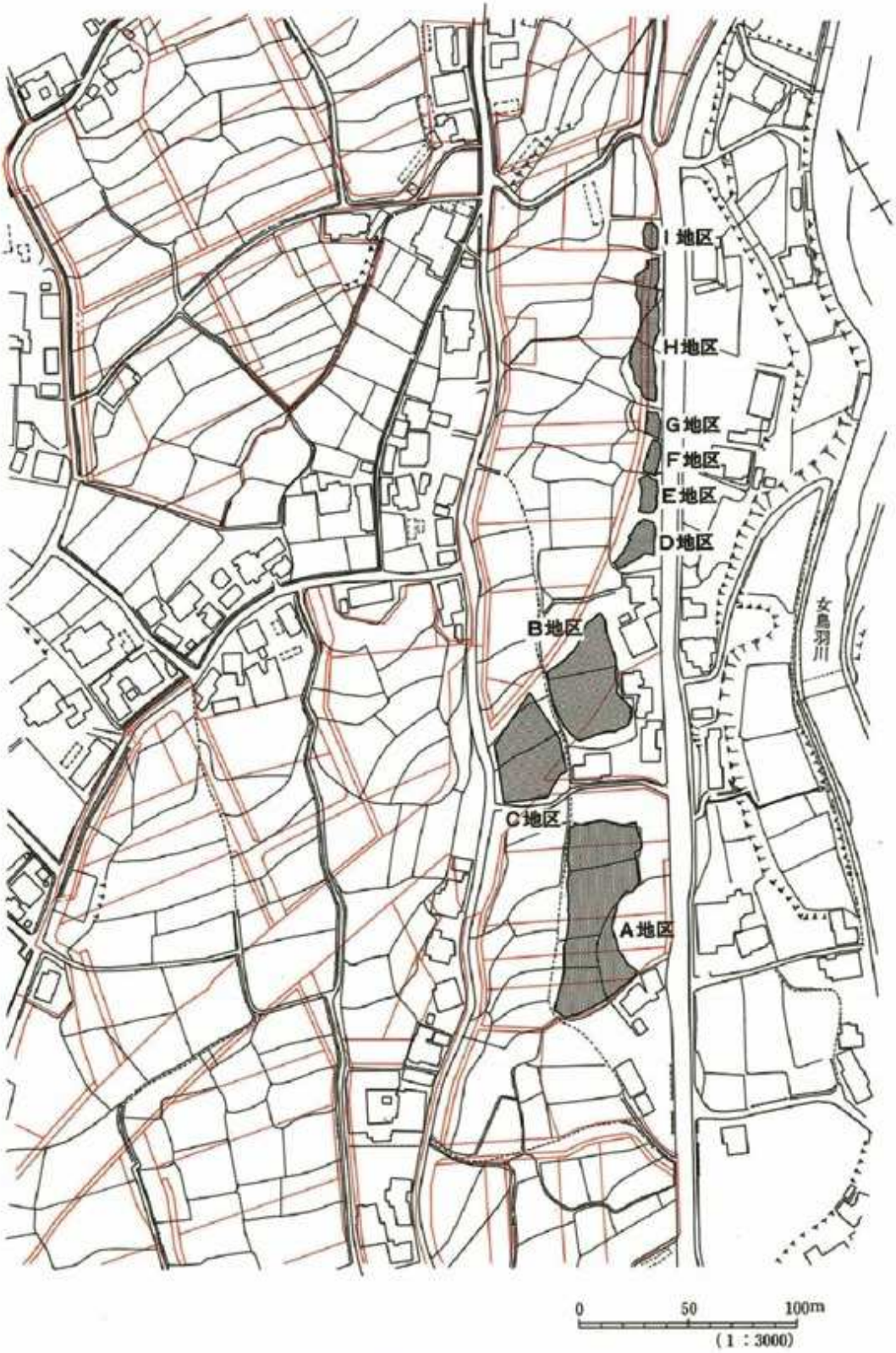
6)磨製石斧　残片のため図化できなかったが、蛇紋岩製の定角式石斧1点が出土している。

7)凹・敲・磨石（70～85）　42点が出土している。厚さ4cm以上の礫(B)を素材とするものが多く、球状礫（Aの一部）は磨面のみが多い。石材は砂岩31点（73.8%）、安山岩7点（16.7%）、石英閃緑岩3点（7.1%）、ガラス質安山岩1点（2.4%）である。使用痕については、凹部と磨面をもつものが26点と多い。磨面のみ、凹部のみは少数ある。敲打痕をもつものは3点のみである。67の凹部は他のものに比べて深く、性格を異にしている。

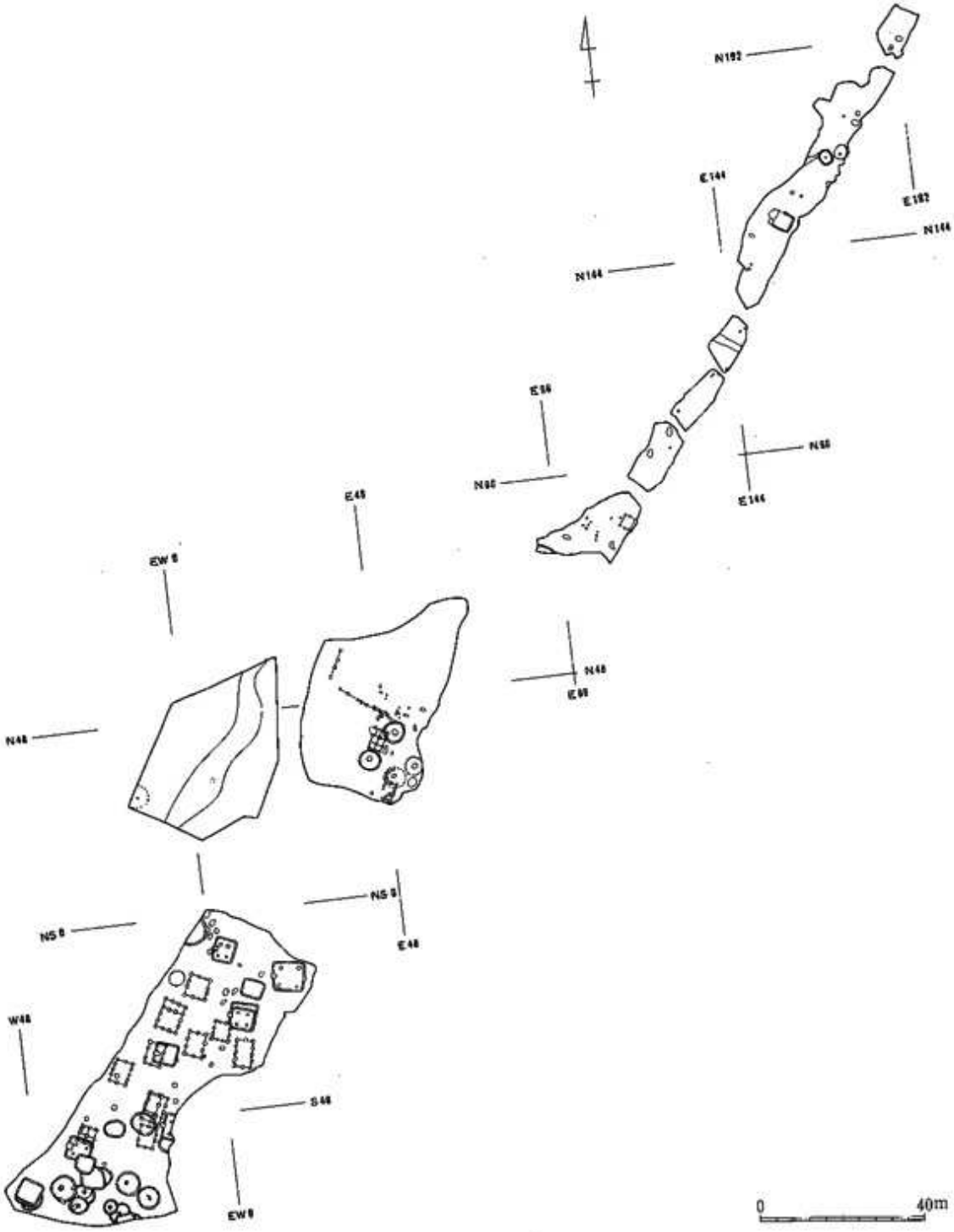
8)石核　黒曜石製の1点（15.25g）が出土している。

②石製品（第55図）

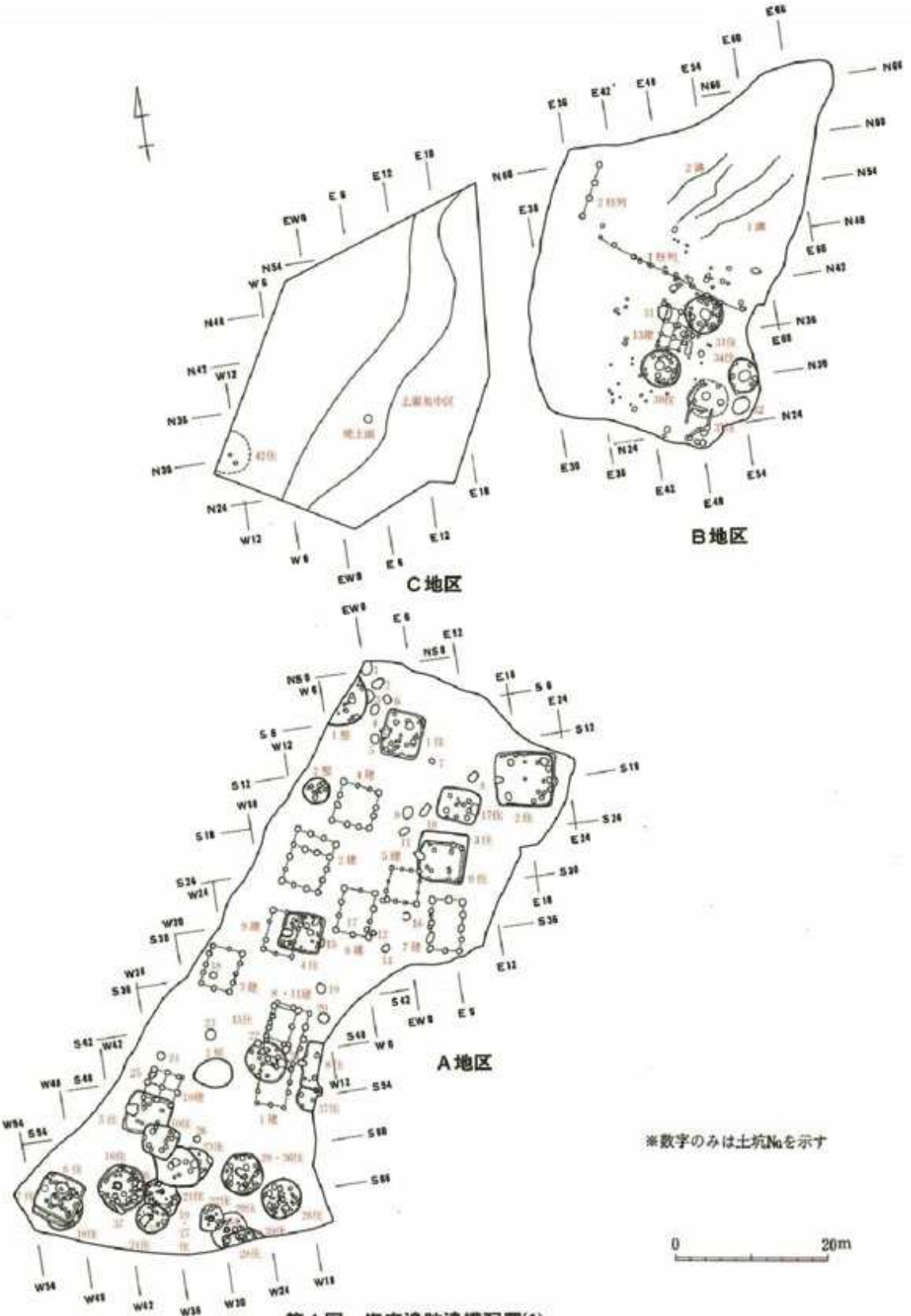
2点が出土している。86はB地区検出面からの出土の紡錘車である。石材は硅質砂岩を利用している。長径は4.49cm、短径は2.49cmを測り、断面は台形を呈する。孔径は0.6cmである。側面には顕著な研磨痕が残る。87はA地区検出面からの出土の石棒である。石材は安山岩を利用しており、両側を欠いている。残存部の最大幅は15.1cmを測り、比較的大形の製品と思われる。



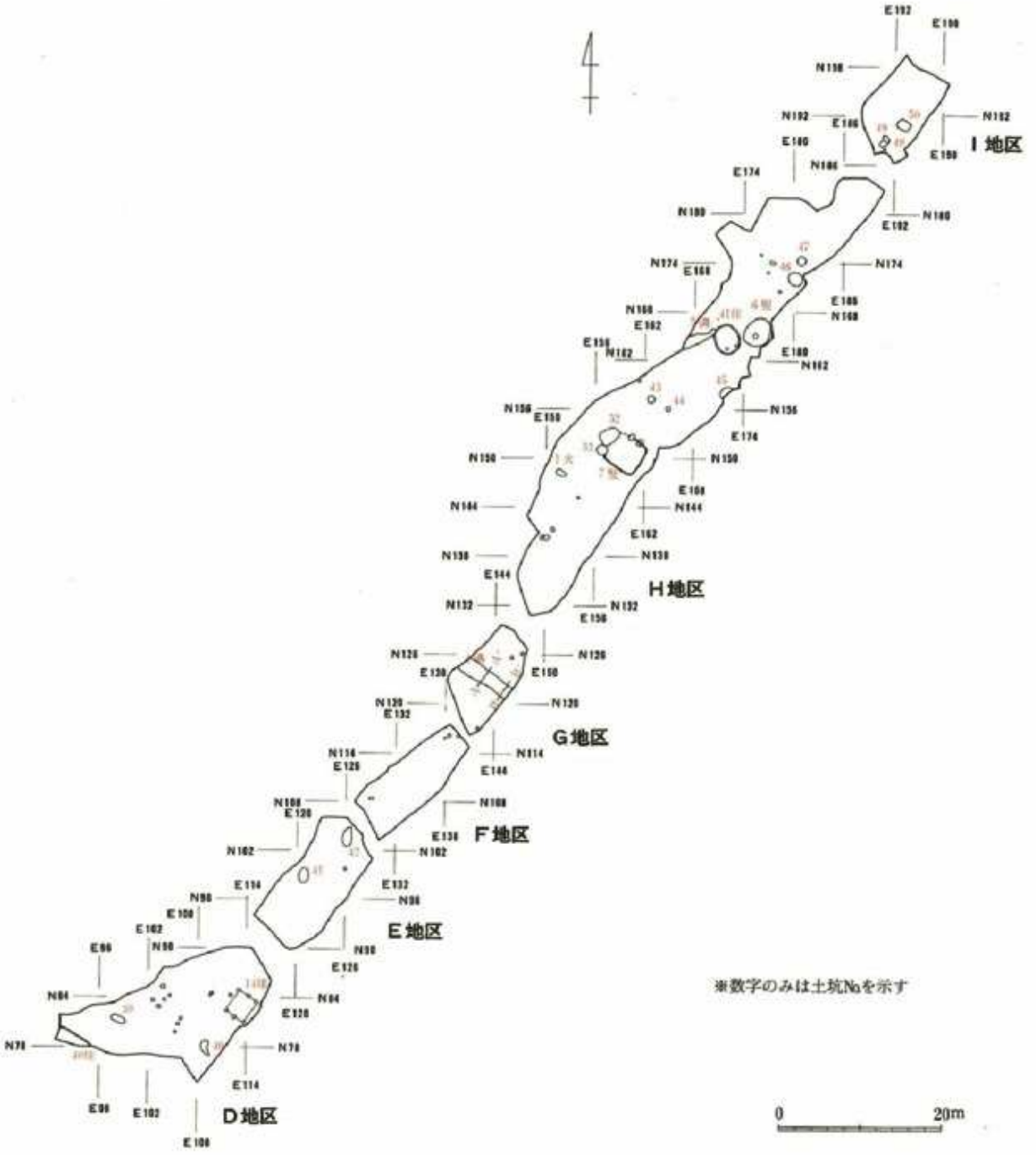
第2図　塩辛遺跡調査地の範囲



第3図　塩辛遺跡遺構配置（全体）

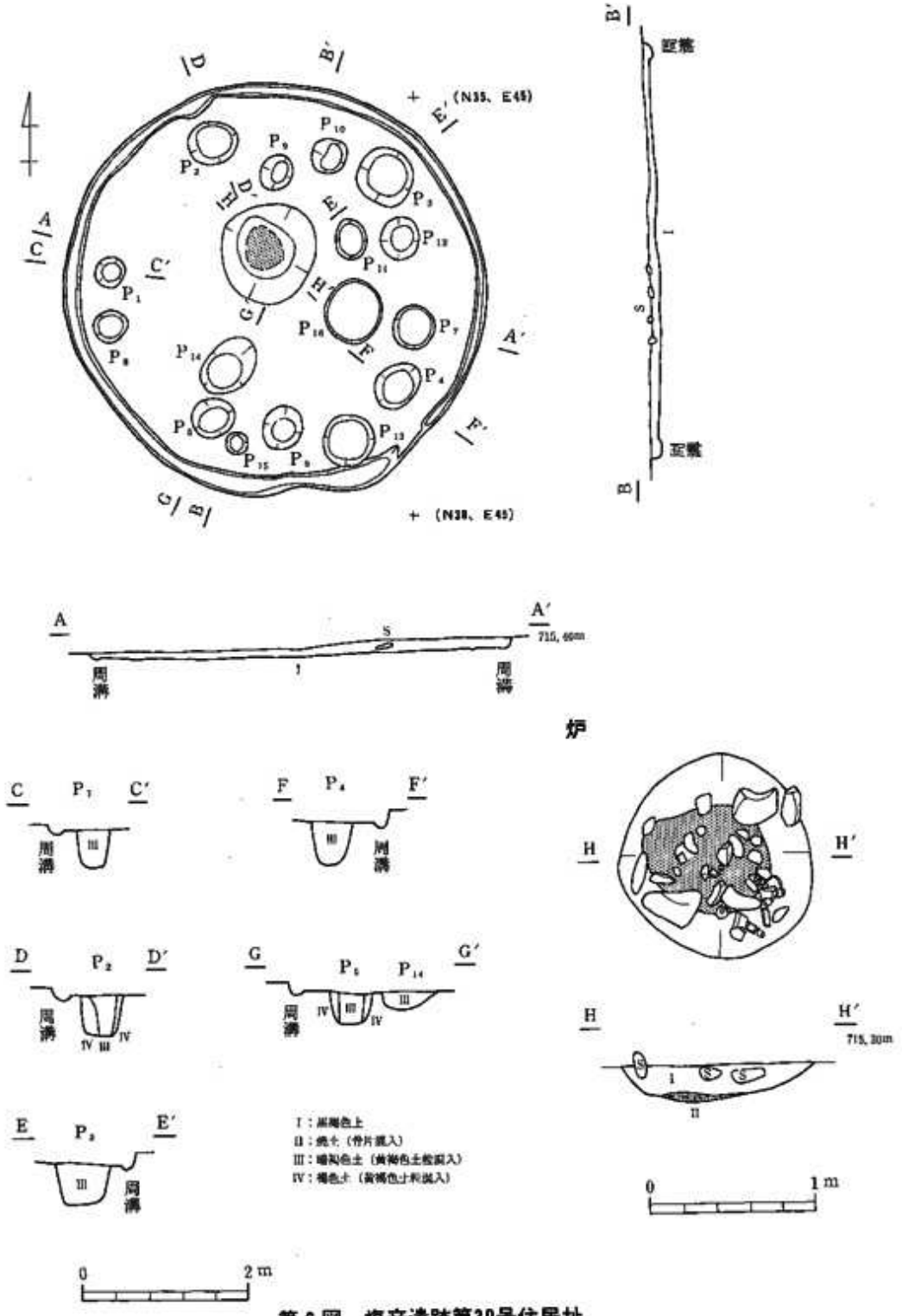


第４図　塩辛遺跡遺構配置(1)



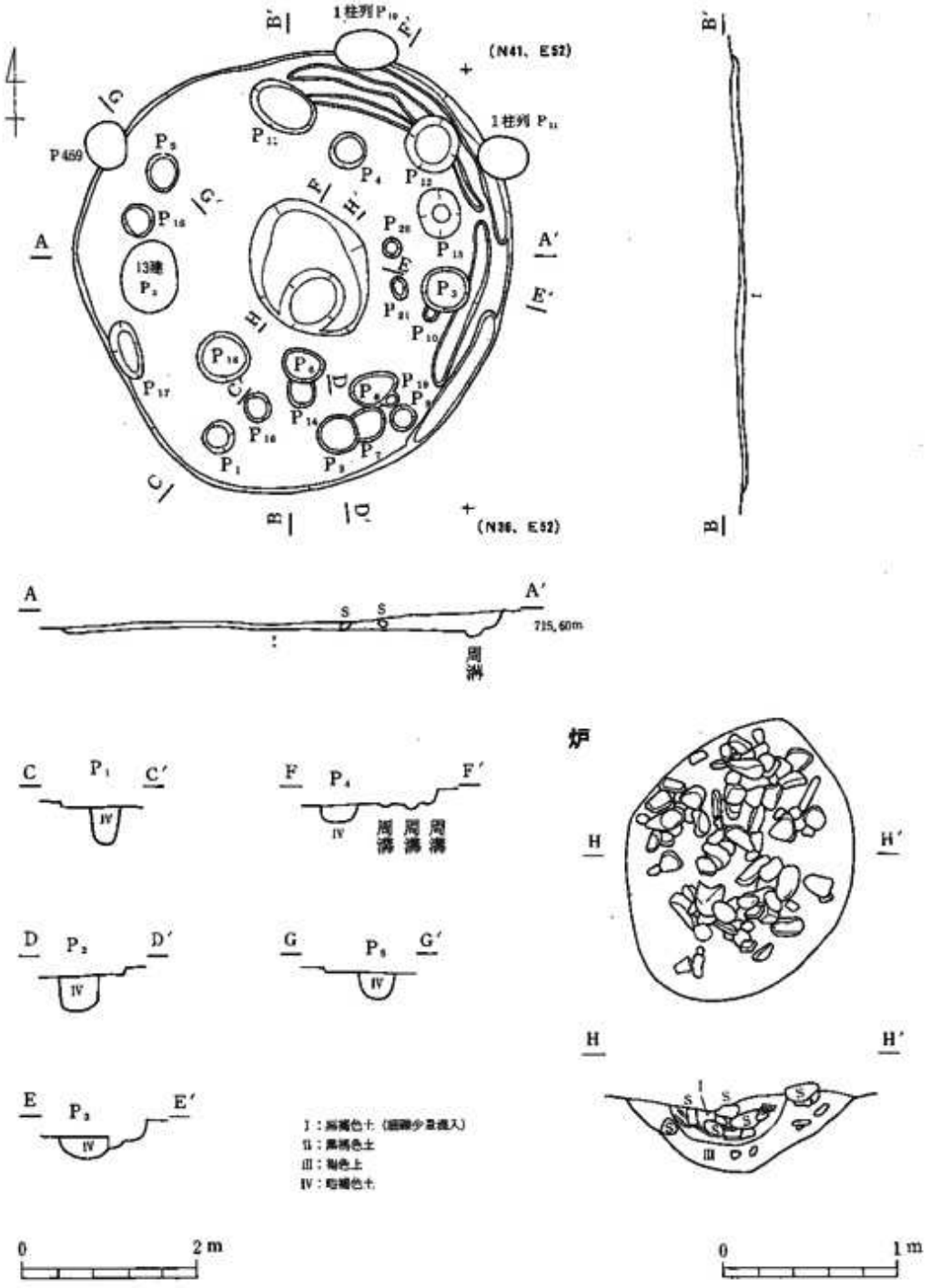
第5図　塩辛遺跡遺構配置(2)

第30号住居址



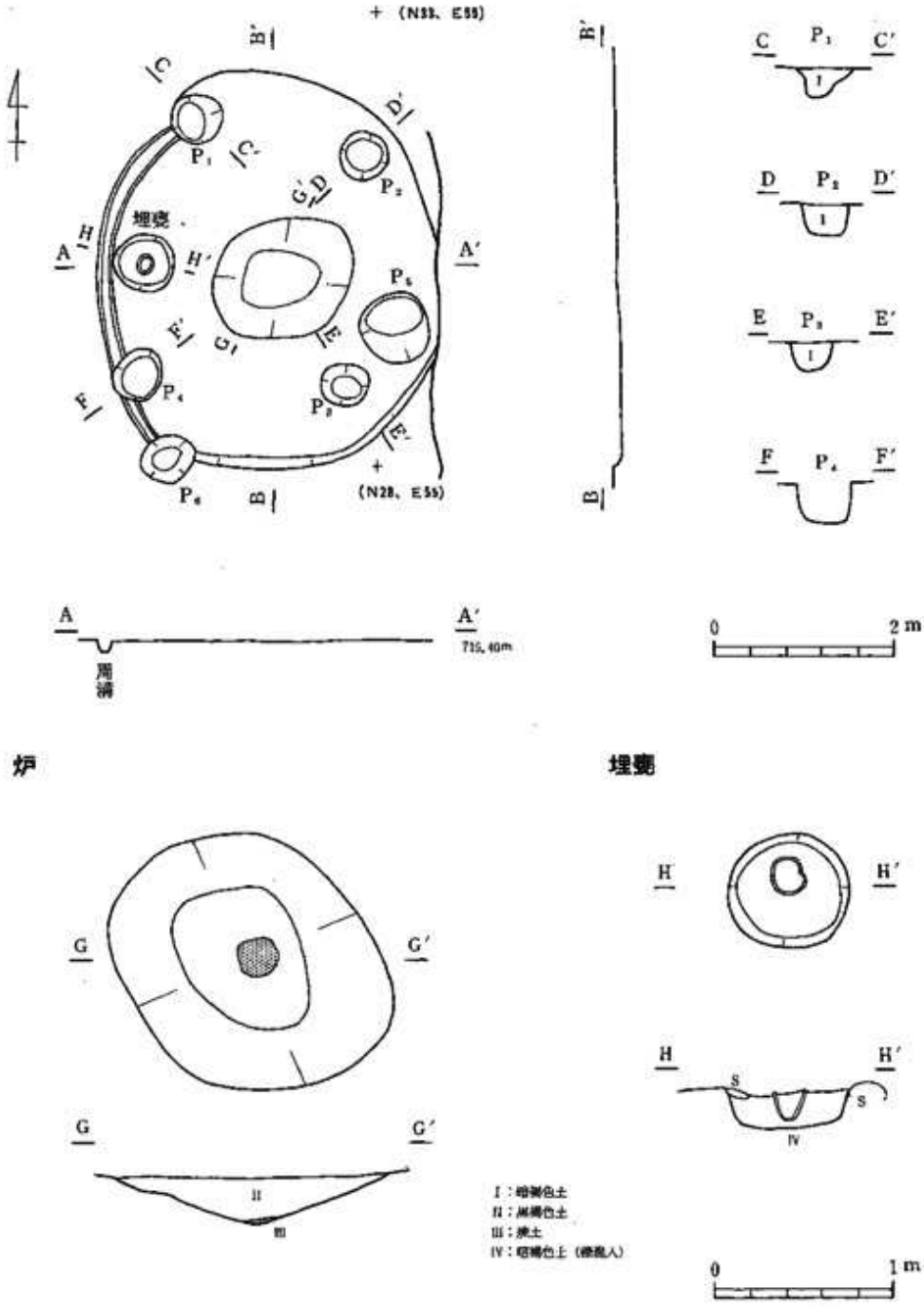
第6図　塩辛遺跡第30号住居址

第31号住居址



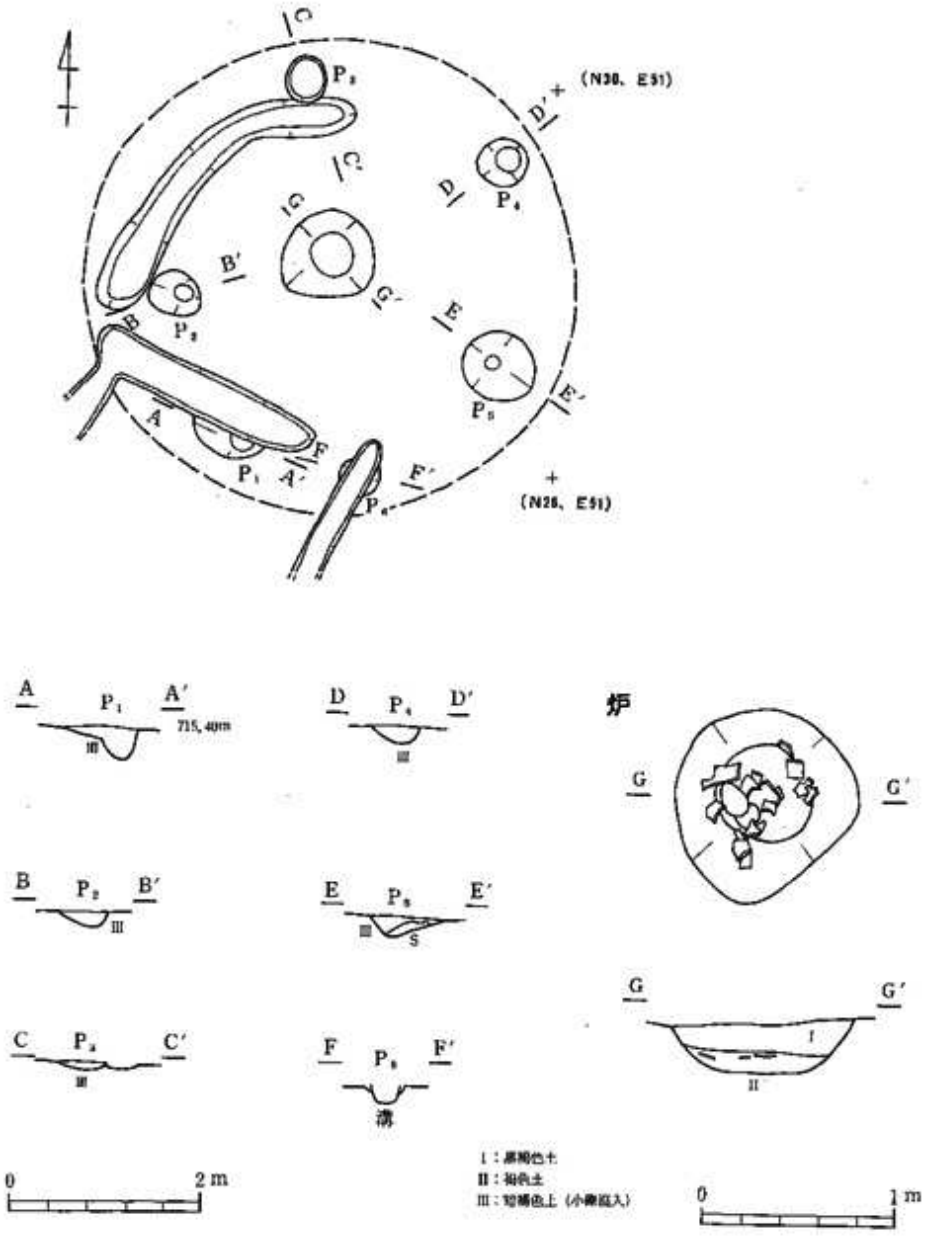
第7図　塩辛遺跡第31号住居址

第34号住居址



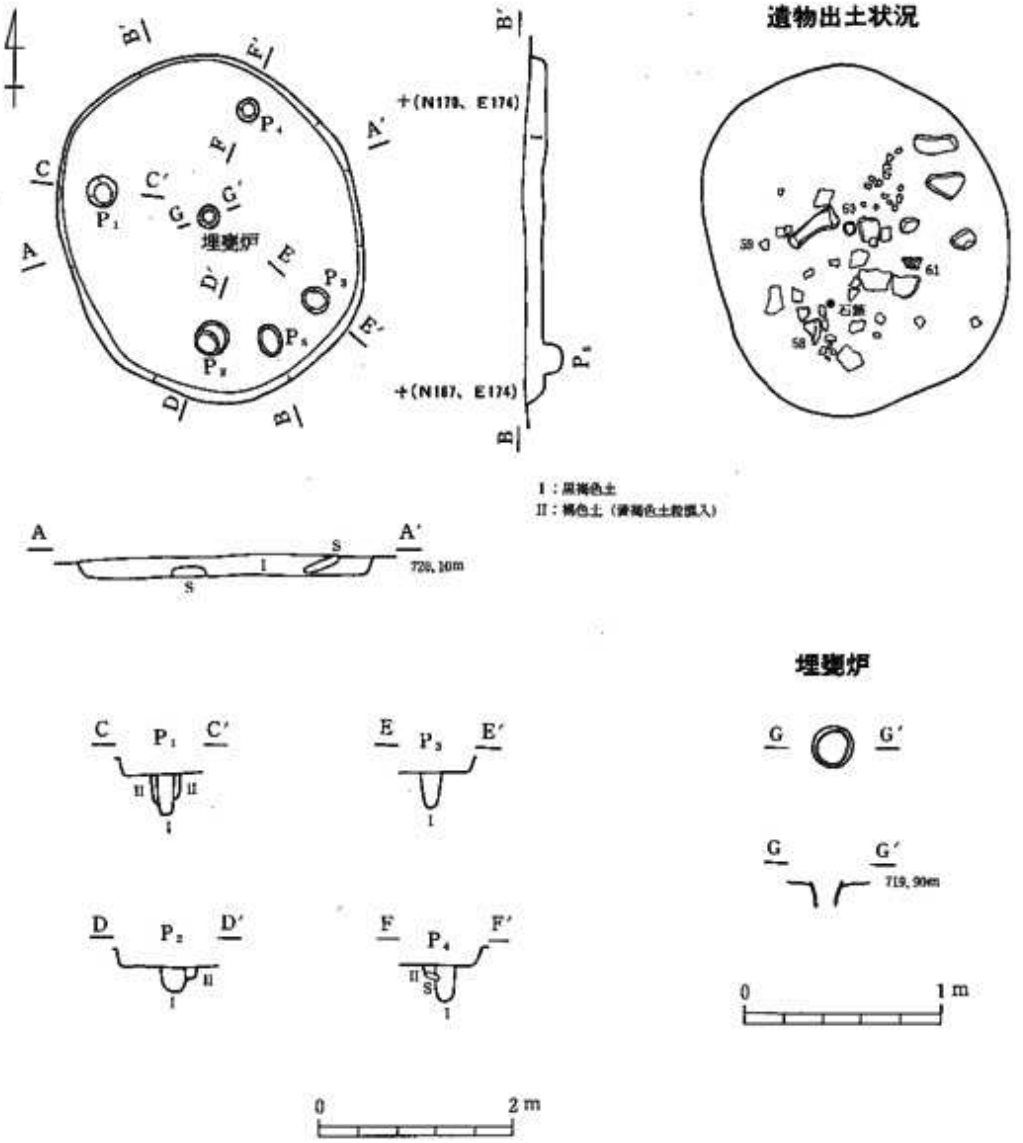
第8図　塩辛遺跡第34号住居址

第35号住居址



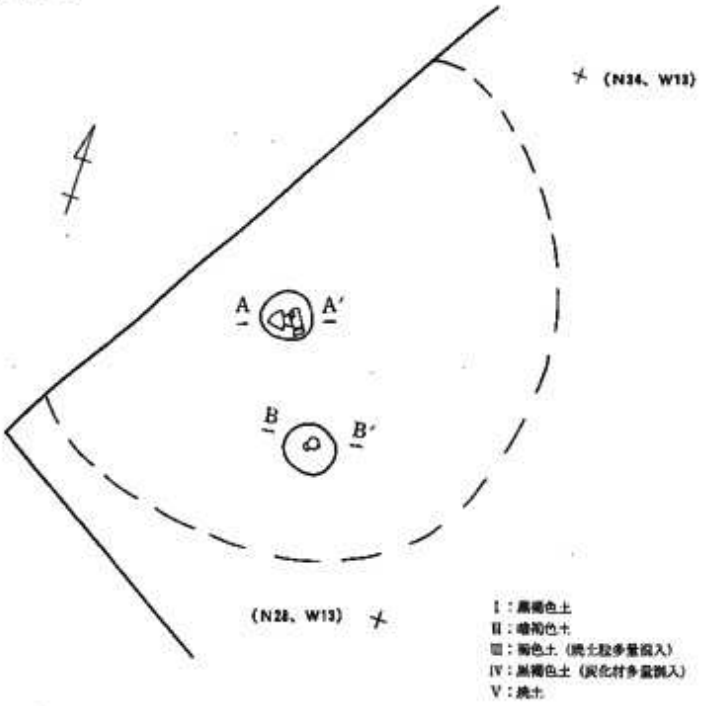
第９図　塩辛遺跡第35号住居址

第41号住居址

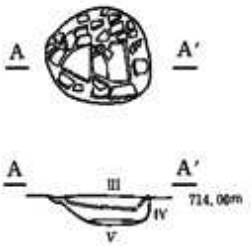


第10図　塩辛遺跡第41号住居址

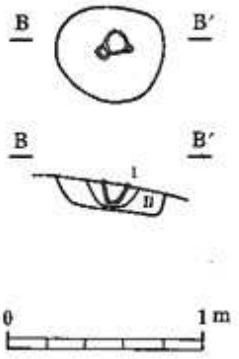
第42号住居址



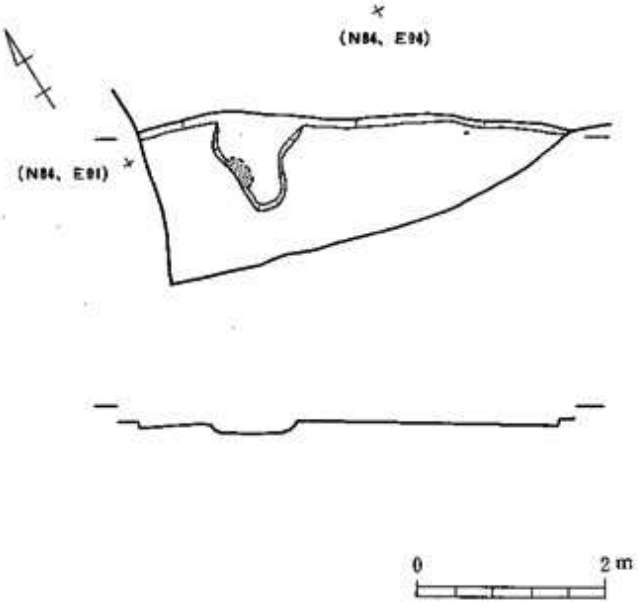
埋甕



炉

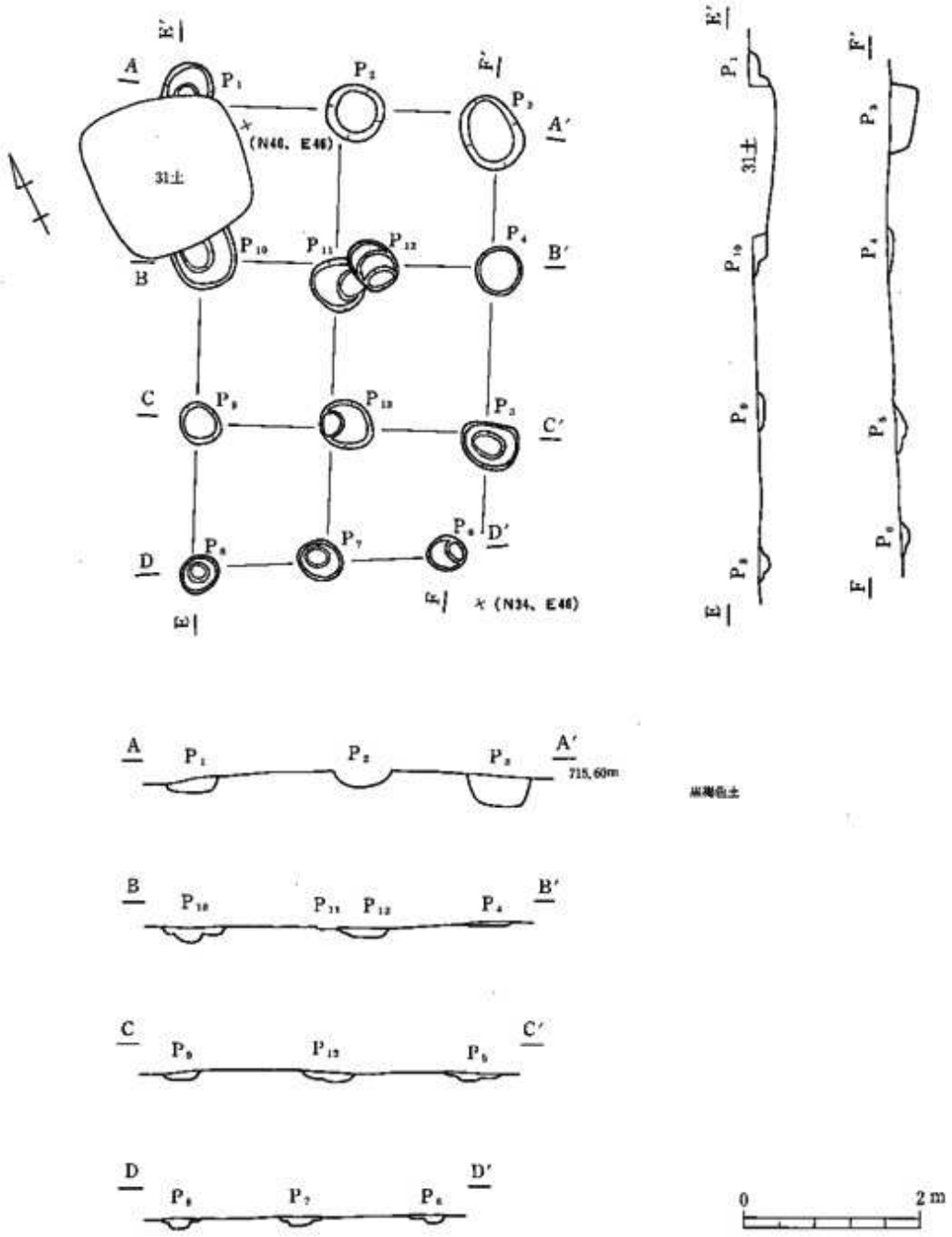


第40号住居址



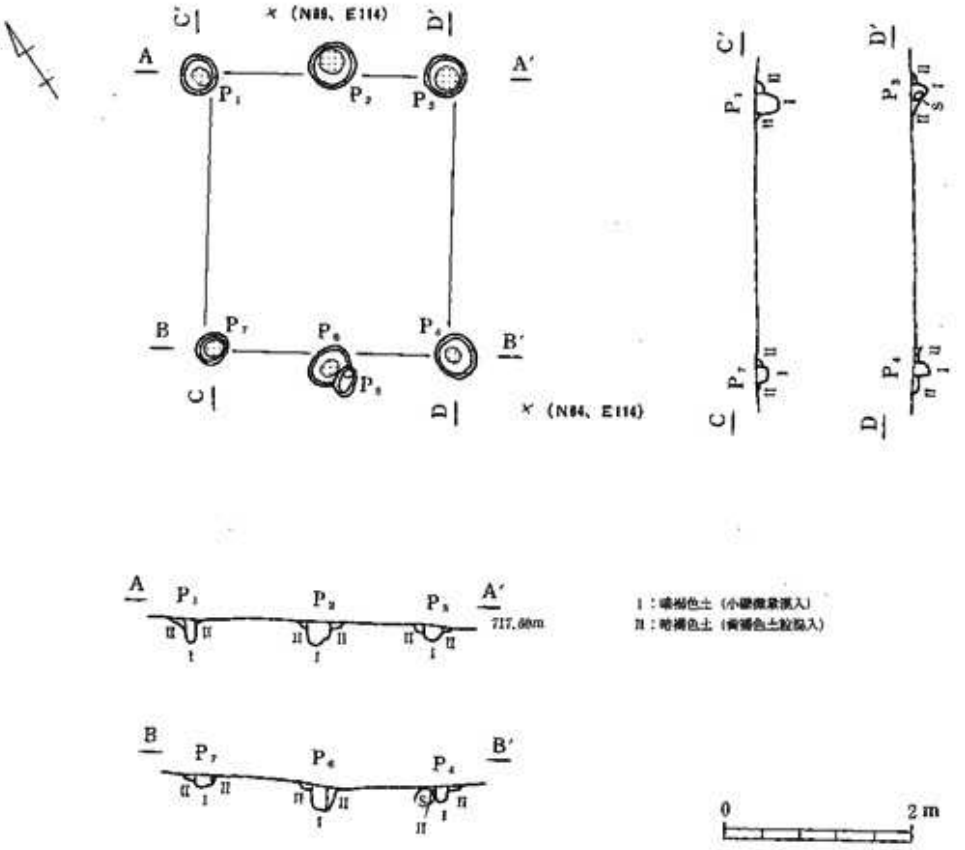
第11図　塩辛遺跡第42・40号住居址

第13号建物址



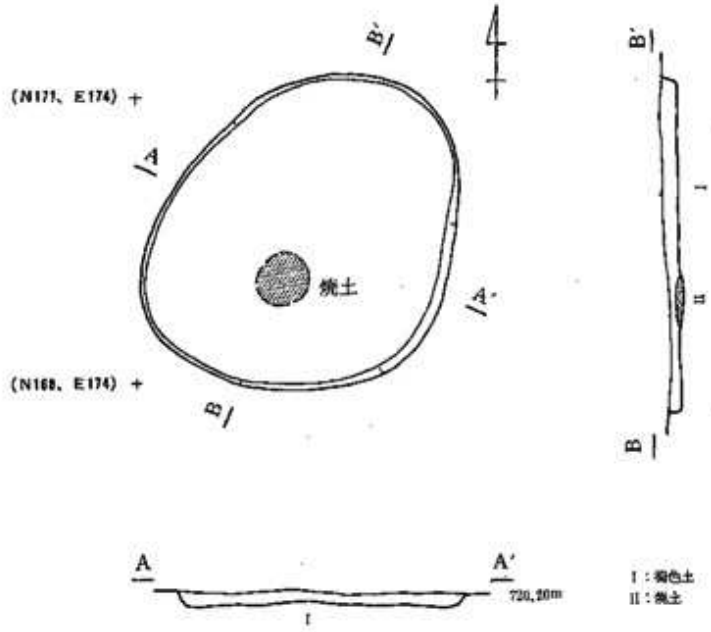
第12図　塩辛遺跡第13号建物址

第14号建物址

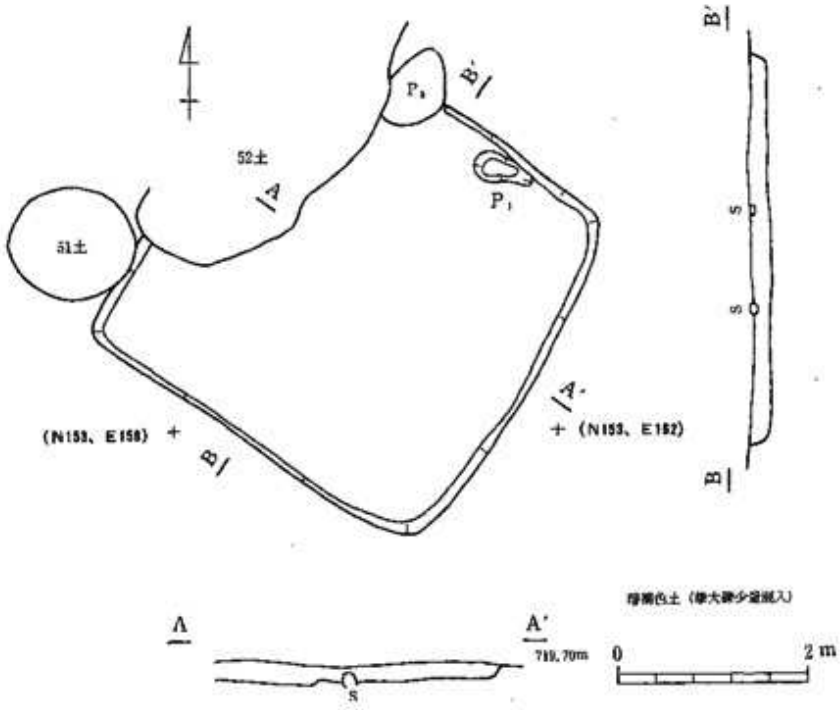


第13図　塩辛遺跡第14号建物址

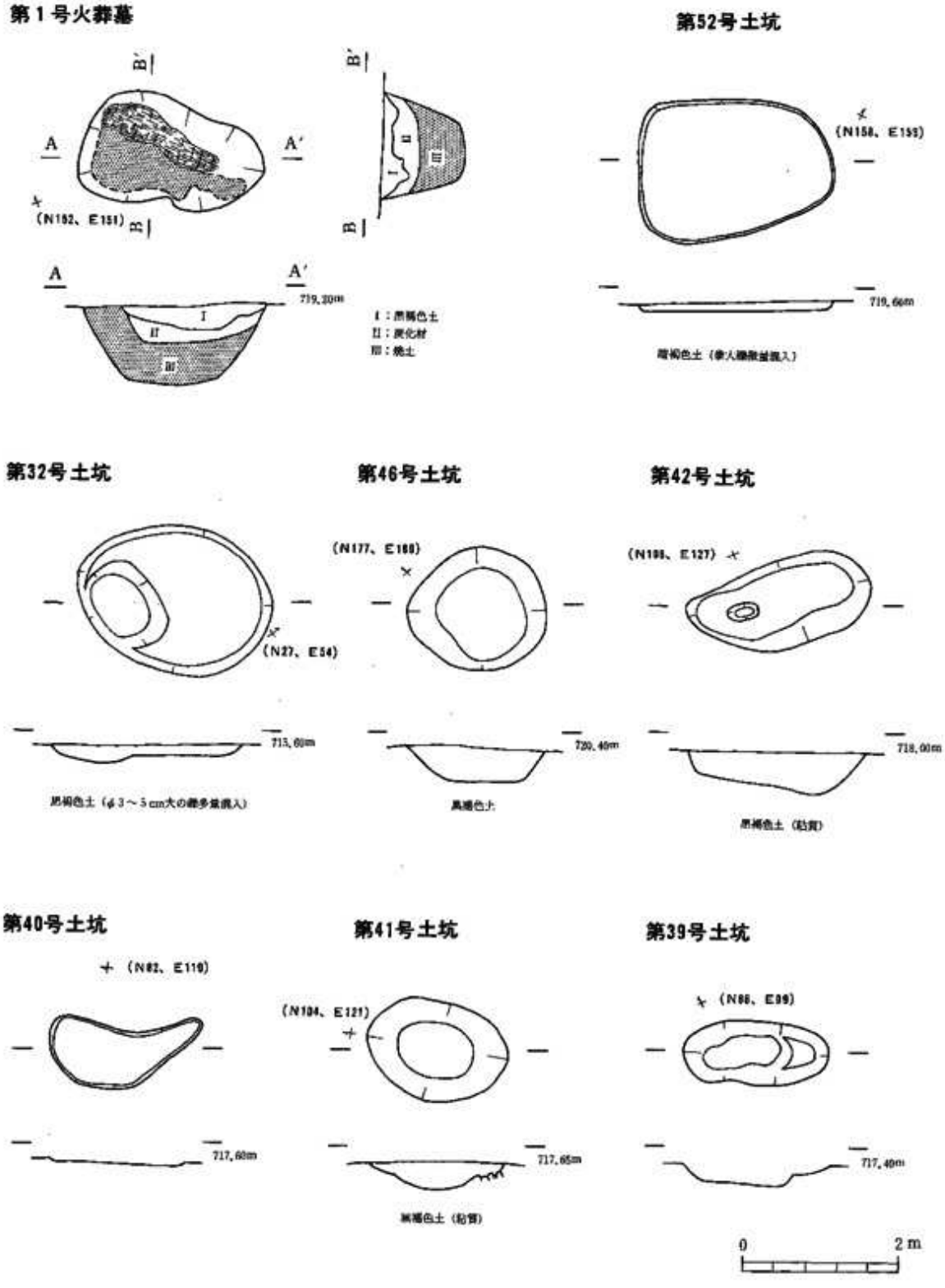
第６号竪穴状遺構



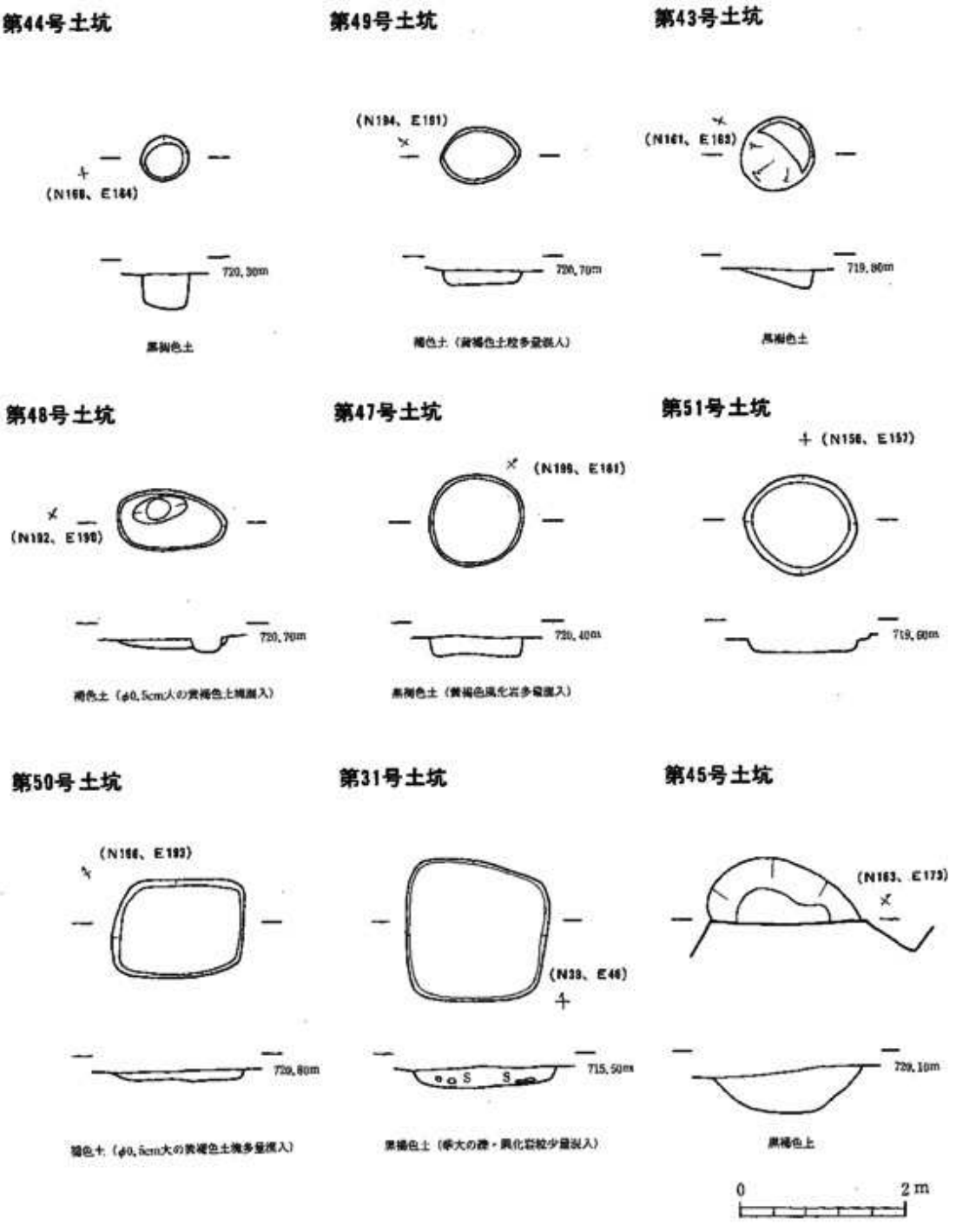
第７号竪穴状遺構



第14図　塩辛遺跡第６・７号竪穴状遺構

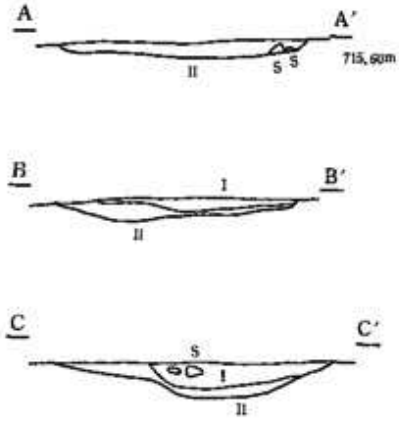


第15図　塩辛遺跡火葬墓、土坑(1)



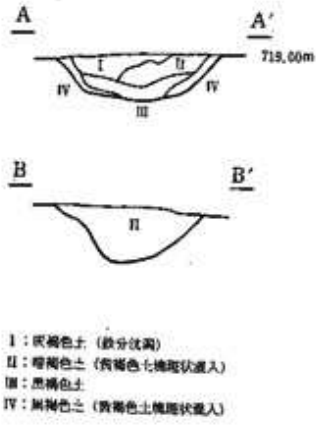
第16図　塩辛遺跡土坑(2)

第 1 号溝址



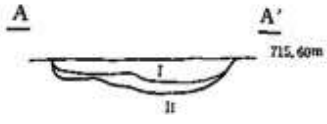
I：暗褐色土（φ3～5cm大の礫混入）
II：褐色土（φ0.3～0.5cm大の黄褐色土塊混入）

第 4 号溝址



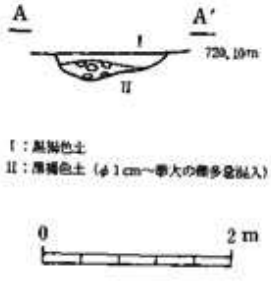
I：灰褐色土（鉄分沈澱）
II：暗褐色土（黄褐色土塊状混入）
III：黒褐色土
IV：黒褐色土（黄褐色土塊状混入）

第 2 号溝址



I：黒褐色土（風化岩多量混入）
II：黄褐色土（風化岩多量混入、砂質）

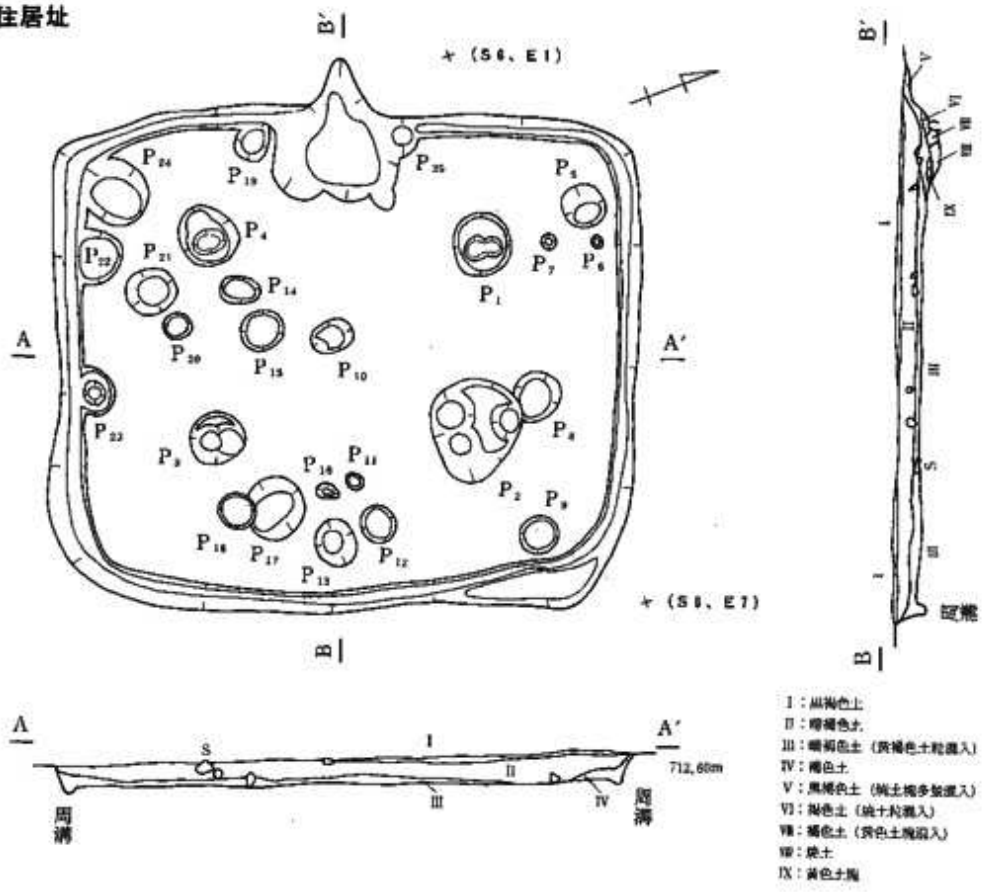
第 5 号溝址



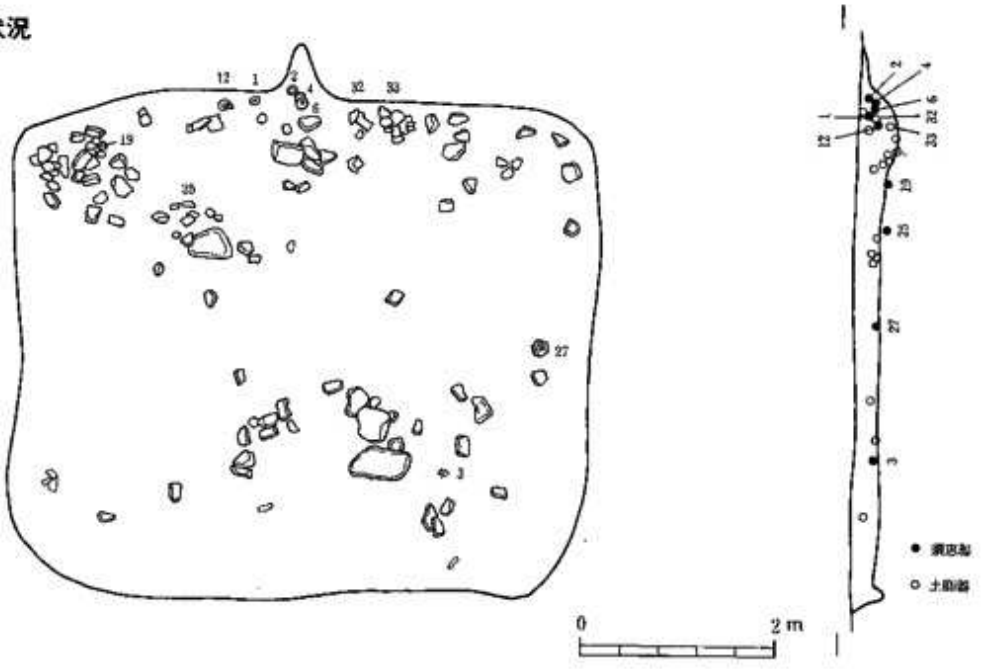
I：黒褐色土
II：黒褐色土（φ1cm～拳大の礫多量混入）

第17図　塩辛遺跡溝址

第１号住居址

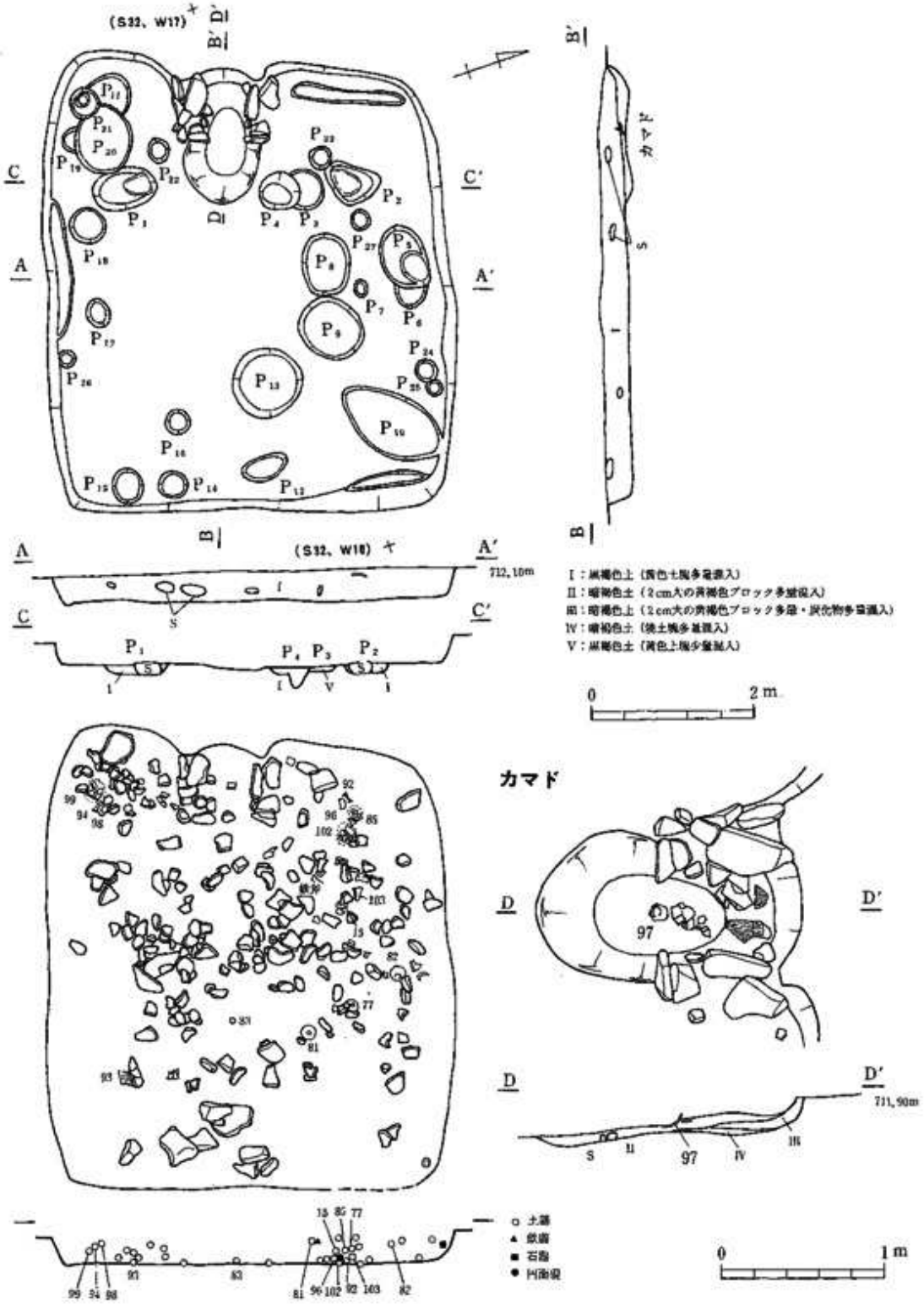


遺物出土状況

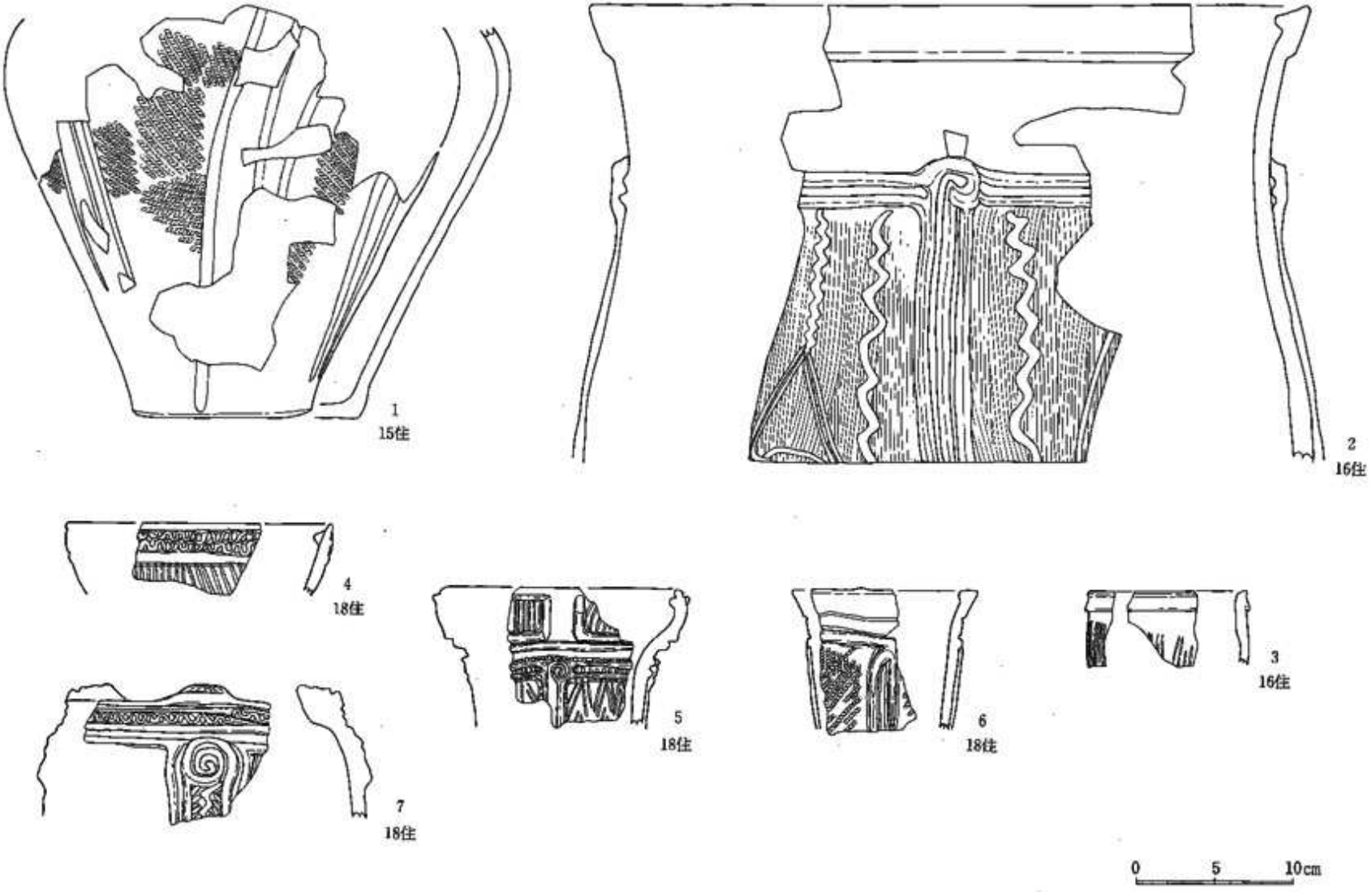


第18図　塩辛遺跡第１号住居址（第Ⅰ次調査）

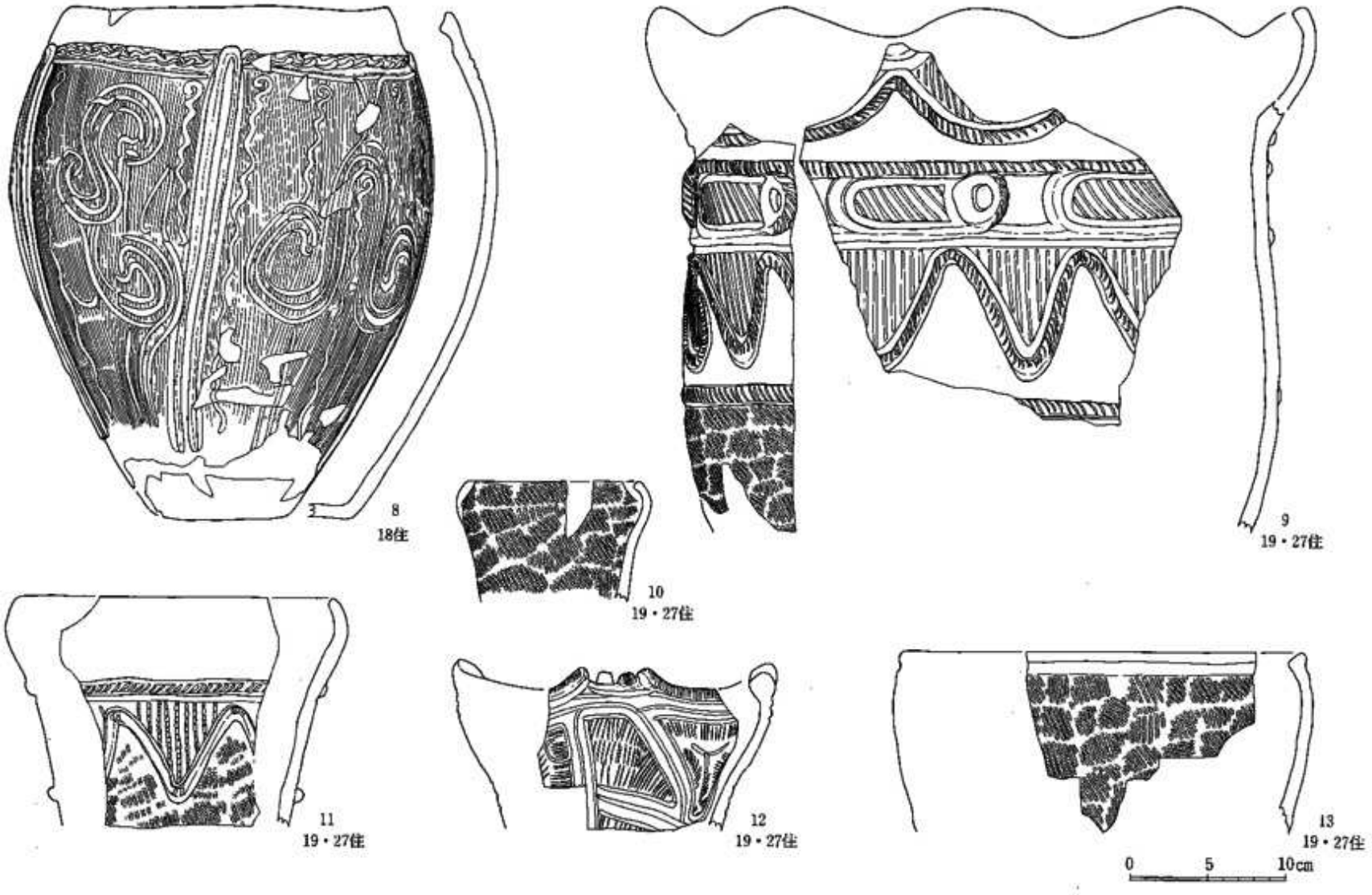
第４号住居址



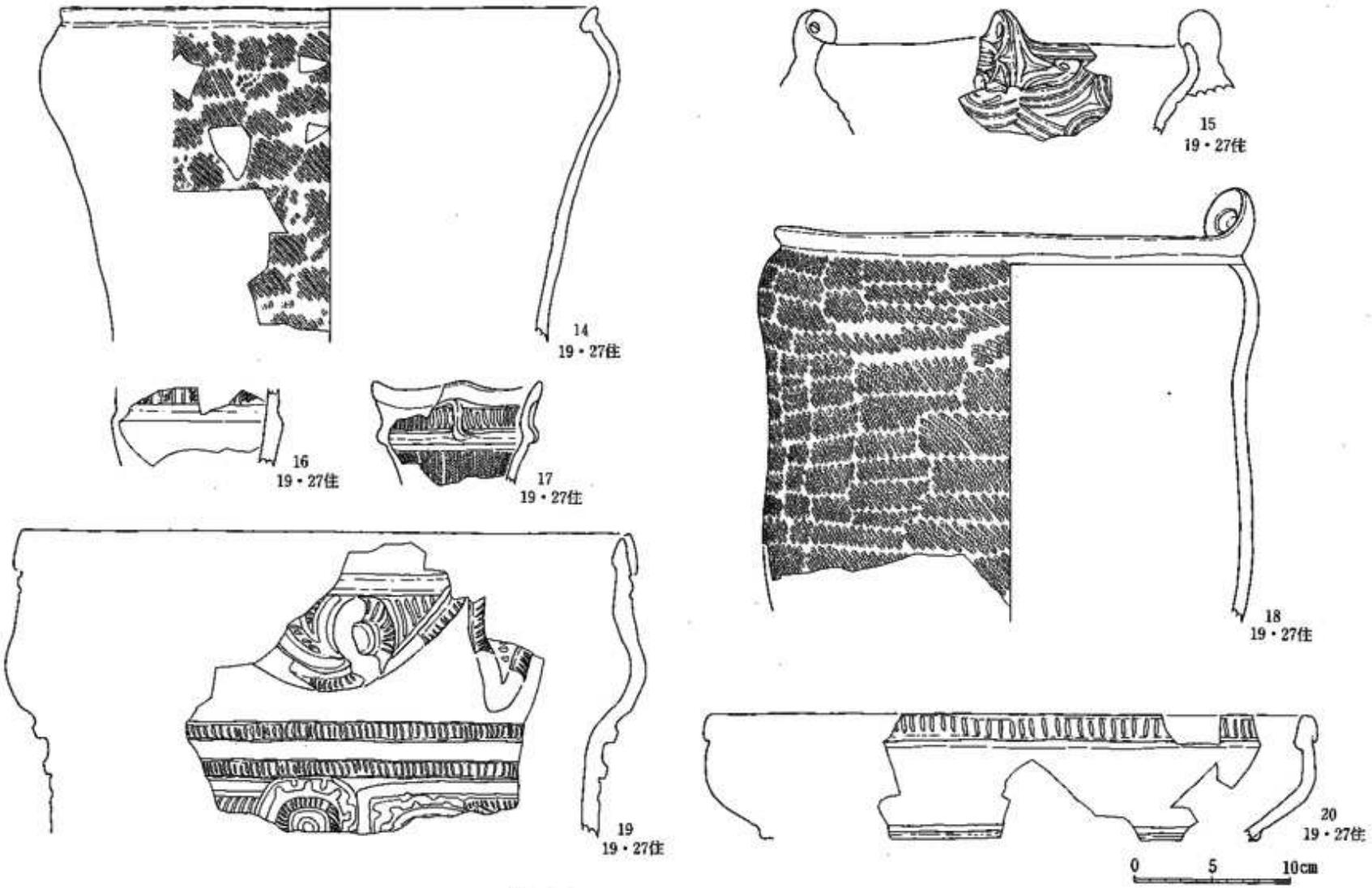
第19図　塩辛遺跡第４号住居址（第１次調査）



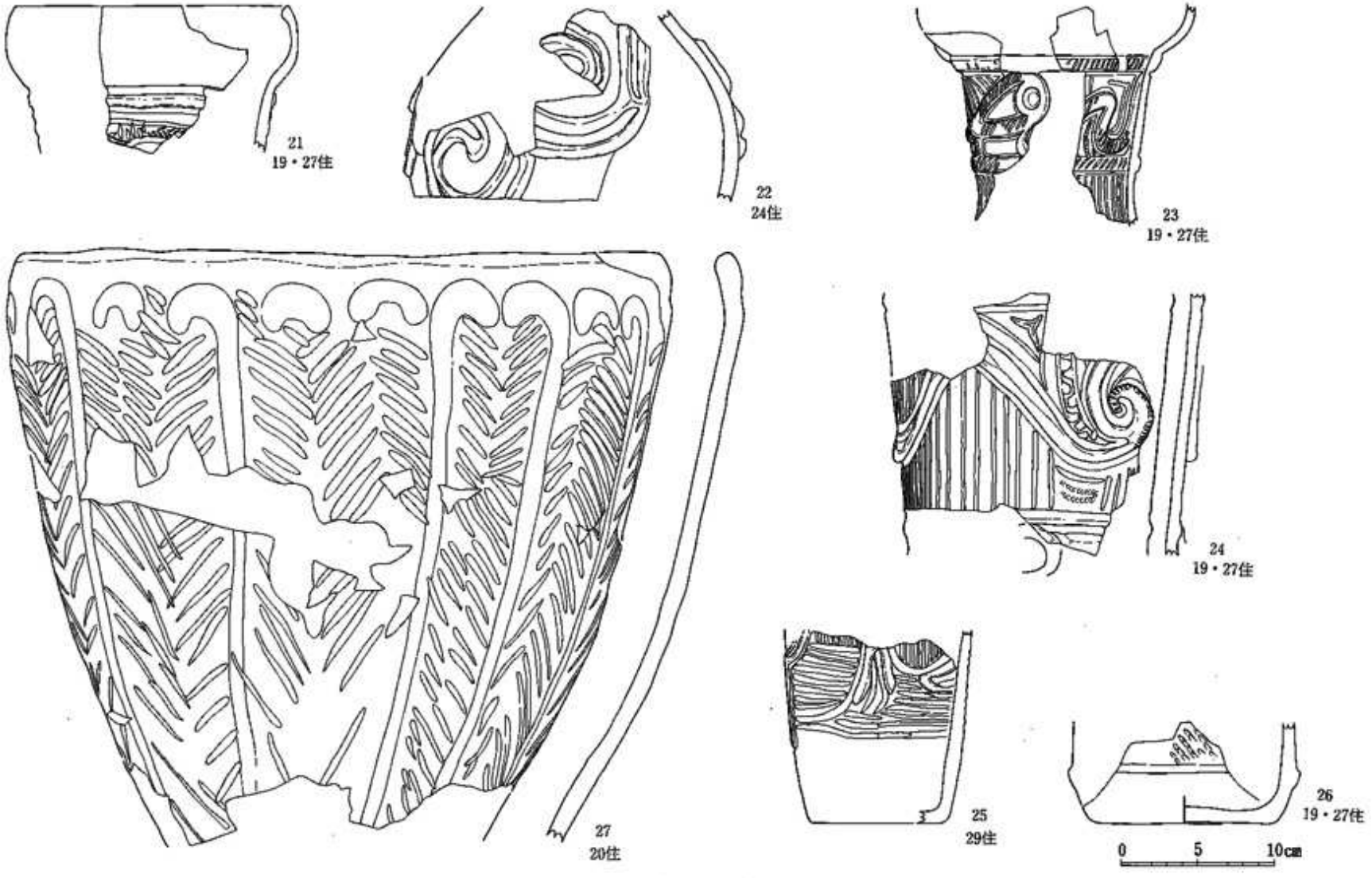
第20図　塩辛遺跡縄文土器実測図(1)



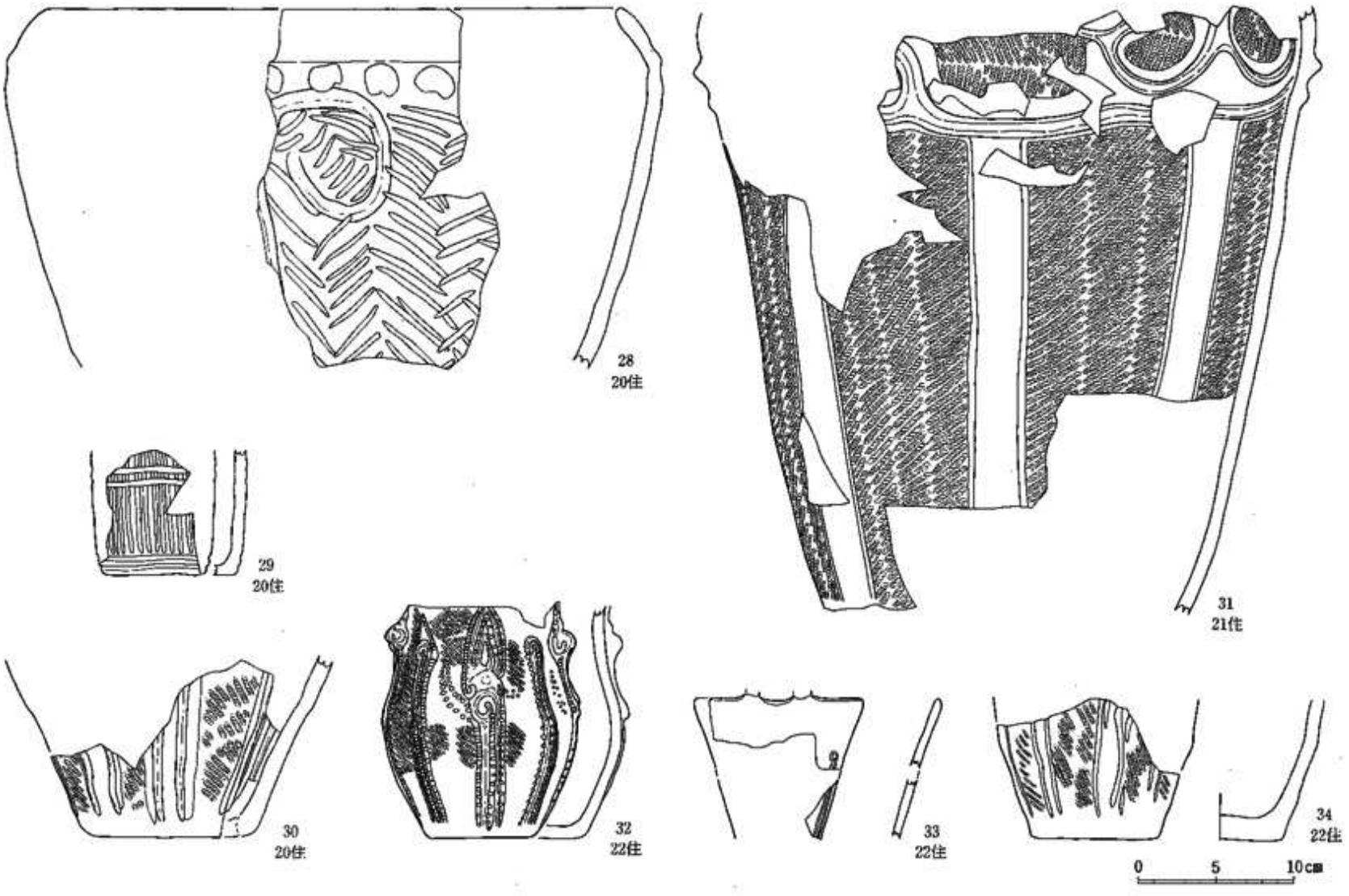
第21図　塩辛遺跡縄文土器実測図(2)



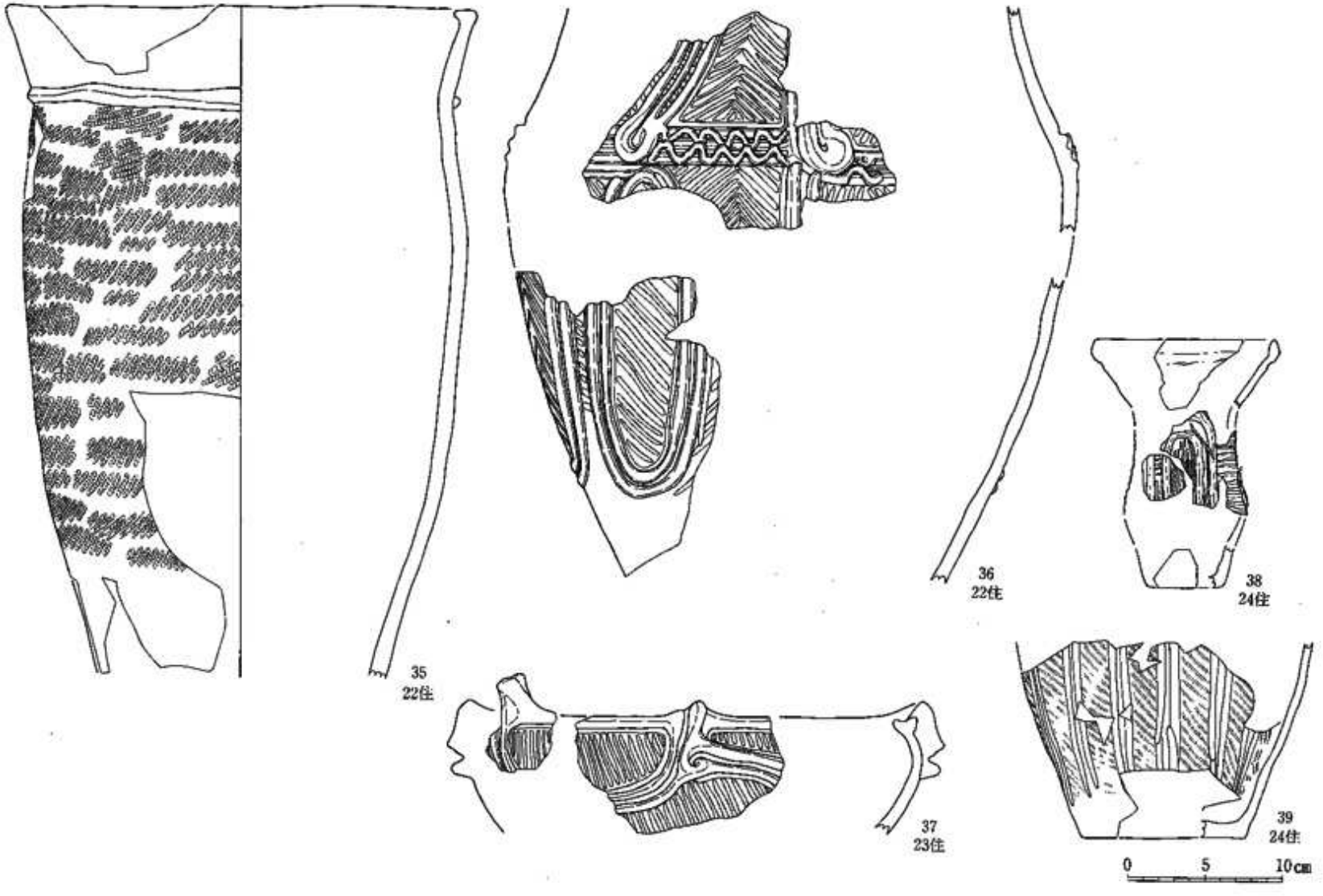
第22図　塩辛遺跡縄文土器実測図(3)



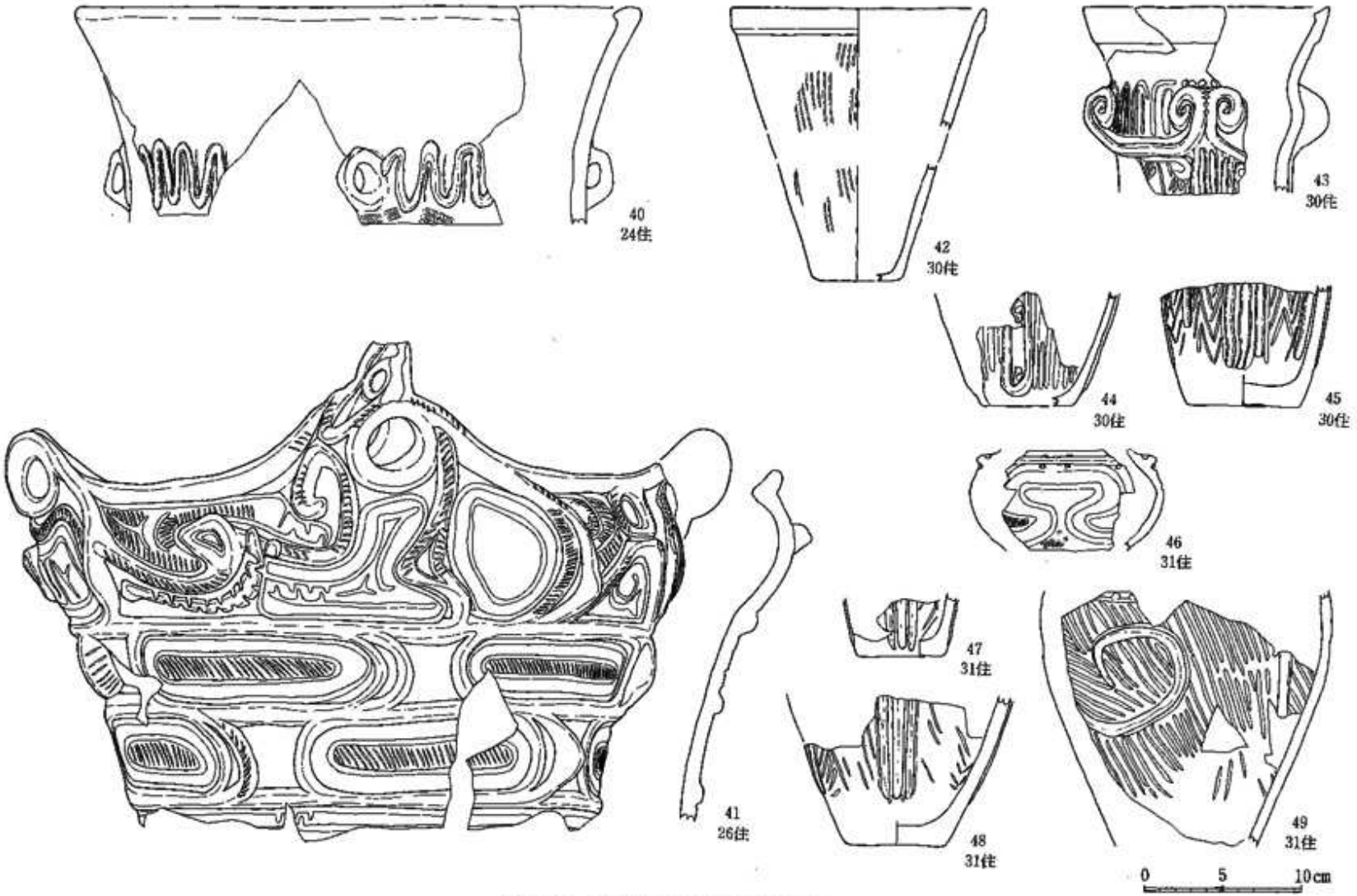
第23図　塩辛遺跡縄文土器実測図(4)



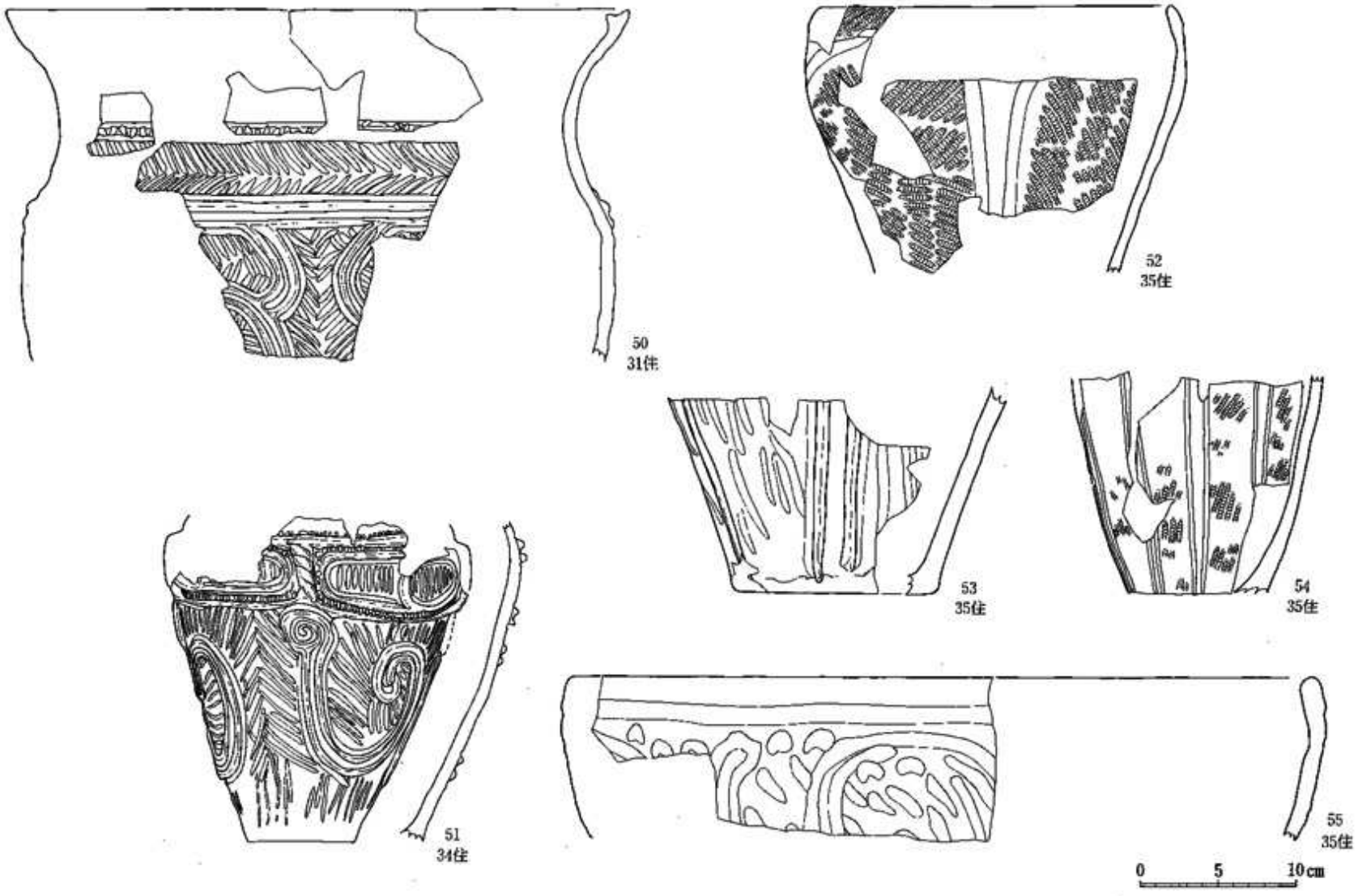
第24図　塩辛遺跡縄文土器実測図(5)



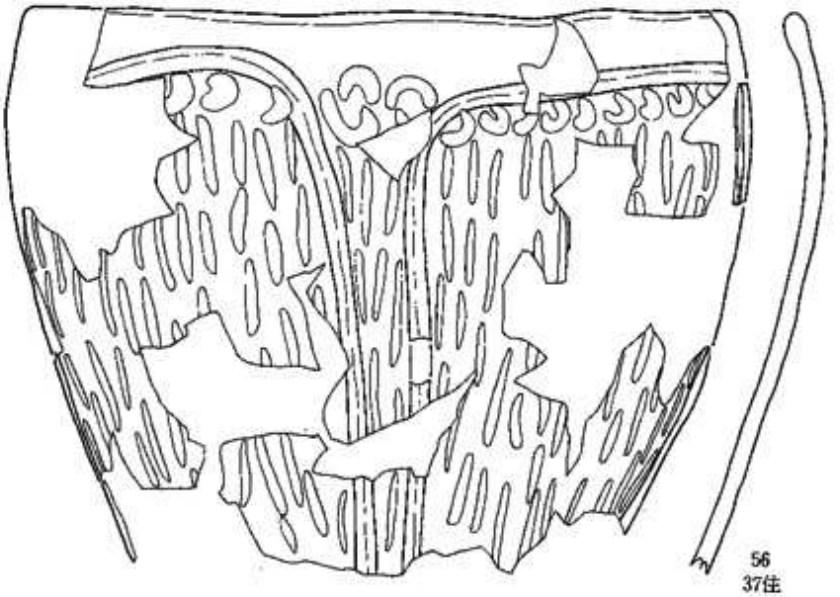
第25図　塩辛遺跡縄文土器実測図(6)

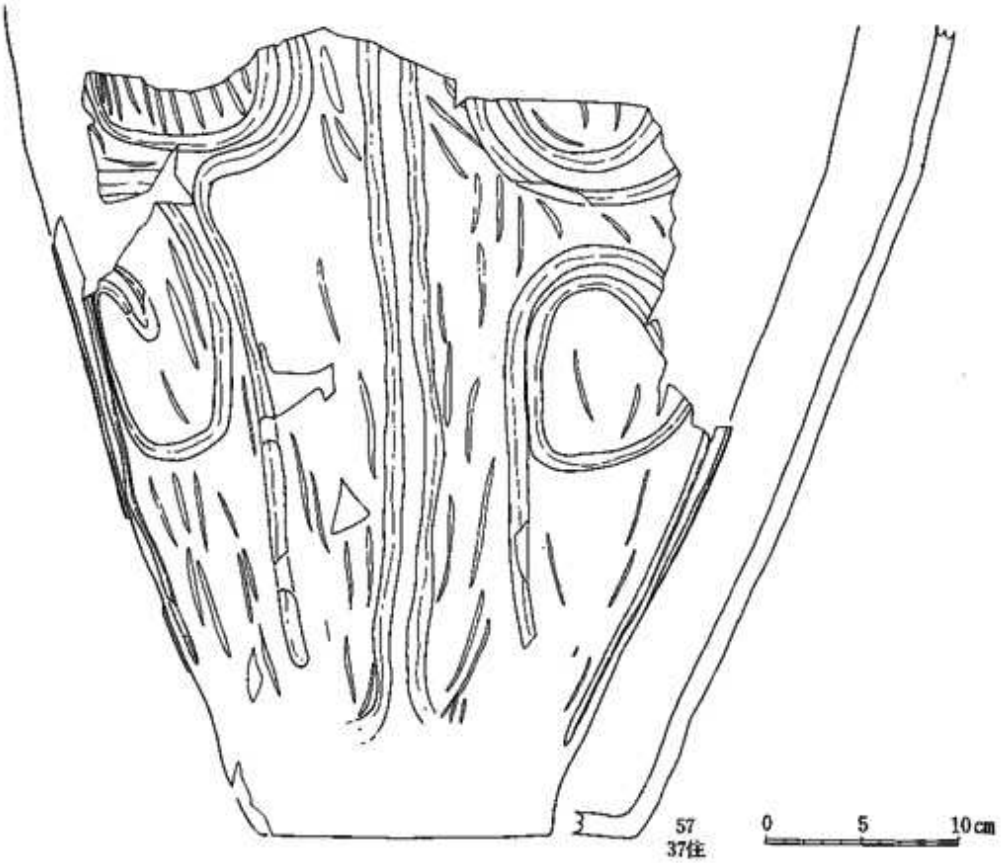


第26図　塩辛遺跡縄文土器実測図(7)

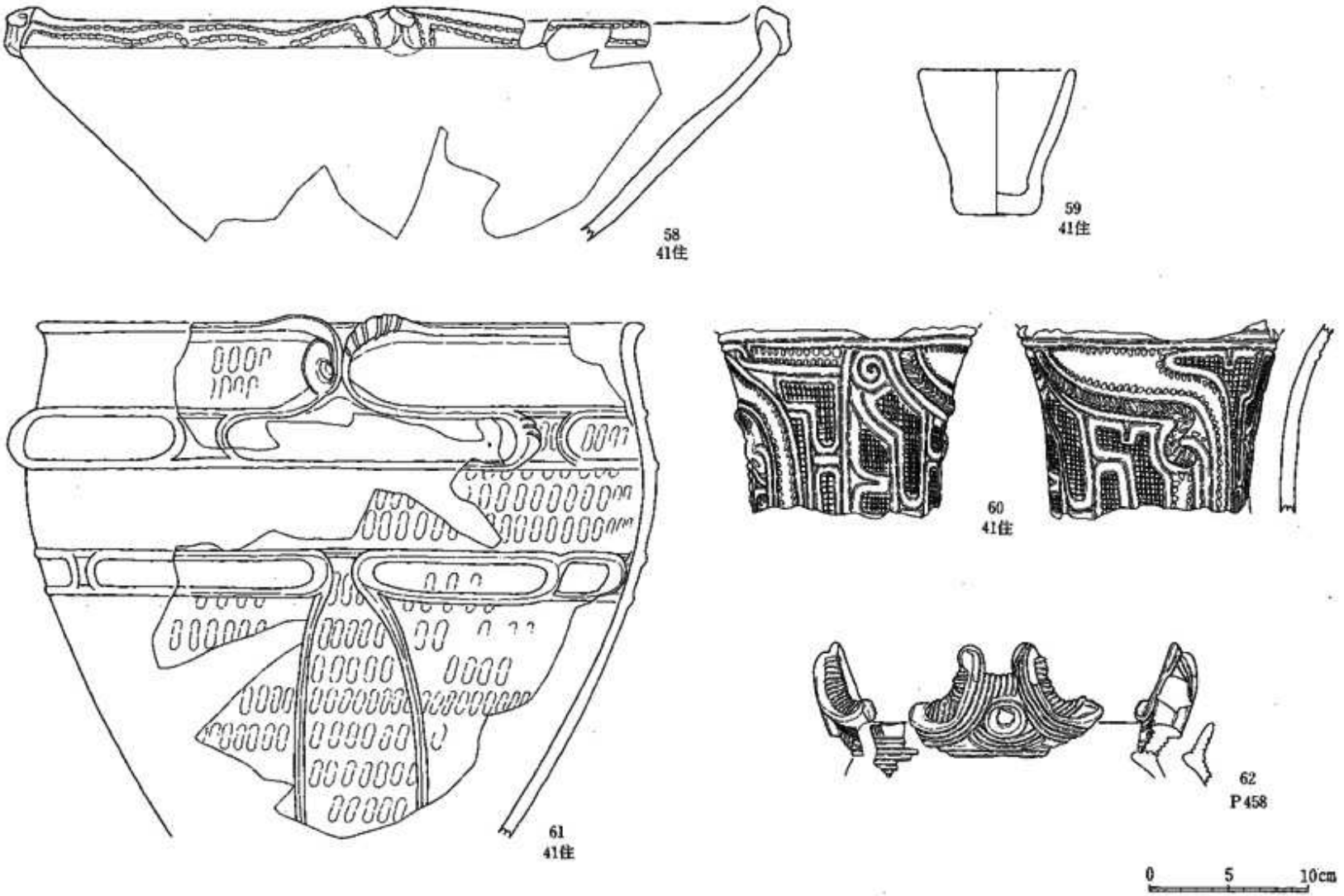


第27図　塩辛遺跡縄文土器実測図(8)

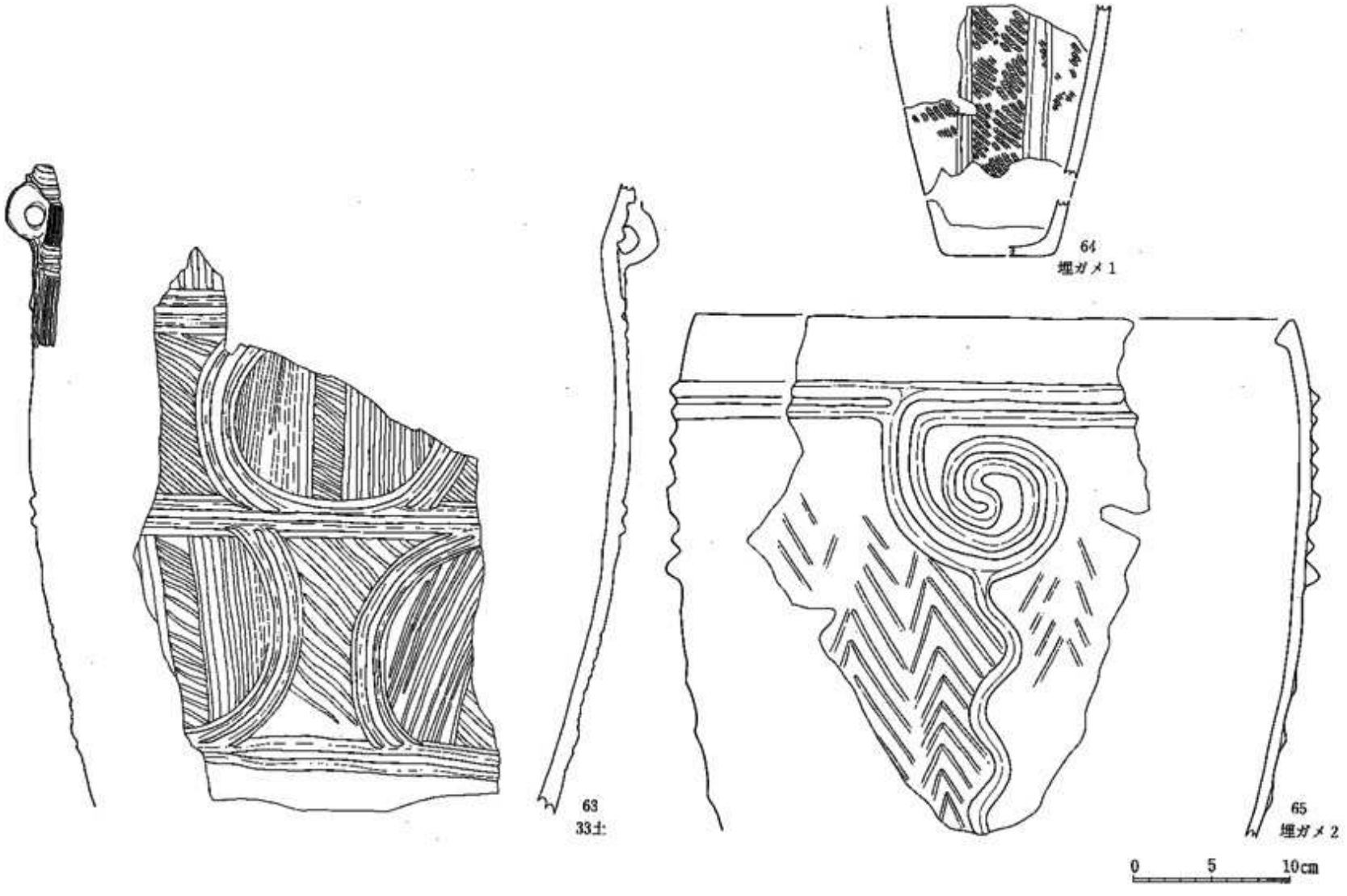




第28図　塩辛遺跡縄文土器実測図(9)

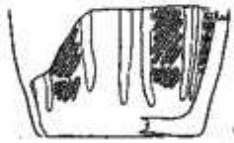


第29図　塩辛遺跡縄文土器実測図(10)



第30図　塩辛遺跡縄文土器実測図(11)

66
土集

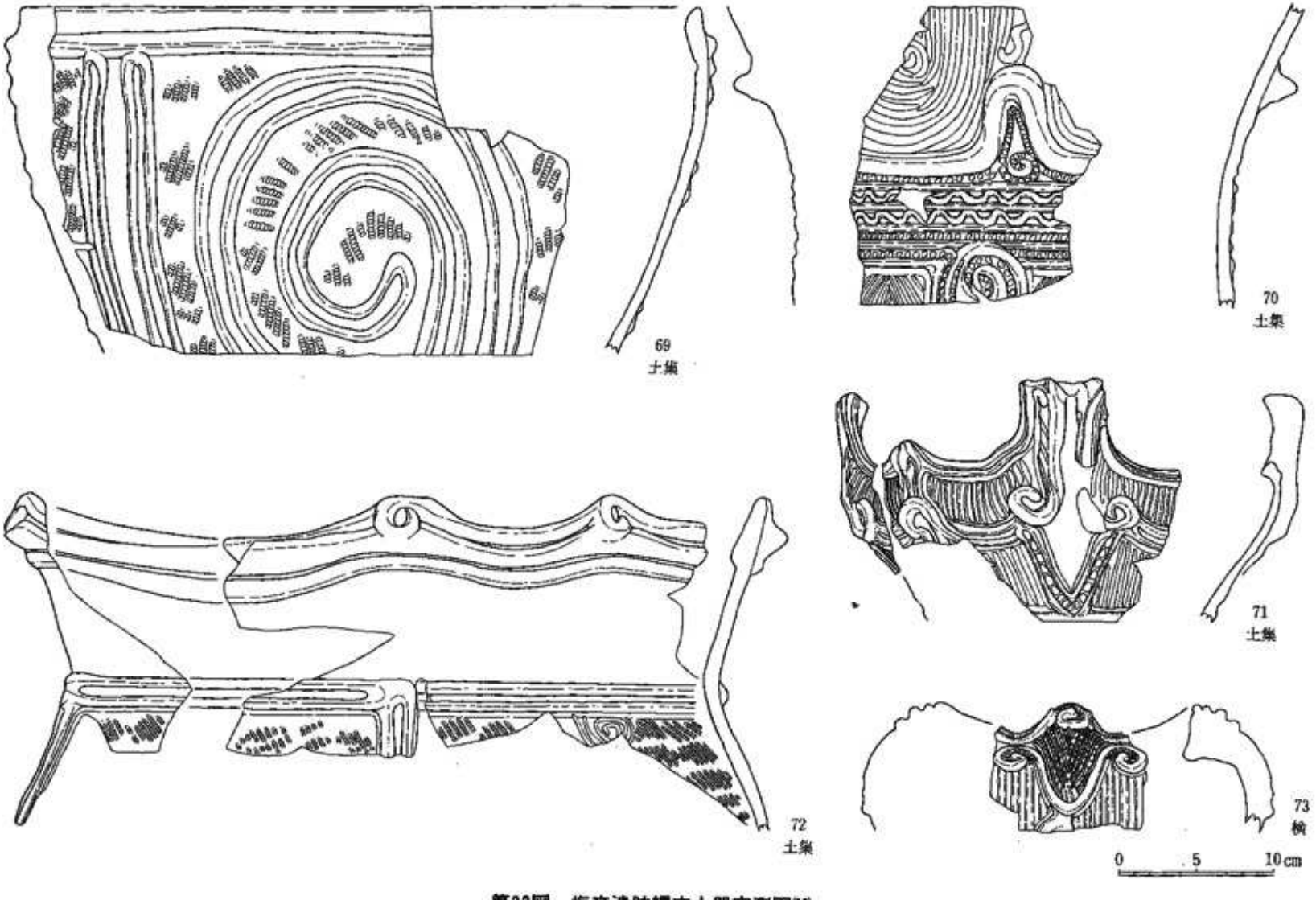


67
土集

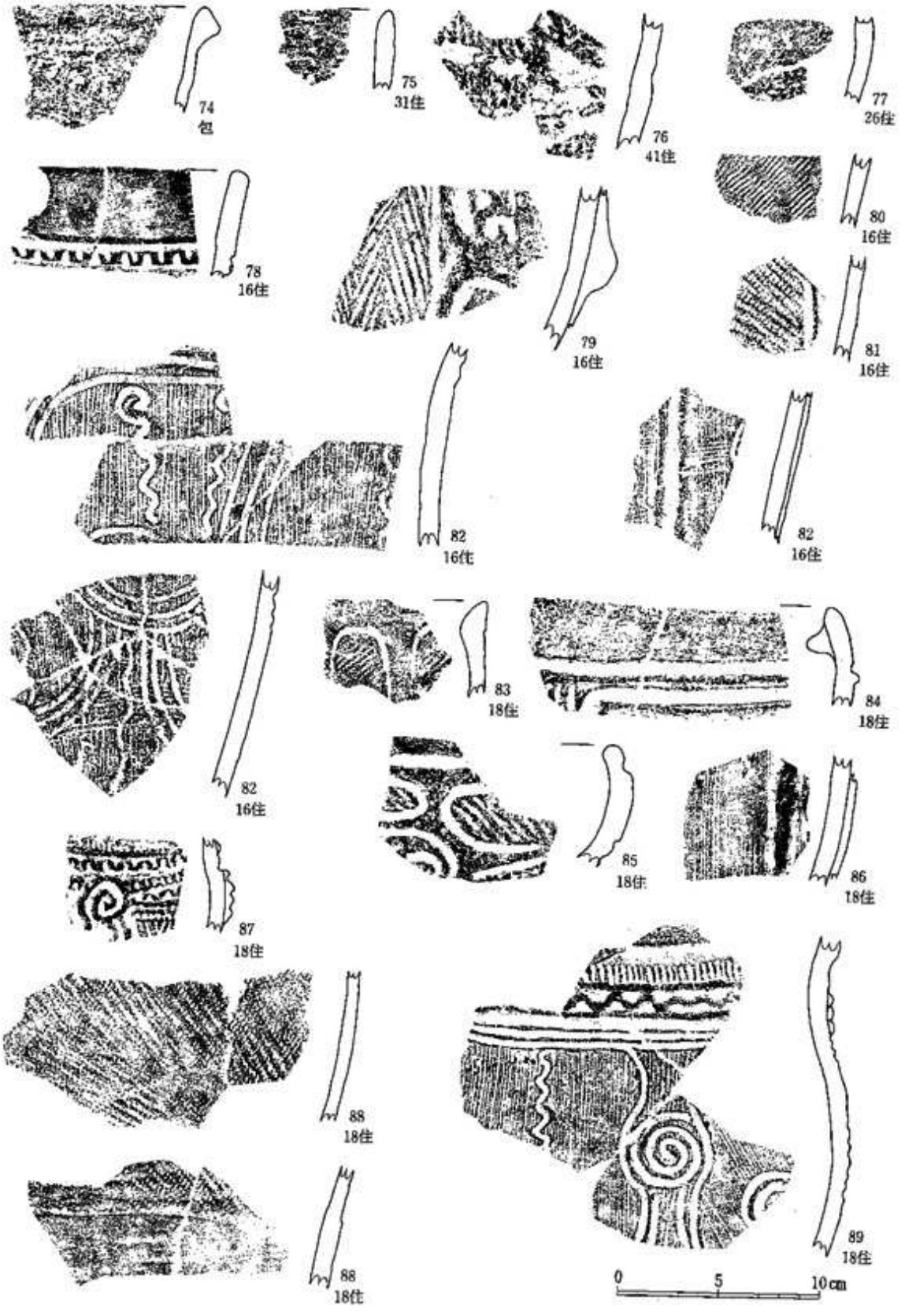
68
土集

0　5　10cm

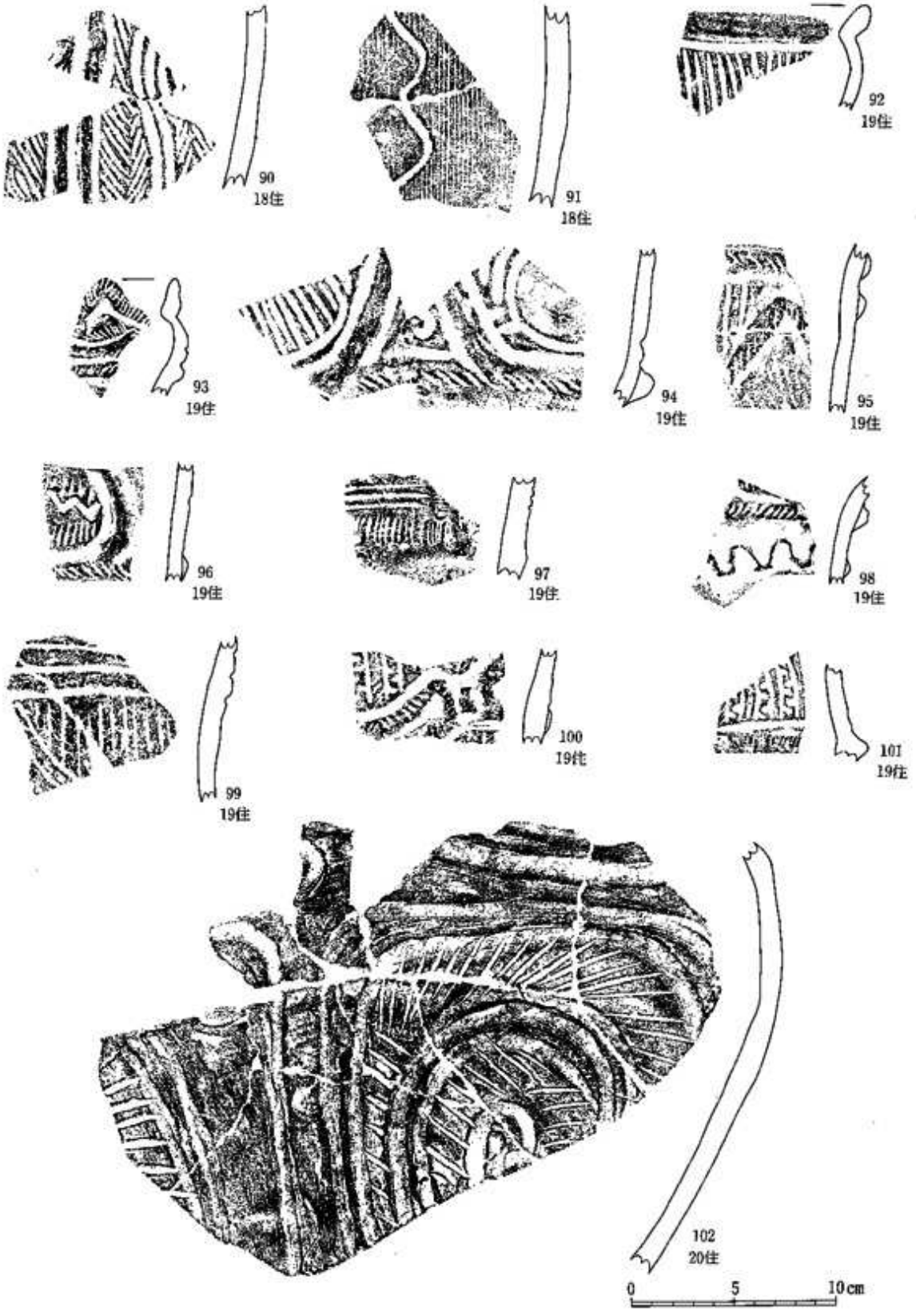
第31図　塩辛遺跡縄文土器実測図(12)



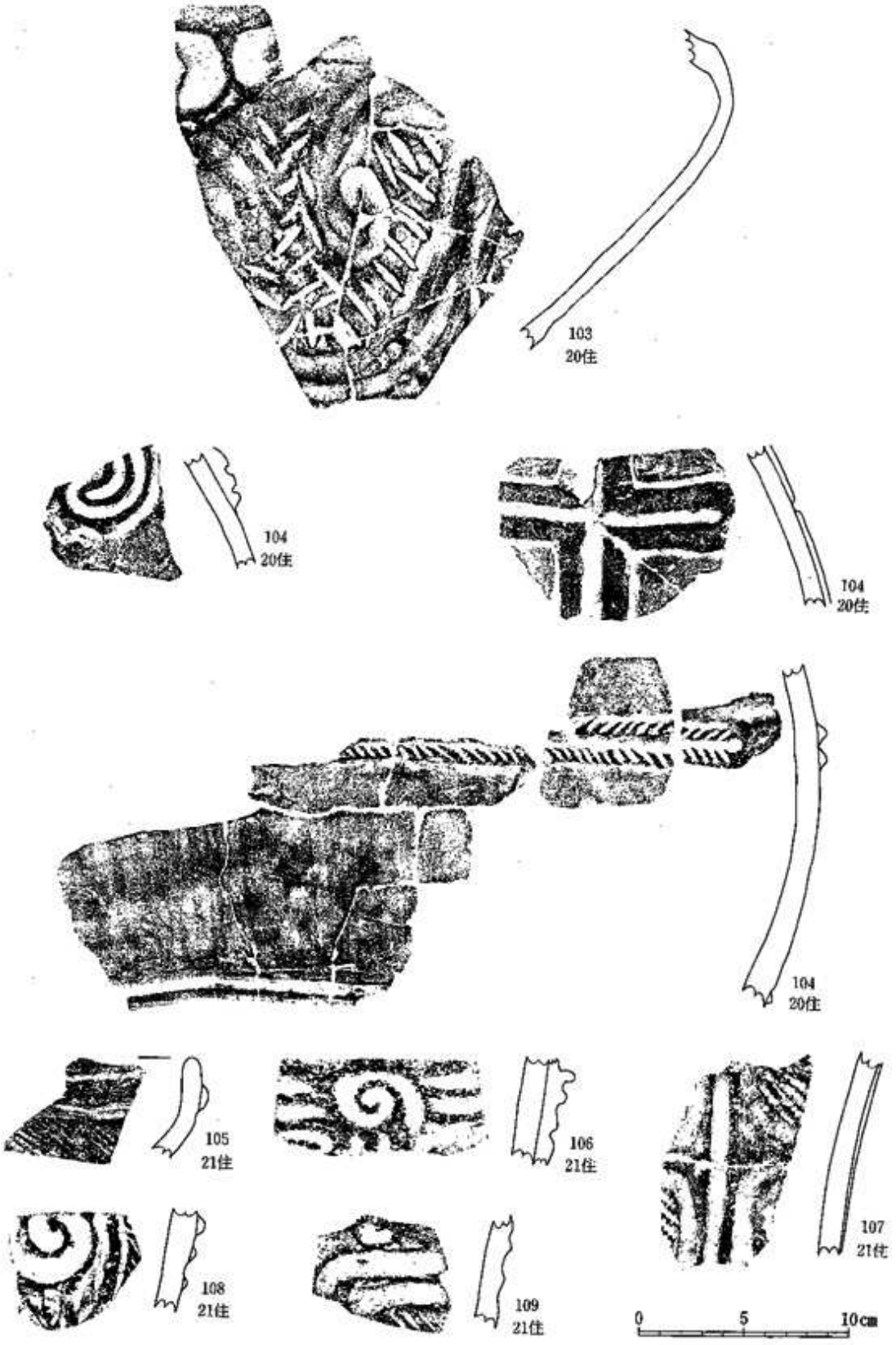
第32図　塩辛遺跡縄文土器実測図(13)



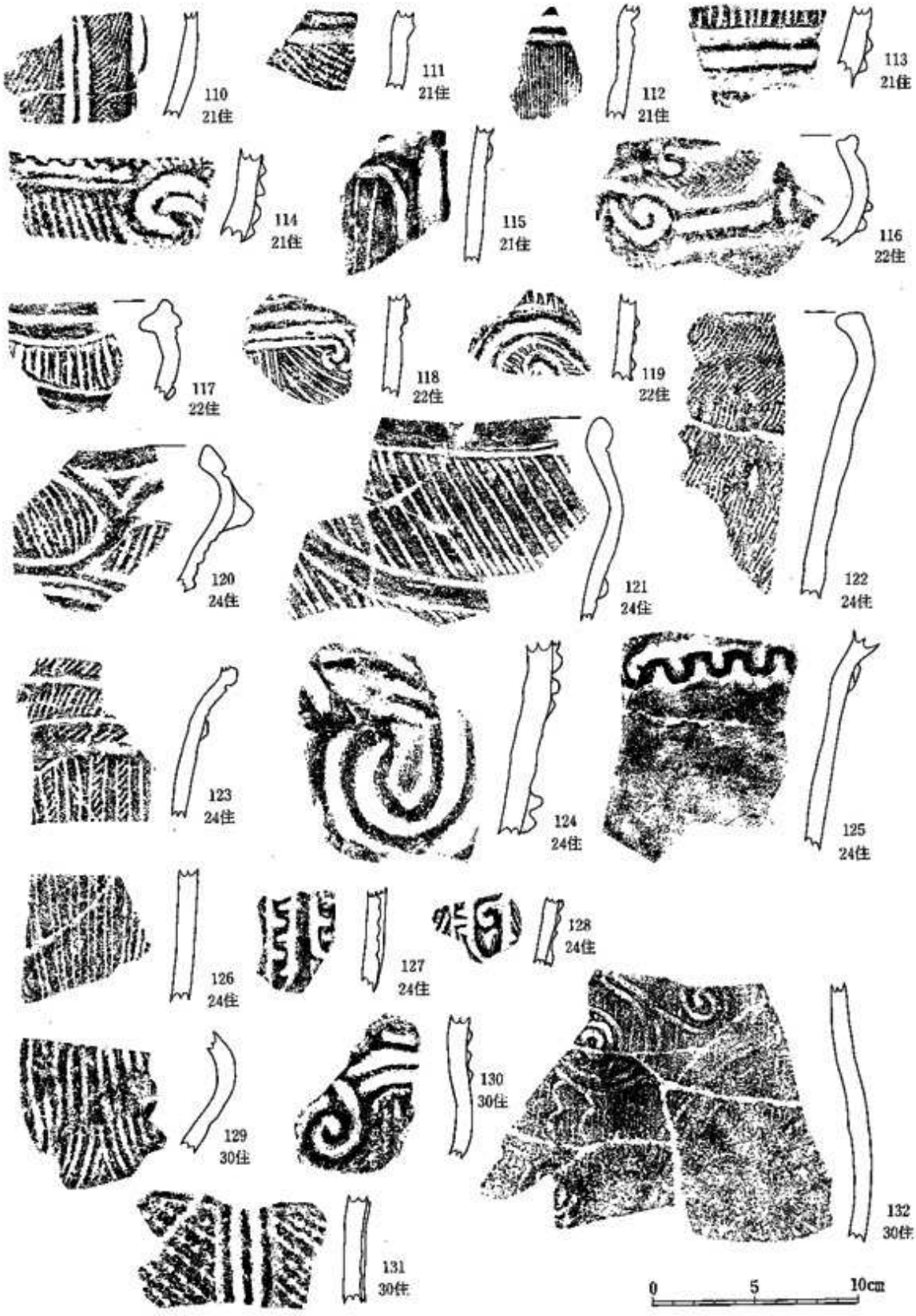
第33図　塩辛遺跡縄文土器拓影(1)



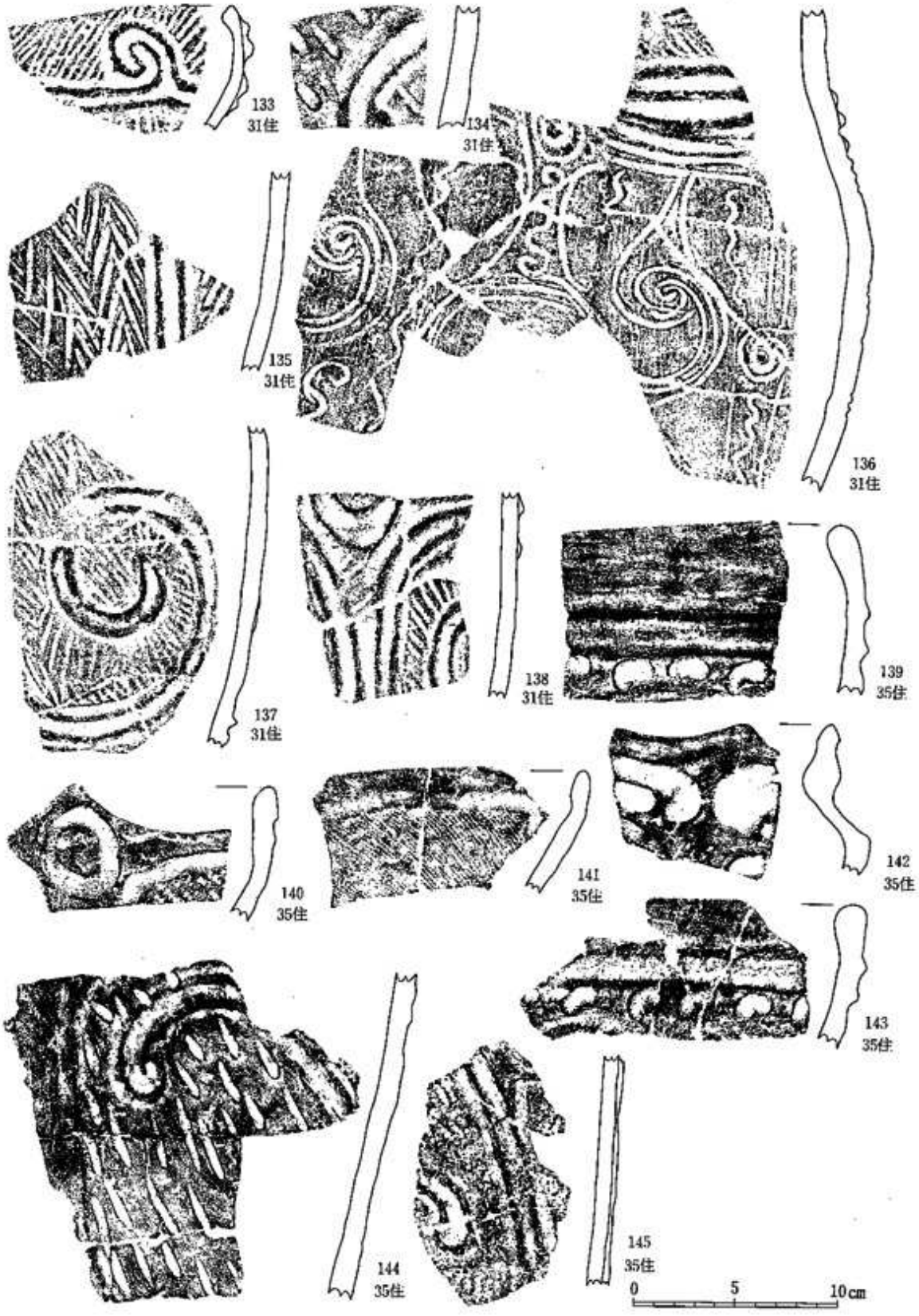
第34図　塩辛遺跡縄文土器拓影(2)



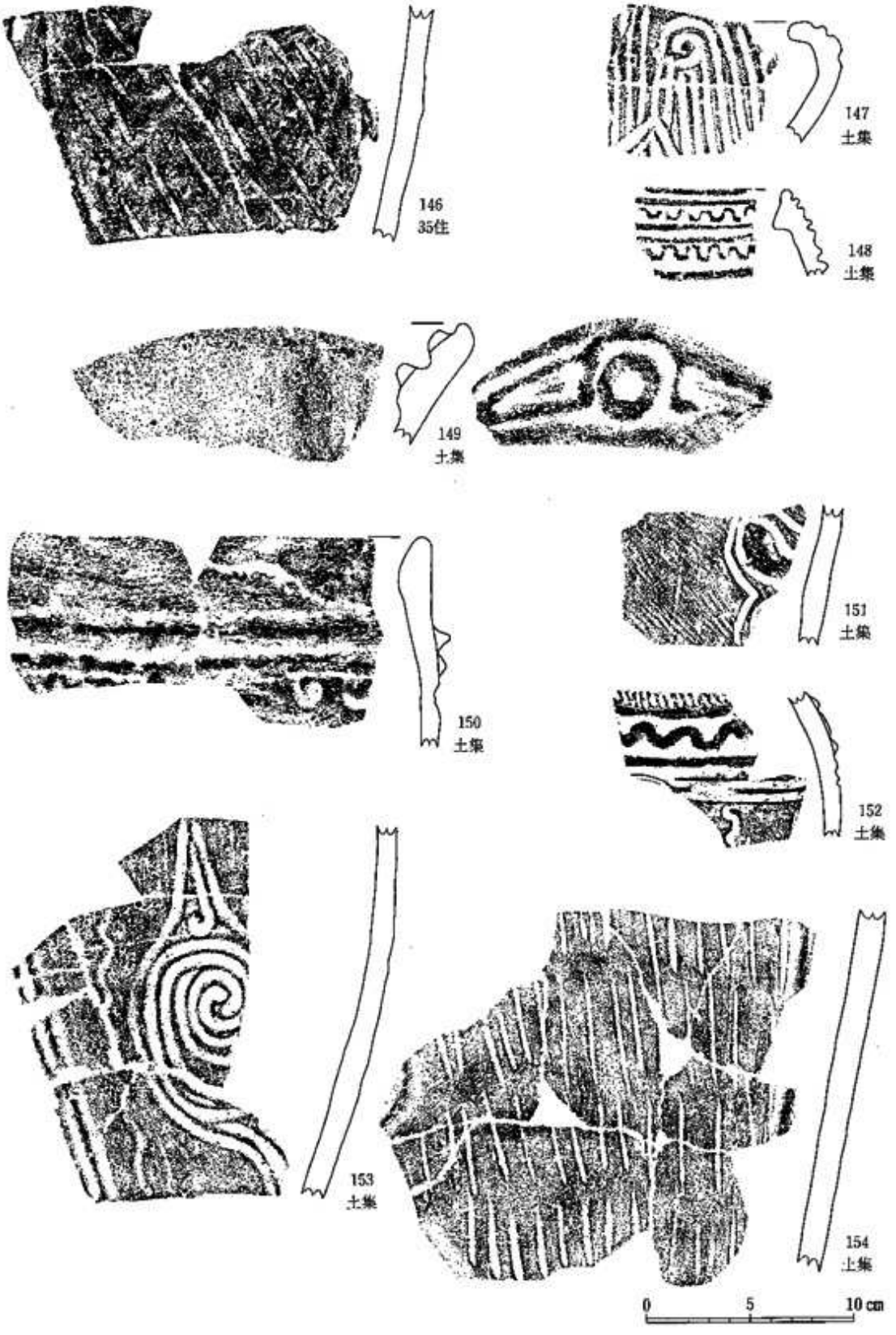
第35図　塩辛遺跡縄文土器拓影(3)



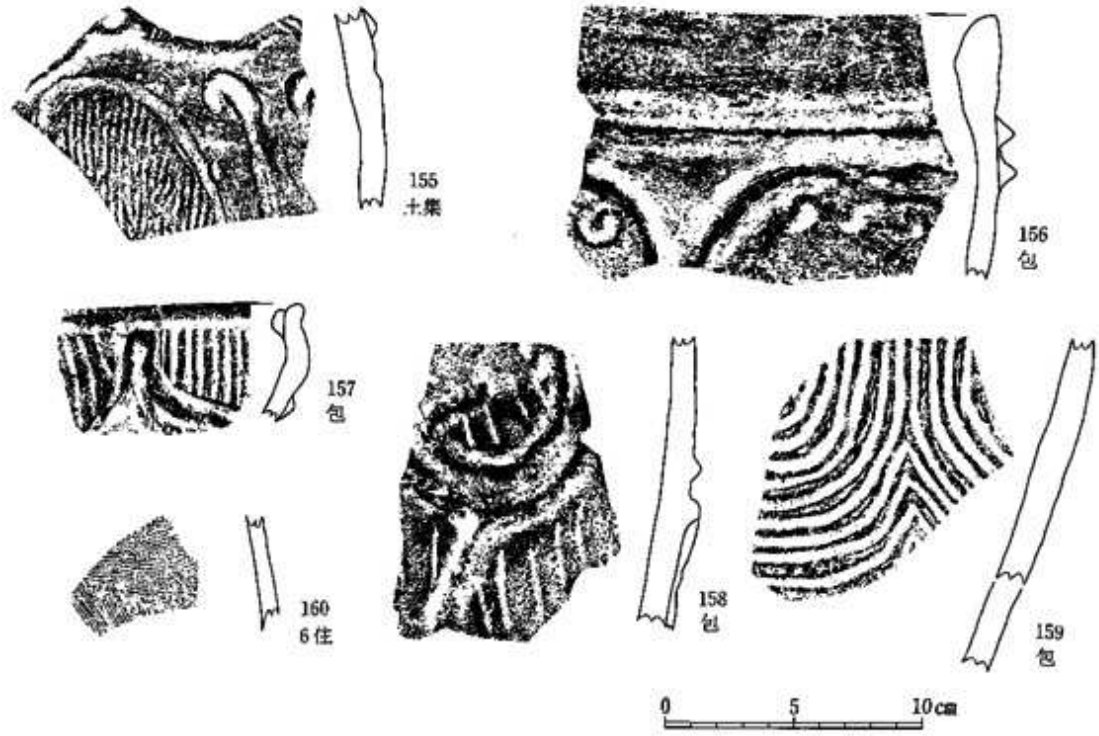
第36図　塩辛遺跡縄文土器拓影(4)

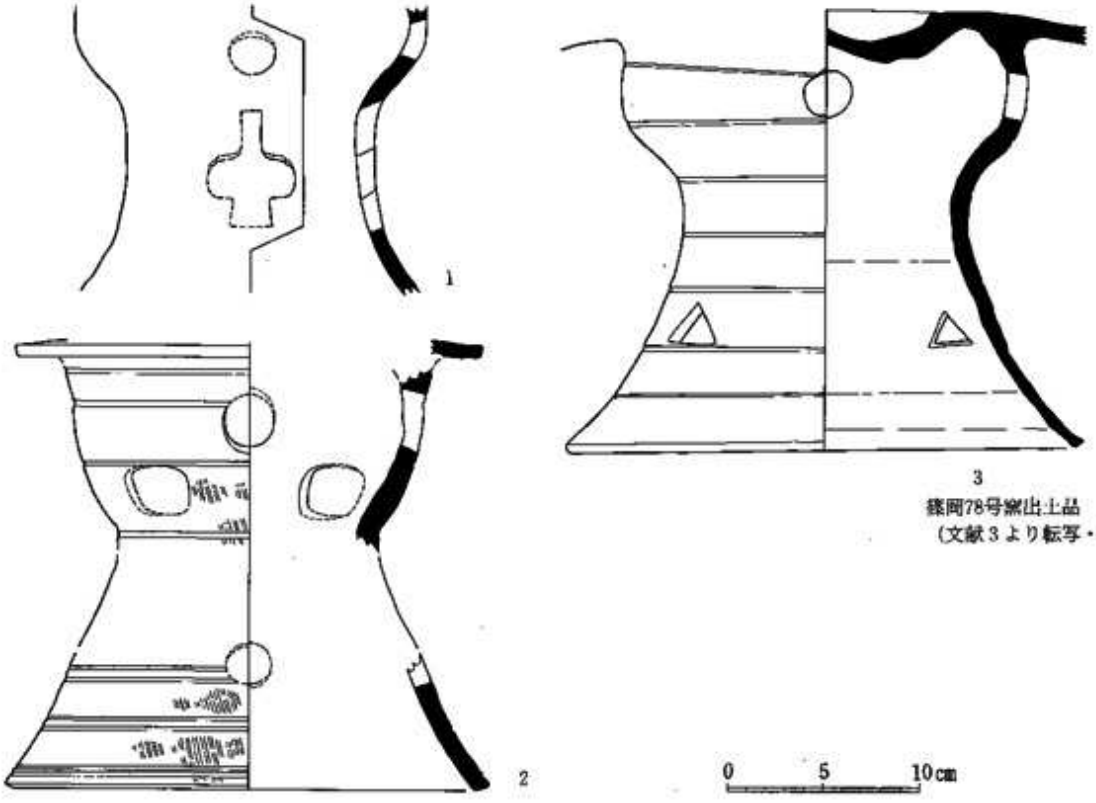


第37図　塩辛遺跡縄文土器拓影(5)



第38図　塩辛遺跡縄文土器拓影(6)

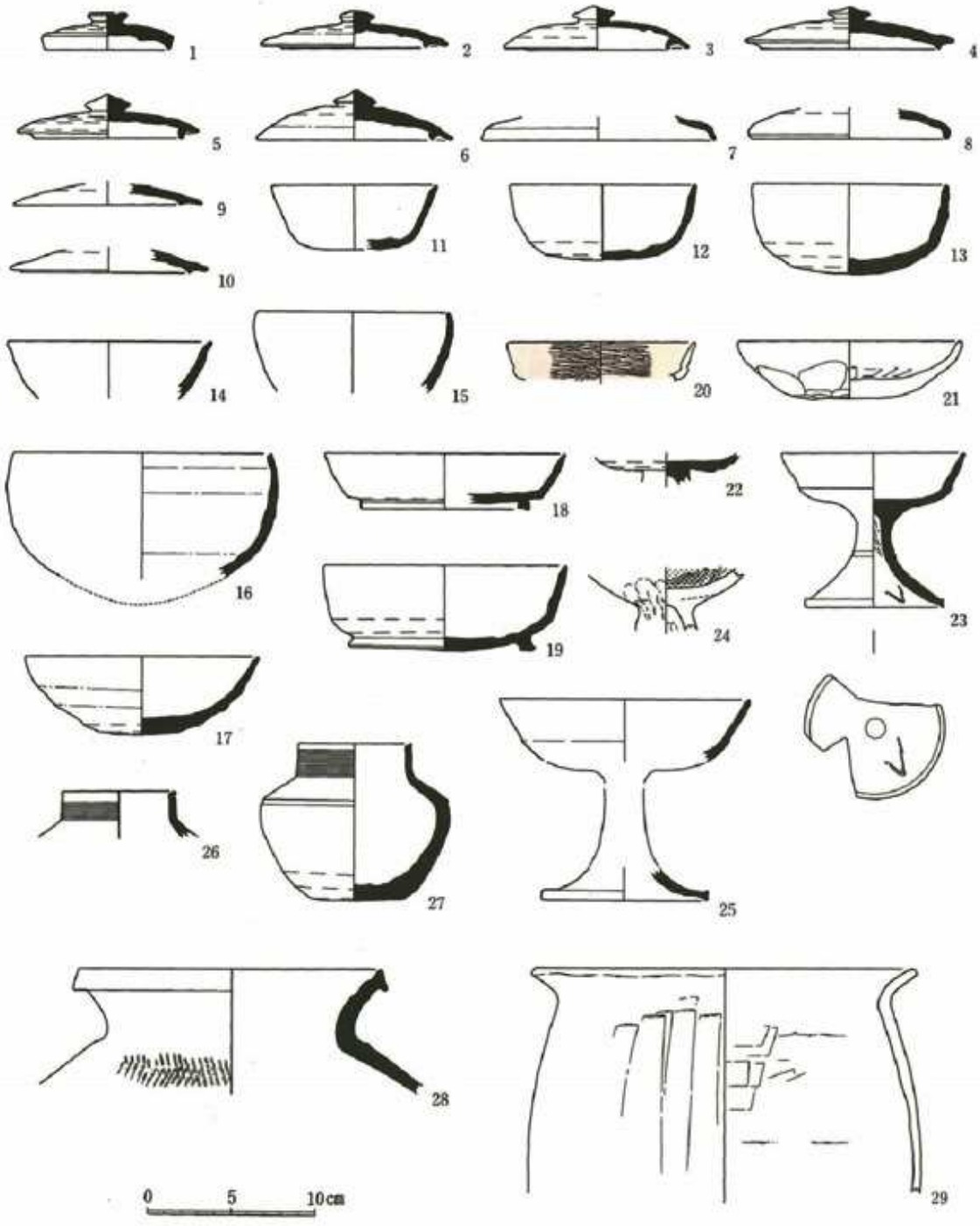




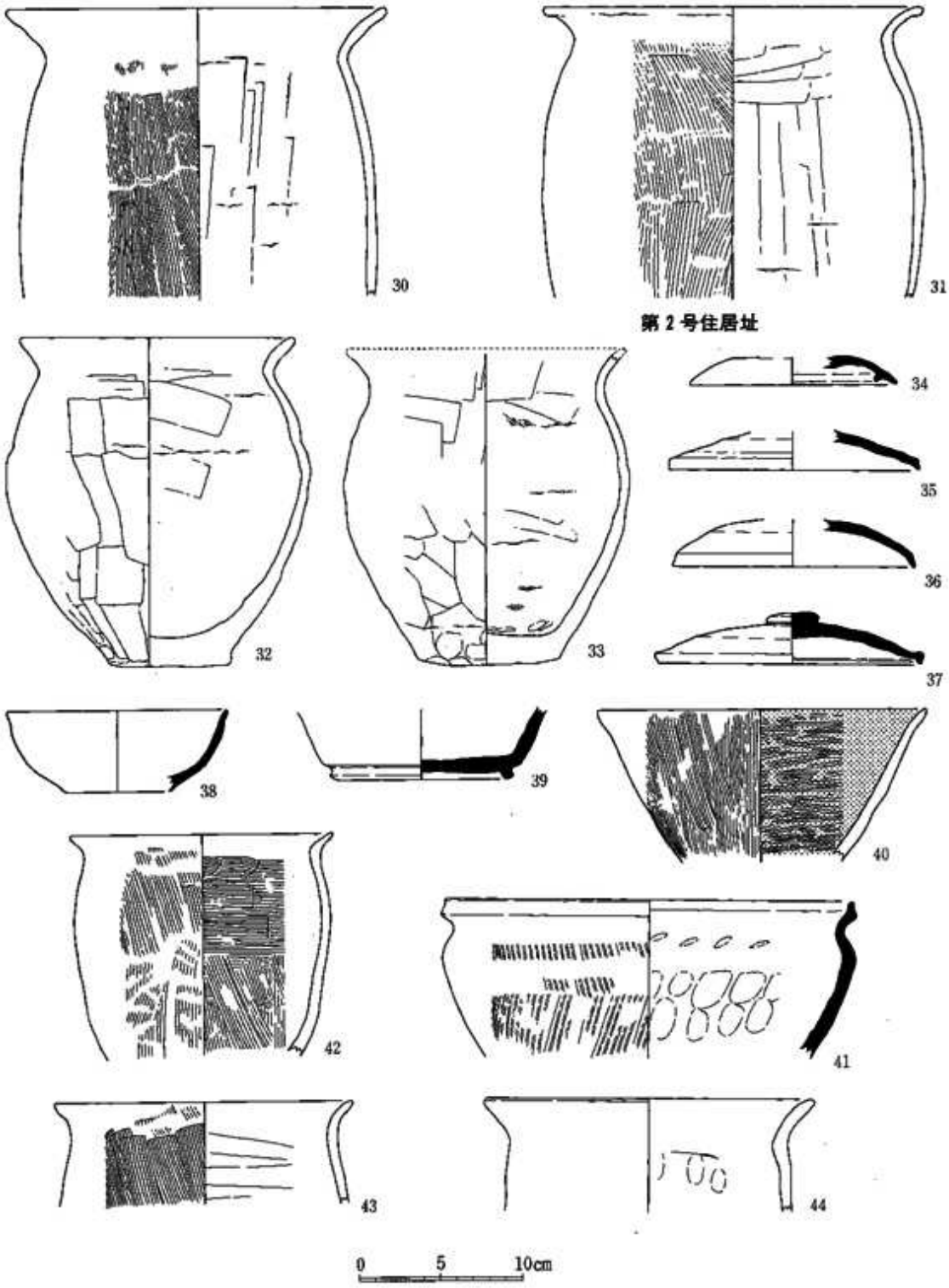
3
篠岡78号窯出土品
(文献3より転写・再トレース

第39図　塩辛遺跡縄文土器拓影(7)、岡田地区出土須恵器器台

第１号住居址

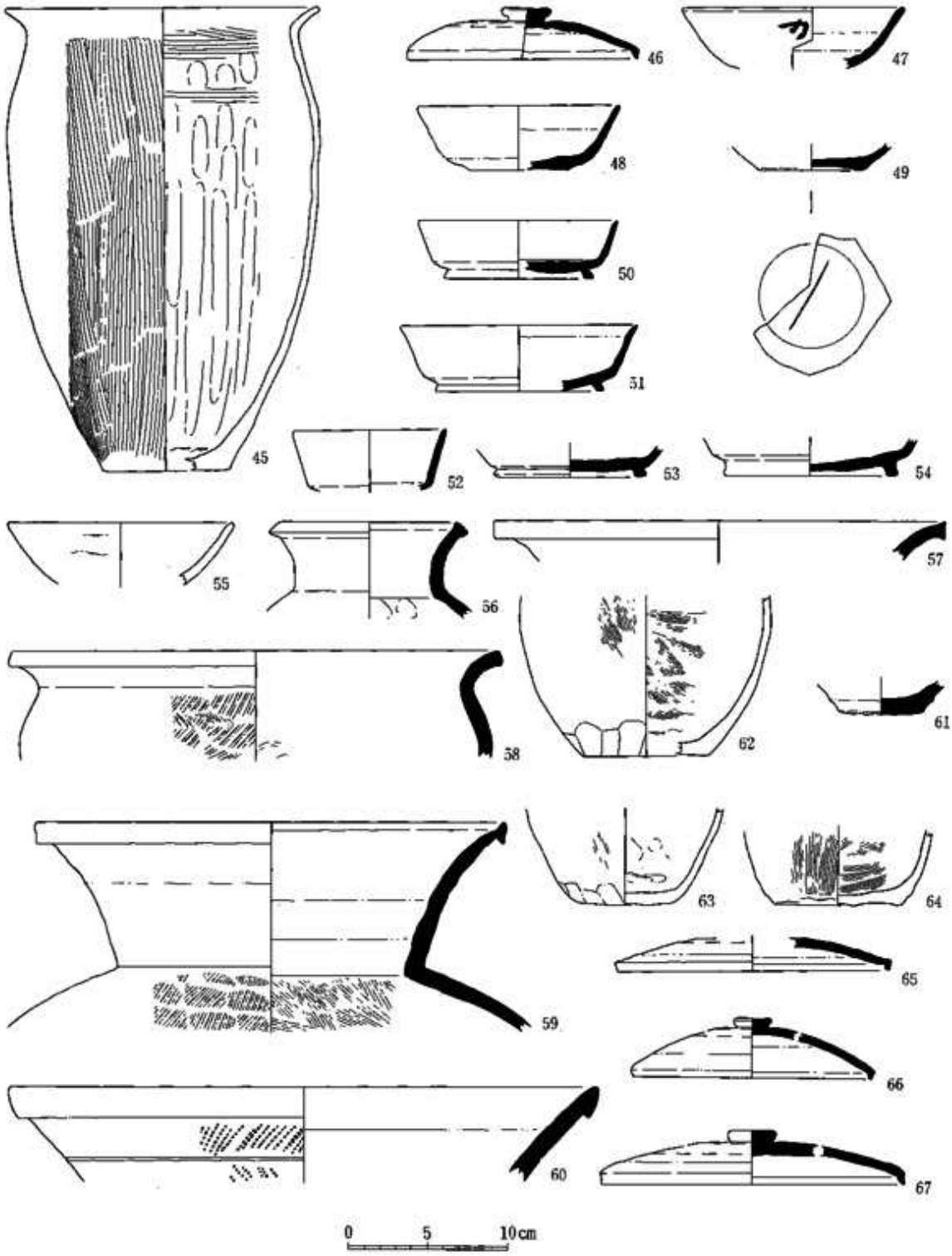


第40図　塩辛遺跡古墳時代以降の土器実測図(1)

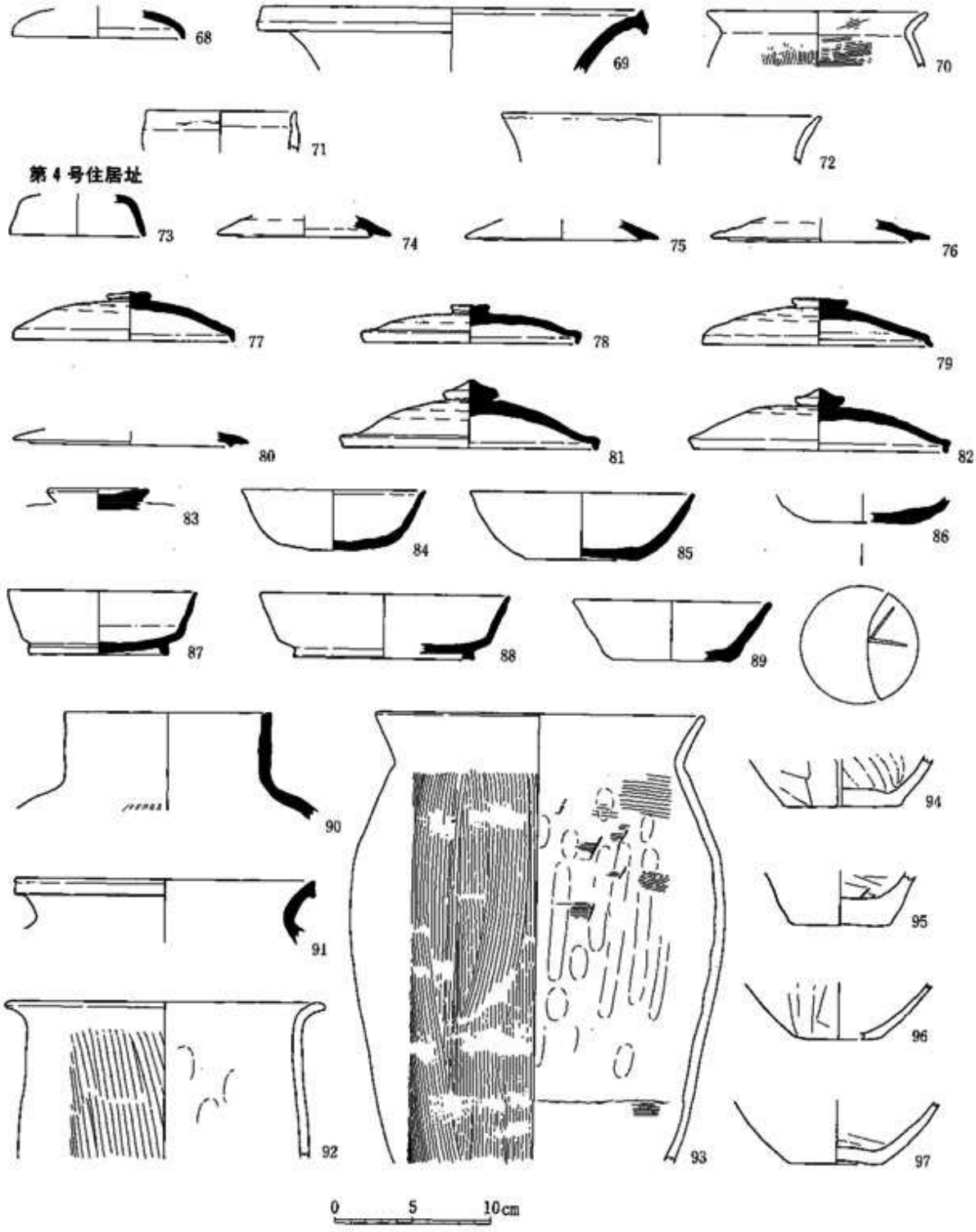


第41図　塩辛遺跡古墳時代以降の土器実測図(2)

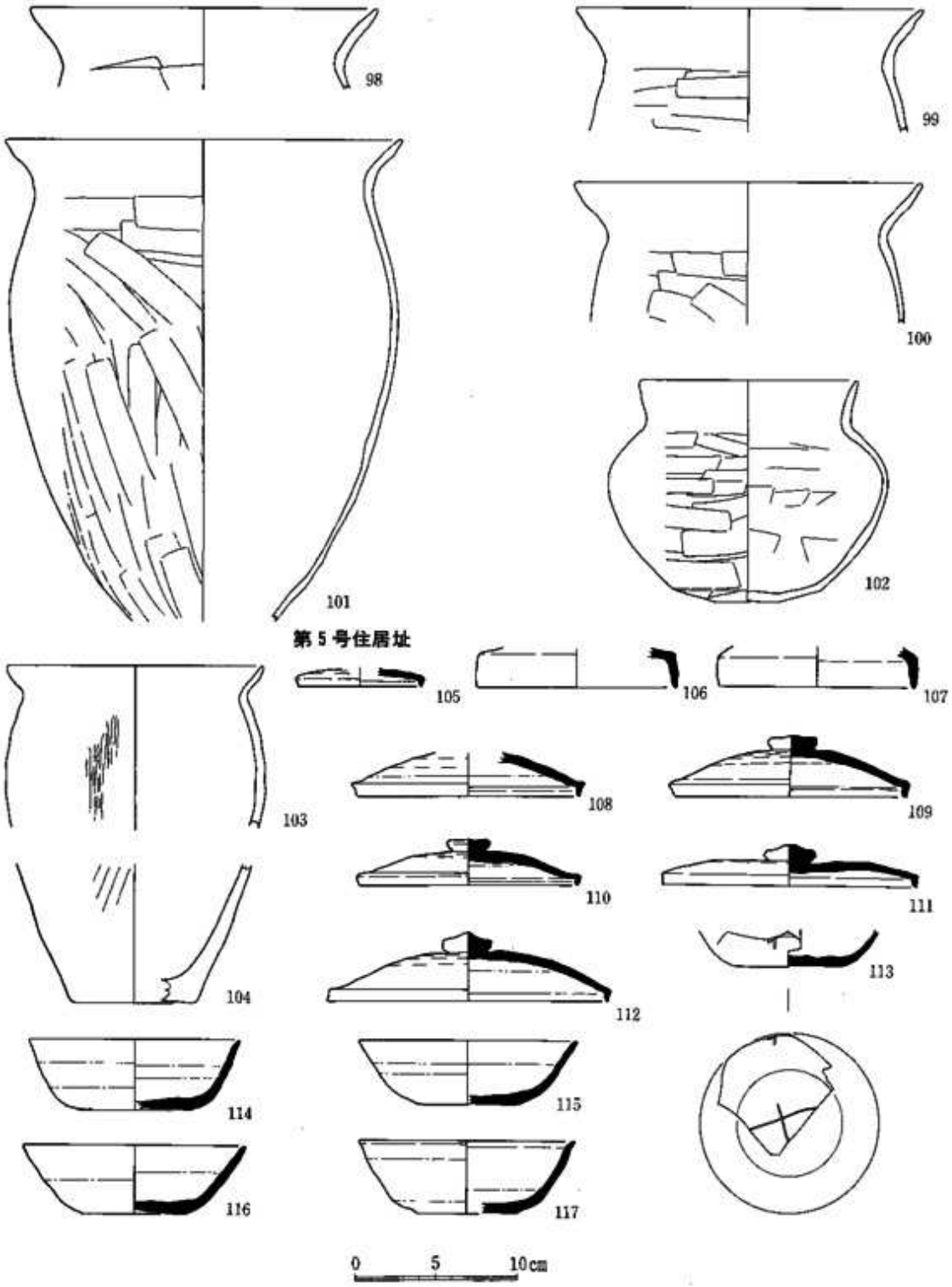
第３号住居址



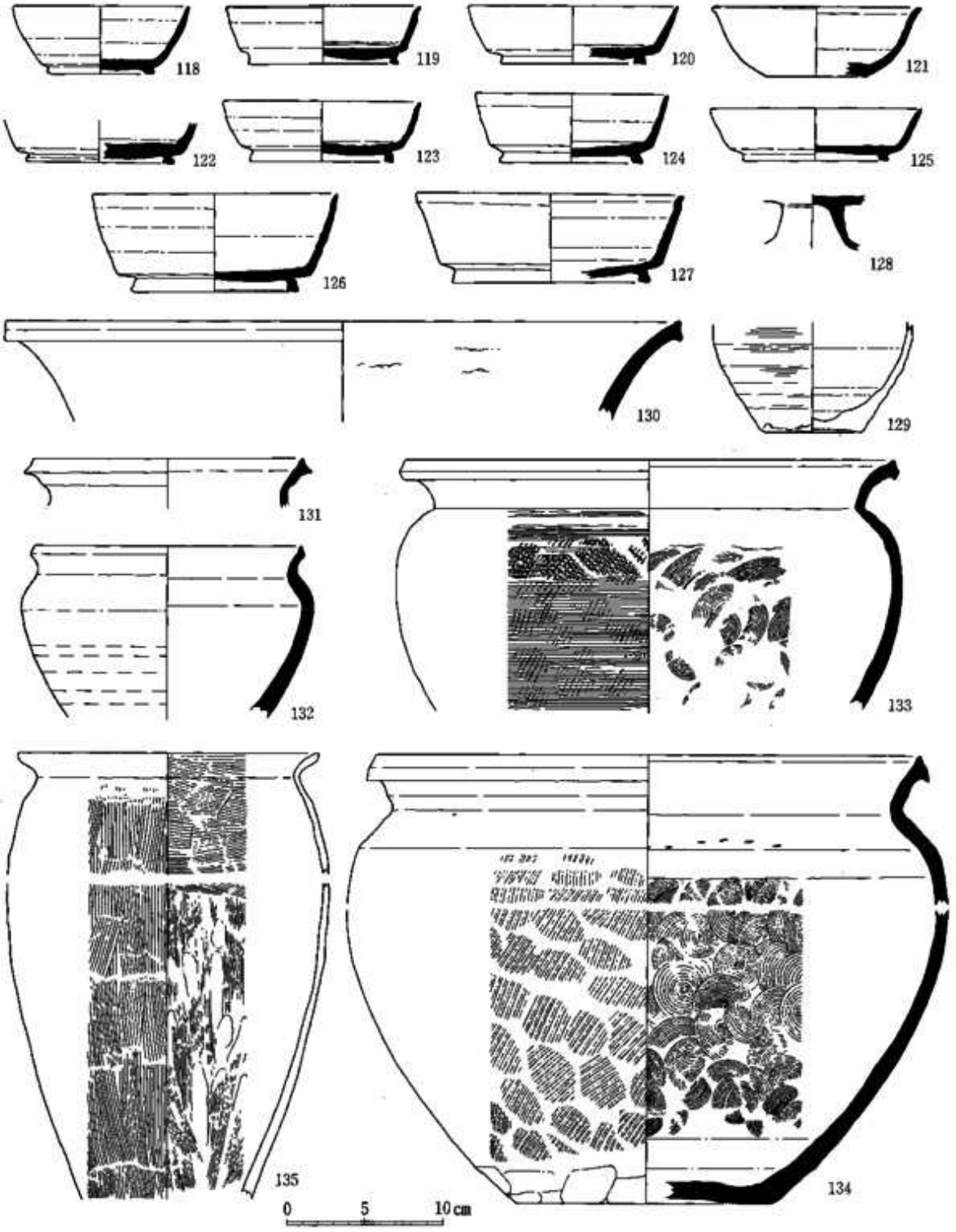
第42図　塩辛遺跡古墳時代以降の土器実測図(3)



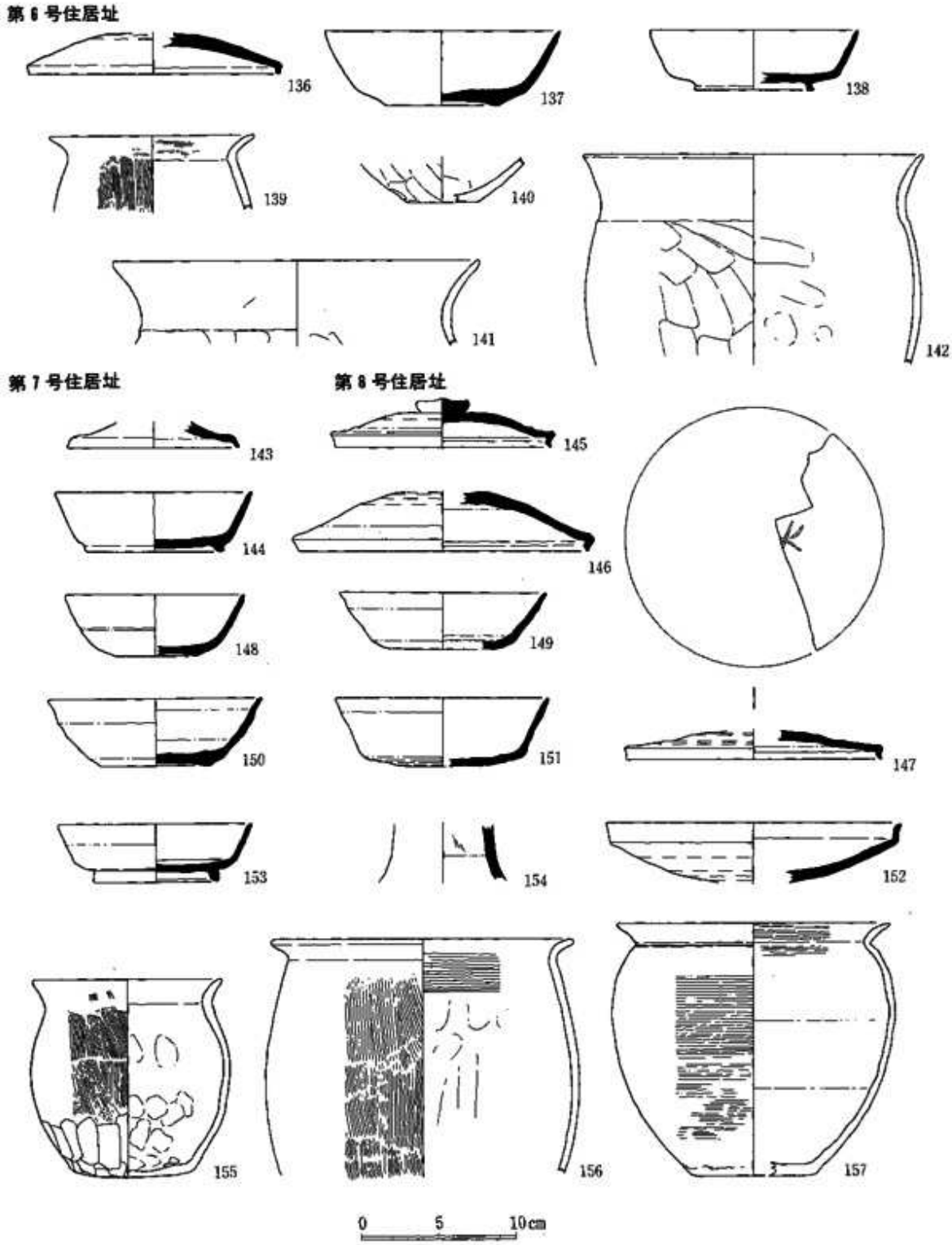
第43図　塩辛遺跡古墳時代以降の土器実測図(4)



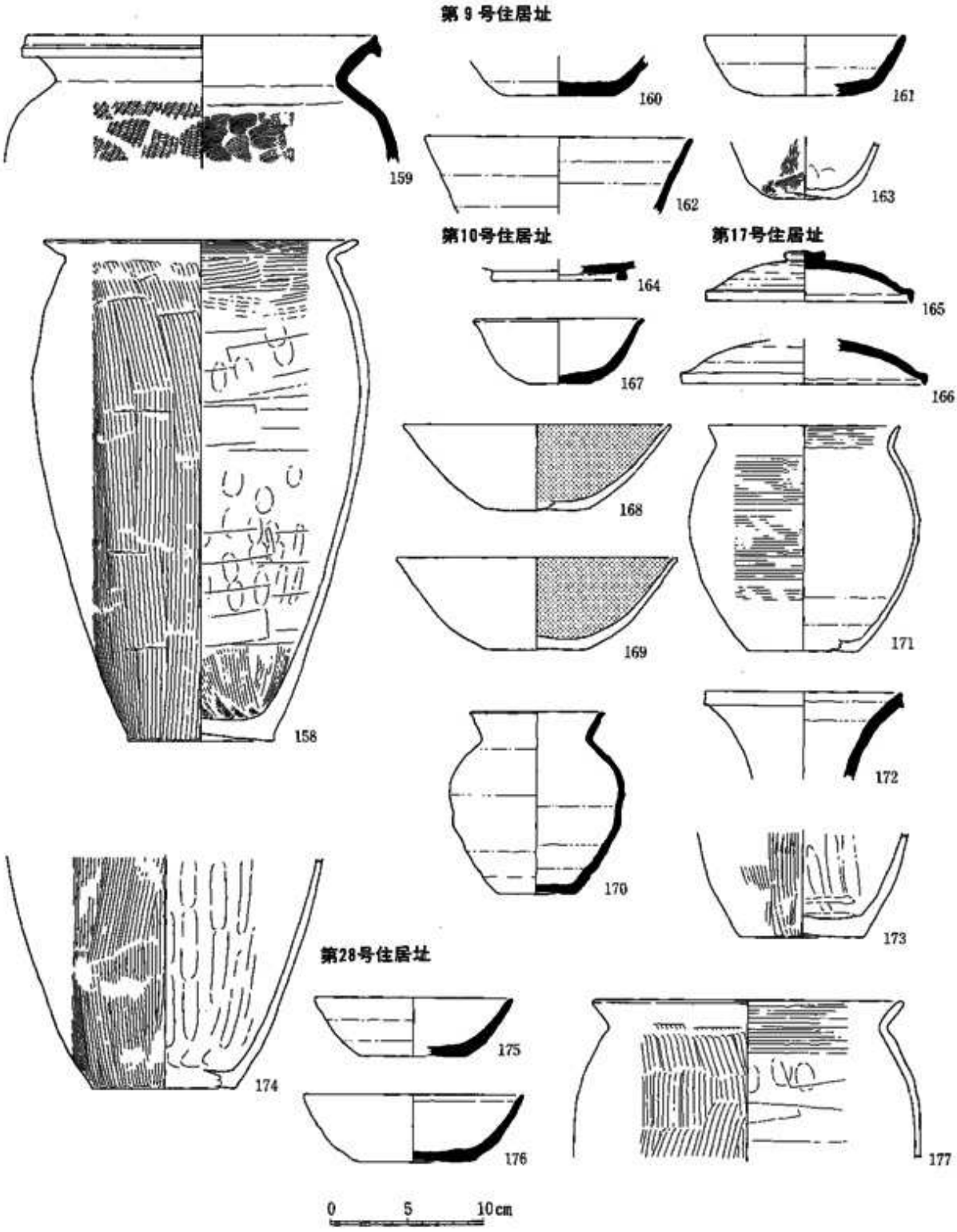
第44図　塩辛遺跡古墳時代以降の土器実測図(5)



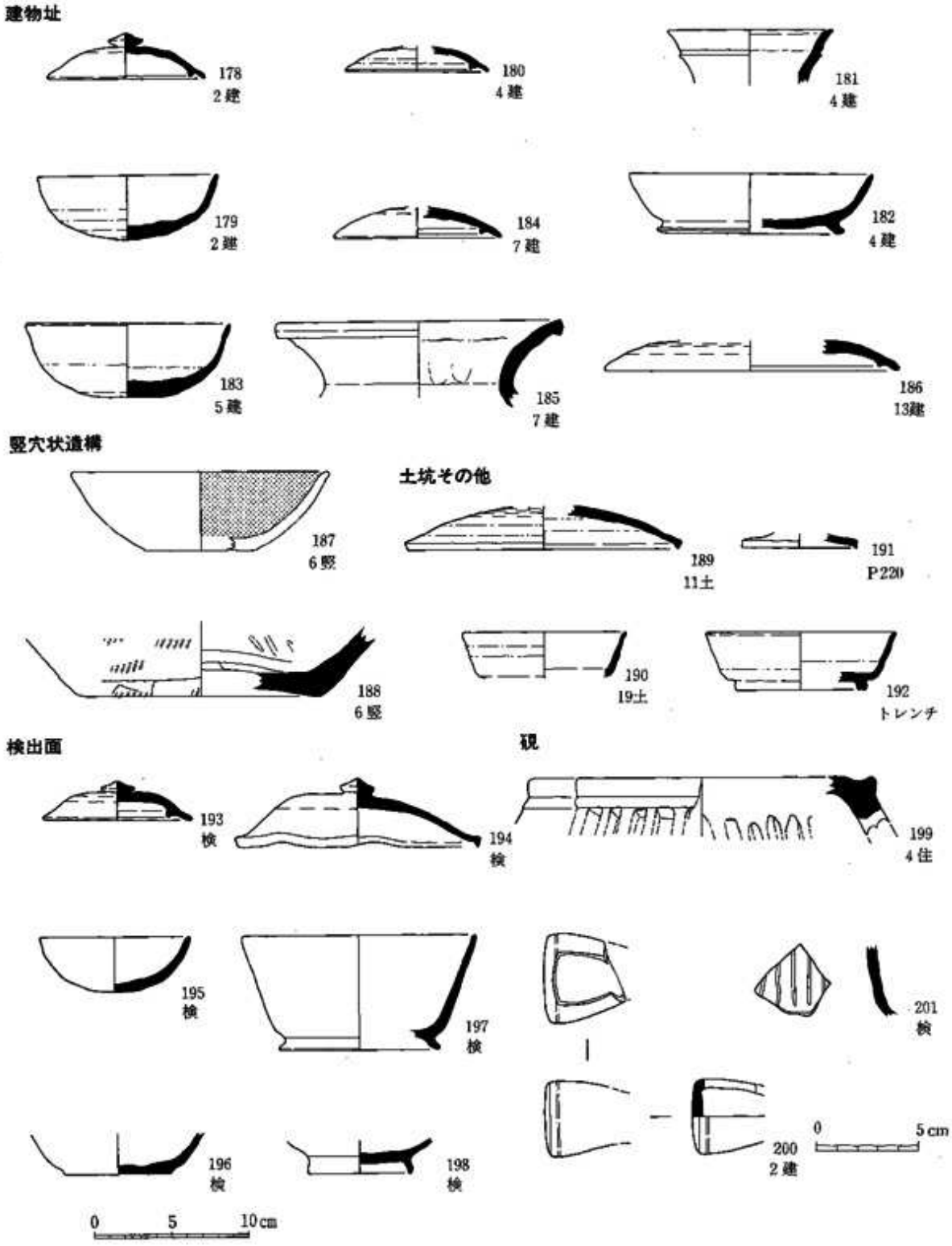
第45図　塩辛遺跡古墳時代以降の土器実測図(6)



第46図　塩辛遺跡古墳時代以降の土器実測図(7)

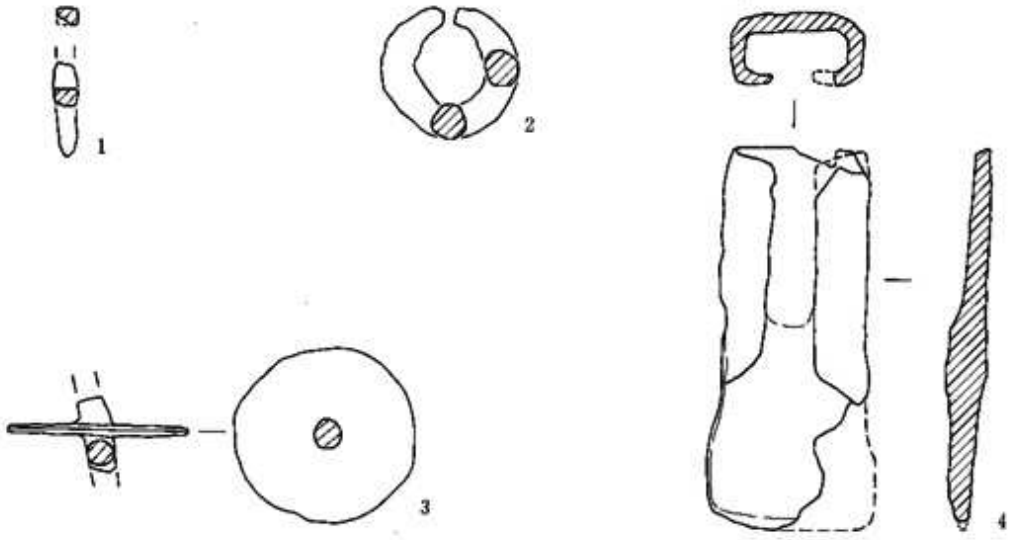


第47図　塩辛遺跡古墳時代以降の土器実測図(8)



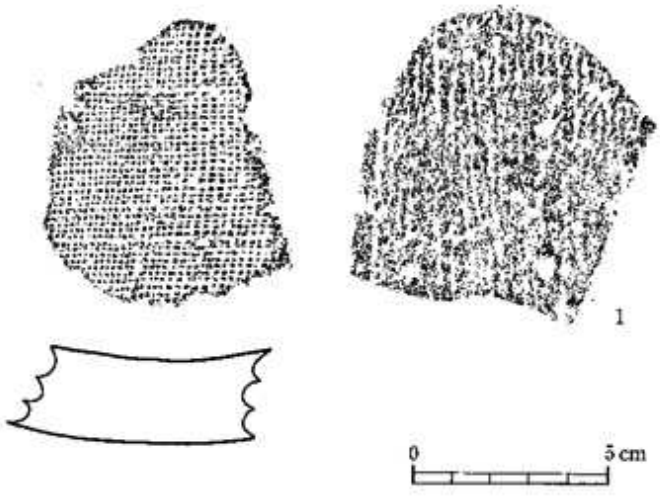
第48図　塩辛遺跡古墳時代以降の土器実測図(9)、硯実測図

鉄器

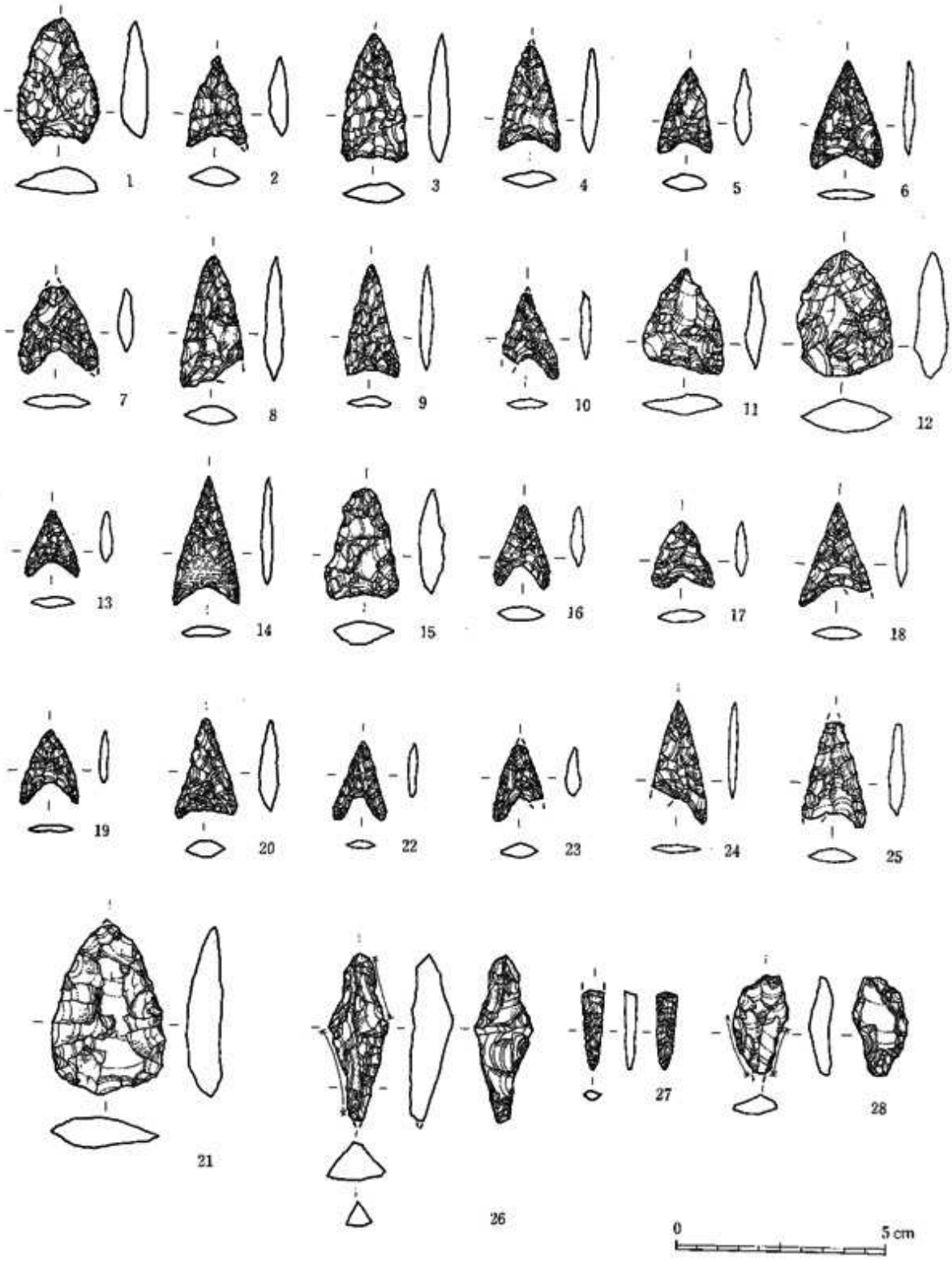


銭貨

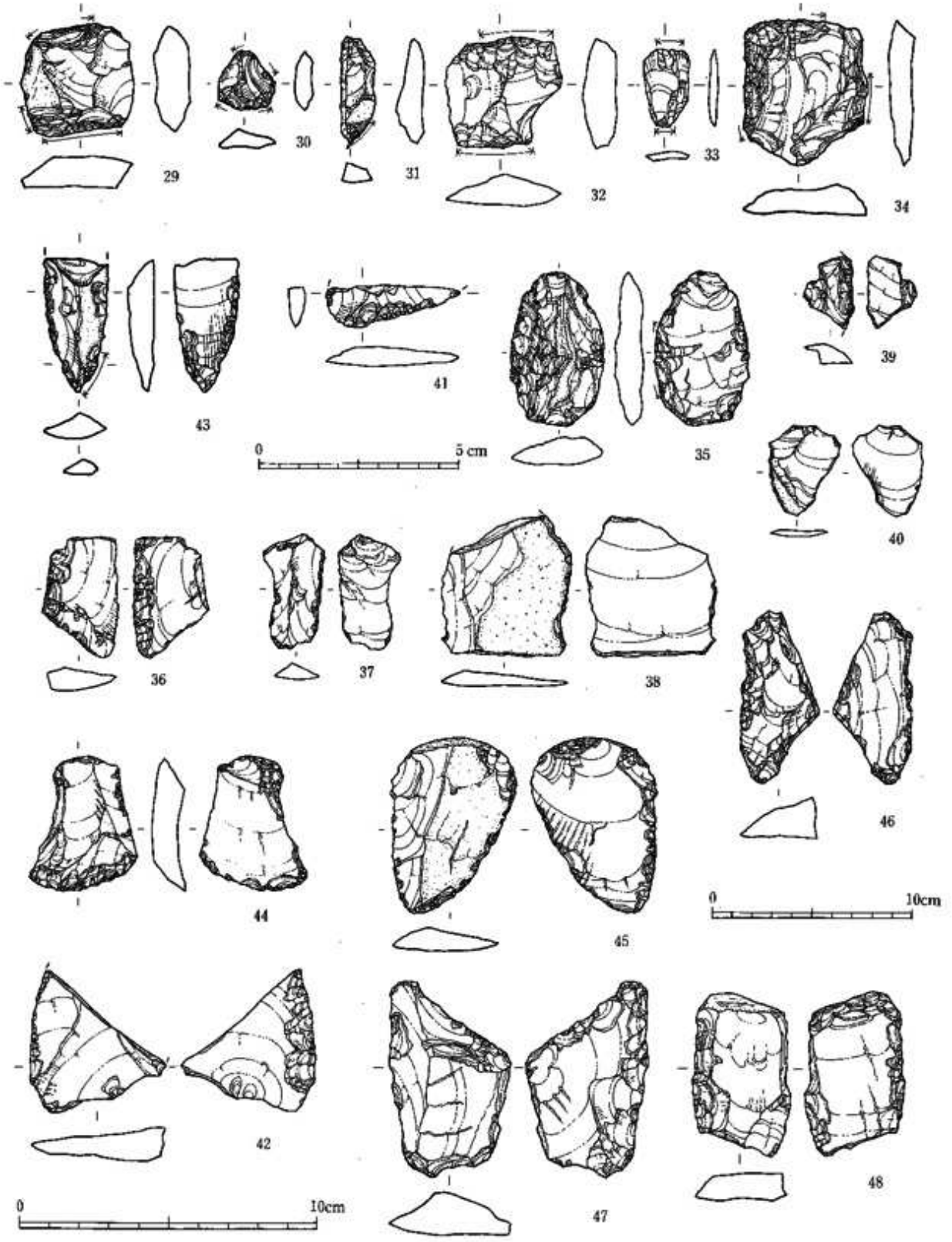
瓦



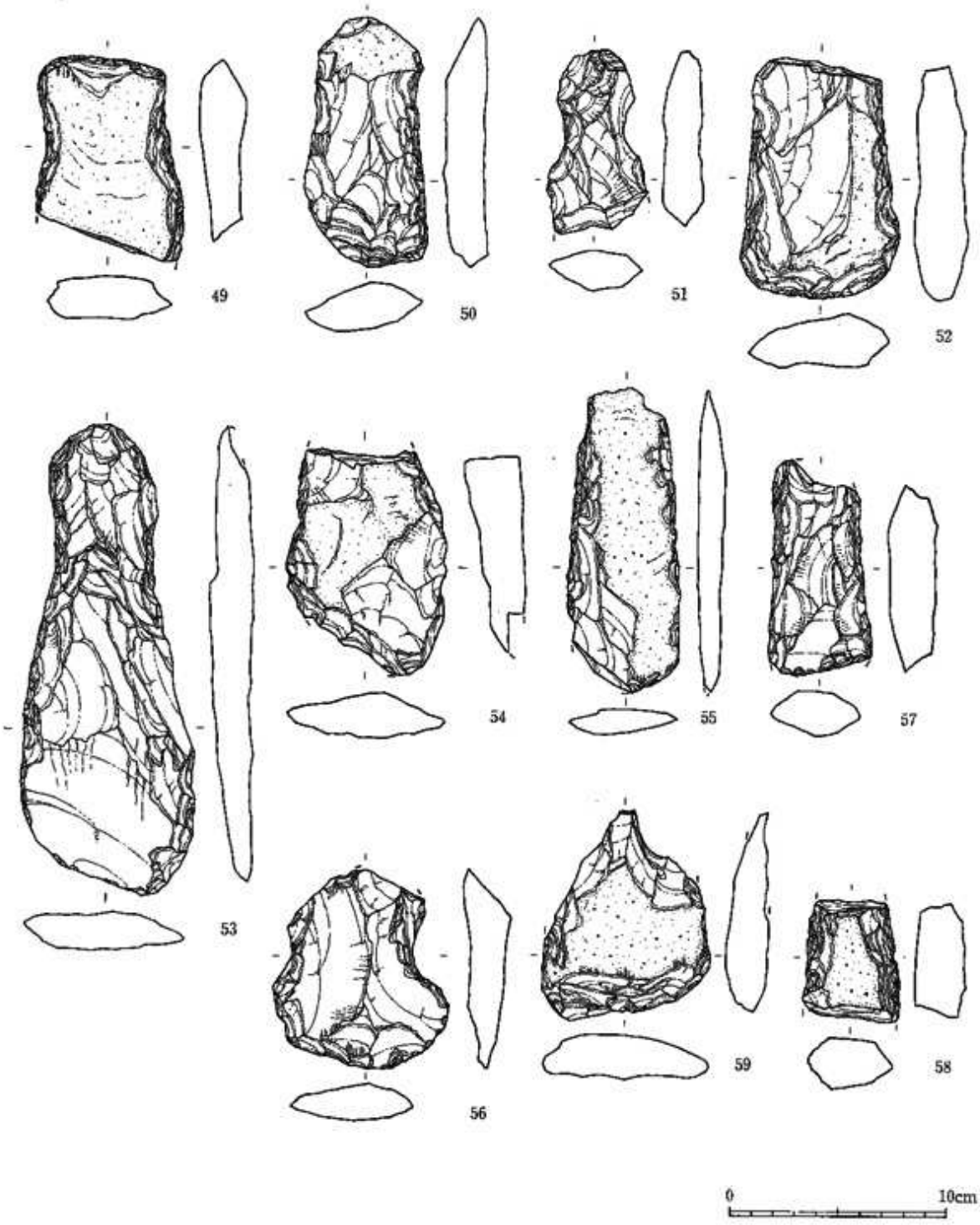
第49図　塩辛遺跡鉄器・瓦実測図、銭貨拓影



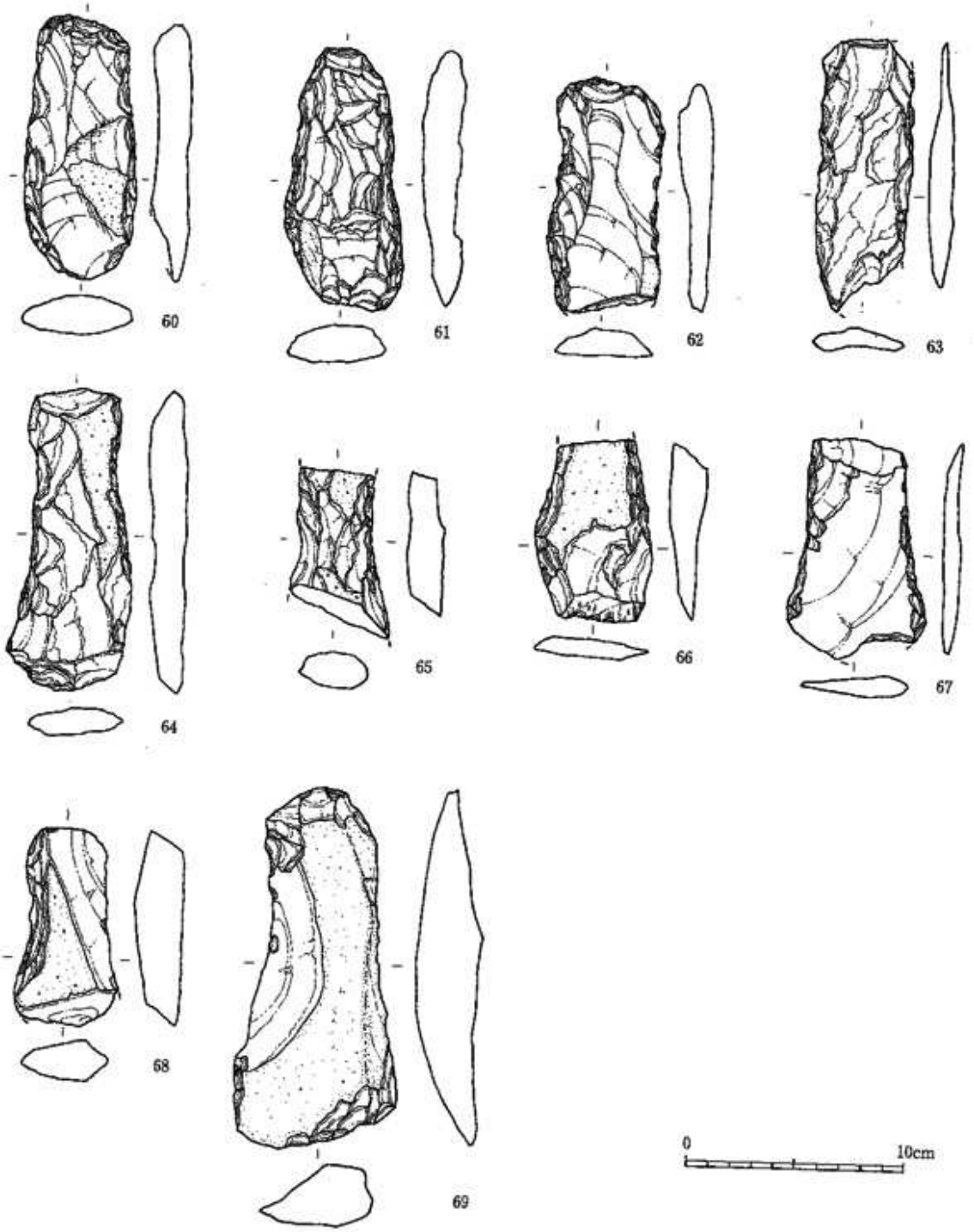
第50図　塩辛遺跡石器実測図(1)



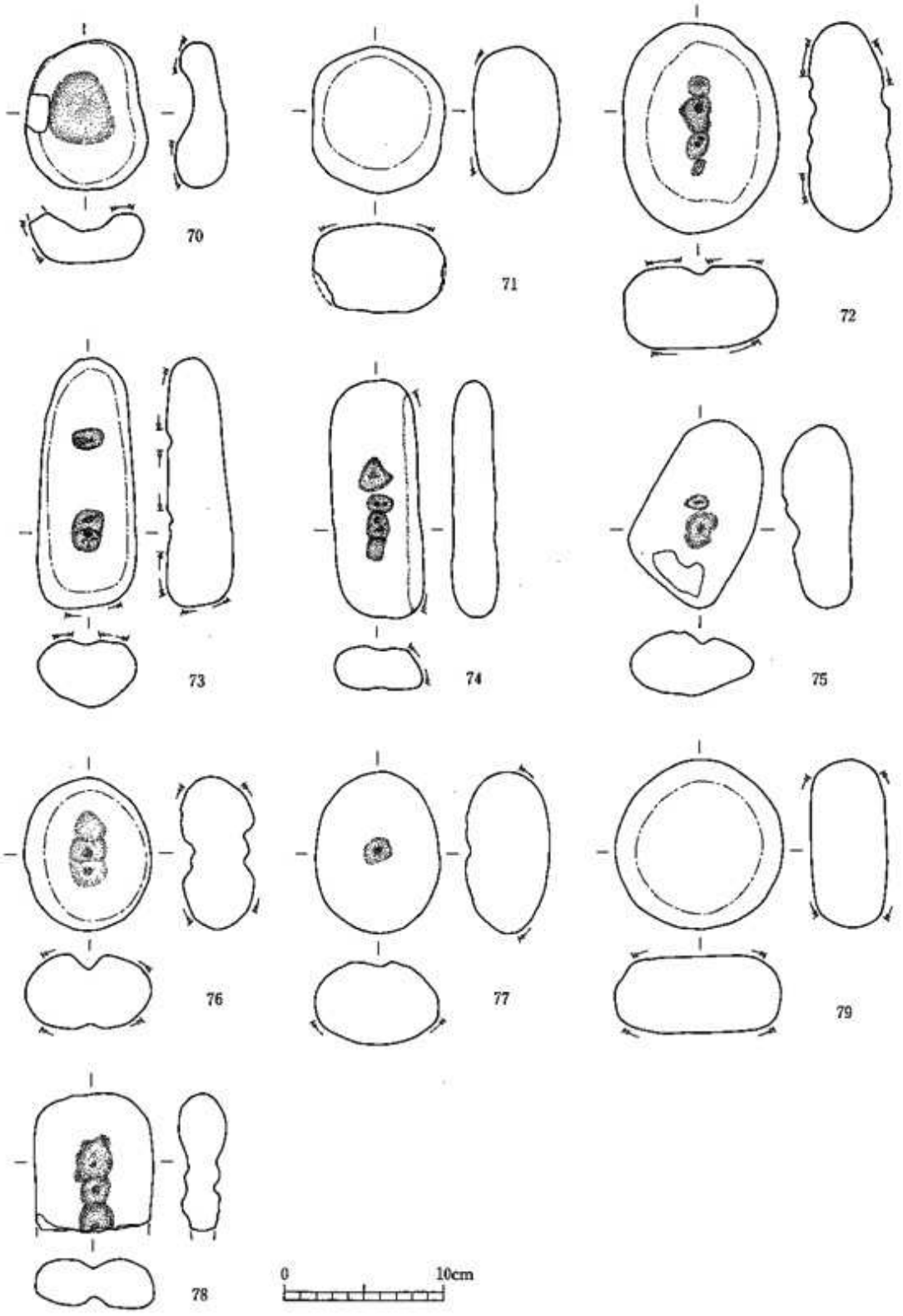
第51図　塩辛遺跡石器実測図(2)



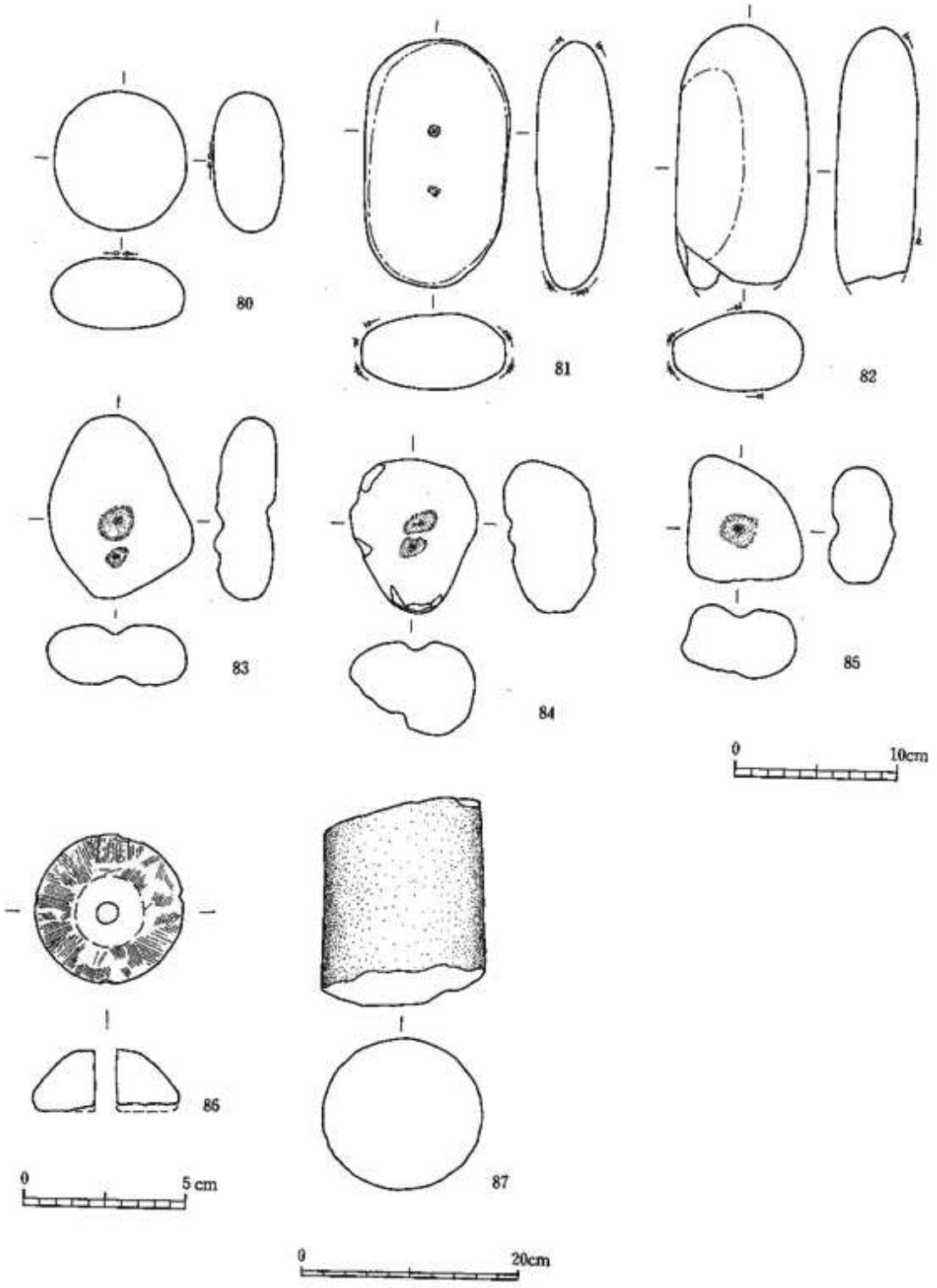
第52図　塩辛遺跡石器実測図(3)



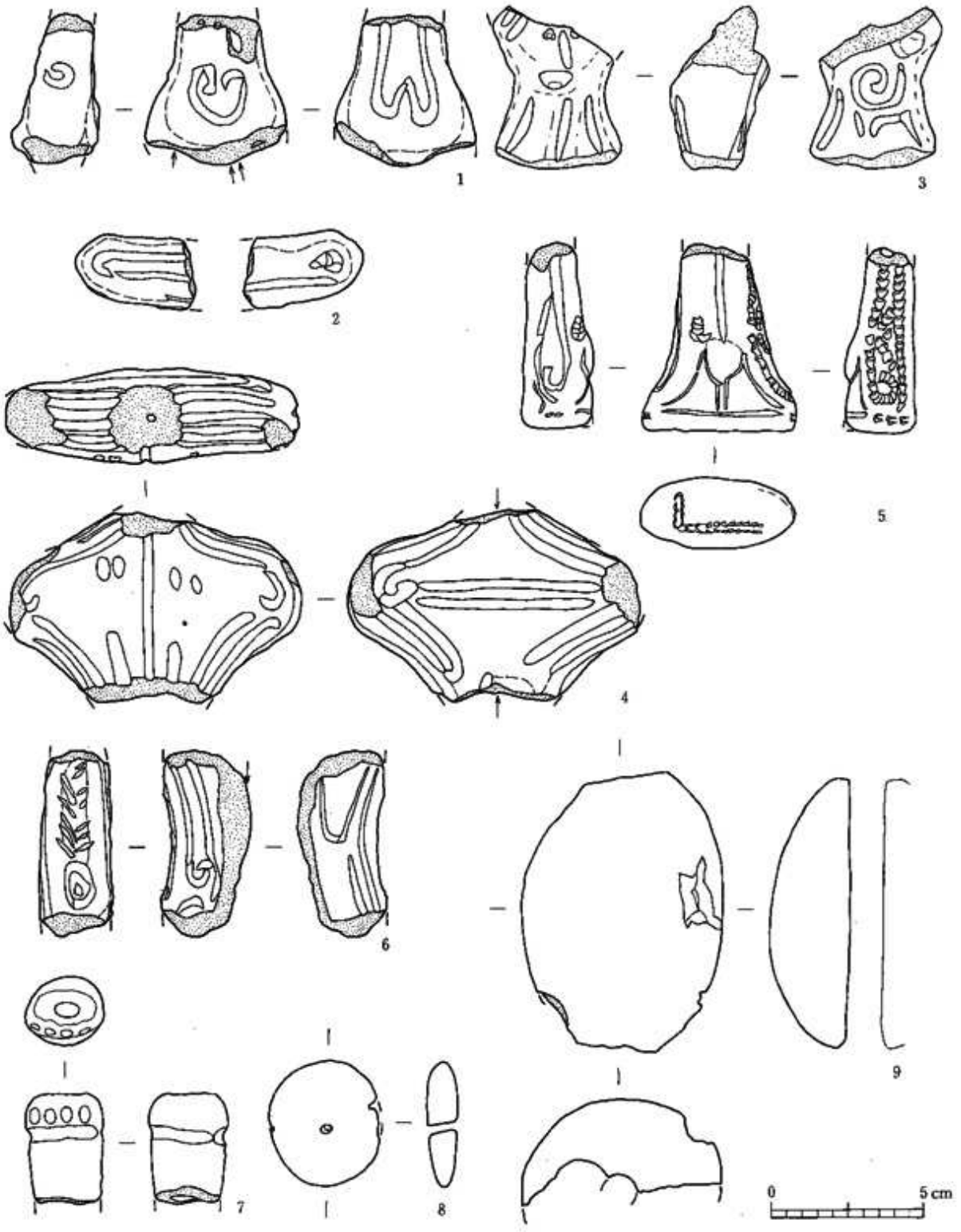
第53図　塩辛遺跡石器実測図(4)



第54図　塩辛遺跡石器実測図(5)



第55図　塩辛遺跡石器実測図(6)、石製品実測図



第56図　塩辛遺跡土製品実測図

表1　塩辛遺跡　遺構一覧

住居址（Ⅰ次）

遺構No.	図No.	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸×深さcm 南北×東西×深さcm	規模 床面積m²	所属時期	備考
1	18	S 4～12・E 1～7	N－67°－W	隅丸長方形	608× 506×29	27.6	1 期	
2		S13～21・E14～23	N－81°－W	方 形	816× 712×32	49.2	2 期	礎石 2
3		S22～30・W 3～10	N－75°－W	方 形	(656×645)×26	36.8	3 期	
4	19	S30～36・W10～17	N－70°－W	長方形	569× 498×38	24.0	3～4 期	円面硯出土
5		S49～56・W34～41	N－62°－W	方 形	570× 553×22	26.5	3～5 期	
6		S58～65・W48～54	N－55°－W	方 形	571× 550×19	27.8	4 期	
7		S62～65・W49～54	(N－62°－W)	長方形？	(552× 82)×21	(31.0)	不 明	
8		S47～54・W13～17	N－72°－W	方形？	623× 280×34	(35.1)	5 期	
9		S22～30・E 1～10	N－74°－W	方 形	593× 532×10	26.7	3 期	
10		S55～60・W33～39	N－58°－W	方 形	461× 428×19	16.6	5～6 期	
15		S46～51・W18～24	N－49°－W	楕円形	558× 493×22	20.2	縄文中期後葉 4	埋甕
16		S58～65・W39～45	N－55°－W	円 形	618× 602× 8	28.0	縄文中期後葉 2	
17		S17～22・E 6～12	N－114°－W	隅丸長方形	544× 440×20	19.9	5～6 期	
18		S50～66・W48～53	N－61°－W	楕円形	(591×480)×18	(21.0)	縄文中期後葉 2	埋甕
19		S61～66・W35～40	N－156°－W	楕円形	(507)×460×11	(18.2)	縄文中期後葉 1	
20		S60～65・W24～29	旧）N－125°－W 新）N－54°－W	円 形 円 形	(424×387)×18 542×524 ×18	(11.6) 21.4	縄文中期後葉 4	拡張か
21		S57～63・W32～38	N－136°－W	不整円形	(629)×595×12	(25.0)	縄文中期後葉 3	埋甕
22		S65～70・W27～33	N－78°－W	楕円形	353× 307×10	9.0	縄文中期後葉 2	
23		S58～62・W30～33	(N－54°－W)	円形？	(448×380)×10	(14.7)	縄文中期後葉 1	
24		S64～68・W37～41	N－66°－W	円 形	460× 432×12	11.9	縄文中期後葉 2	
26		S64～69・W20～24	N－49°－W	円 形	539× 508×14	19.5	縄文中期中葉 1	埋甕
27		S61～66・W35～40	N－40°－W	楕円形	(410×206)×12	(9.9)	縄文中期中葉 2	
28		S69～72・W26～30	(N－28°－W)	方形？	(412×165)×12	(15.6)	2～3 期	
29		S65～70・W27～33	N－58°－W	円 形	(505×350)× 5	(18.2)	縄文中期後葉 1	
36		S60～65・W24～29	不 明	不 明	不 明	――	不 明	
37		S52～56・W14～17	N－48°－W	不 明	(406×252)×30	(12.0)	縄文中期後葉 4	
39		S70～72・W25～30	不 明	不 明	(500×137)×12	(20.9)	不 明	

住居址（Ⅱ次）

遺構No.	図No.	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸×深さcm 南北×東西×深さcm	規模 床面積m²	所属時期	備考
30	6	N30～35・E41～46	N－0°	円 形	492× 508×12	10.77	縄文中期後葉 2	
31	7	N36～41・E48～53	N－0°	円 形	496× 500×20	14.06	縄文中期後葉 3	
34	8	N28～33・E52～56	N－97°－E	楕円形	(400×460)× 8	(26.87)	縄文中期後葉 3	埋甕
35	9	N26～31・E46～51	N－0°	円 形	(488×508)×	(9.39)	縄文中期後葉 4	
42	11	――――	N－34°－W				縄文中期後葉 3	埋甕

住居址（Ⅲ次）

遺構No.	図No.	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸×深さcm 南北×東西×深さcm	規模 床面積m²	所属時期	備考
40	11	N82～84・E91～95	N－25°－E		不 明		3～4 期	
41	10	N167～171・E171～174	N－22°－W	楕円形	358× 312×20	8.08	縄文中期前葉	

表1　塩辛遺跡　遺構一覧

建物址（1次）

No.	図No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模（m）	柱間寸法（m）	柱穴規模（cm）No.	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見	時期
1		長方形 側柱式	N－21°－E	3間×2間 5.3×3.8	桁 1.4～2.2 梁 1.8～1.9	1	56	48	24	円　形	柱痕	15住を切る	不　明
						2	64	64	24	円　形	柱痕		
						3	64	61	32	円　形	柱痕		
						4	60	56	36	円　形	柱痕		
						5	60	59	37	円　形	柱痕		
						6	52	52	28	円　形	柱痕		
						7	63	51	22	円　形	柱痕		
						8	53	49	26	円　形	柱痕		
						9	52	49	26	円　形	柱痕		
						10	60	57	32	円　形	柱痕		
2		長方形 側柱式	N－28°－E	3間×3間 7.0×5.3	桁 1.4～2.2 梁 1.5～2.0	1	79	65	24	楕円形	柱痕	北面庇付き 須恵器器台・提瓶形碗出土	1　期
						2	82	80	21	円　形	柱痕		
						3	80	68	12	楕円形	柱痕		
						4	86	84	18	円　形	柱痕		
						5	80	74	36	円　形	柱痕		
						6	74	72	46	円　形	柱痕		
						7	68	66	30	円　形	柱痕		
						8	82	76	48	円　形	柱痕		
						9	76	72	36	円　形			
						10	72	64	35	円　形			
						11	90	80	48	円　形	柱痕		
						12	58	56	30	円　形	柱痕		
						13	77	66	35	楕円形	柱痕		
						14	76	74	37	円　形	柱痕		
						15	81	80	35	円　形	柱痕		
						16	101	59	29	楕円形	柱痕		
3		長方形 側柱式	N－27°－E	4間×2間 5.4×4.2	桁 1.1～1.5 梁 1.9～2.1	1	71	63	22	不整円形	柱痕	P507に貼られ、9住を貼る	不　明
						2	50	49	19	円　形	柱痕		
						3	80	78	27	円　形	柱痕		
						4	73	60	15	楕円形	柱痕		
						5	55	45	13	楕円形	柱痕		
						6	60	55	23	円　形	柱痕		
						7	72	71	19	円　形	柱痕		
						8	71	60	17	不整円形	柱痕		
						9	63	56	21	円　形	柱痕		
						10	52	47	13	円　形	柱痕		
						11	63	52	21	楕円形	柱痕		
						12	71	62	16	円　形	柱痕		
4		長方形 側柱式	N－27°－E	3間×3間 5.4×4.9	桁 1.0～2.2 梁 1.3～2.0	1	95	89	56	円　形	柱痕		1　期
						2	54	51	21	円　形	柱痕		
						3	51	46	17	円　形	柱痕		
						4	85	84	57	円　形	柱痕		
						5	73	62	64	楕円形	柱痕		
						6	81	77	30	円　形	柱痕		
						7	80	72	37	円　形	柱痕		
						8	67	63	38	円　形	柱痕		
						9	78	74	24	円　形	柱痕		
						10	89	77	41	楕円形	柱痕		
						11	85	70	40	円　形	柱痕		
						12	71	68	42	円　形	柱痕		
5		方　形 側柱式	N－24°－E	3間×3間 4.4×4.4	桁 1.2～1.8 梁 1.2～1.6	1	57	56	38	円　形	柱痕		1～2期
						2	56	45	30	楕円形	柱痕		
						3	51	49	29	円　形	柱痕		
						4	66	66	11	円　形	柱痕		
						5	49	45	32	円　形	柱痕		
						6	50	41	16	楕円形	柱痕		
						7	70	67	58	円　形	柱痕		
						8	59	48	37	楕円形	柱痕		
						9	58	49	46	楕円形	柱痕		
						10	64	60	42	円　形	柱痕		
						11	68	54	29	楕円形	柱痕		
						12	36	32	16	円　形	柱痕		

表1　塩辛遺跡　遺構一覧

No.	図No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模（m）	柱間寸法（m）	柱穴規模（cm） No.	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見	時期
6		長方形 側柱式	N－20°－E	3間×2間 5.8×4.4	桁 1.8～2.1 梁 2.1～2.2	1	80	76	42	円　形	柱痕		不　明
						2	53	48	25	円　形	柱痕		
						3	86	72	45	楕円形	柱痕		
						4	90	74	39	楕円形	柱痕		
						5	54	48	26	円　形	柱痕		
						6	98	72	36	楕円形	柱痕		
						7	68	55	20	楕円形	柱痕		
						8	82	76	36	円　形	柱痕		
						9	69	61	18	円　形	柱痕		
						10	71	70	24	円　形	柱痕		
7		長方形 側柱式	N－13°－E	4間×2間 6.4×4.1	桁 新)1.4～1.9 旧)1.3～1.9 梁 新)1.8～2.2 旧)1.8～2.2	1	105	79	42	楕円形	柱痕	建て替えか？	1　期
						2	98	92	41	円　形	柱痕		
						3	96	88	46	円　形	柱痕		
						4	90	70	57	楕円形	柱痕2ヶ		
						5	108	64	37	楕円形	柱痕2ヶ		
						6	69	65	36	円　形	柱痕		
						7	70	69	35	不整円形	柱痕		
						8	69	54	37	楕円形	柱痕2ヶ		
						9	90	68	50	楕円形	柱痕		
						10	150	64	44	楕円形	柱痕2ヶ		
						11	62	56	16	円　形	柱痕		
						12	73	70	32	円　形	柱痕		
						13	47	45	31	楕円形	柱痕		
						14	62	57	36	円　形	柱痕		
8		長方形 側柱式	N－26°－E	3間×2間 6.9×4.6	桁 1.6～2.1 梁 2.1～2.4	1	73	72	56	円　形		15住・11建を切る 南面庇付き	不　明
						2	76	72	46	円　形	柱痕		
						3	74	70	61	円　形	柱痕		
						4	82	73	40	円　形	柱痕		
						5	81	78	26	円　形	柱痕		
						6	64	58	31	円　形	柱痕		
						7	66	64	11	円　形	柱痕		
						8	76	75	56	円　形	柱痕		
						9	63	58	35	円　形			
						10	66	57	38	楕円形	柱痕		
						11	64	63	40	円　形			
						12	69	65	41	円　形			
						13	73	61	33	楕円形			
9		長方形 側柱式	N－25°－E	3間×2間 5.5×4.1	桁 1.2～2.3 梁 1.8～2.3	1	83	74	27	円　形		4住に貼られる 環状鉄製品出土	1　期
						2	81	65	29	楕円形	柱痕		
						3	61	52	30	楕円形			
						4	57	49	25	楕円形			
						5	63	60	27	円　形			
						6	70	65	33	円　形	柱痕		
						7	60	52	27	楕円形			
						8	79	70	31	円　形	柱痕		
						9	69	65	8	円　形			
						10	57	51	8	円　形			
10		方　形 総柱式	N－31°－E	2間×2間 3.9×3.8	桁 1.8～2.0 梁 1.7～2.0	1	77	74	22	円　形		5住に貼られる	不　明
						2	77	74	13	円　形			
						3	56	50	25	円　形			
						4	57	54	20	円　形			
						5	87	79	21	円　形			
						6	76	69	22	円　形			
						7	82	64	15	円　形			
						8	75	73	11	円　形			
						9	79	75	29	円　形			
						10	70	62	15	円　形			
11		長方形 側柱式	N－26°－E	2間×1間 4.7×3.2	桁 1.8～2.6 梁 2.8～3.2	1	85	82	58	円　形	柱痕	8建に貼られる	不　明
						2	98	75	49	楕円形	柱痕		
						3	72	62	33	楕円形	柱痕		
						4	88	80	40	円　形	柱痕		
						5	69	68	46	円　形	柱痕		
						6	69	60	28	楕円形	柱痕2ヶ		

表1　塩辛遺跡　遺構一覧

建物址（II次）

No.	図No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模（m）	柱間寸法（m）	柱穴規模（cm） No.	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見	時期
13	12	正方形	N－30°－E	3間×2間	桁1.3～1.9	1		58	20	楕円形か			1～2期
						2	62	60	18	円　形			
						3	84	64	34	楕円形		31住を切る	
						4	52	50	6	円　形			
						5	64	50	10	不整楕円形		31土に切られる	
		総柱式		5.4×3.4	梁1.3～1.9	6	44	38	8	円　形			
						7	52	42	10	楕円形			
						8	44	38	12	楕円形			
						9	48	44	8	円　形			
						10		70	16	楕円形か			
						11	50	60	4	楕円形			
						12	58	46	10	楕円形			
						13	60	54	10	円　形			

建物址（III次）

No.	図No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模（m）	柱間寸法（m）	柱穴規模（cm） No.	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見	時期
14	13	長方形	N－30°－E	2間×1間	桁 2.8～3.2	1	40	40	24	円　形	柱痕		不　明
						2	48	46	26	円　形	柱痕		
						3	44	44	16	円　形	柱痕		
						4	50	40	12	楕円形	柱痕		
		側柱式		2.7×3.2	梁 1.3～1.4	5	36	24	12	不整楕円形	柱痕		
						6	48	36	26	楕円形	柱痕		
						7	32	30	12	円　形	柱痕		

竪穴状遺構（I次）

遺構No.	図No.	位置	長軸方向	平面形	規模 長軸×短軸×深さcm	床面積m²	所属時期	備考
1		NS0～S7・EW0～W6			×28		縄文中期後葉4	
2		S29～36・W20～25	N－34°－W	円　形	356×344×14	8.5	縄文中期後葉4	
3		S47～51・W25～31	N－89°－E	楕円形	512×388×24	13.9	縄文中期	

竪穴状遺構（II次）

遺構No.	図No.	位置	長軸方向	平面形	規模 長軸×短軸×深さcm	床面積m²	所属時期	備考
6	14	N168～171・E174～177	N…23°－E	楕円形	352×300×16	7.9	3～4期	
7	14	N152～156・E157～162	N－55°－W	隅丸方形	424×408×24	(15.4)		

表2　塩辛遺跡　石器・石製品一覧

1　石鏃

No	図No	分類 基部	分類 茎部	分類 側縁	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	1	凹	無	V	4住	3.17	1.98	0.67	3.60	チャート	O	未成品
2	2	〃	〃	I	6住床	2.20	(1.48)	0.47	(1.00)	〃	B	
3		〃	〃	V	6住	(2.40)	(1.50)	0.30	(0.95)	〃	〃	
4	3	〃	〃	IV	〃	3.08	1.59	0.50	1.85	黒曜石	O	
5		—	—	—	8住	(—)	(—)	(—)	(0.55)	チャート	E	
6	4	凹	無	III	18住	(2.55)	(1.50)	(0.36)	(0.90)	〃	A	側縁鋸歯状
7	5	〃	〃	〃	〃	2.03	1.32	0.40	0.85	〃	O	
8	6	〃	〃	V	〃	2.65	1.72	0.31	1.00	黒曜石	〃	
9	7	〃	〃	〃	21住	(2.12)	(1.90)	0.34	(1.05)	〃	D	
10	8	—			24住	(3.13)	(1.58)	0.46	(1.70)	チャート	F	
11	9	凹	無	III	〃	2.69	1.34	0.30	0.90	〃	O	
12		〃	〃	〃	〃	(2.83)	(1.57)	0.46	(1.45)	〃	B	
13	10	〃	〃	IV	30住No.1	(2.10)	(1.41)	0.24	(0.40)	黒曜石	D	
14	11	平	〃	V	〃 No.4	2.46	2.01	0.49	1.80	チャート	O	
15	12	円	〃	〃	〃 P_{18}	(3.03)	2.31	0.90	(5.25)	〃	F	
16	13	凹	〃	III	31住No.1	1.62	1.32	0.26	0.35	黒曜石	O	
17	14	〃	〃	〃	〃 No.2	3.07	1.64	0.29	0.95	〃	〃	両側に線条痕有
18	15	〃	〃	V	〃 No.4	2.75	1.84	0.60	2.30	チャート	〃	未成品
19	16	〃	〃	〃	〃 No.11	(2.01)	(1.34)	0.32	(0.55)	〃	B	
20	17	〃	〃	IV	41住No.4	1.63	1.53	0.33	0.55	黒曜石	O	
21	18	〃	〃	III	〃 No.7	2.46	(1.71)	0.32	(0.75)	〃	B	
22		〃	〃	—	33住	(1.98)	(1.48)	0.35	(0.65)	〃	C	
23	19	〃	〃	V	I－A検	1.82	1.40	0.20	0.35	チャート	O	
24	20	〃	〃	〃	〃	2.42	1.46	0.50	1.00	黒曜石	〃	
25	21	円	〃	〃	〃	4.17	2.75	0.83	9.80	チャート	〃	未成品
26	22	凹	〃	III	〃	1.88	1.30	0.22	0.30	〃	〃	
27	23	〃	〃	IV	〃	(1.79)	(1.20)	0.37	(0.50)	黒曜石	B	
28		〃	〃	〃	I－A排土	1.60	1.30	0.28	0.45	チャート	O	未成品
29		—	—	—	〃	(2.12)	(1.42)	(0.48)	(0.95)	黒曜石	F	
30	24	凹	無	IV	II－C検	(2.91)	(1.30)	0.23	(0.65)	チャート	B	
31	25	〃	〃	〃	III－H検	(2.53)	(1.54)	0.41	(1.10)	〃	G	

2　石錐

No	図No	分類 形態	分類 調整	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	26	棒	両	1住	(4.05)	1.45	1.01	(4.10)	黒曜石	錐部端欠	両頭錐・未成品
2	27	?	〃	18住	(1.89)	(0.53)	(0.28)	(0.25)	チャート	上部欠	
3	28	つ	〃	19住	(2.37)	1.34	0.55	(1.55)	〃	錐部欠	

3　ピエス・エスキーユ

No	図No	分類 剥離	分類 縁部	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	29	II	●	5住	2.76	2.89	0.93	9.90	チャート		
2	30	〃	○	8住	1.49	1.60	0.56	1.05	黒曜石		
3	31	I	▽	19住	2.72	0.93	0.70	1.35	〃		
4	32	II	○	31住炉	2.85	2.94	0.93	8.35	チャート		
5	33	I	○	35住	2.07	1.16	0.35	0.75	黒曜石		
6	34	III	●	1－A検	3.71	3.11	0.80	11.05	チャート		

4 スクレイパー

No	図No	分類 刃部	分類 調整	分類 素材	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	35	外	両	縦	5住No 1	7.8	4.7	1.5	59.8	チャート	完形	
2	36	直	片	横	5住	6.0	3.9	1.3	27.6	〃	〃	
3	37	〃	〃	縦	〃	5.9	3.1	1.4	17.8	〃	〃	
4	38	外	〃	〃	10住	(7.1)	6.4	(0.9)	(46.0)	硬砂岩	上部欠	
5	39	直	〃	?	17住	(3.6)	(2.5)	(1.1)	(8.0)	チャート	両側欠	
6	40	外	〃	縦	20住	4.5	3.5	0.6	7.0	黒曜石	完形	
7	41	直	両	?	30住 P_7	(1.0)	(3.3)	(0.4)	(1.3)	チャート	上部欠	
8	42	外	〃	〃	31住	4.7	4.5	1.4	15.0	〃	完形	
9	43	〃	〃	縦	1土	(3.3)	(1.6)	(0.7)	(2.8)	黒曜石	上部欠	
10		内	片	?	I－A検	2.5	3.5	1.0	7.2	チャート	完形	
11	44	外	両	縦	I－A排土	6.6	5.4	1.2	51.9	〃	〃	
12	45	〃	〃	〃	〃	8.8	6.3	2.1	90.2	〃	〃	
13	46	内	〃	横	I－A表採	8.7	4.0	2.0	58.7	〃	〃	
14	47	直	片	〃	II C検	6.5	4.1	1.5	32.5	〃	〃	
15	48	〃	両	縦	〃	5.6	3.3	1.0	28.6	〃	〃	

5 打製石斧

No	図No	分類 平面	分類 刃部	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	使用痕 頭部	使用痕 側部	使用痕 刃部	破損状況	備考
1		短	?	1住	(8.6)	(4.0)	(1.8)	(64.2)	硬砂岩				C	
2	49	分	〃	3住	(9.6)	(6.7)	2.2	(171.3)	粘板岩（ホルンフェルス）				A_2	
3	50	撥	偏	5住	11.4	5.8	2.0	156.0	硬砂岩			●	O	
4	51	分	?	6住	(8.5)	(4.8)	(2.0)	(77.0)	玢岩				A_2	
5	52	撥	円	10住 P_{16}	10.8	7.2	2.6	262.8	粘板岩（ホルンフェルス）			●	O	
6	53	分	偏	20住No12	21.5	7.8	2.3	357.7	硬砂岩		○		〃	被熱による黒色部分有
7		〃	〃	〃 床	(11.9)	(4.8)	1.6	(68.5)	玢岩				A_2	
8	54	〃	〃	20住	(10.5)	(7.4)	(2.7)	(219.9)	凝灰岩				C	
9	55	〃	〃	21住	(14.1)	(5.3)	1.4	(118.3)	硬砂岩				A_2	
10		〃	?	31住No 8	(8.3)	(4.3)	1.2	(44.4)	〃				C	
11		?	〃	35住	(—)	(—)	( )	(25.0)	〃				E	破片
12		〃	〃	2土	(7.3)	(4.4)	(1.6)	(73.0)	粘板岩（ホルンフェルス）				C	
13		撥	〃	I－A検	(6.6)	(5.3)	(1.4)	(74.2)	硬砂岩				〃	
14	56	分	円	〃	(9.3)	(8.1)	(2.0)	(130.8)	〃				B_2	
15		?	?	〃	(4.9)	(4.8)	(2.1)	(64.7)	〃				A_1	
16	57	撥	〃	〃	(9.9)	(4.8)	2.3	(118.1)	玢岩		○		C	
17		〃	〃	〃	(10.1)	(5.0)	(1.6)	(98.1)	硬砂岩				〃	
18	58	〃	〃	〃	(5.6)	(4.6)	(2.4)	(84.8)	〃		○		〃	
19		〃	〃	〃	(7.3)	(7.5)	(1.8)	(109.2)	粘板岩（ホルンフェルス）				〃	
20		?	〃	〃	(5.2)	(4.4)	(1.7)	(45.6)	砂岩				A_1	
21	59	〃	直	〃	(9.2)	(8.1)	(2.2)	(145.8)	硬砂岩				B_1	
22	60	撥	偏	I－A排土	12.0	5.2	1.9	131.5	〃				O	
23	61	〃	〃	〃	12.1	5.1	(2.2)	(154.1)	〃		○	●	B_2	
24	62	分	?	〃	(10.8)	(5.3)	2.1	(108.1)	〃				A_2	
25		?	〃	I－A表採	(6.0)	(5.2)	(1.8)	(70.3)	〃		○		C	
26		短	〃	〃	(10.2)	(4.4)	1.7	(78.3)	〃				〃	
27		分	〃	II－B排土	(8.0)	(4.9)	1.8	(94.1)	粘板岩（ホルンフェルス）				A_2	
28	63	短	〃	II－C検	(12.4)	(4.3)	1.5	(65.2)	砂岩（ホルンフェルス）				C	
29	64	分	円	〃	(13.0)	5.8	1.4	(136.7)	硬砂岩（ホルンフェルス）			●	A_2	
30	65	撥	?	〃	(8.2)	(4.9)	(1.7)	(62.2)	〃（ 〃 ）				C	
31	66	〃	直	〃	(8.3)	5.5	(1.8)	(89.0)	〃（ 〃 ）				B_2	
32	67	〃	?	〃	(10.1)	6.4	0.9	(62.4)	砂岩（ホルンフェルス）				C	
33	68	分	〃	〃	(9.2)	(4.9)	2.3	(109.8)	硬砂岩（ホルンフェルス）	●			A_2	
34		?	〃	〃	(6.8)	(4.8)	(2.2)	(87.6)	硬砂岩		○		A_1	
35	69	撥	偏	III－H検	16.5	7.6	3.1	330	硬砂岩（ホルンフェルス）				O	

6 磨製石斧

No.	図No.	分類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	残存状況	備考
1		定角	18住	( )	(-)	(—)	(5.2)	蛇紋岩	E	残片

7 凹・敲・磨石

No.	図No.	使用痕 刃部	使用痕 敲打面	使用痕 磨面	素材	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	70	○(1)			C	2住	9.2	7.1	3.3	(270)	石英閃緑岩	ほぼ完形	
2				○	A	4住No22	9.3	8.4	7.6	755	砂岩	完形	
3	71		○	○	E	5住	8.9	8.1	5.5	530	安山岩	〃	
4		○(2+3)		○	B	6住	12.1	(7.3)	4.8	(495)	砂岩	½欠	
5		○(1+1)			C	〃	11.9	9.6	3.7	555	〃	完形	
6	72	○(2×2)+3∓4	○	○	B	〃	12.9	9.6	5.8	925	〃	〃	
7		○(2+1+1)			G	〃	(6.9)	(4.3)	(4.4)	(170)	〃	片側欠	
8		○(1)		○	B	16住No1	10.8	8.7	5.9	715	〃	完形	
9	73	○(3+1)		○	G	〃 No2	15.4	6.2	4.3	545	〃	〃	
10		○(1)		○	B	〃 No3	11.9	7.5	5.8	730	〃	〃	
11	74	○(2+2)		○	H	〃 No6	14.6	5.4	2.9	370	〃	〃	
12				○	B	17住	10.4	8.5	4.7	505	〃	〃	
13	75	○(2)		○	A	19住No12	11.4	6.8	4.5	(403)	〃	ほぼ完形	
14				○	E	〃 No13	8.0	6.9	4.5	310	〃	完形	
15	76	○(2+3)		○	B	〃 No14	9.4	7.8	4.5	435	〃	〃	
16		○(1)		○	〃	〃 No15	9.2	8.2	4.7	(390)	〃	ほぼ完形	
17		○(2)		○	A	20住No6	10.7	7.9	6.2	680	〃	完形	
18				○	B	〃 No7	9.9	6.7	9.5	875	〃	〃	
19	77	○(1)		○	〃	〃 No8	9.8	7.7	5.2	470	安山岩	〃	
20				○	〃	〃 No13	10.5	7.8	5.4	625	砂岩	〃	
21	78	○(2+3)		○	H	22住No3	(8.4)	(7.3)	(3.4)	(290)	石英閃緑岩	½欠	
22		○(1+2)		○	E	24住No11	8.2	7.7	4.8	370	砂岩	完形	
23				○	A	26住床	9.3	8.7	8.1	885	石英閃緑岩	〃	
24	79			○	E	30住No9	10.5	10.3	4.9	725	安山岩	〃	
25		○(2)		○	B	〃 No12	10.4	9.0	5.0	610	〃	〃	
26		○(2)			〃	〃 No13	12.1	9.2	4.3	(615)	砂岩	ほぼ完形	
27				○	C	〃 No15	11.6	7.3	4.0	480	〃	完形	
28	80			○	E	31住No7	8.3	8.1	4.3	390	安山岩	〃	
29				○	H	〃 No9	10.3	8.4	5.4	510	ガラス質安山岩	〃	
30	81	○(2)		○	〃	〃 No12	14.9	8.8	4.7	920	砂岩	〃	
31		○(2+2)		○	K	〃 No14	10.3	9.3	5.9	740	安山岩	〃	
32		○(1)			H	31住	(11.7)	5.6	3.2	(225)	砂岩	両側欠	
33	82			○	B	35住炉No4	(15.9)	8.1	4.9	(965)	〃	先端欠	
34		○(1+1)	○		〃	37住No1	(9.0)	(7.3)	(4.2)	(300)	〃	½欠	
35				○	〃	41住No2	(7.6)	(8.1)	(5.2)	(370)	安山岩	両側欠	
36		○(1)		○	A	I－A検	7.6	7.1	6.3	460	砂岩	完形	
37	83	○(2+1)		○	C	I－A排土	10.1	8.2	3.7	450	〃	〃	
38				○	F	〃	6.0	5.6	3.0	170	〃	〃	
39		○(2)			II	〃	15.8	6.3	4.2	510	〃	〃	
40	84	○(2∓3)		○	A	〃	9.2	7.5	5.7	(450)	〃	ほぼ完形	
41				○	B	II－C検	7.5	6.3	4.7	280	〃	完形	
42	85	○(1+1)			A	〃	7.2	9.0	4.1	285	〃	〃	

8 紡錘車

No.	図No.	出土地点	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	86	II－B検	4.49	2.49	(1.82)	(47.15)	硅質砂岩	上端欠	孔径 0.60cm

9 石棒

No.	図No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	87	I－A表採	(19.1)	(15.1)	(14.2)	(6100)	安山岩	両側欠	

第３節　矢作遺跡の調査

1.矢作遺跡の地形・地質

本遺跡は松本市の北の第三紀層の山地から流れ出す沢が、女鳥羽川によって形成された３段の段丘面のうち、最上位段丘面の標高 720m付近にある段丘肩に分布している。遺跡に接して西にはフォッサマグナ堆積物である第三紀層の山地が 800m前後の高さで南北に連なり、南に行く程標高を減じ城山へと続いている。一方、東方は女鳥羽川の開せきにより開けている。

この遺跡の基盤である扇状地堆積物は、武石峠・三才山・袴越山などから流れ出す沢が、一の瀬で合し、西へ向かって流れ稲倉付近で流路を120°程かえて南流し、稲倉付近を扇頂として本郷や岡田に広い扇状地を形成している。この女鳥羽川も新生代更新世の末頃は、南西方向に向かって流れていたことが、城山一帯に古女鳥羽川の堆積物が見られる事からわかっている。その後城山一帯の山地の隆起により、流路を次第に東にとり、稲倉→岡田西→大門沢へと流れを変え、岡田西の南北性の低地は古女鳥羽川の自然流路の跡である。この流路の変更によって形成された扇状地も、地盤が西から東へ傾動しながらの隆起により、上段から矢作～神沢の第１面、伊深～岡田～中原に至る第２面、そして現在の氾濫原である第３面におよそ区分することができる。

本遺跡はこの第１面の段丘肩にあり、扇状地堆積物は上流の地質や岩質により、ひん岩・砂岩・安山岩類・緑色凝灰岩などの大小の砂礫とそれ等の風化物である黄色シルト質粘土層からなっている。この黄褐色礫土の第１面段丘面の上に、背後に接する第三紀の内村層と、それを覆っているローム層を沢が侵食・運搬して堆積している。この堆積物の厚さは同じ第１段丘面でも、微高地（テント付近）は15～20cmと薄く、やや低地では60～70cmと厚くなっている。これ等の堆積物は安山岩、凝灰質泥岩、砂岩などの礫と、その風化物にロームが混入し水はけの悪い土層となっている。

遺跡付近の微地形は、この第１段丘を山地からの沢により侵食され、出入りの多いアメーバ状を呈しており、沢の運搬した土砂と沢で侵食された第１段丘面の堆積物が混合して第２段丘面に押し出し、複雑な堆積層となっている。遺跡付近の第１段丘は標高 720m前後であるが、その下の第２段丘面の標高は715～710mで段丘崖の急なところは東側へ13°程傾斜している。矢作の縄文時代の遺構は第１段丘面から段丘肩にかけての黄色～黄灰色礫土にあり、この上に上記の沢による堆積物が、地形により厚薄の差を持って載っている。この縄文遺構を覆っている堆積物は、ローム層の混入の割合や有機物の多少により色や粘性を異にしているが、表土以外では暗褐色～褐色を呈している部分が多い。尚、縄文時代の生活面の地形は今とは多少異なっており、後世、沢から幾回もの洪水を受け、やや低い段丘肩は次第に侵食されてアメーバ状に変形を遂げた事が、微高地（テント付近）の直ぐ南の段丘堆積物が、度重なる洪水で遺物と共に段丘崖を流下し、約 150m南東の水田に押し出されている事からも明瞭である。

2. 遺構

(1)竪穴住居址

第1号住居址(第60図)

A地区北側、N9～12・E2～7に位置し、66土に切られる。平面形は不整な楕円形を呈し、東西4.1m、南北3.4mを測る。床面積は10.9m²である。主軸方向はN－64°－Wをさす。覆土は明黄褐色土が堆積していた。床面は堅固な2次堆積ロームで、起伏はないが北西から南東に向かって傾斜をもつ。炉は住居址中央に位置する埋甕炉で66土に掘り方の南側を壊される。周囲は広範囲に被熱・焼土化している。ピットは総数20個がある。このうちP_1・P_2・P_{13}には柱痕が確認され、主柱穴の一部なのかもしれない。遺物は比較的少ないが、縄文土器と石器が出土した。本址の時期は縄文時代中期前葉であろう。

第2号住居址(第61図)

A地区西側、S1～N3・W5～10に位置し、6・7土やP1・P34等の多数の単独ピットに切られる。黄褐色土の検出面ににぶい褐色土の落ち込みとして検出した。規模は東西5.2m、南北4.0mを測り、楕円形を呈している。床面積は14.1m²を測る。長軸方向はN－66°－Eを示す。床面は起伏が少なく、堅固であった。炉はピットに壊された可能性もあるが、検出されなかった。ピットは総数18個が検出された。床面北側に多くあり、中央部を囲むように分布する。柱痕の確認されたものはなかった。土器の量は少ない。石器にはピエス・エスキーユ等がある。本址の時期は縄文時代であろう。

第3号住居址(第61図)

A地区西端、S5～N1・W10～14に位置する。西側半分は道路の下となり調査はできなかった。また中央部を69土に床面下まで壊されている。平面形は楕円形と思われ、規模は6.4×5.4m程と推定したい。長軸方向はN－32°－Eを示す。覆土ににぶい褐色～黄褐色土が20cm程堆積していた。炉は検出されなかった。ピットはP_1～P_{13}が検出され、長軸が60cm以上のものが6個（P_1・P_2・P_8・P_{10}・P_{12}・P_{13}）ある。2住と同様に中央部では確認されなかった。出土土器は比較的多い。石器には磨製石斧等がある。本址の時期は出土遺物より縄文時代中期前葉に属する。

第4号住居址(第62図)

A地区東側、S4～7・E16～20に位置し、北端部を1溝に貼られる。平面形は楕円形を呈するものと思われ、東西4.1m、南北3.4mの規模をもち、推定される床面積は9.4m²である。長軸方向はN－49°－Eを指す。覆土は床面より明褐色土～灰黄褐色土～にぶい黄褐色土の順で自然に堆積している様相を示す。床は中央部が僅かに窪み、西から東へ傾斜がある。本址に伴う施設はピット14個が検出された。このうちP_1・P_3に柱痕が認められた。またP_{12}・P_{13}は並んで検出されたが、掘り込みは深い。これらは位置的に見ても主柱穴の可能性が高い。遺物には縄文土器、石器がある。時期は遺物より縄文時代中期前葉に属する。

第５号住居址(第62図)

本址はＡ地区南東部、Ｓ10～12・Ｅ18～20に位置する。舌状台地の東端にあたり、これより東は急な傾斜地となる。規模は南北2.7m、東西2.4m、床面積は3.4m²を測る。小規模な住居址で楕円形を呈する。壁は概ね直に掘り込まれるが、南壁はなだらかである。覆土は自然に堆積した様相を呈し、３つに分層できるが、他の住居址には見られない黒褐色土が堆積していた。覆土下層から床面にかけては多量の土器片が10～30cm大の礫と共に投げ込まれたように出土した。遺物は非常に多く、これらより縄文時代中期前葉に考えられる。

第６号住居址(第63図)

Ａ地区北東部、Ｎ１～７・Ｅ４～10に位置する。耕作による削平を受け床面を失った住居址として考えた。図の破線は埋甕炉１の位置からプランを推定したものである。13・14・15・31土、Ｐ55・56等の破線円に含まれる穴は単独のものとして扱ったが、13・14・15・31土の配置は弧状に並んでおり、本址に伴うピットなのかもしれない。埋甕炉１は直径30cmの掘り方の中に正位に土器を埋設している。周囲は広範囲に被熱し、焼土化している。また埋甕炉１の南東に埋甕炉２があるが残存度が悪く、直径34cmの掘り方に埋設されている。周囲には柱穴が認められず、住居址とは推定できなかった。６住に伴う遺物は埋甕炉１のみである。本址の時期は縄文時代中期前葉に属する。

第７号住居址(第63図)

Ｂ地区東側、Ｎ３～６・W26～33に位置し、北側は調査区域外へ続く。規模は東西4.0mを測り、隅丸方形を推定する。長軸方向はＮ－11°－Ｗを示す。覆土は２層に分かれ、床面より灰黄褐色土、明黄褐色土が自然堆積している。壁はほぼ直に掘り込まれ、壁高は20cm程である。床面は粘質の明灰黄色土で大きな起伏がある。ピットはP_1～P_4の４個があるが、柱痕の認められるものはなかった。遺物は非常に少なく、所属時期はわからない。

(2)建物址

第１号建物址(第64図)

Ｂ地区西側、Ｎ４～Ｓ１・W70～75に１建のみが検出された。他遺構との切り合い関係はないが、周辺には多数のピットが分布している。南北２間（4.5m）×東西２間（4.1m）という正方形に近い建物で、主軸方向はＮ－108°－Ｅを示す。柱間寸法はばらつきがあり、桁行1.6～2.8m、梁行1.8～2.2mを測る。ピットは総数12個が検出された。掘り方の平面形は円形ないし楕円形を呈している。中央のP_8は今回は本址に伴うものと扱い、総柱式の建物址と考えているが、あるいは単独のピットで側柱式の建物であった可能性もある。P_1・P_5・P_7・P_9・P_{11}・P_{12}の６個には柱痕が確認された。またP_2は柱痕はないが、底面に礎石らしい平石を埋設してあった。各ピットは２次堆積ローム層中に掘り込まれ、埋土にはにぶい褐色土を用いている。遺物はほとんど出土しなかった。所属時期はわからない。

(3)竪穴状遺構

今回の調査ではA地区より8個の竪穴状遺構を検出した。うち6竪は欠番である。検出時には長軸が2.5m以上の規模をもつ落ち込みで、明黄褐色土～黄色土の覆土をもつものを竪穴状遺構とし、にぶい黄褐色土の覆土のものを竪穴住居址とした。しかし竪穴住居址の中でも炉・埋甕が検出されず、主柱穴も確認できないものが大半を占め両者の区別は曖昧なものになってしまった。

第1号竪穴状遺構(第65図)

A地区北側、N7～N10・W1～W5に位置する。南壁際をP40に切られる。黄褐色2次堆積ローム土の検出面に同色だが焼土粒炭化物が混入する落ち込みとして検出した。平面形はやや不整な円形を呈し、東西2.9m×南北2.4mの規模をもつ。底面は起伏があり、全体に北から南へ傾斜をもつ。底面は軟弱で覆土との区別は困難であった。ピット等は検出していない。遺物は縄文土器少量がある。

第2号竪穴状遺構(第65図)

A地区北側、N4～8・W3～6に位置する。7竪を南側で貼り、P41・P42に切られる。規模は南北4.3m、東西2.9mを測る。平面形は楕円形を呈する。黄褐色の覆土は浅いが、緩やかに掘り込まれた様子が窺える。底面は2次堆積ロームで、軟弱であった。北から南へ傾斜をもつ。本址に伴う施設はピットのみで、P_1～P_8の8個が認められた。何れも10cm前後の深さで、柱痕等は確認できなかった。遺物は縄文土器少量がある。

第3号竪穴状遺構(第65図)

A地区西側、N10～11・W3～7に位置する。P43～P46に切られる。本址は遺構の大半が北側の調査区域外に入っている。規模は現況で東西3.7m以上、南北0.8m以上を測る。平面形は推定できない。覆土は黄色土と黄褐色土であり、いずれも焼土粒を混入していた。底面は北から南へ傾きをもち軟弱であった。ピットはP_1のみが検出された。遺物は縄文土器少量がある。

第4号竪穴状遺構(第66図)

A地区中央、E1～W2・NS0～S3に位置する。33土とP45に底面下迄、34土に覆土上層迄破壊されている。小形の楕円形を呈し、東西4.9m×南北2.3mの規模をもつ。黄褐色2次堆積ロームの検出面に同じ黄褐色土だが、炭化物を含む範囲として確認できた。検出面からの掘り込みは10cm前後と浅い。底面は平坦・堅固な状態で、僅かに北から南へ傾斜をもつ。確認されたピットは多くP_1～P_{17}があるが柱痕は検出されなかった。遺物は多く、縄文土器、石器がある。遺物より中期前葉に位置づけられよう。

第5号竪穴状遺構(第66図)

B地区東側、N3～6・W24～27に位置する。北端は区域外となり、未調査である。平面形は不整な隅丸長方形を推定する。規模は東西2.7mを測り、南北は2.4m程となろう。覆土は、地山の黄褐色土に類似した明褐色土で底面との区別が難しく、掘り下げ時には一部掘り過ぎてしまった。底

面は平坦であるが軟らかい。東壁北側直下には直径35cm程の円形のピットが1つ確認された。深さは20cm程だが、性格は不明である。遺物は少量の縄文土器片がある。

第7号竪穴状遺構(第66図)

A地区西側、N2～6・W2～6に位置する。切り合い関係は激しく、大型の遺構では北側を2竪、南西端を2住に壊され、中央を横切るように2溝に貼られている。小型の遺構では5・6・8・9土に壁上をほぼ等間隔に巡るように切られている。平面形は円形を呈し、東西4.3m×南北3.9mの規模をもつ。覆土は単層で、黄褐色土が堆積している。堅固な底面は小さな起伏があり、平坦ではない。ピットはP_1～P_{12}の12個がある。掘り込みは10～20cm程のものが多く、性格はわからない。遺物は縄文土器少量がある。

第8号竪穴状遺構(第67図)

A地区北西、N5～8・W12～15に位置する。西側半分は舌状台地の中央を南北に走る道路下に続き、調査を行なっていない。平面形は推定できないが、北東部に半円形の突出部がある。規模は南北3.6m以上、東西2.0m以上を測る。覆土は2層に分かれ、I層ににぶい褐色土、II層ににぶい橙色土が堆積している。底面は比較的堅固で、起伏が認められた。ピットは15個が検出された。検出できた底面内には偏りはなく、北東部の突出部にP_2がある。何れも深さは5～10cm程のものであった。遺物は縄文土器片少量と石錐等の石器がある。所属時期はわからない。

第9号竪穴状遺構(第67図)

A地区南東、S6～12・E13～18に位置し、南端は区域外となる。地形的には舌状台地の東端部にあたり、これより東は急斜面となっている。切り合い関係は49～53土とP47～49に切られている。平面形は不整な楕円形を呈し、南北6.0m以上×東西4.4mの規模を測る。耕作による削平の為、覆土はほとんど失われていたが、黄褐色土が観察できた。底面は西から東へ急な傾きがあり、比較的堅く、起伏は認められない。ピットは16個が検出された。中央部と北東部に多く見られる。このうちP_2・P_3・P_5・P_6・P_9・P_{10}・P_{11}には柱痕が観察できた。遺物は若干の縄文土器と石鏃等の石器が出土している。所属時期は推定できない。

(4)土坑・ピット(第68図)

本調査では竪穴住居址、竪穴状遺構などの各遺構に伴うピット以外の穴で、長径が50cm以上のものを土坑、それ未満をピットとして扱った。

土坑　今回の調査で検出された土坑は1～93土の93個である。本遺跡は北の伊深城山から南へ張り出す舌状台地に立地し、T字形に展開するが、この中でも日当たりの良い台地上の東側を中心として、集落が形成されている。この為、土坑・ピットばかりでなく全ての遺構がA地区に集中している。D地区の中央にも土坑が9個検出されたが、台地上のそれとは異なる性格をもつと思われる。平面形は楕円形・円形の順に多く、方形やそれに近いものは少ない。方形のものには1辺に突出部

がつく形態の63・67土がある。規模は長径で最小50cm～最大280cm（10土）を測り、50～100cmのものが多い。出土した遺物や切り合いから所属時期が推定されるものは少ないが、他の遺構と同様に縄文時代中期前葉のものがほとんどを占めると思われる。中世の遺構と考えられるものは51・63・67・68土等があり、A地区南東部に集中する。以下特徴的なものについてのみ記述する。

ピット　本調査ではA地区を中心に総数322個が検出された。平面形は円形・楕円形がほとんどを占める。A地区のものは、切り合い関係や出土遺物より縄文時代中期前葉のものが多いと思われる。B地区の1建周辺にも集中がみられる。規模は直径20cm前後が主体である。出土遺物がほとんどないため、時期は不明である。A地区のそれらとは異なる性格を持つものであろう。

第1号土坑(第68図)

A地区北西、N9～11・W11～13に位置し、僅かに北端が調査区域外へ出る。平面形は不整な楕円形を呈している。規模は268cm以上×168cmを測り、深さは103cmある。段を作って掘り込まれるが、断面形は三角形に近い。覆土は底面より黒褐色土、にぶい褐色土、灰褐色土が順に堆積しており、中層～底面にかけて縄文時代早期～中期の土器片が出土した。本址の時期は出土遺物より縄文時代中期前葉に比定される。

第10号土坑(第68図)

A地区北側、N6～9・NS0～E2に位置し、南側でP67に貼られる。平面形は楕円形を呈し、南北280cm、東西180cm、深さは56cmを測る。壁は傾きをもって掘り込まれ、底面を南から北、東から西へ傾斜している。覆土はにぶい褐色土と明褐色土が堆積しており、中層からは河原石と共に少量の土器片が出土した。本址の時期は出土遺物より縄文時代中期であろう。

第21号土坑(第68図)

A地区南西、S8～9・W6～7に位置する。70土、P68を貼る。平面形は楕円形を呈し、72×66cmの規模をもつ。深さは28cmある。断面形は台形を呈し、覆土はにぶい褐色土が堆積しており、北側半分には縄文土器片がまとまって出土している。本址は今回の調査では最も普通に見られるタイプである。遺物より縄文時代中期中葉に比定されよう。

第63号土坑(第68図)

A地区中央、NS0～S1・E8～9に位置する。切り合い関係は認められない。平面形は長方形を呈し、長辺1辺に突出部が付く。規模は長軸が101cm×短軸68cm（突出部を含めると112cm）を測る。覆土はにぶい黄橙色を呈し、焼土粒・炭化物が混入していた。覆土には多量の焼骨片(註)が確認された。焼骨は人骨で、頭骨の板状の細片のほか、長骨の長さ数cmの破片など管状の小片が多く、肩甲骨の一部が認められた。銭2枚が出土している。本址の時期は、出土遺物より中世以降と考えられる。本址に類似するものには67土がある。

（註）骨片については信州大学の西沢寿晃氏に調査と鑑定をしていただいた。

(5)溝址(第68図)

第1号溝址

A地区の南端を東西に横切る形で検出された。切り合い関係は4住等を貼っている。東側・西側はいずれも区域外へ続き、全形は知り得ない。確認された部分での規模は幅114cm、長さ38mを測る。A地区の東は排土置き場になり未調査であるが、調査終了後の埋め戻しの際に本址の東端からの続きを確認できた。区間境界からは約1m東で急に直角に曲がり、北へ伸びていた。地形的にみると、直角に曲がる地点から数m東は、伊深城山から続く舌状台地の東端にあたり、ここより急な東斜面となり底地へ落ちていく。一方西端は、舌状台地の中央にあたり、西は緩やかな斜面となる。舌状台地中央部より西は遺構の分布が急に少なくなっているが、本址の続きはどうなっているのであろうか。覆土は底面よりにぶい褐色土、黒褐色土が順に堆積し、砂・小礫は確認されなかった。覆土下層～底面にかけては10～20cm大の礫が疎らに見られた。断面は幅の広い台形～半円形を呈している。本址の性格は、A地区南端で北北西→南南西の緩傾斜地を東西に、A地区東で西→東の斜面を南北にそれぞれ直交しており、水を伴っていた様子も観察されないことから、何らかの区画の為に人為的に掘られた溝と考えたい。遺物は覆土上層から底面にかけ多くが出土し、縄文土器・石器がある。遺物より本址の時期は縄文時代中期後葉と比定される。

第2号溝址

A地区西側、N3～4・W2～8に位置する。7竪を切り、P322に切られる。規模は幅76cm、長さ5.4mを測る。1溝と並行に東西に伸びる。覆土はにぶい褐色土の単層で、砂・小礫は含まない。検出面からの深さは8～20cm程と浅く、底面は平坦で傾きはない。断面形は皿形を呈す。遺物はほとんどないが、縄文土器が少量ある。本址の時期は、縄文時代中期後葉に比定される。

第3号溝址

2溝の西側にあり、N3～4・W10～13に位置する。西側は調査区域外へ続く。位置的にみて2溝とは一連のものであろう。幅86cm、長さ2.7mを測る。覆土・断面形・底面の様子は2溝と同様であった。遺物はほとんどなく縄文土器が少量ある。本址の時期は縄文時代中期中葉に比定される。

3.遺物

(1)土器(第69図～72図)

縄文時代早期末の土器

検出面、および4・5住を中心に破片が比較的多く出土しているが、明確に遺構に伴うものは存在しない。また、接合資料がない上、器面の摩滅が著しく図示に耐え得るものは非常に少ない。

拓影で示した26点はいずれも胎土に植物繊維を含み、断面内部が黒色を呈する。器形は深鉢で、尖底となるものが大半と思われる。16・18・30は外反する口縁部破片で、18は端部を外側に肥厚させている。16は口縁直下に突帯を巡らせ、何らかの工具で押圧を加える。施文が確認されるものは17点あり、他は無文かまたは器面の摩滅により確認できないものである。文様は17が口縁部外面および端部に絡縄体圧痕を施すほかはいずれも縄文である。単節の原体を横位に回転押捺するものがほとんどだが、19・24・30は2種類の原体による羽状縄文となる。

縄文時代中期初頭の土器

量的にはわずかである。15は外開する体部とキャリパー形の口頸部を有する形態で、3段の文様帯を有する。口縁文様帯は端部の貼付突起、U字状隆帯により4単位に区画され、内部に斜行する角押文を充塡する。頸部文様帯は隆帯による狭長な楕円区画文で、内部は無文である。体部はクランク状に隆帯を配する。これらの諸特徴から中期初頭でも最終末に位置付けられよう。12は外反する深鉢の口縁部であろうか。端部を内外に肥厚させ波状部の端面に渦巻状沈線を加える。端部の施文にあまり例を見ないが、器形から本期あるいは中葉の古い段階のものと考えたい。

縄文時代中期中葉の土器

出土土器の主体をなす土器群である。住居址等からまとまった資料が得られたが、器面の風化摩滅が著しく図示できる個体は少ない。内容的には5群に分類可能で、以下各群毎に記述を行う。なお時期的には井戸尻編年の狢沢式～藤内式が存在するが、主体は新道式の段階と考えられる。

第1群　勝坂式の系統で、土器群の主体をなす。隆帯による横位あるいは縦位の区画文を形成、内部に角押文や三角押文を多用する土器群である。器種は深鉢、浅鉢、有孔鍔付土器が見られる。

深鉢　円筒形ないし外開する器形がある。文様帯には隆帯による区画を横帯させるもの(7・42・46・47・49・52・54)と、平行沈線文等により縦位の区画文を展開するもの(2・13・45)の二者が見られ、量的には前者が主体となる。横帯区画は小片が多いため全体像がつかめないが、半円区画と三角区画を交互に連続させるもの(7)や楕円区画(46・47)がみられる。隆帯上には刻目を入れるもの(47)や交互刺突を施すもの(42・54)がある。7は区画の連結部に第2群の手法である円文を貼付したひねり状の隆帯が見られる。区画に沿う押し引き文や区画内にみられる波状文・斜走文には角押文を多用するもの(47・52)と三角押文や爪形の押し引き文を用いるもの(7・42・46・49)がみられ、後者が多い。46は幅の広い押し引きである。角押文を多用するものは狢沢式に、5住出土品をはじめ他は新道式に比定されよう。8はバケツ形の形態をなすものであろうか。

口縁部は外反し波状をなす。波状に対応して体部上位には大形の環状突起を貼付し、下部に逆U字状の隆帯を垂下させる。隆帯の一方には連鎖状の押圧を加えている。隆帯・突起で縦位に4分割された体部は、さらに口縁直下および器体中位の横位平行沈線によって上下に区画され、刺突列点を加えた沈線文で縁どりがなされる。平行沈線を多用して区画文を形成する点でやや異質な感を受ける。また刺突列点文や連鎖状隆帯等、第2群の要素も取り入れられている。

区画文が縦位の構成となるものは基本的に平行沈線によって区画がされる。3は平行沈線に沿って爪形の刻みを入れるが、区画内は施文されない。13は相対する2条の懸垂隆帯、斜走隆帯により体部が4分割され、広幅の平行沈線により縦位基調の方形、長方形、三角形の区画がなされる。区画内は斜位沈線文を充填するようである。なお口縁部は小波状を小刻みに連続させており、珍しい形態である。これら2点について区画の手法としては2が古く、新道式に比定されよう。13は区画および区画内充填文様のあり方から藤内Ⅰ式に下るものと考えられる。

浅鉢　3点を図示した。4・11はくの字状に短く内屈する口縁部を有し、2条の爪形ないし三角形状の押し引き文を横走させる。いずれも新道式段階のものと考えられよう。

有孔鍔付土器　70土出土の1点を図示し得た（14)。細片化したものを図上復元したもので、中位の張る太鼓型の体部に短く直立する口縁部が取り付く形態と考えられる。体部中位には円文、三叉文により顔面を表した円形の突起を1対配し、唐草様の渦巻隆帯で突起間を連繋する。

第2群　いわゆる斜行沈線文を多用する土器群である。2点を呈示した。いずれも深鉢である。9は上半部を残存し、直開する体部とくの字状に内屈する口縁部を有する。文様帯は横走隆帯により口縁部1段、体部2段に行われ、口縁部文様帯と体部下段文様帯の上位に斜行沈線が充填される。また体部上段には波状文が巡らされる。これら本群の特徴のほか、隆帯に沿う角押文や体部下半のクランク状隆帯等第1群の要素も見られる。時期的には角押文やクランク状隆帯に古い要素を認めるが、5住の他の共伴遺物からみて新道式に併行するものとしたい。64は体部破片で、垂下する隆帯は逆U字状の懸垂文の一部と考えられる。懸垂文内や隆帯区画内に波状文や斜行沈線が施される。

第3群　57はいわゆる新巻類型の深鉢口縁部で、波状部を残す。施文は波状部外面に環状突起を付すと思われ、それから隆帯を派生させる。隆帯脇には2～3条の平行沈線を沿わせる。頸部は横走隆帯により体部と区切られる。体部は曲隆線による文様帯が展開するものと考えられる。

第4群　平出3Aの特徴を有するもので、5住出土の2点を示した。6は口縁部～体部上半を残存する。口縁部は短く直立し、平行沈線による波状文を横走させ、4単位波状部に縦位棒状の隆帯を貼付する。頸部は縦位の集合沈線をやや密に施文し、体部との境界は平行沈線を2状横走させて区切る。体部は施文が省略されている。55は大粒の石英粒を多含し、第1群土器とは明瞭に異なる胎土である。頸部文様帯は縦位の集合沈線を密に施し、体部との境を3条の平行沈線で区切る。体部は荒く斜位格子状に平行沈線を施した後、さらに縦位集合沈線を密に充填している。

第5群　北陸系の土器群を一括した。いずれも半隆起線や爪形文を付した半隆起線による区画文を特徴とする。43は胎土の特徴から搬入された可能性の高いものである。外開する口縁部破片で、蓮華状文が施文される。5・48・50・51は胎土は在地的であるが、施文のあり方は北陸地方のものに類似する。51はキャリパー形の深鉢口縁部で、格子目文を充填した逆U字状区画文を横帯させる。5は唯一器形の窺い知れるもので、体部上半～頸部が残存する。頸部以上に文様帯を有し、半隆起線、爪形文を付した半隆起線を交互に横走させる。屈曲部には円文や波状文を配した横帯文を巡らせる。48・50は深鉢体部で、半隆起線、格子目文により縦位基調の区画文を施文している。これらはおおむね新崎式に併行するものであろう。

縄文時代中期後葉の土器

3溝出土土器のうち、3点を拓影で示した。62はキャリパー形の深鉢口縁部で、沈線による褶曲文が施文される。61も深鉢口縁部で隆帯による渦巻文を描き、63は縦位に沈線を施す。

(2)土製品(第75図)

土偶2点と、耳栓1点が出土している。1は左腕部～胴部にかけて残存する破片である。左腕部はまっすぐに伸び、背面を除いて2本の沈線が施されている。盛り上がった乳房の先端には、直径2㎜の円形の刺突があり、乳頭を表現している。2は右足脚部の破片である。縦方向の2本の沈線が、正面・背面に施される。側面には斜め方向の4本の沈線が施され、その上には踝を表現したらしい盛り上がりがある。製作痕については、破損面と足の裏面に芯棒痕がある。時期は1・2いずれも縄文時代中期に属すると思われる。3は直径2.9cm、厚さ1.5cmの円盤状を呈した耳栓である。片面の中央部が大きく窪んでいる。

(3)銭貨(第72図)

8点出土している。5点を掲載した。1・2・3は63土、4・5は67土から出土している。その他、同じく67土から判読不能なものが1点ある。68土からは2点出土している。

No	出土地点	種　類	初鋳年	径(㎜)	重量(g)	破損状態
1	63土	紹聖元宝	1094	(2.39)	(2.70)	周囲欠
2	〃	永楽通宝	1408	2.49	2.80	完形
3	〃	□□□宝		2.42	(1.20)	¼欠
4	67土	元豊通宝	1078	2.41	3.75	完形
5	〃	□□元宝 □元□宝		2.40	(1.90)	周囲欠
6	〃	□□□□		2.40	(2.00)	ほぼ完形
7	68土	永楽通□	1408	2.50	(2.20)	¼欠
8	〃	□□□□		2.40	(1.30)	½欠

銭貨一覧表

(4)石器(第73～75図)

今回の発掘調査で出土した石器群のうち、定形的な石器の点数（全体の構成比は）以下の通りである。

1)石鏃	52点（42.3%）	6)打製石斧	11点（ 8.9%）
2)石錘	14点（11.4%）	7)磨製石斧	3点（ 2.4%）
3)ピエス・エスキーユ	13点（10.6%）	8)凹・敲・磨石	11点（ 8.9%）
4)石匙	4点（ 3.3%）	総　　計	123点
5)スクレイパー	15点（12.2%）		

このほかに2次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、砕片等が出土しているが報告書では割愛している。定形的な石器についてはできるだけ多くのデータを提示するため、整理作業は以下の方針で行なった。

a)全ての石器について種類毎に出土地点・寸法・重量・石質・破損状況を一覧表に登載する。

b)実測は完形または全形をうかがえるもの、使用痕を残すもの、特殊なものを中心に行なう。

c)石器の分類及び一覧表中の略号は、松本市教育委員会 1990 『松本市坪ノ内遺跡一緊急発掘調査報告書一』に従った。

なお、石質鑑定は太田守夫氏のご教示を受けている。以下では石器の種類毎にその概要を述べることにする。文中の石器を説明する数字は図番号である。

1)石鏃（1～15）　52点出土している。このうち13点は未成品であると考えられる。石材はチャート製29点、黒曜石製23点が利用されている。不明8点を除くと、基部は凹基37点、円基4点、平基3点、茎部については、凹基3点の有茎鏃がある他は全てが無茎鏃である。破損状況についてみると総数が少ないので、データとしては不十分であるが、先端・片脚を破損するものが18点（A・B類34.6%)、完形のもの19点があり（O類36.5%)、比較的多い傾向があるといえよう。特徴的なものとして鋸歯状側縁（5）と異形石器と思われるものが各1点ある。

2)石錘（16～22）　14点が出土している。石材はチャート13点、黒曜石2点が利用されている。形態からみるとつまみを持つもの10点、棒状錐4点がある。錐部の剥離調整は不明の1点（18）を除いてすべてが両面加工である。使用痕については錐部に摩耗のあるものが2点（20・21）ある。

3)ピエス・エスキーユ（23～29）　13点が出土している。石材は黒曜石を利用し、長さは2cm前後である。剥離は、上下端に剥離をもつもの（I類）に12点ある。縁部のつぶれは上下縁にあるものに28、下縁にあるものに24がある。

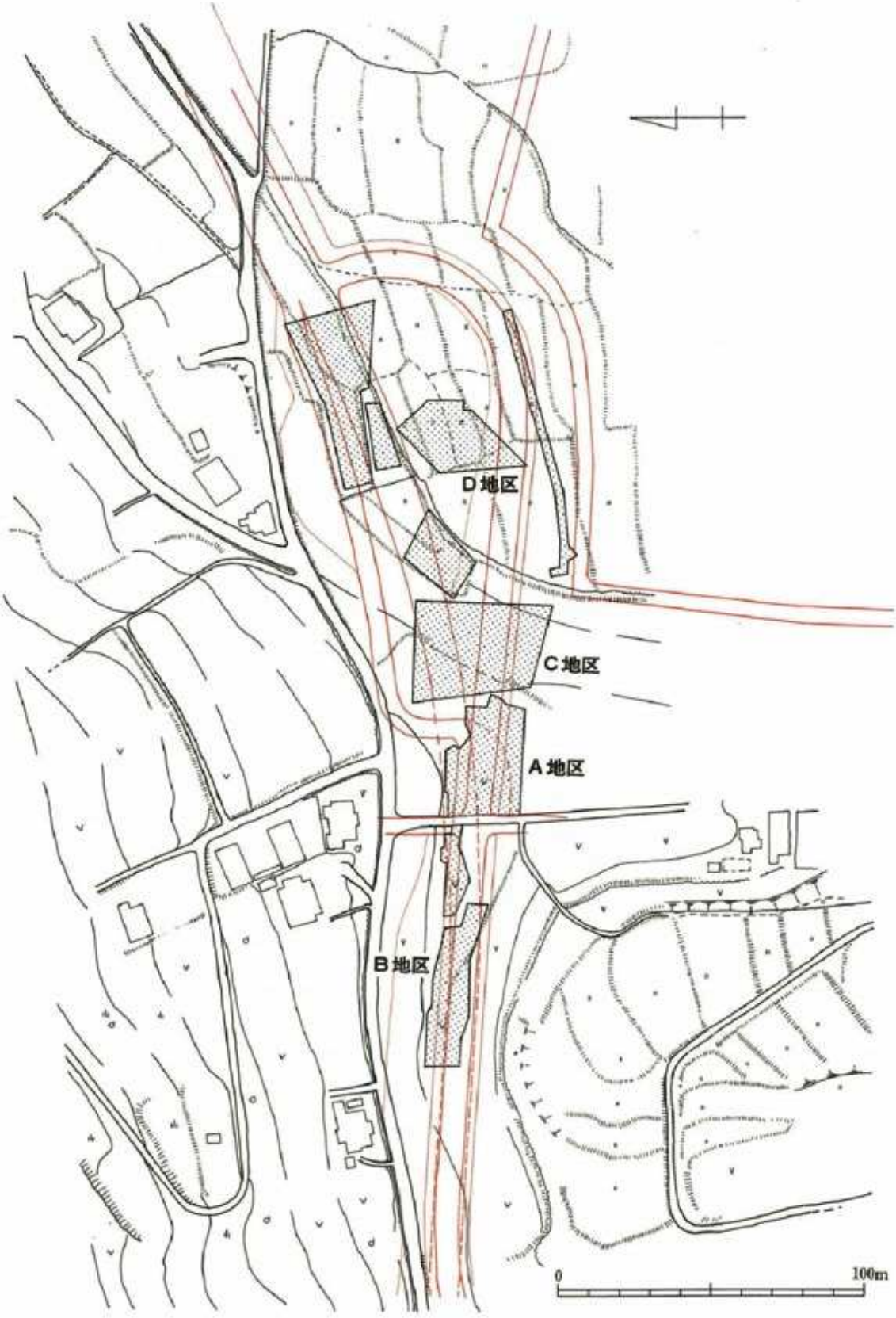
4)石匙（30～33）　4点が出土している。チャート製の小形・精製石匙3点（30・31・32)、硬砂岩製の大形・粗製品1点（33）がある。つまみと刃部の位置関係による分類では30は横形、32・33は斜形、31は不明である。刃部の形状による分類では30は外湾刃、33は直刃である。刃部の調整はすべて両面加工である。

5)スクレイパー（34～39）　15点が出土している。小形品14点と大形品１点（34）の２種類がある。小形品は石材にチャート10点、黒曜石２点、緑石凝灰岩１点が利用されている。素材剝片は縦長剝片が多い。刃部形態は外湾刃８点、直刃３点、円刃・内湾刃が各１点ある。刃部調整は片面加工９点、両面加工６点である。大形品の34は玢岩を石材とする打製石斧の転用品である。縦長剝片を利用し、刃部形態は直刃で両面加工される。

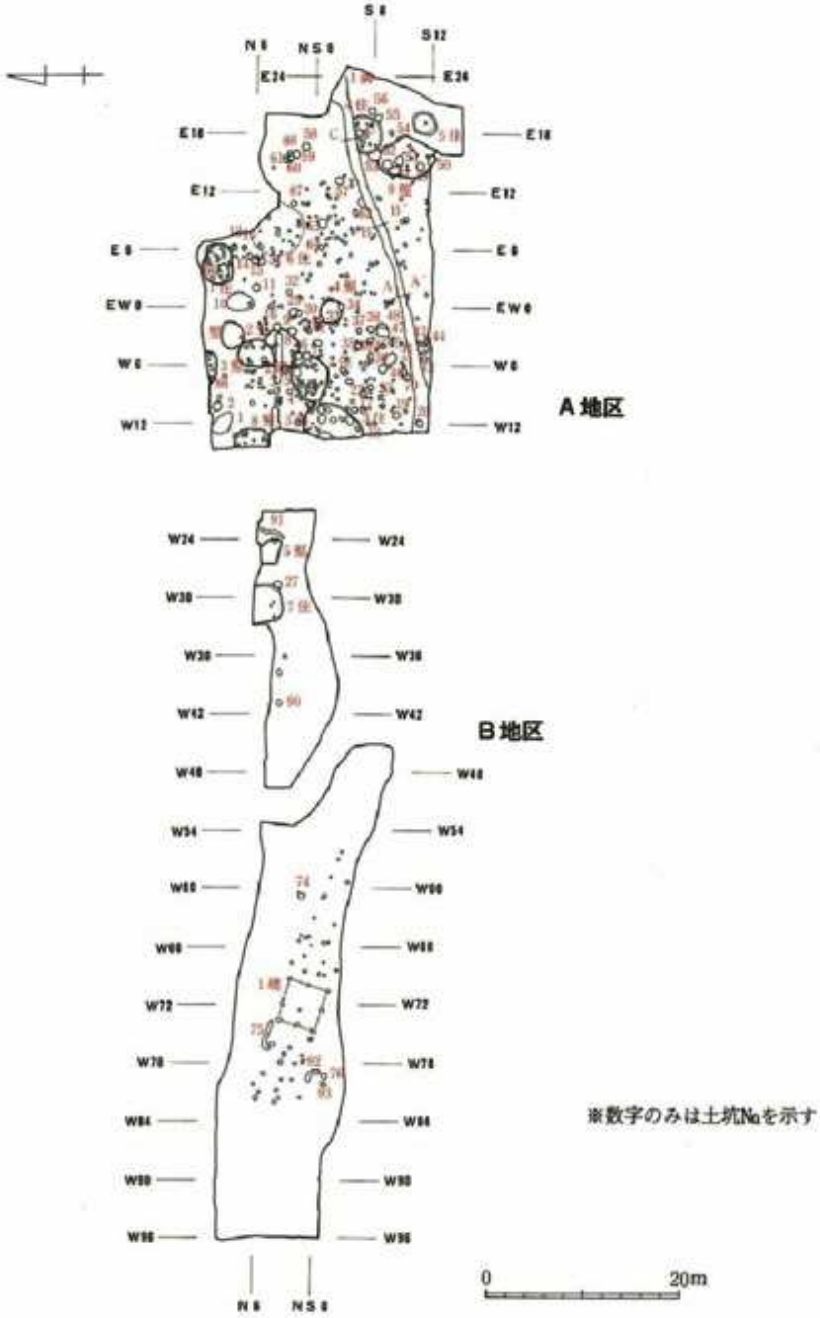
6)打製石斧（40～45）　11点が出土している。石材は硬砂岩４点、砂岩（ホルンフェルス）２点、粘板岩（ホルンフェルス）２点、砂岩２点、凝灰岩１点が利用されている。平面形による分類では撥形７点、分銅形１点、不明３点があり、短冊形はない。刃部は円刃４点、偏刃１点、不明６点となる。破損状況をみると、着柄部を残すと考えられるもの（A_1）が４点、刃部を残すもの（B_3）は２点、頭・刃部を欠くもの（C）２点がある。完形品には３点（41・44・45）がある。使用痕についてみると、43には胴部の側縁と刃部に磨耗痕がある。前者は着柄痕と考えられる。44は刃部に使用痕がある。

7)磨製石斧（46～48）　３点が出土している。石材は閃緑岩、凝灰質岩、蛇紋岩が各１点ずつ利用されている。いずれも定角式石斧である。いずれも研磨によって面取りされた側面をもつ。破損状況をみると46は頭・刃部欠（C）、47は刃部欠（A_3）、48は縦に半欠（D）である。

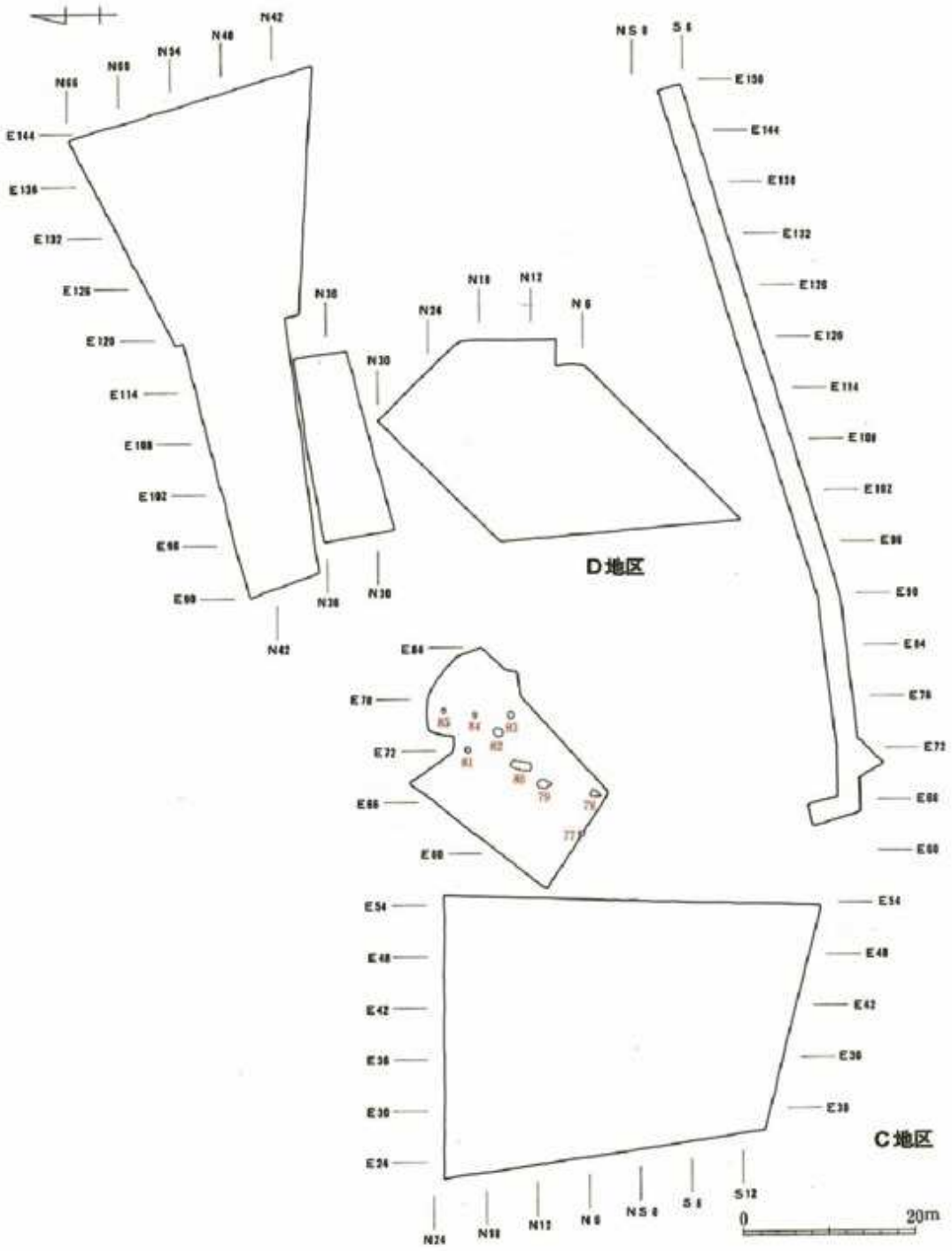
8)凹・敲・磨石（49～54）　11点が出土している。石材は砂岩４点、安山岩４点、安山岩（溶岩）２点、軽石１点が利用されている。使用痕については全てのものに磨面がある他８点に凹部３点（50・51・54）に敲打痕がある。素材については、楕円礫（B類２点・C類５点・D類１点）が８点、円礫（E類１点・B類２点）を利用している。



第57図　矢作遺跡調査地の位置

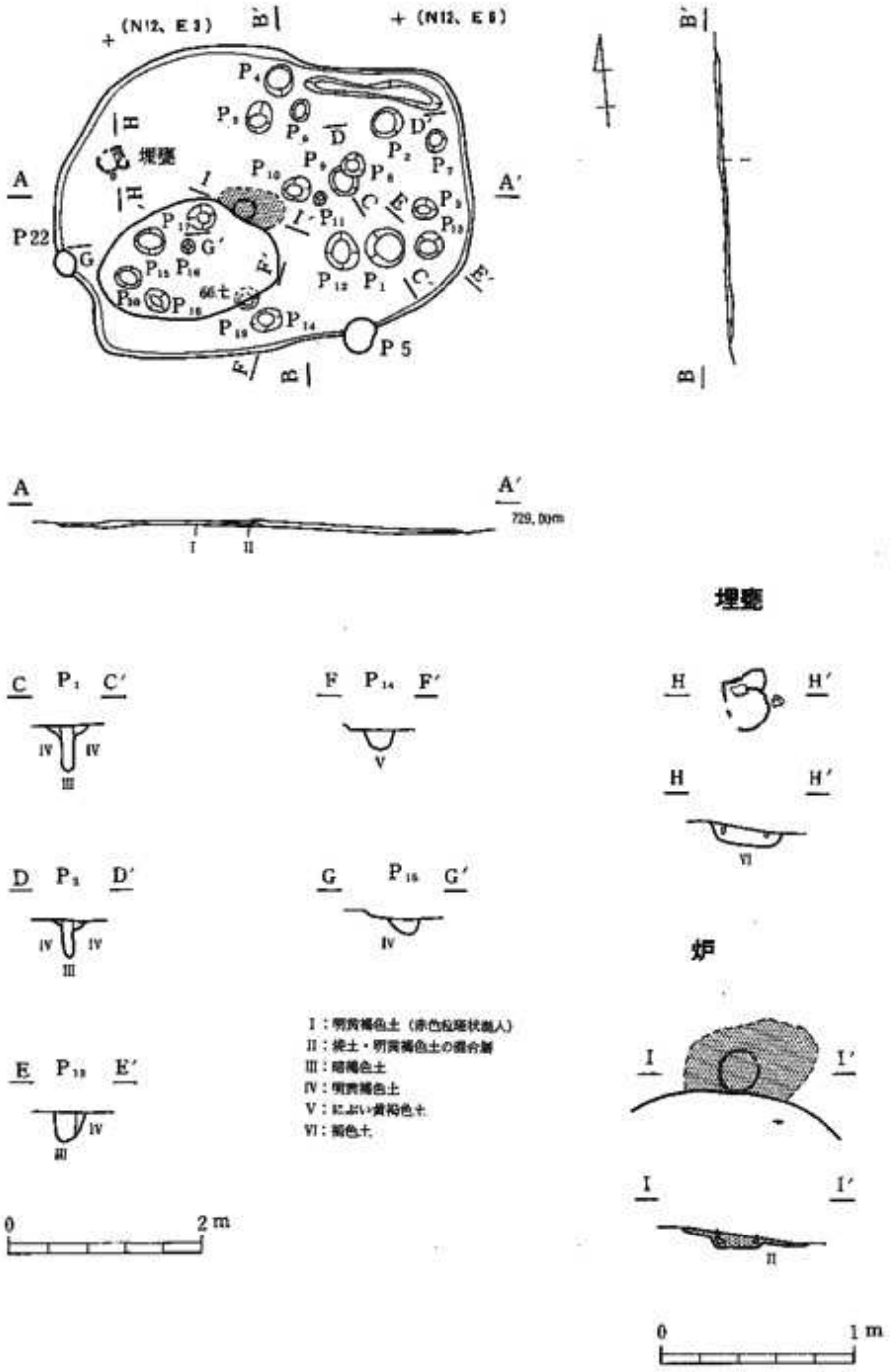


第58図　矢作遺跡遺構配置(1)



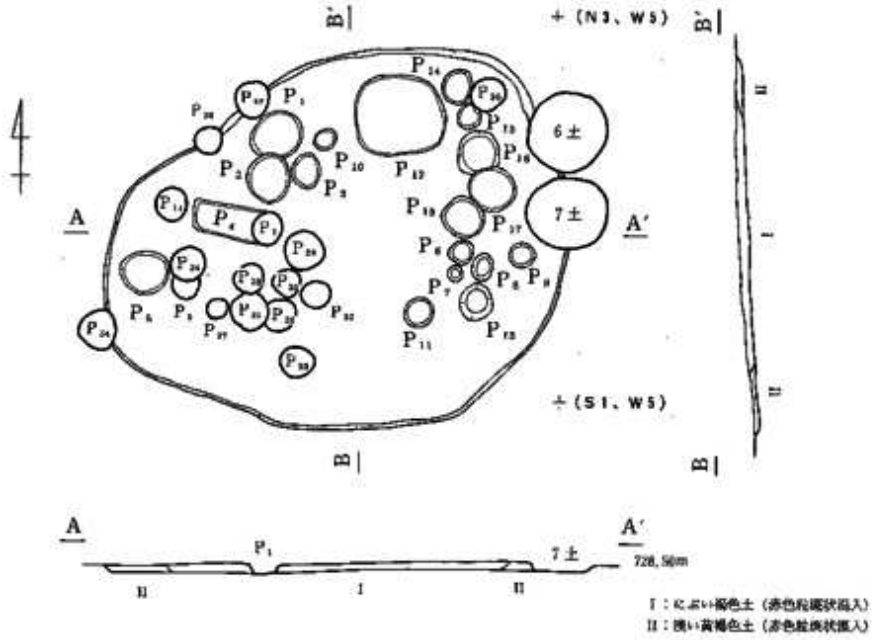
第59図　矢作遺跡遺構配置(2)

第１号住居址

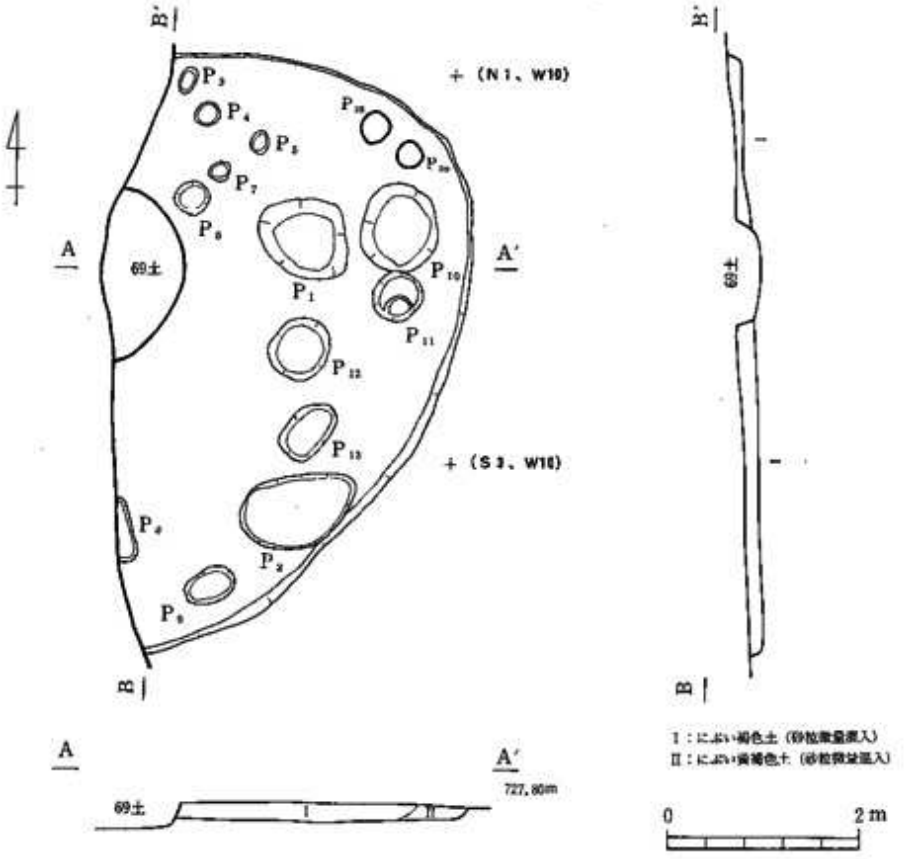


第60図　矢作遺跡第１号住居址

第２号住居址

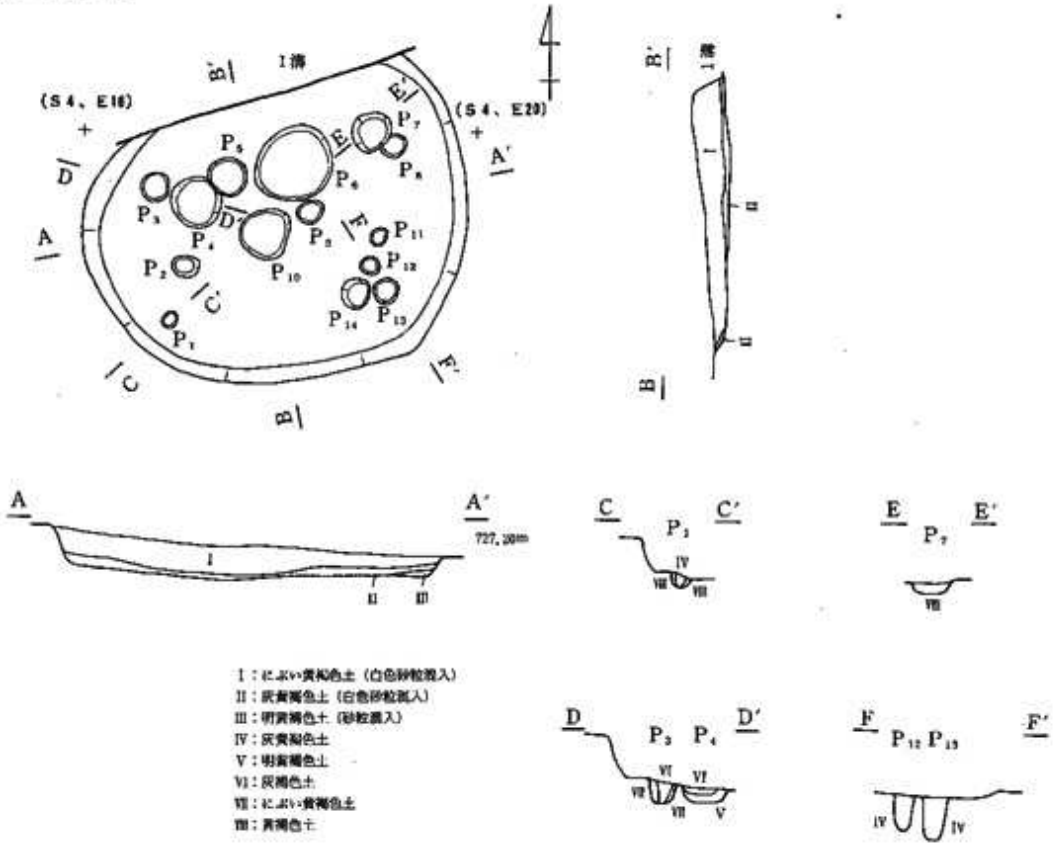


第３号住居址

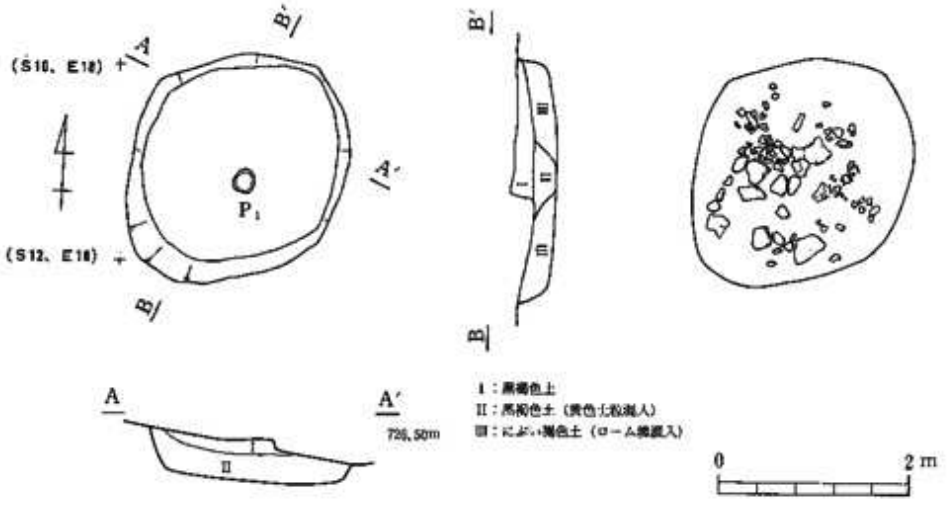


第61図　矢作遺跡第２・３号住居址

第４号住居址



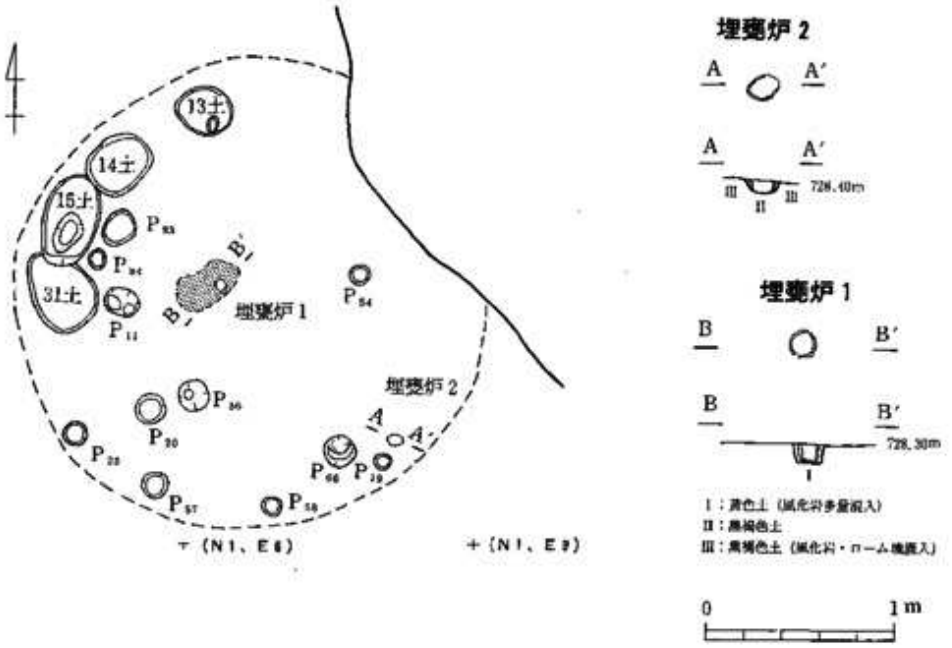
第５号住居址



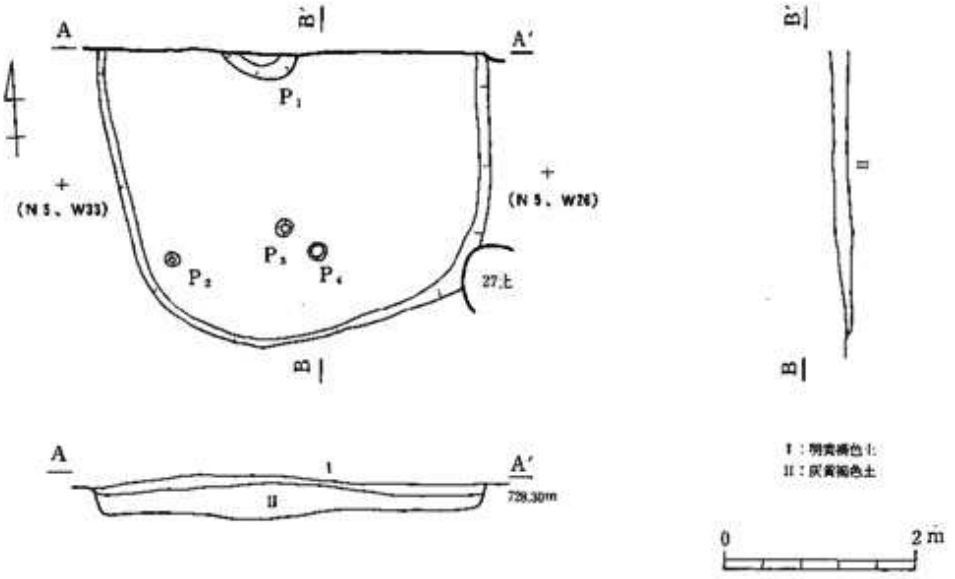
遺物出土状況

第62図　矢作遺跡第４・５号住居址

第６号住居址

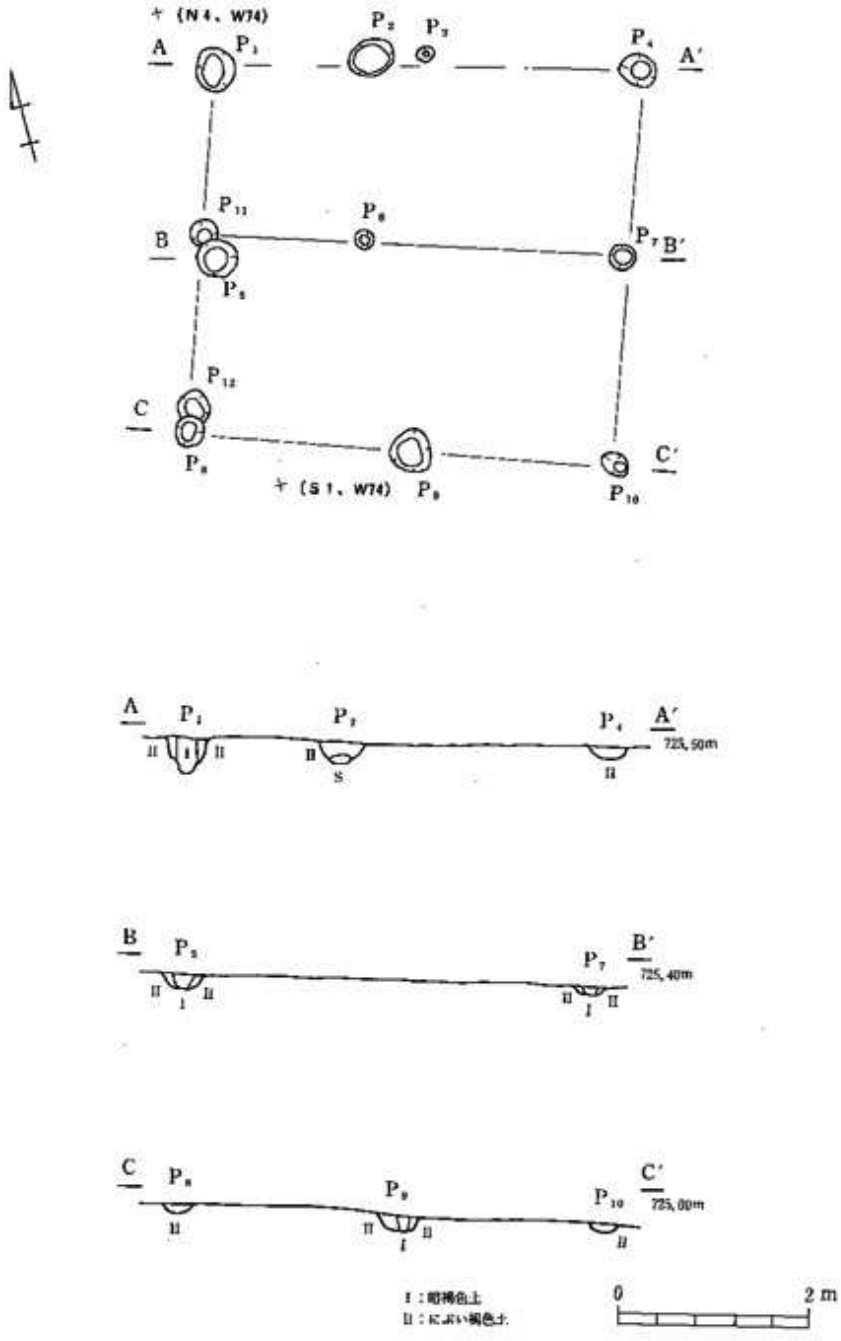


第７号住居址



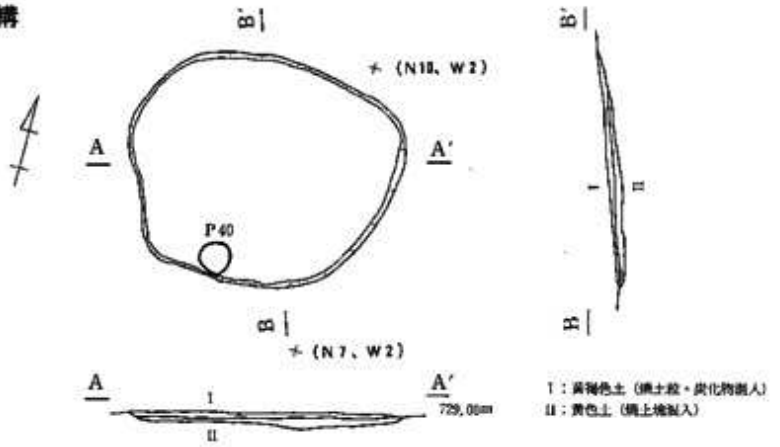
第63図　矢作遺跡第６・７号住居址

第１号建物址

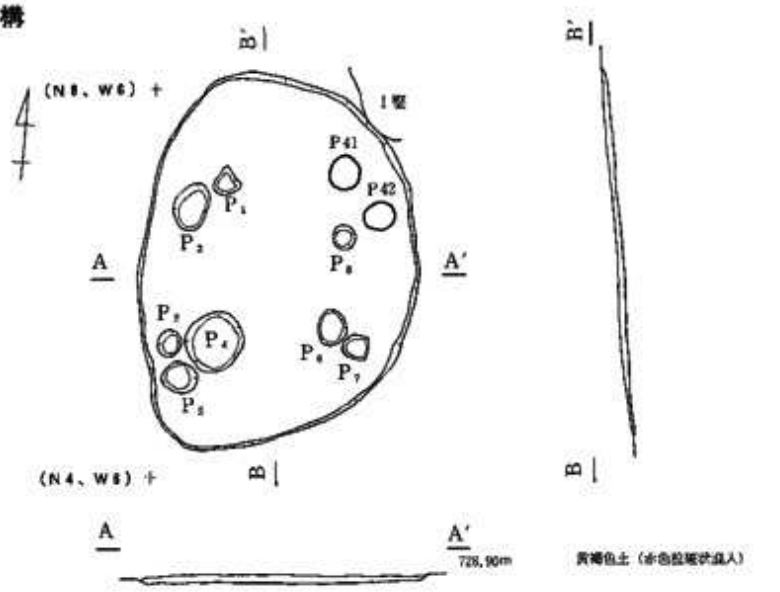


第64図　矢作遺跡第１号建物址

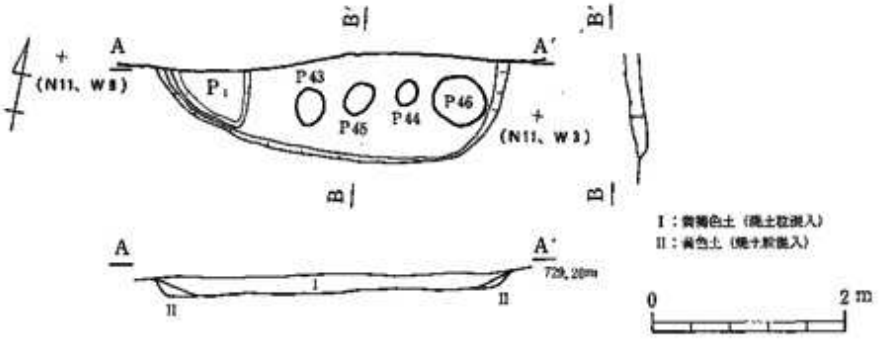
第１号竪穴状遺構



第２号竪穴状遺構

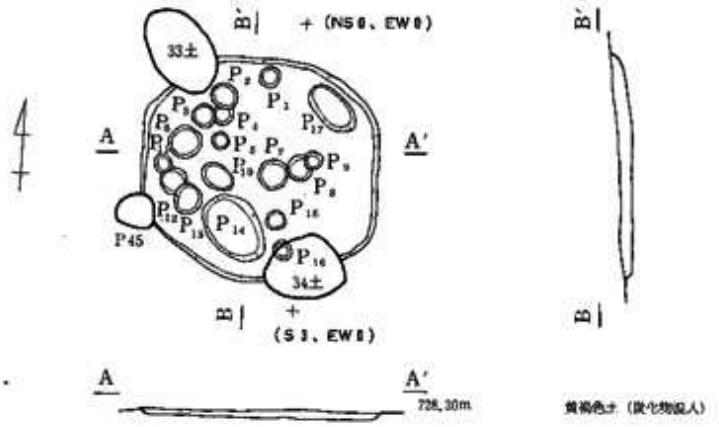


第３号竪穴状遺構

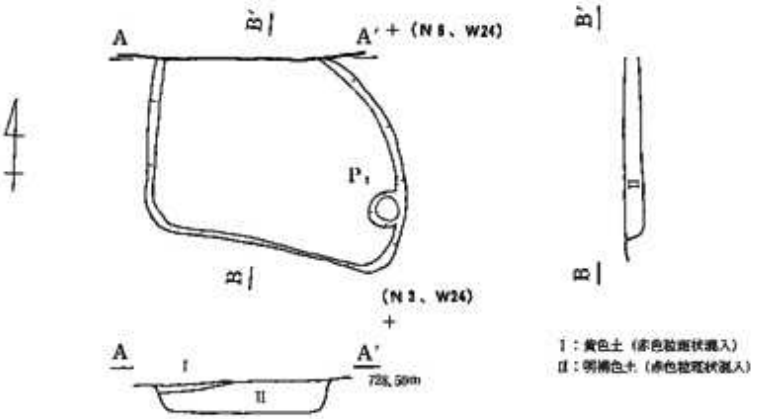


第65図　矢作遺跡第１～３号竪穴状遺構

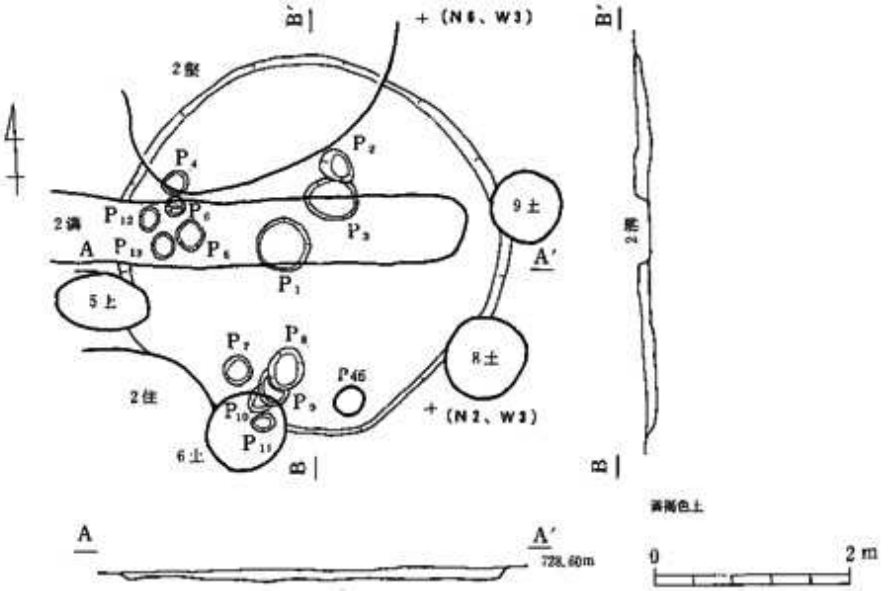
第４号竪穴状遺構



第５号竪穴状遺構

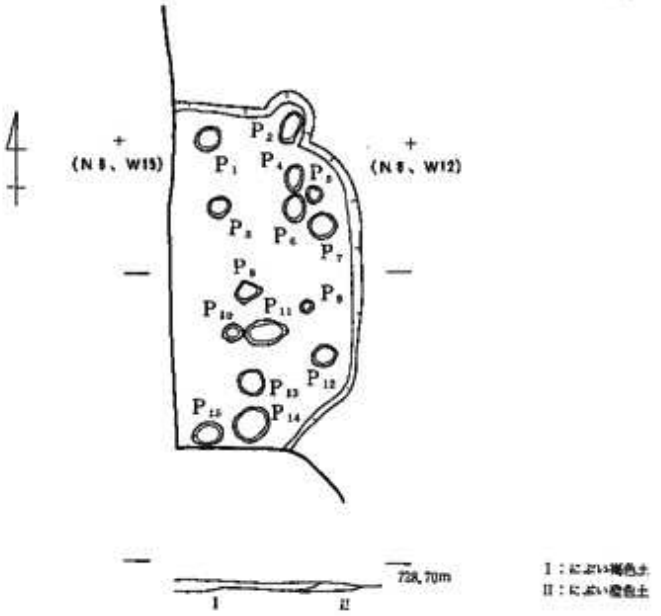


第７号竪穴状遺構

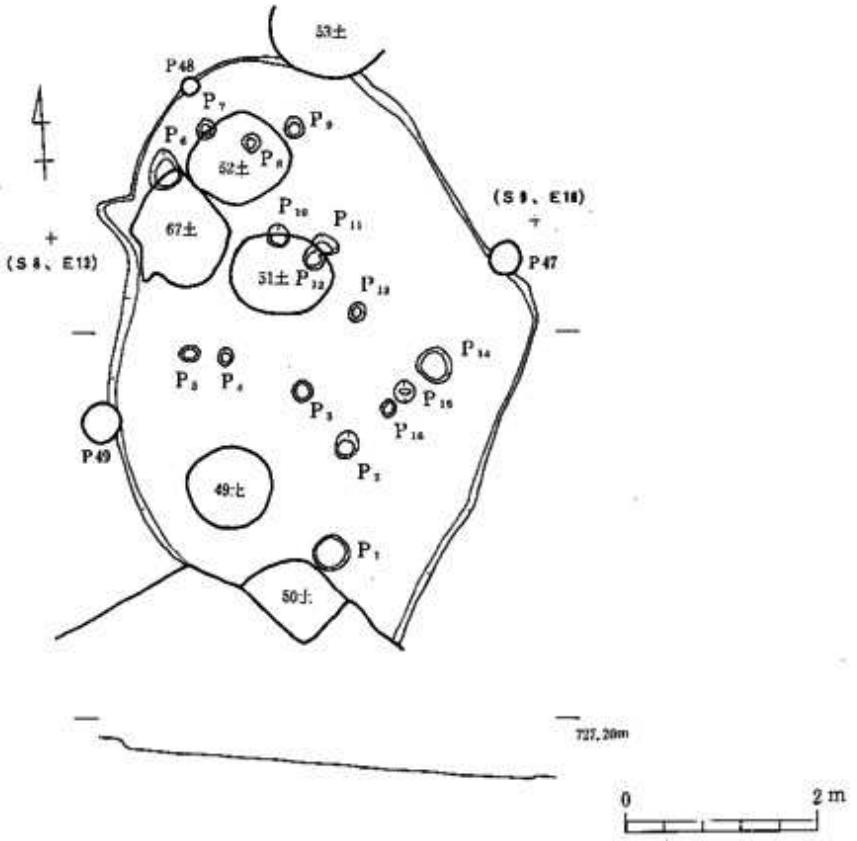


第66図　矢作遺跡第４・５・７号竪穴状遺構

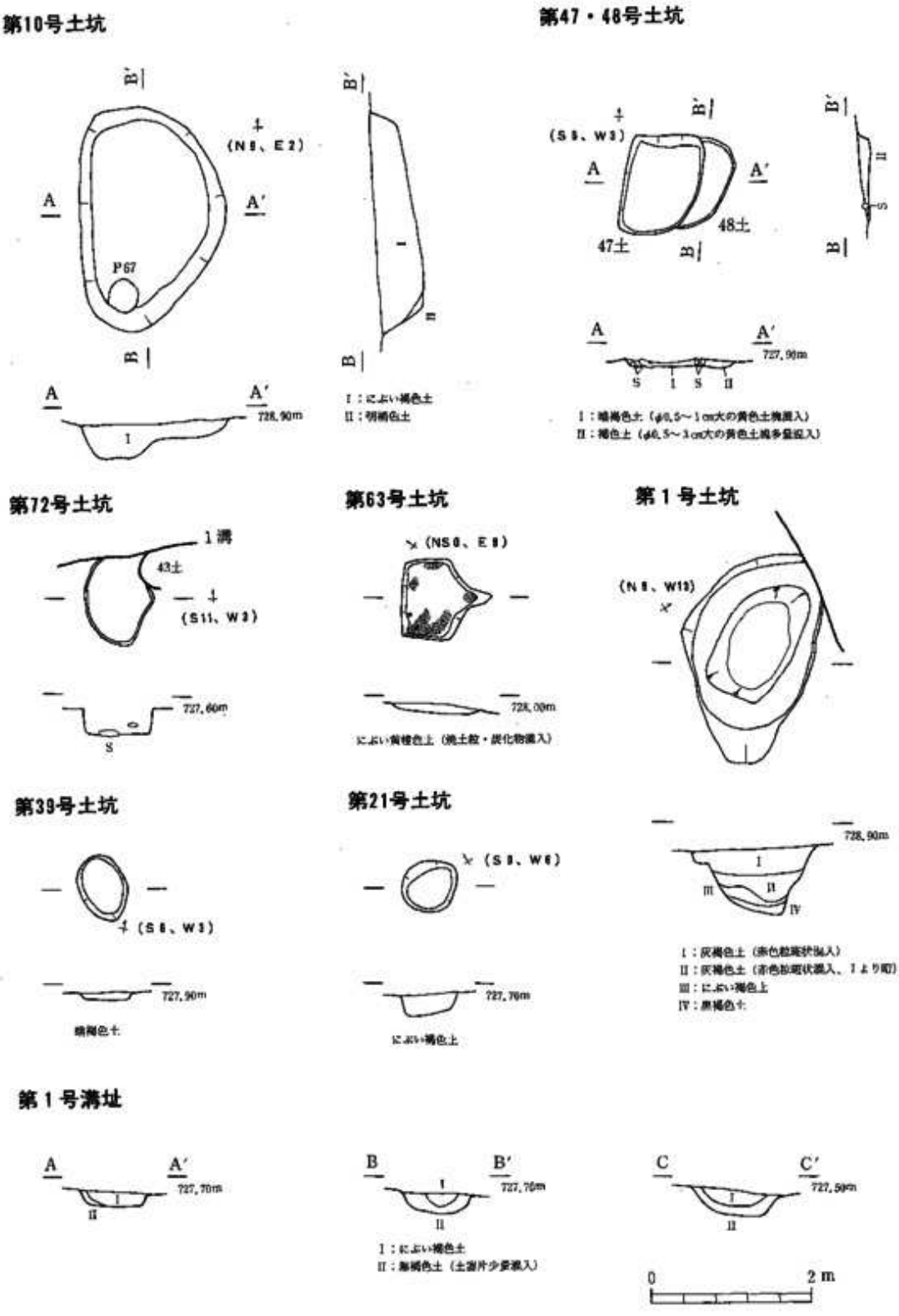
第８号竪穴状遺構



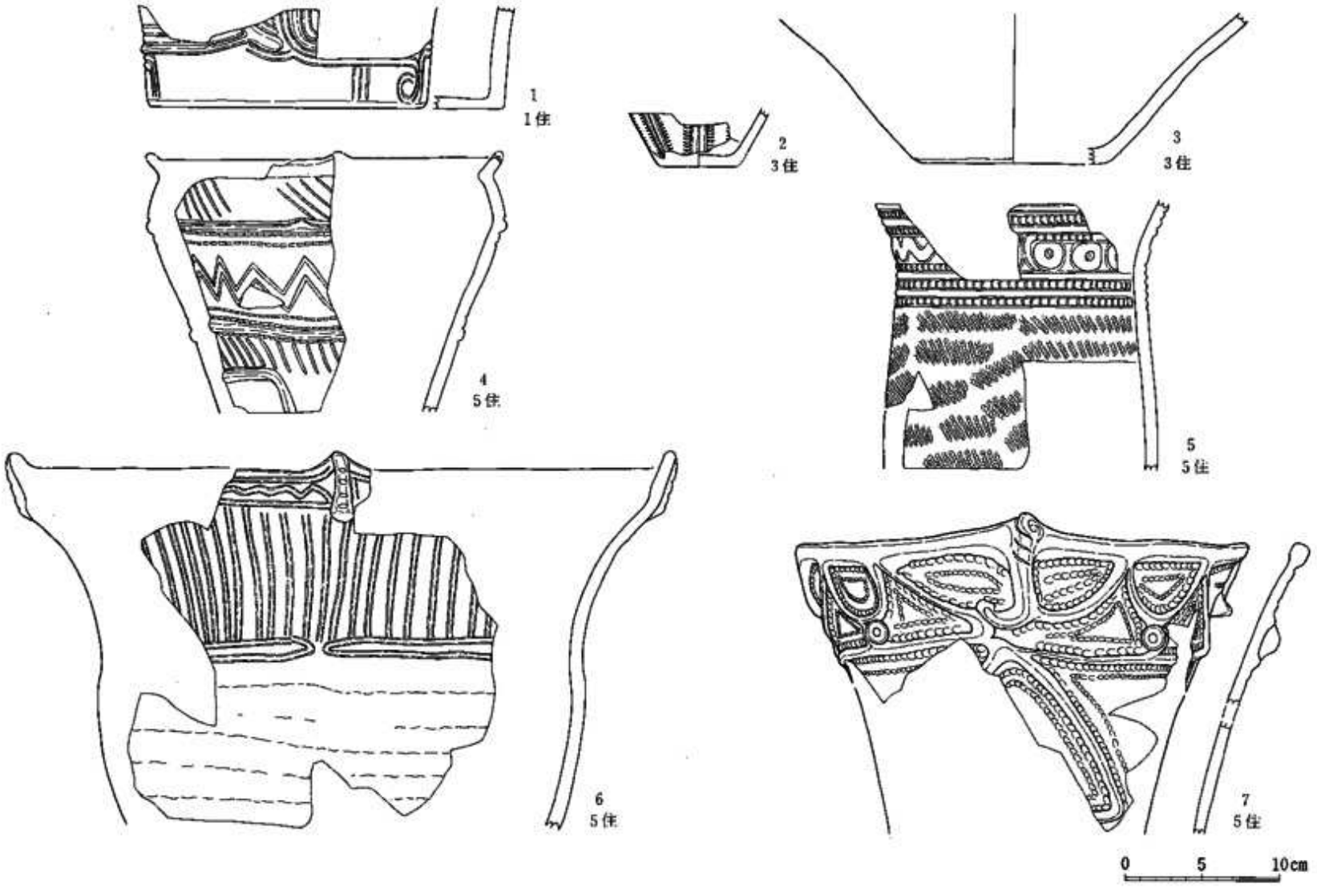
第９号竪穴状遺構



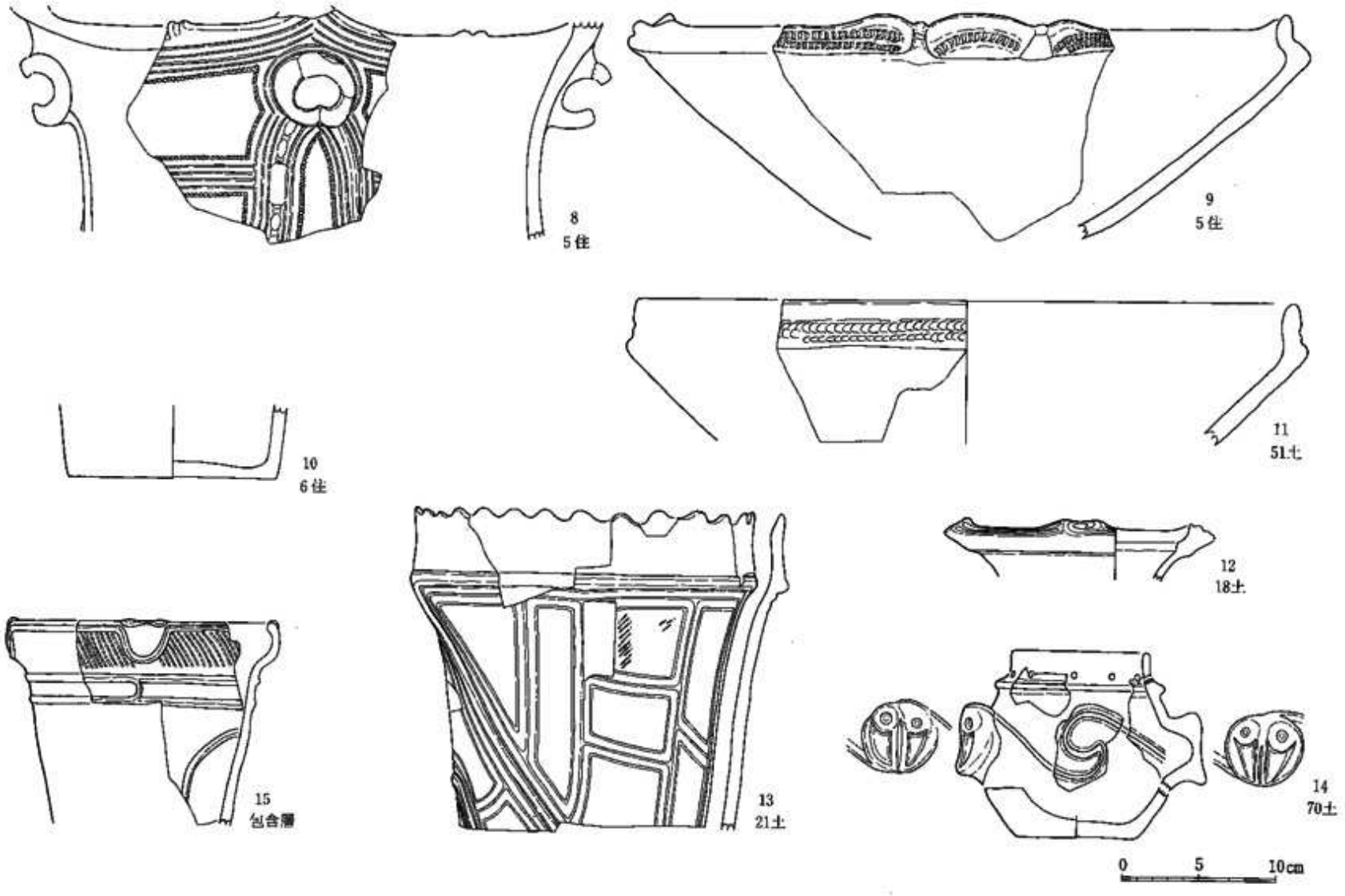
第67図　矢作遺跡第８・９号竪穴状遺構



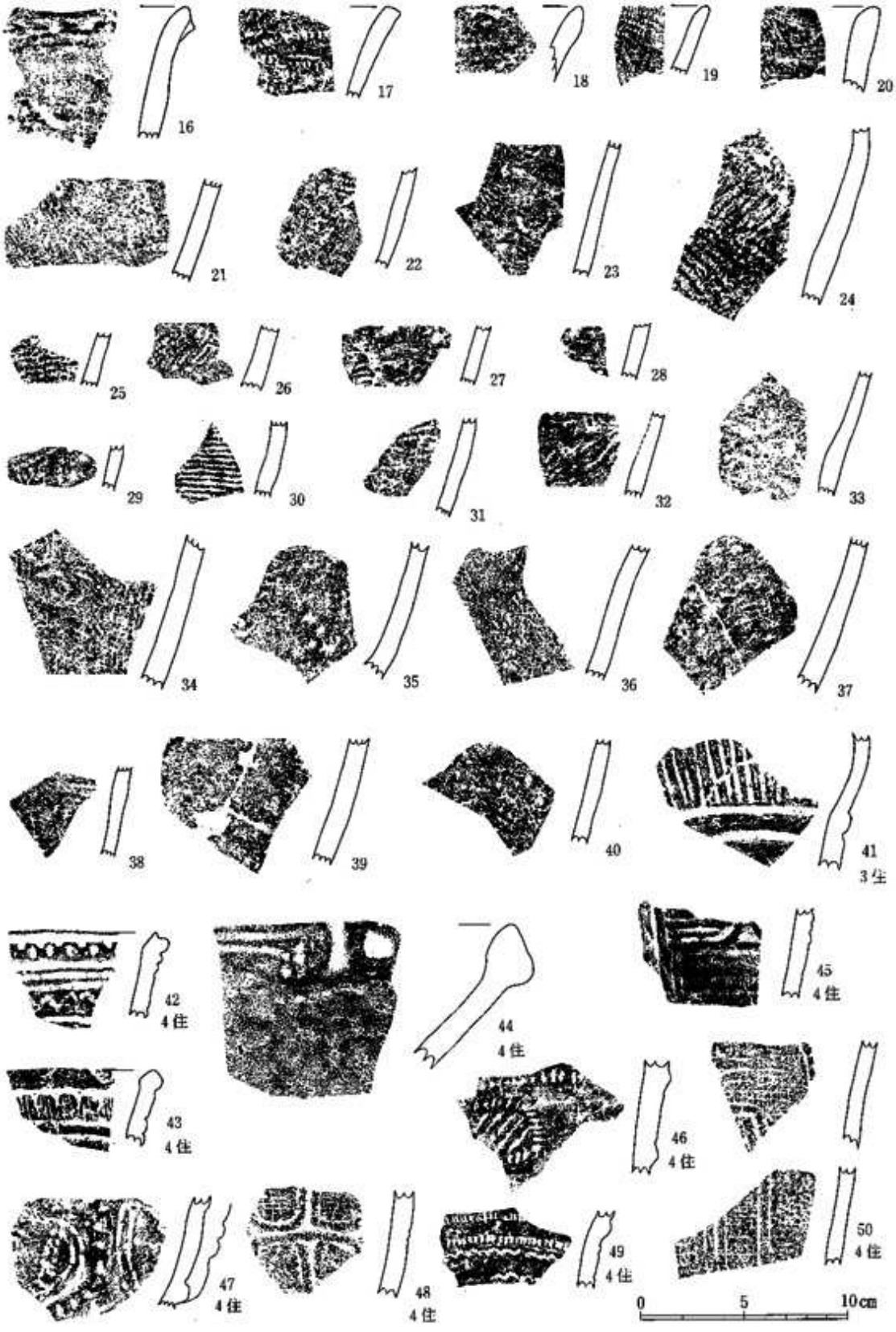
第68図　矢作遺跡土坑・溝址



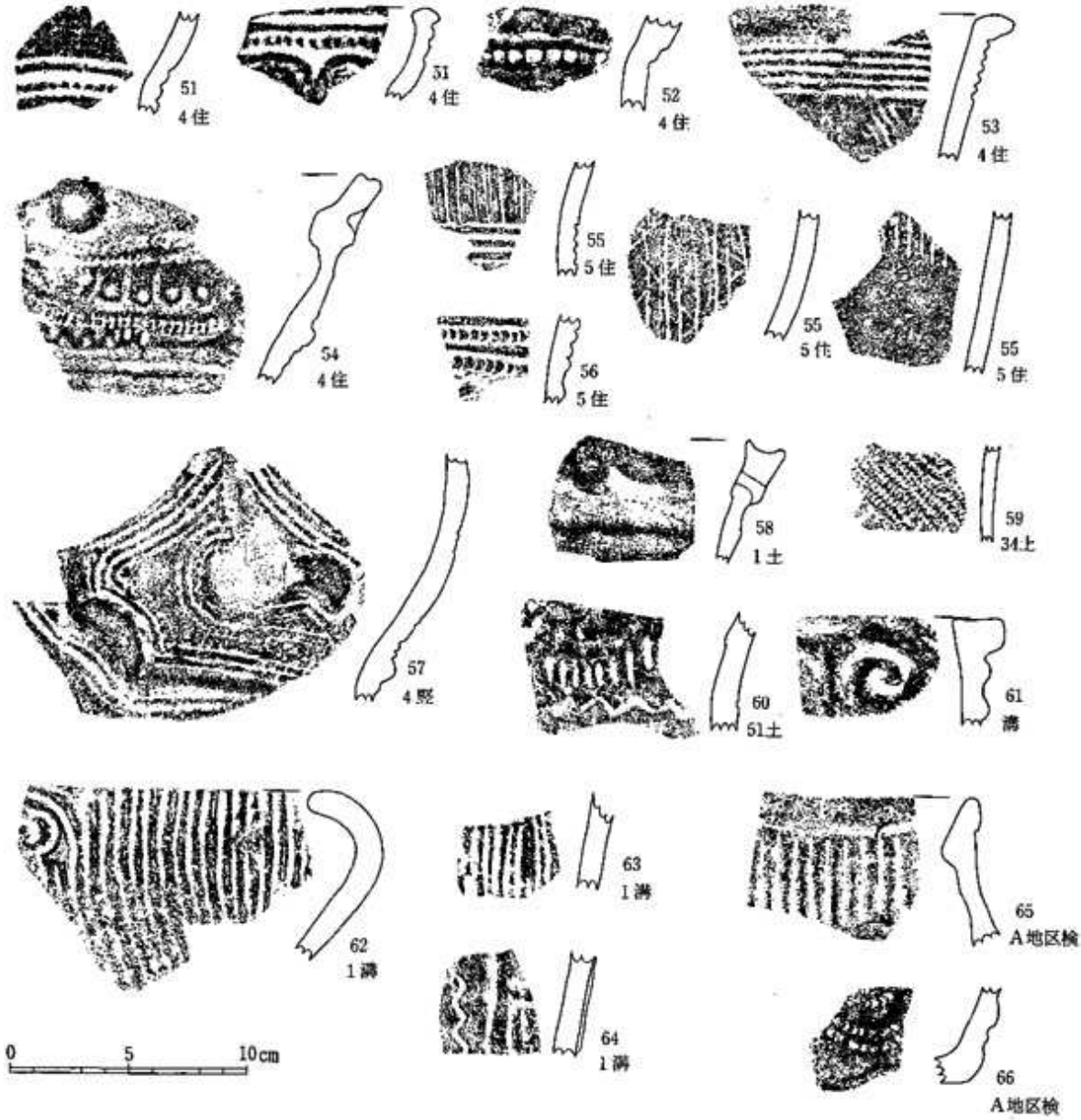
第69図　矢作遺跡縄文土器実測図(1)



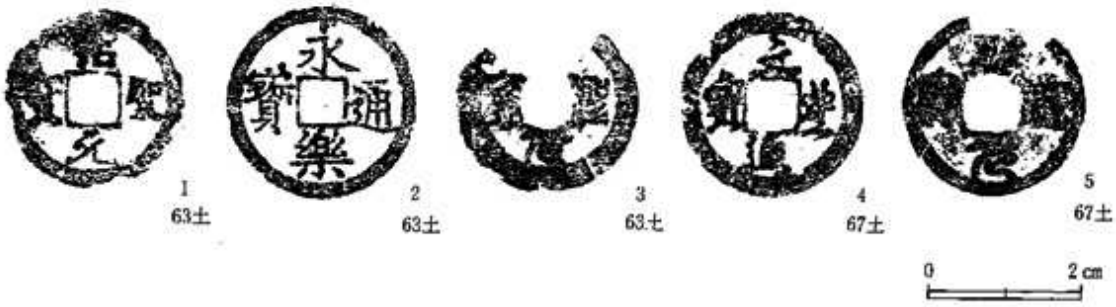
第70図　矢作遺跡縄文土器実測図(2)



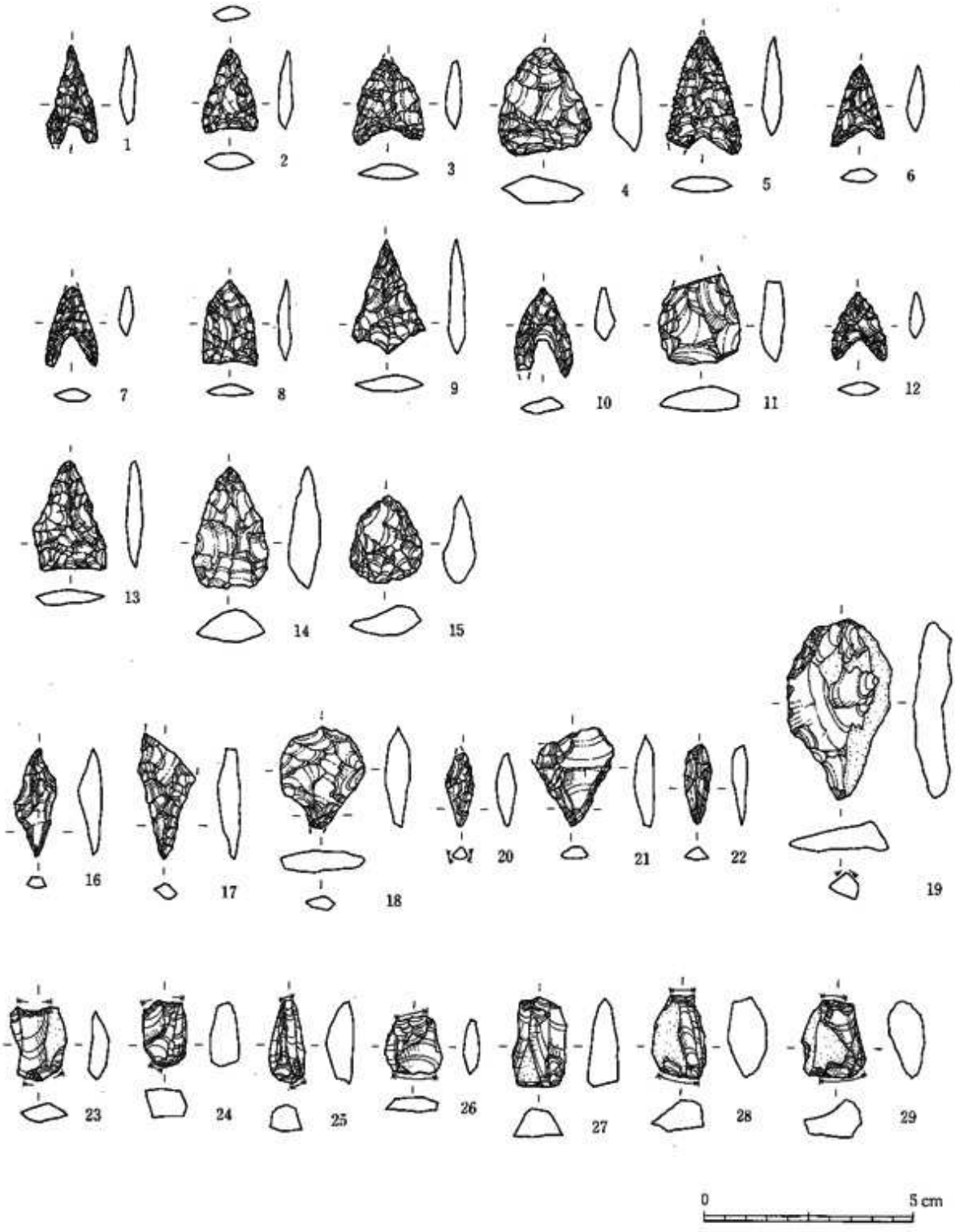
第71図　矢作遺跡縄文土器拓影(1)



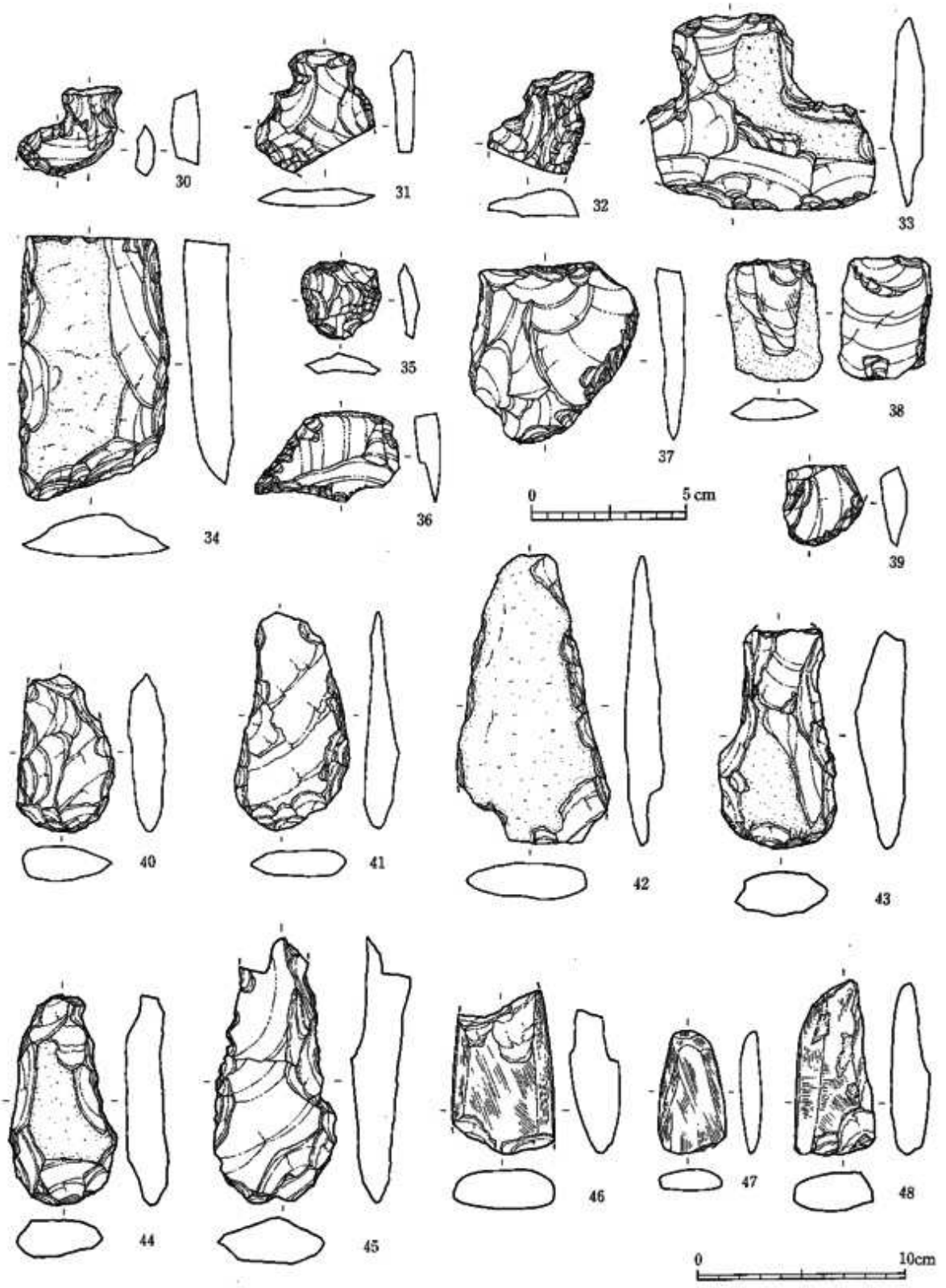
銭貨拓影



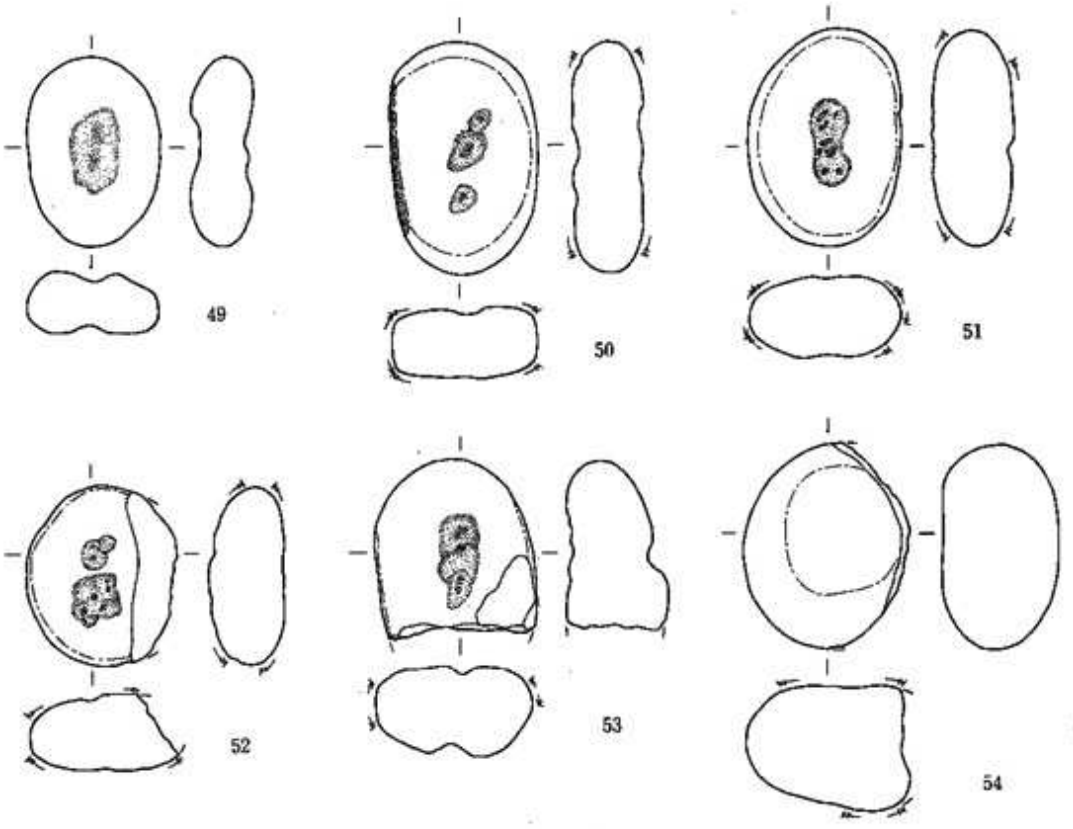
第72図　矢作遺跡縄文土器拓影(2)、銭貨拓影



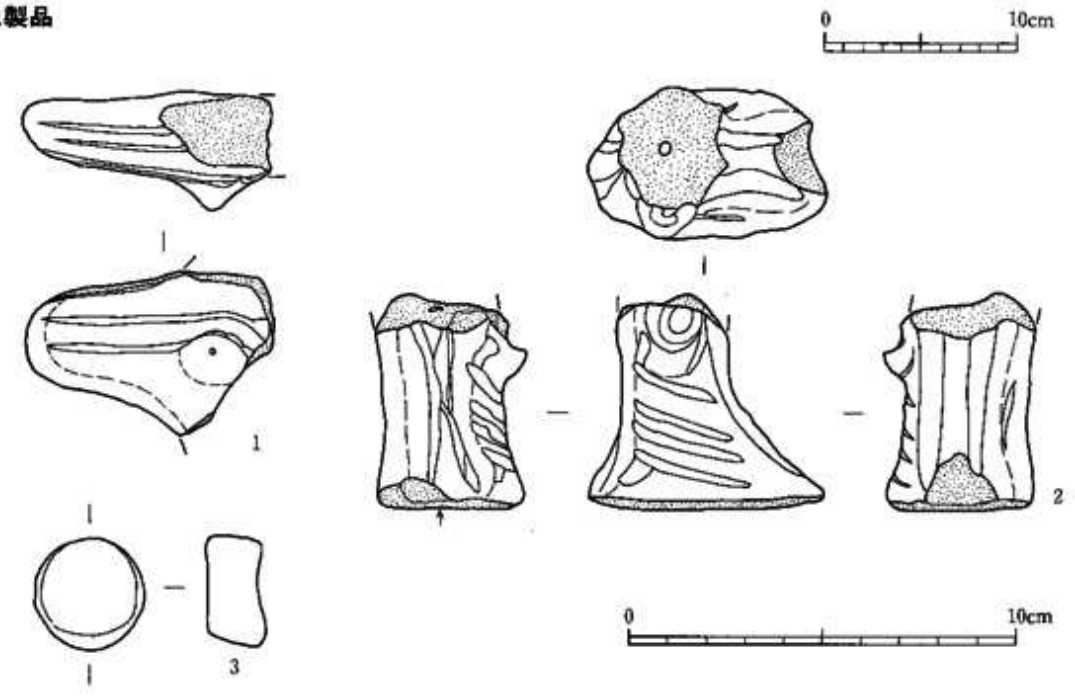
第73図　矢作遺跡石器実測図(1)



第74図　矢作遺跡石器実測図(2)



土製品



第75図　矢作遺跡石器実測図(3)、土製品実測図

表3　矢作遺跡　遺構一覧

住居址

遺構No.	図No.	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸×深さcm 南北×東西×深さcm	規模 床面積m²	所属時期	備考
1	60	N 9～12・E 2～7	N－64°－W	楕円形	408× 340× 6	10.77	縄文中期前葉	埋甕炉
2	61	S 1～N 3・W 5～10	N－66°－W	楕円形	500× 398× 8	14.06		
3	61	S 5～N 1・W10～14	N－32°－W	楕円形？	(644×536)×22	(26.87)	縄文中期前葉	
4	62	S 4～7・E16～20	N－49°－W	楕円形	408×(356)×36	(9.39)	縄文中期前葉	
5	62	S10～12・E18～20	N－42°－W	楕円形	268× 236×48	3.38	縄文中期前葉	
6	62	N 1～7・E 4～11	N－41°－W	円形？	(572)×560×	(26.12)	縄文中期前葉	埋甕炉・埋甕
7	62	N 3～6・W26～33	N－11°－W	隅丸方形	(408)×396×20	(12.59)		

建物址

No.	図No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模（m）	柱間寸法（m）	柱穴規模（cm） No.	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見	時期
1	64	正方形	N－108°－E	2間×2間	桁 1.6～2.8	1	46	40	38	楕円形	柱痕		
						2	48	38	20	楕円形	平石		
						3	20	16	12	円形			
						4	36	32	14	楕円形			
						5	42	40	14	円形	柱痕		
		総柱式		4.5×4.1	梁 1.8～2.2	6	20	18	10	円形			
						7	28	28	8	円形	柱痕		
						8	32	30	8	円形			
						9	48	42	16	楕円形	柱痕		
						10	32	30	8	楕円形			
						11	28	28	10	円形	柱痕		
						12	34	32	20	円形	柱痕		

竪穴状遺構

遺構No.	図No.	位置	長軸方向	平面形	規模 長軸×短軸×深さcm	規模 床面積m²	所属時期	備考
1	65	N 7～10・W 1～5	N－74°－E	楕円形	284× 240×12	5.0		
2	65	N 4～8・W 3～6	N－ 3°－W	楕円形	384× 292× 8	8.5		
3	65	N10～11・W 3～7			×17			
4	66	NS 0～S 3・E 1～W2	N－87°－E	円形	244× 232×16	4.3	縄文中期前葉	
5	66	N 3～6・W24～27	N－84°－W	不整形	268×(216)× 7	(4.6)		
7	66	N 2～6・W 2～6	N－88°－W	円形	404× 388×16	11.1		
8	67	N 5～8・W12～15			×13			
9	67	S 6～12・E13～18	N－19°－W	不整形	620× 412×13	(18.8)		

表 4　矢作遺跡石器一覧表

1　石鏃

No.	図No.	分類 茎部	分類 基部	分類 側縁	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	I	凹	無	?	3住 No.9	(2.39)	(1.21)	0.34	(0.70)	黒曜石	C	
2		円	〃	V	〃 P_{10}	2.30	1.80	0.51	1.70	チャート	O	未成品
3		凹	〃	IV	3住	(1.66)	(1.43)	(0.26)	(0.85)	〃	D	〃
4		〃	〃	〃	〃	(1.92)	(1.30)	0.21	(0.45)	黒曜石	B	
5		〃	〃	〃	〃	(1.80)	(1.26)	0.40	(0.70)	チャート	D	
6	2	〃	〃	〃	4住 No.2	1.97	1.28	0.35	0.75	〃	O	
7		〃	〃	III	〃 No.12	(2.49)	(1.22)	0.39	(1.10)	黒曜石	B	
8	3	〃	〃	I	〃 No.18	(1.94)	1.73	0.33	(1.00)	チャート	A	
9	4	?	?	?	〃 床	2.60	2.26	0.69	3.95	〃	O	未成品
10		凹	無	?	4住	(2.01)	(1.03)	0.46	(0.70)	黒曜石	C	
11		〃	〃	IV	〃	(1.96)	(1.24)	0.24	(0.35)	チャート	〃	
12		?	?	?	7住	(2.61)	(1.79)	(0.56)	(1.95)	〃	E	
13	5	凹	無	IV	1建 P_{10}	(2.84)	(1.76)	0.39	(1.75)	〃	B	鋸歯状側縁
14	6	〃	〃	III	4竪 No.6	1.99	1.22	0.33	0.50	黒曜石	O	
15		〃	〃	IV	4竪	(1.74)	1.85	(0.31)	(0.95)	チャート	A	
16		〃	〃	〃	5竪	(1.58)	(1.31)	0.31	(0.45)	黒曜石	B	
17		〃	〃	〃	9竪	(1.40)	(1.50)	0.37	(0.90)	チャート	A	
18	7	〃	〃	〃	1土	(1.96)	1.23	0.28	(0.45)	黒曜石	〃	
19		〃	〃	〃	22土	1.65	1.40	0.24	0.50	チャート	O	
20		〃	〃	?	25土	(2.77)	(1.52)	0.66	(1.70)	黒曜石	C	
21		?	?	?	34土	(1.38)	(1.04)	(0.28)	(0.35)	〃	F	
22		凹	無	IV	35土	(1.96)	(1.30)	0.28	(0.60)	チャート	D	
23		〃	〃	〃	46土	2.32	1.64	0.59	1.65	〃	O	
24		〃	〃	?	66土 No.3	(2.29)	(1.48)	0.37	(0.95)	黒曜石	C	
25		〃	〃	?	〃 No.6	(1.88)	(0.90)	0.37	(0.45)	〃	E	
26	8	平	〃	I	P17	1.99	1.29	0.29	0.80	チャート	O	
27		?	?	?	P25	2.15	1.56	0.28	1.20	〃	〃	未成品
28		凹	無	III	P69	(2.30)	1.57	0.41	(1.10)	〃	A	
29	9	〃	有	?	P70	(2.74)	(1.73)	(0.40)	(1.30)	黒曜石	F	
30	10	〃	〃	V	1溝 No.2	2.06	(1.40)	0.42	(0.75)	〃	B	
31		〃	〃	I	〃 1区	(1.65)	(1.49)	0.36	(0.70)	チャート	〃	
32		?	?	?	〃	(1.81)	(1.21)	(0.23)	(0.45)	黒曜石	F	未成品
33	11	円	無	V	1溝 4区	(2.20)	1.93	0.57	(3.05)	チャート	A	〃
34	12	凹	〃	IV	〃 5区	1.65	1.27	0.29	0.40	黒曜石	O	
35		〃	〃	V	〃	(1.52)	1.43	0.30	(0.50)	〃	A	
36		〃	〃	IV	〃	(2.56)	(1.73)	0.36	(1.60)	チャート	G	
37		〃	〃	〃	〃	1.85	1.21	0.37	0.80	黒曜石	O	未成品
38	13	平	〃	〃	1溝	2.64	1.73	0.40	1.60	チャート	〃	〃
39		凹	〃	V	A区 検	2.21	(1.51)	0.47	(1.05)	〃	E	
40		〃	〃	?	〃	(－)	(－)	(－)	(0.30)	〃	G	
41		〃	〃	V	〃	(1.57)	1.48	0.40	(0.95)	〃	A	
42		?	?	?	〃	1.65	1.23	0.26	0.60	黒曜石	O	未成品
43		凹	無	IV	〃	1.61	1.27	0.36	0.50	〃	〃	
44	14	平	〃	V	〃	2.89	1.85	0.76	3.25	チャート	〃	未成品？
45		?	?	?	〃	2.77	2.40	0.84	5.35	〃	〃	未成品
46	15	円	無	V	〃	2.14	1.80	0.76	2.50	黒曜石	〃	
47		凹	〃	?	〃	1.93	1.46	0.50	0.80	〃	〃	未成品
48		?	?	?	〃	(1.92)	(1.09)	(0.17)	(0.35)	〃	B	異形石器？
49		凹	無	IV	D区 検	(1.35)	1.56	0.52	(0.70)	〃	A	
50		〃	〃	〃	〃	(1.49)	1.52	0.36	(0.75)	チャート	〃	
51		〃	〃	V	排土	2.69	1.64	0.46	1.80	〃	O	
52		円	〃	〃	出土地不明	2.69	1.54	0.56	1.55	〃	〃	未成品？

2 石錐

No	図No	分類 形態	分類 調整	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	16	棒	両	3住 P_{12}	(2.53)	0.98	0.51	(1.15)	チャート	錐部端欠	
2	17	つ	〃	4住 No19	(2.98)	(1.36)	0.59	(1.65)	〃	頭部欠	
3	18	〃	?	〃 床	(2.39)	2.01	0.56	(3.00)	〃	錐部欠	
4		〃	両	5住	(1.90)	1.36	0.47	(1.20)	〃	〃	
5		〃	〃	5竪	2.94	1.94	0.61	2.60	〃	完形	
6	19	〃	〃	8竪	4.29	2.56	0.93	9.25	〃	〃	
7	20	棒	〃	9竪	(1.82)	0.67	0.41	(0.50)	黒曜石	頭部欠	錐部磨耗
8		つ	〃	37土	2.87	1.92	0.76	4.00	チャート	完形	石鏃未成品？
9		〃	〃	P66	2.51	(1.68)	0.56	(2.20)	〃	頭端欠	〃
10		〃	〃	1溝 5区	(2.70)	(1.87)	(0.37)	(1.65)	〃	頭部欠	
11	21	〃	〃	A区 検	2.30	1.90	0.56	1.85	〃	完形	錐部磨耗
12		〃	〃	〃	2.87	2.15	1.01	3.95	黒曜石	〃	
13		棒	〃	〃	3.30	0.90	0.70	2.20	チャート	〃	
14	22	〃	〃	〃	1.83	0.65	0.31	0.40	〃	〃	

3 ピエス・エスキーユ

No	図No	分類 剥離	分類 縁部	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	23	I		2住 P_1	1.82	1.37	0.47	1.15	黒曜石		
2	24	〃	▽	3住 P_3	1.62	0.97	0.67	1.30	〃		
3	25	〃		3住	2.03	0.83	0.61	1.15	〃		
4		〃		4住	2.05	1.46	0.80	2.15	〃		
5		〃		58土	2.16	1.06	0.60	1.45	〃		
6	26	〃		59土	1.44	1.40	0.39	0.80	〃		
7		〃		1溝 5区	1.28	1.02	0.25	0.35	〃		
8		〃		〃	1.54	1.16	0.59	0.80	〃		
9	27	〃		1溝 6区	2.23	1.31	0.70	1.95	〃		
10		〃		A区 検	2.12	1.81	0.61	2.05	〃		
11		II		〃	1.58	1.34	0.72	1.35	〃		
12	28	I	○	〃	1.92	1.46	1.03	2.75	〃		
13	29	〃		C区 検	2.16	1.31	0.90	2.50	〃		

4 石匙

No	図No	分類 位置	分類 刃部	分類 調整	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	30	横	外	両	3住 No21	(2.99)	(3.39)	0.90	(8.65)	チャート	片側欠	
2	31	?	?	〃	1溝 5区	(3.97)	(3.90)	0.71	(10.85)	〃	刃部欠	
3	32	斜	?	〃	A区 検	(3.43)	(2.96)	(0.85)	(8.15)	〃	〃	
4	33	〃	直	〃	排土	6.56	(6.88)	1.05	(56.20)	硬砂岩	両端欠	

5 スクレイパー

No.	図No.	分類 刃部	調整	素材	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	34	直	両	縦	1住	4.68	8.62	1.59	84.00	珪岩	完形	打製石斧の転用
2	35	円	〃	?	2住 P_4	2.56	2.60	0.57	4.40	チャート	〃	
3	36	内	〃	横	4住	(2.94)	(4.67)	0.86	(9.30)	〃	刃部欠	
4		外	片	〃	〃	2.47	2.80	0.70	5.20	〃	完形	
5		〃	両	〃	〃	(4.39)	(5.26)	(0.58)	(14.80)	緑色凝灰岩	片側欠	
6		〃	片	〃	5住 No.1	2.33	4.63	0.88	7.65	チャート	完形	
7	37	〃	両	?	3土	5.63	6.56	1.02	31.80		〃	
8	38	直	片	縦	47土	3.97	2.94	0.92	13.40	チャート	〃	
9		〃	〃	?	91土	5.23	3.10	1.40	19.50	〃	〃	
10		〃	〃	?	1溝 2区	3.80	3.50	0.98	12.70	〃	〃	
11		外	〃	縦	A区 検	2.80	1.84	0.69	2.35	黒曜石	〃	石鏃未成品?
12		〃	〃	〃	〃	(3.87)	(2.99)	(0.67)	(6.60)	チャート	片側欠	
13	39	〃	〃	?	〃	2.65	2.70	0.79	6.25	〃	完形	
14		〃	〃	?	〃	1.92	3.70	0.65	5.25	〃	〃	
15		?	両	?	〃	(1.30)	(1.47)	(0.39)	(1.05)	黒曜石	両側欠	

6 打製石斧

No.	図No.	分類 平面	刃部	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	使用痕 頭部	刺部	刃部	破損状況	備考
1	40	撥	円	3住 No.6	(7.6)	4.8	1.8	(68.6)	硬砂岩				B_4	
2	41	〃	偏	4住 No.17	10.5	6.6	1.5	85.4	〃				O	
3		〃	?	4住	(7.9)	(5.2)	(1.8)	(68.4)	〃				A_1	
4		?	?	〃	(6.2)	(3.8)	(1.5)	(39.1)	砂岩				C	
5	42	撥	?	5住	(14.0)	(7.4)	(1.7)	(192.2)	砂岩(ホルンフェルス)				A_3	
6		〃	?	10土	(7.3)	(4.3)	(1.3)	(40.7)	粘板岩(ホルンフェルス)				A_3	
7	43	分	円	91土	(10.7)	5.7	2.3	(142.0)	硬砂岩		●	●	B_3	
8	44	撥	〃	〃	10.0	5.0	1.8	118.3	凝灰質岩			●	O	
9	45	〃	〃	P 4	(12.7)	6.0	(2.2)	(156.8)	砂岩(ホルンフェルス)				〃	
10		?	?	1溝	(5.6)	(5.0)	(1.3)	(37.2)	砂岩				C	
11		?	?	A区 検	(9.7)	(4.8)	(1.7)	(91.1)	粘板岩(ホルンフェルス)				A_1	

7 磨製石斧

No.	図No.	分類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	残存状況	備考
1	46	定角	3住 P_3	(7.8)	(4.9)	(2.3)	(134.0)	閃緑岩	C	
2	47	〃	P13	5.9	3.3	1.0	(22.8)	凝灰質岩	A_2	
3	48	〃	A区 検	(8.4)	(3.8)	(1.9)	(95.8)	蛇紋岩	D	

8 凹・敲・磨石

No.	図No.	使用痕 凹部	敲打痕	磨面	素材	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	49	○(2+1)		○	C	5住 No.4	9.8	6.8	3.3	270	軽石	完形	
2		○(1)		○	〃	〃 No.15	(7.2)	(8.3)	(3.6)	(260)	安山岩	½欠	
3	50	○(3+3)	○	○	D	〃 No.17	12.0	7.6	3.8	485	砂岩	完形	
4	51	○(2+1)	○	○	C	5住	11.2	7.8	4.2	555	安山岩	〃	
5				○	〃	8竪	10.7	8.6	3.0	390	砂岩	〃	
6	52	○(2)		○	〃	91土	9.3	(7.6)	(4.0)	(330)	〃	½欠	
7		○(1+1)		○	F	P 9	10.5	9.7	4.1	450	安山岩(溶岩)	完形	
8	53	○(3+1+1)		○	B	1溝	(9.7)	(8.1)	(5.5)	(510)	安山岩	½欠	
9				○	〃	〃	11.9	8.3	6.4	855	安山岩(溶岩)	完形	
10				○	F	A区 検	7.7	6.9	4.1	290	砂岩	〃	
11	54		○	○	E	C区 検	(10.3)	(8.2)	(6.4)	(680)	安山岩	½欠	

第4節　松蔭寺遺跡の調査

調査地は芥子坊主山西側山麓中にあり、標高667m前後を測る。今回国道19号線と国道254号線を結ぶバイパス道路が、松本市島内平瀬から同岡田矢作に抜けるルートで計画されたことに伴い、遺跡の有無を確認するため現地踏査を行なった。その結果、松蔭寺廃寺跡および石仏群の存在が確かめられた。道路建設ルートがこの石仏群を通過することから、この一帯の調査を実施することにした。この周辺は山麓の急斜面に幾筋か尾根状台地が形成されており、石仏もこの尾根状地形の上に置かれていた。調査区は山林で灌木を手作業で切り開き調査を開始した。

1.遺構

今回の調査で確認できた遺構は、基壇状の石囲い1基と参道がある。基壇状の石囲いは、尾根状地形上部の平坦な場所にあった。一辺3mの方形に10～40cmの礫が置かれていた。石の上面は南側の一辺は水平を保っているが、他は高低にバラツキがある。これが時間の経過によって生じたものなのか、もともと石囲いの上には建造物が乗らず、ただ区画する意味を持つだけなのかは不明である。石囲いの内側中央東寄りに長径80cm、短径60cm、高さ30cmの大礫が1個置かれていた。上面は平らで調査時には石仏が3基据えられていたが、石仏は後世動かされた可能性が高く、この石の性格は石囲いと同様不明である。

次に参道とした遺構は、前述の石囲いの西辺に直交する幅1m程の踏み跡をさす。これは上部にある石囲いから北西に尾根上地形を下っていく。地形測量図には明瞭に等高線の変化として表われている。周囲の土よりも固くしまっており道と考える。

調査はこれらの遺構を測量、図化した後にトレンチを設定し土層観察を行なった。石囲いから参道に沿って入れたトレンチとこれに直交するトレンチを2本入れた。土層観察の結果は、人為的に盛り土をしたり、削平した痕跡は認められなかった。Ⅰ層は腐植土、厚さ10cm、Ⅱ層は黄褐色土、厚さ20cm、Ⅲ層は拳大～50cm以上の大礫の間に黄褐色土が入る。Ⅱ・Ⅲ層は地山と考える。

2.遺物（第78図）

鉄器2点、陶器1点、銭6点、石仏10体、台石22点が得られた。1は乘燭（ひょうそく）で瀬戸・美濃系陶器である。鉄釉がかかる。17世紀後半の所産と考える。2・3は不明鉄製品で、一説には秋葉神社信仰に関係するものと言われるが判然としない。銭貨（拓影1～6）はいずれも寛永通宝である。これらの遺物は、全て地表面から2～3cm下までで検出されている。石仏は完形のものは1点もない。上半身が欠けたもの6点、下半身を欠くもの1点、摩滅しているもの3点である。7体の石仏には文字が刻まれている。判読できる字は少なく、一部『…信士』と読めることから戒名であろうと推察される。石仏は6体が台石に乗っている。この一帯には以前数多くの石仏があったと言われてい

る。昭和30年代後半から40年代前半にブームとなり、その多くが持ち去られてしまったと地元の方から伺った。残念なことである。

今回の調査地の下方に今は廃寺となっている松蔭寺がある。この寺の沿革は明確ではないが、開基は平瀬和泉守信義と言われている（註１）。現存する文書では16世紀後半に天桂和尚（武田晴信の叔父）が住職を務めた記録があり、格式の高い寺であったことが窺える。明治初年の廃仏毀釈で取壊しになり現在に至っている。今回調査を行なった場所は宗教行事と何らかの関連が考えられる。その意味で松蔭寺との結びつきも考えていかなければならないものと思う。

3.周辺遺跡の調査　泣坂古墳

泣坂古墳群周辺の調査は、松蔭寺遺跡の調査と原因事業は同じ国道254号線の建設工事に伴う事前調査である。平成２年８月から９月にかけて調査を実施した。この建設工事用道路脇にある泣坂古墳群は数基の円墳から成るが詳しい考古学的調査が実施されておらず、全容は文献（註２）でしか摑めていない。今回調査を実施するに当たり、まずＡ・Ｂ・Ｃ地区と３ヶ所設定した。どの調査区も山林であったため、木の伐採、下草刈りから手作業で始めた。その後遺構の検出、測量、記録等の作業へ進んだ。調査の結果、Ａ地区は石積みが６基、石垣１基が確認された。Ｂ・Ｃ地区は遺構の検出はない。遺物はＡ地区で銭が３点出土したのみである。

Ａ地区で検出された石積みは直径50～100cmの範囲に人頭大の角礫が積まれていた。石垣とした遺構はＡ地区の北側にあり、小高い地形の上部にやはり人頭大～50cmの角礫が積まれていた。発見当初は付近にある平瀬城に関連する遺構かと考えたが後に畑の開墾によって出た石を積んだものとの結論に達した（註３）。

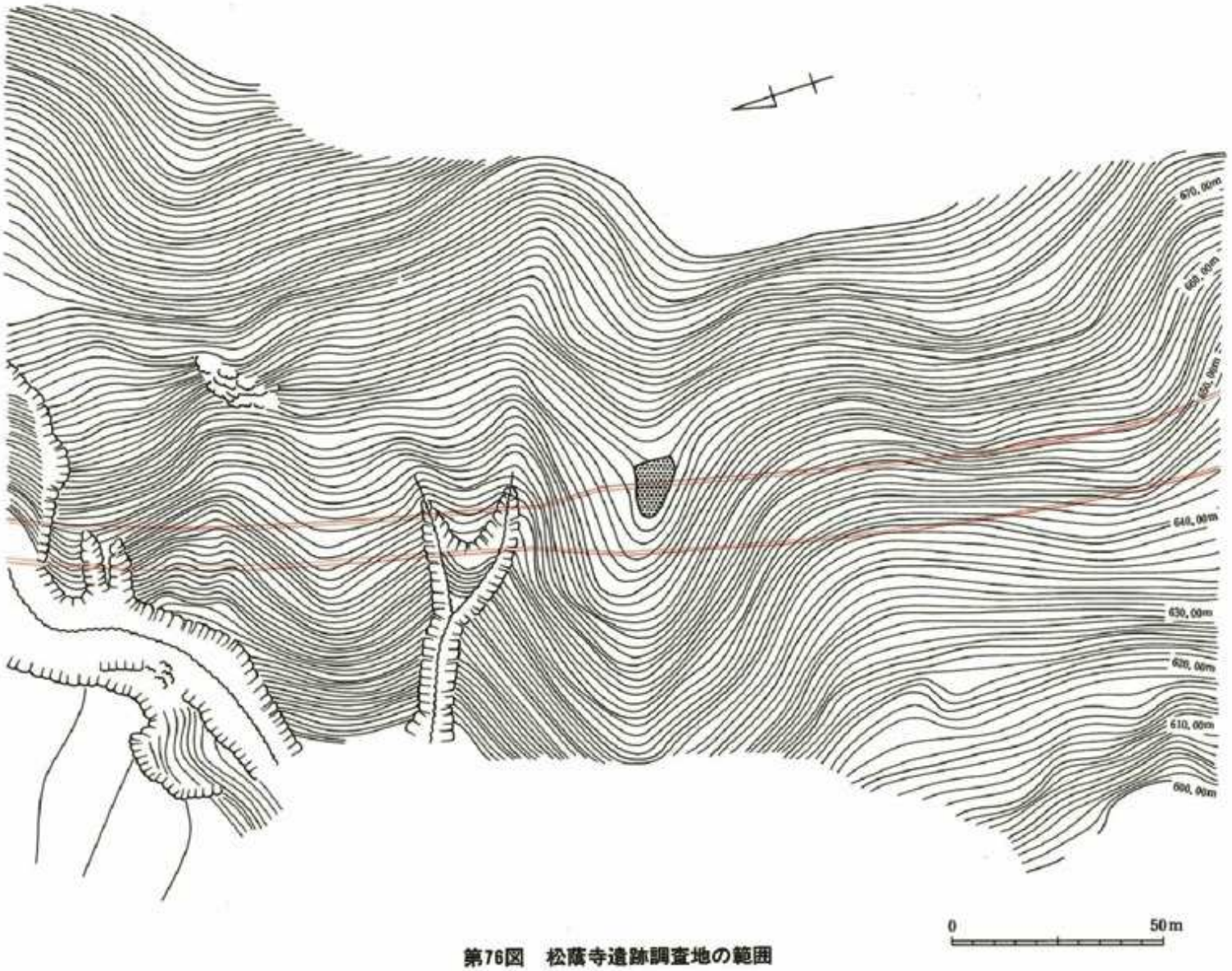
Ａ地区で出土した銭は、元豊通宝、聖宋元宝、寛永通宝の３点がある。いずれも下草刈りの最中に地表付近で出土した。

今回の調査では成果を上げることは出来なかったが、泣坂古墳群については前に述べたように詳しい調査が実施されていないため、その実体解明が強く求められている。開発事業に伴う発掘調査にばかり追われている現状ではなかなか時間的に無理かと思われるが、今後の調査に是非とも期待したい。

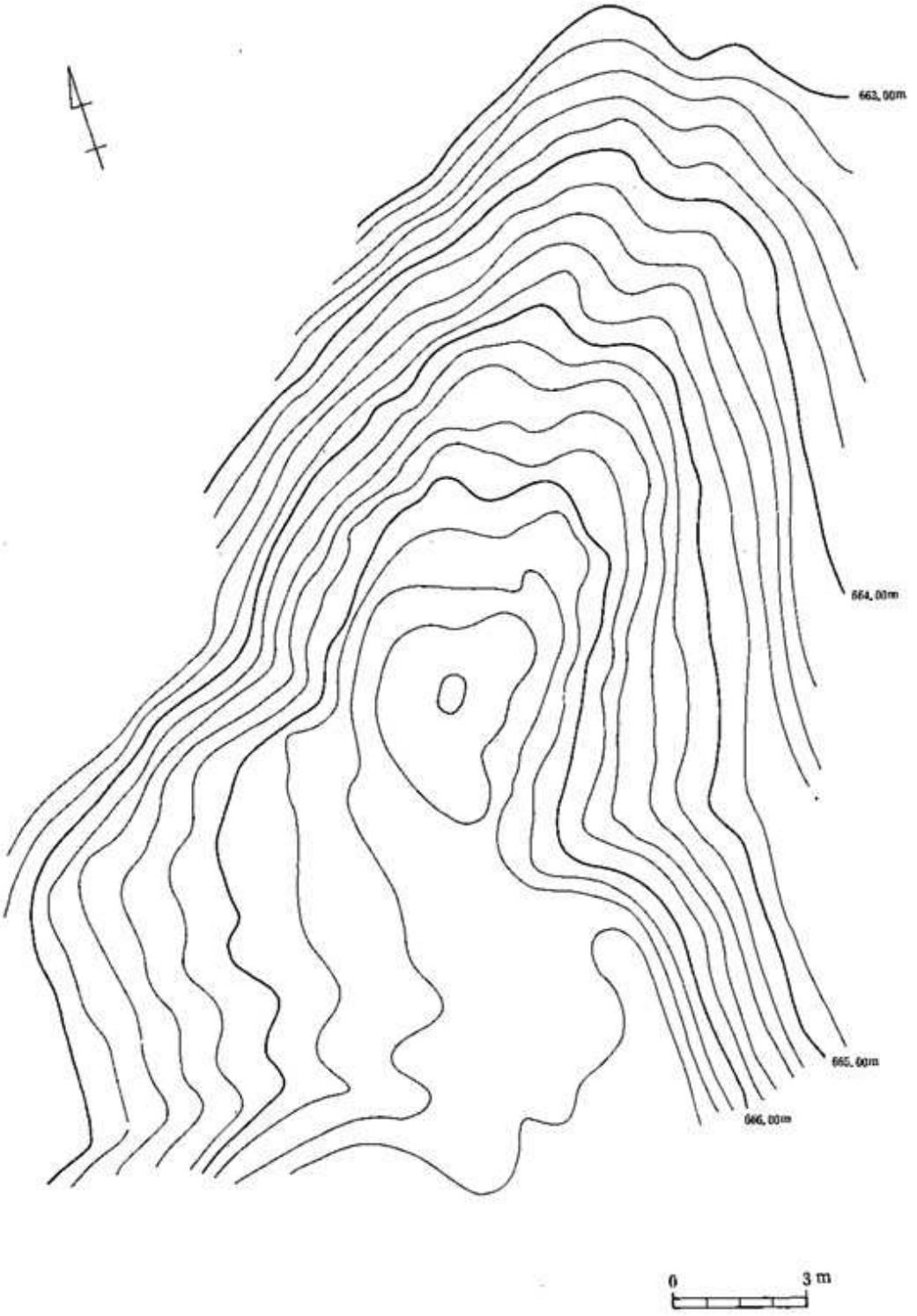
（註１）島内の歴史文化財地図

（註２）東筑摩郡・松本市・塩尻市誌　第２巻　歴史上

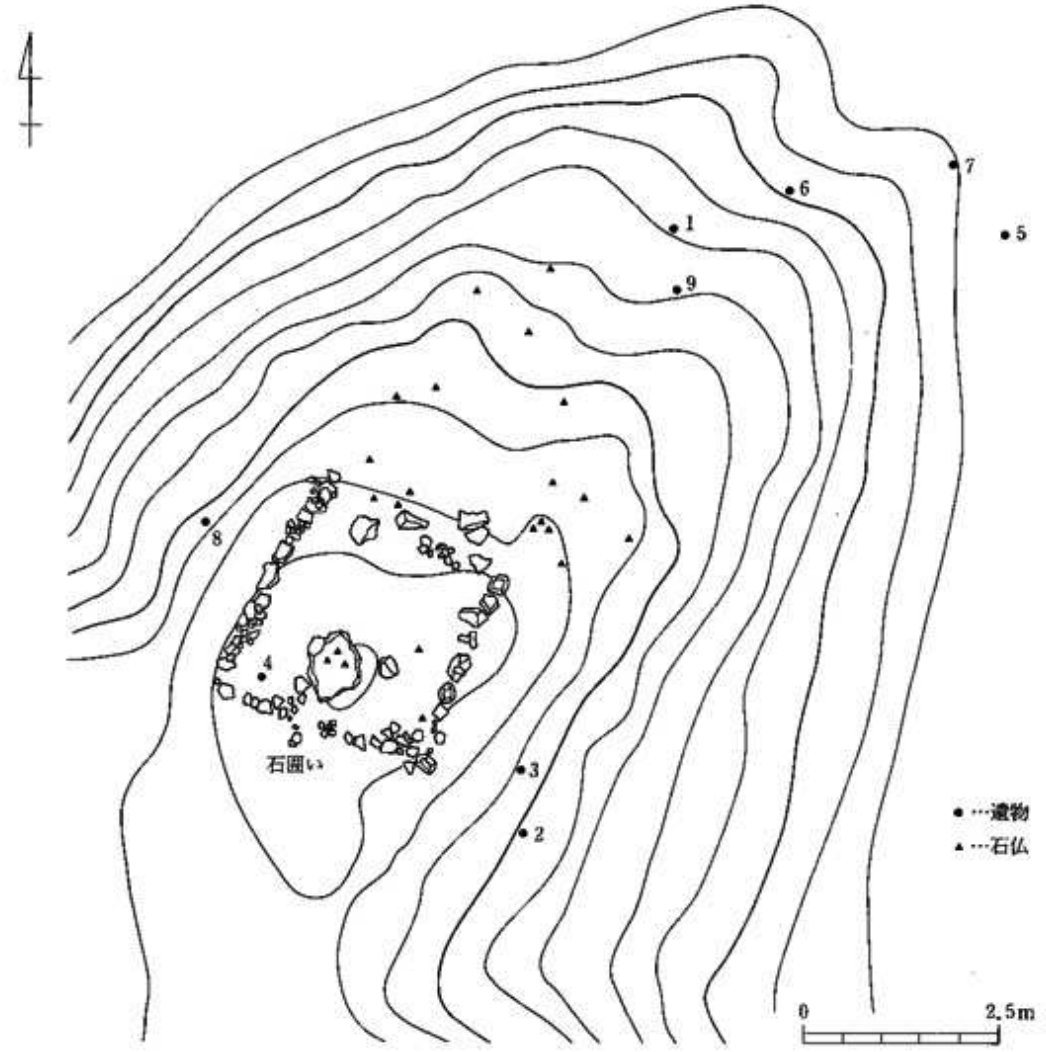
（註３）信州大学　人文学部　助教授　笹本正治氏の御教授による。

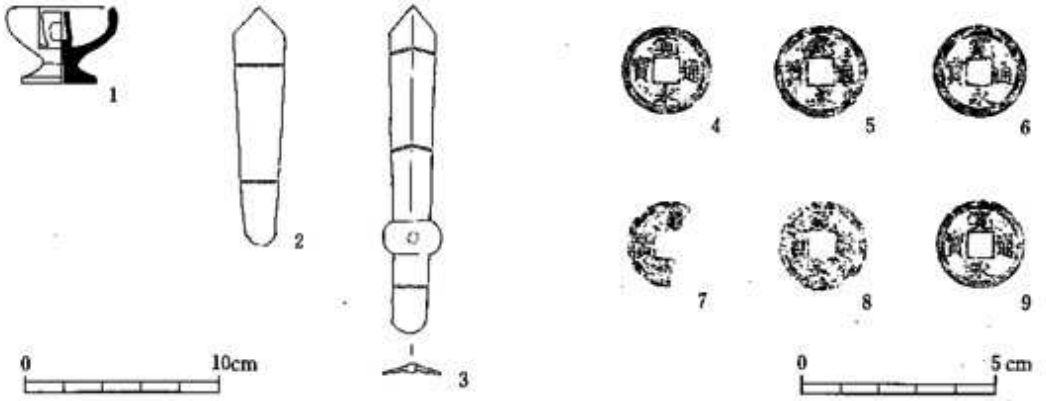


第76図　松蔭寺遺跡調査地の範囲



第77図　松蔭寺遺跡の地形図





第78図　松蔭寺遺跡遺物出土状況、遺物実測図、銭貨拓影

第79図　泣坂古墳群付近の調査範囲

第3章　調査のまとめ

今回調査した塩辛・矢作・松蔭寺の3遺跡のうち、塩辛遺跡では縄文時代中期前葉～後葉と古墳時代末～平安時代の集落、矢作遺跡では縄文時代中期前葉の集落を検出した。ここでは長期間に亘り集落が営まれた塩辛遺跡の集落の変遷について、縄文時代、古墳時代末以降に分けて所属時期の推定された住居址・建物址を中心に記述してみたい。

①縄文時代（第80図）

Ⅰ～Ⅱ次に亘る調査では、縄文時代中期中葉～後葉の集落の一部を検出することができた。以下、集落を時期別にみてみたい。

中期前葉期〈狢沢式期〉　H地区に41住1軒がある。

中期中葉1・2期〈藤内Ⅱ式期・井戸尻Ⅰ式期〉　A地区南端に19・26・27住3軒がある。

中期後葉1期〈唐草文土器Ⅰ段階期〉　A地区南端23・29住2軒がある。

中期後葉2期〈唐草文土器Ⅱ段階期〉　この時期にB地区南側に30住1軒があらわれる。A地区南端には16・18・22・24住4軒がある。又、C地区の土器集中区が形成される。

中期後葉3期〈唐草文土器Ⅲ段階期〉　A地区南端に21住、B地区南側に31・34住、C地区南西に42住、同C地区に引き続いて土器集中区がある。

中期後葉4期〈唐草文土器Ⅳ段階期〉　A地区南端に13・20・37住、B地区南側に35住がある。本遺跡の住居址群はこの時期以降は廃絶されるが、中期後葉2期に形成されたC地区の土器集中区もこの時期迄続き、廃絶される。

これらの結果をもとに集落の変遷を考えてみたい。中期前葉期ではH地区に41住のみがあるが、D～I地区の調査地は非常に細長い事から、周囲の状況は残念ながら把握できない。中期中葉1・2期になるとA地区南端に3軒の住居が認められ、中期後葉4期迄各時期1～4軒の住居址が見られる。中期後葉2期にはC地区南側に30住があらわれ、中期後葉4期迄各1～2軒の住居址がある。中期後葉3期にはC地区南西隅に42住があらわれるが、調査区の隅にあたり、周囲の状況は把握できない。このように本遺跡の集落の形態は、西側を伊深城山、東側を女鳥羽川に挟まれた南北に細長く伸びる緩やかな傾斜地に立地するため、小規模な住居址群が点在して構成していると思われる。今回の調査地内ではA地区南側・B地区南側・C地区南西・H地区の4ヶ所に確認できた。又、C地区には中期後葉2期を中心に中期後葉4期まで続く溝状の黒色土の落ち込み（土器集中区）があり、土器廃棄（ゴミ捨て？）遺構と考えられる。しかしながら、今回の調査は調査面積が5,770m²と狭い上に細長く、検出した縄文時代の4ヶ所の住居址群はいずれも調査区の端部にあたる。残念ながら遺跡の規模・範囲は捉えることができなかった。集落の変遷はその傾向を捉えたにすぎないか

もしれない。尚、本遺跡の北東250mにある和田・桜田遺跡でも発掘調査が予定されており、その成果に期待したい。

②古墳時代末以降（第80図）

塩辛遺跡は前述の縄文時代中期の他にも古墳時代末～平安時代を中心に営まれた集落でもある。南西300～900mに隣接する岡田町遺跡でも発掘調査がH３年に行われ、奈良～平安時代の110軒に及ぶ住居址、建物址21棟他を調査した。本報告と同時に報告書を刊行する（註１）。集落の営まれた時期も本遺跡に重複しており、ここでは両者を時期ごとに比較して住居址群のあり方をみてみたい。

塩辛遺跡第１期（総論編１期・７世紀第IV四半期）

古墳時代末以降の集落はこの時期に開発される。１住、２・４・５・７・９・13建で構成される。１住は同位置に建て直しが行なわれた。

塩辛遺跡第２期（総論編２期・岡田町第Ⅰ期・８世紀第Ⅰ四半期）

大形住居址２住１軒のみである。２住は礎石建ちの建物で、西壁・東壁に新旧２つのカマドが検出された。岡田町遺跡の開発はこの時期に大形住居址を中心として始まる。

塩辛遺跡第３期（総論編３期・岡田町第Ⅱ期・８世紀第Ⅱ四半期）

３・９・28住の３軒で構成される。このうち３住は準大形住居、９・28住は中形住居に分類される。岡田町遺跡でも大形住居は見られず、中形の住居で構成される点が注目される。

塩辛遺跡第４期（総論編４期・岡田町第Ⅲ期・８世紀第Ⅲ四半期）

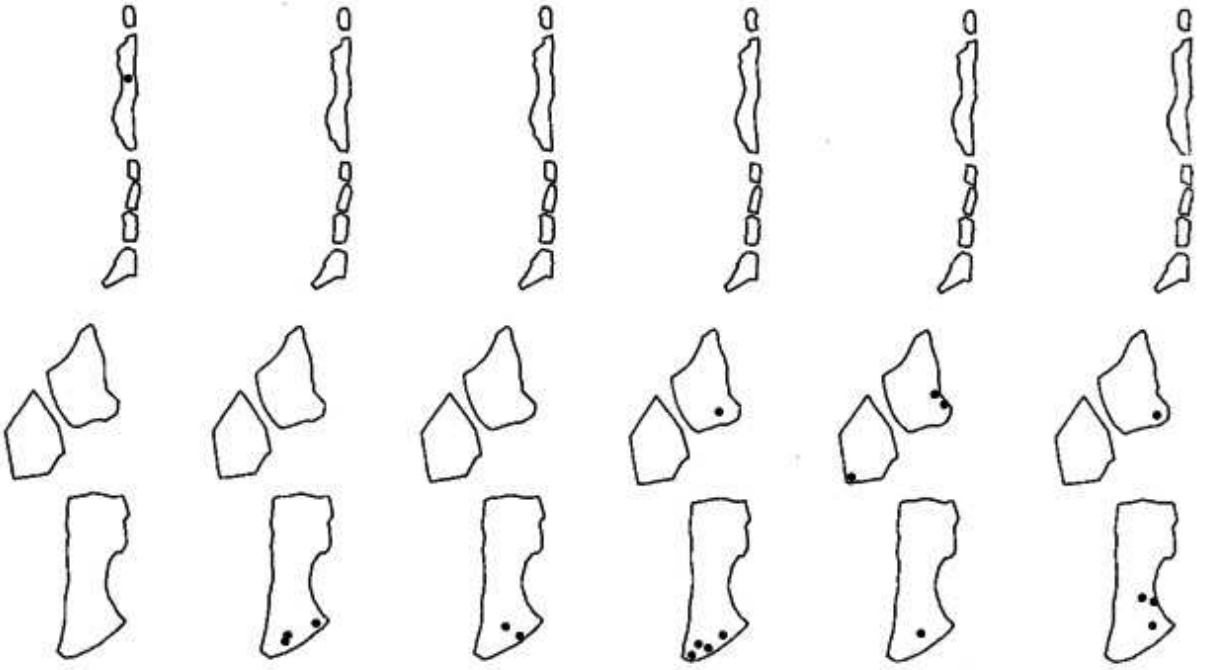
４・６・40住の３軒で構成される。４住からは円面硯と須恵器の特殊器台が出土している。岡田町遺跡の住居址は減少し、散在的となる。

塩辛遺跡第５期（総論編５期・岡田町第IV期・８世紀第IV四半期）

５・８・10・17住の中形住居４軒で構成される。この時期以降集落は廃絶する。一方岡田町遺跡ではこの時期より住居の数は爆発的に増加し、本遺跡とは対照的である。Ｄ区では核となる大形の住居址が再びみられ、集落が計画的に形成された可能性が考えられる。岡田町遺跡はこのあと岡田町IV期（総論編７期・９世紀第Ⅲ四半期）迄この傾向は続き、岡田町VII期（総論編８期・９世紀第Ⅲ四半期）になると住居址数が減少し、分布の中心は、南側のＡ・Ｂ・Ｃ区が中心となっている。

塩辛遺跡の集落の展開を岡田町遺跡と比較して述べてきたが、これらの結果をもとに本遺跡の集落の変遷を考えてみたい。本遺跡は７世紀第IV四半期（１期）に初めて開発される。Ａ地区北側を中心に重複せずに隣接して配置される５軒の建物址群は、規模・配置・主軸方向等からみて意図的に配置された集落と考えられる。又、周辺には時期不明の建物址が５棟あるが、おそらく同時期に属するものであろう。一方、この時期に属する住居址は１住１軒のみである。この住居址と建物址の構成を考えてみると、該期における松本市域の他遺跡に比べ異常に建物址が多い点が注目される。このうち２建からは提瓶形硯・須恵器の特殊器台等と共に窯壁・自然釉の付着した須恵器蓋が出土していることから、塩辛遺跡１期の集落の開発は須恵器生産との関連があるものと考えられる。

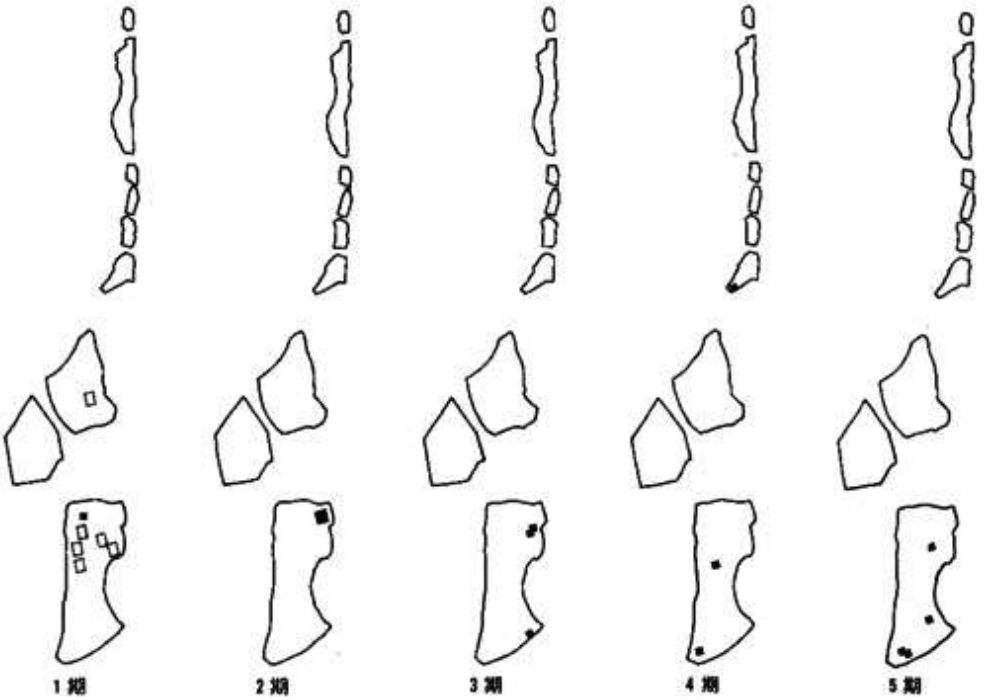
縄文時代



中期前葉期　中期中葉１・２期　中期後葉１期　中期後葉２期　中期後葉３期　中期後葉４期

● 縄文時代の住居址
■ 古墳時代末以降の住居址
□ 古墳時代末以降の建物址

古墳時代末以降



１期　２期　３期　４期　５期

第80図　塩辛遺跡集落変遷模式図

2期には大形住居址1軒のみになり、3期には準大形の1軒と中形2軒、3期以降はすべて中形で、3期3軒、4期3軒、5期4軒となる。これは2期以降は集落の中心が岡田町遺跡へ移動し、その展開が本遺跡に及んだ結果とみたい。本遺跡の廃絶後の岡田町遺跡の展開は、5期（8世紀第Ⅳ四半期～9世紀初頭）に大形住居址を核として爆発的に住居址の数が増加している。遺構の配置から計画的に集落が形成されたと考えられる。5期以降大形住居はなくなるが、住居址の数は9世紀第Ⅲ四半期まで減少しない。9世紀第Ⅳ四半期には住居址は減少し小形住居が主流となり、分布は南側のA・B・C区が中心となる。これ以降は岡田町遺跡の集落は断絶するが、北部古窯址群での須恵器の杯が生産が衰退する時期と一致している点が注目される。

岡田町遺跡廃絶後の平安時代の集落は南東の岡田西裏（S54・S58・S60・H1～4年度発掘調査実施）、原畑（H4年度調査）、宮の上（H3～4年度調査）等（第1図　遺跡の位置と周辺遺跡参照）に移動すると考えられる。以上のように本遺跡は岡田町遺跡と密接な関係があり、古墳時代末～奈良・平安時代の土器製作を背景とした集落展開の一端を物語っている。今後、岡田西裏・原畑遺跡の整理作業が進めば、地区の平安時代全般の展開が解明されるであろう。

（註1）参考文献2.

参考文献

1.堤　隆　1992「信濃国佐久郡における奈良・平安時代の集落構造―御師屋遺跡群における集落構造把握の試み―」長野県考古学会誌64

2.松本市教育委員会　1993　「松本市二反田・岡田町遺跡」

3.　〃　1992　「松本市宮の前遺跡」

4.　〃　1984　「松本市岡田西裏遺跡緊急発掘調査概報」

5.　〃　1986　「松本市岡田西裏遺跡」

6.　〃　1992　「松本市塩辛遺跡Ⅰ」

写　真　図　版

調査前の状況（A地区）

同（B地区）

同（C地区）

同（D～H地区）

表土剝除

同

検出作業

同

第１図版　塩辛遺跡(1)

第 1 号住居址

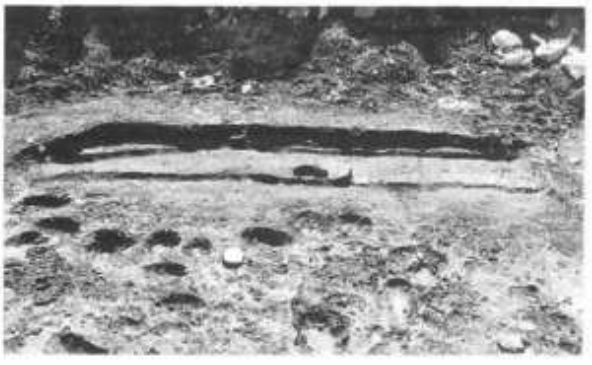
第 2 号住居址

第 3 ・ 9 号住居址

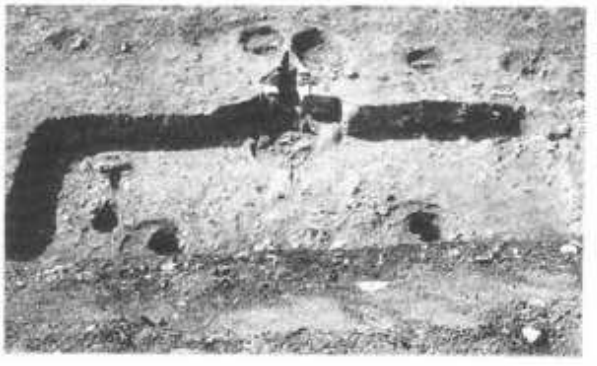
第 4 号住居址　遺物出土状況

第 4 号住居址

第 6 号住居址



第 7 号住居址



第 8 号住居址

第 2 図版　塩辛遺跡(2)

第 9 号住居址

第10号住居址

第15号住居址

第16号住居址

第17号住居址

第19号住居址

第20号住居址

第21号住居址

第 3 図版　塩辛遺跡(3)

第22号住居址

同　炉

第24号住居址　遺物出土状況

第26号住居址

第27号住居址　炉

第27号住居址

第28号住居址　遺物出土状況

第29号住居址　炉

第 4 図版　塩辛遺跡(4)

第30号住居址　遺物出土状況

同　炉検出状況

同　炉半割状況

同　炉

第30号住居址

同

第31号住居址　炉検出状況

同　炉半割状況

第 5 図版　塩辛遺跡(5)

第31号住居址　炉半割状況

第31号住居址

第34号住居址　埋甕

第34号住居址

第35号住居址　遺物出土状況

第35号住居址　炉遺物出土状況

同　炉

第35号住居址

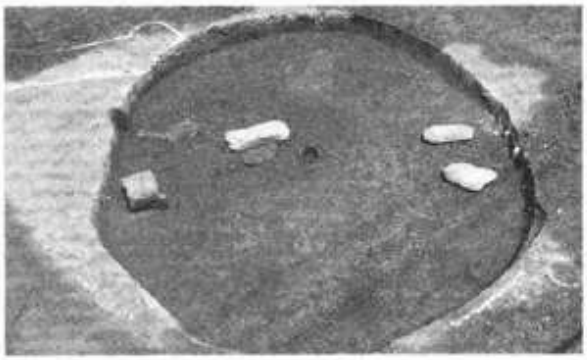
第 6 図版　塩辛遺跡(6)

第36号住居址　炉

第37号住居址　遺物出土状況

第37号住居址　炉遺物出土状況

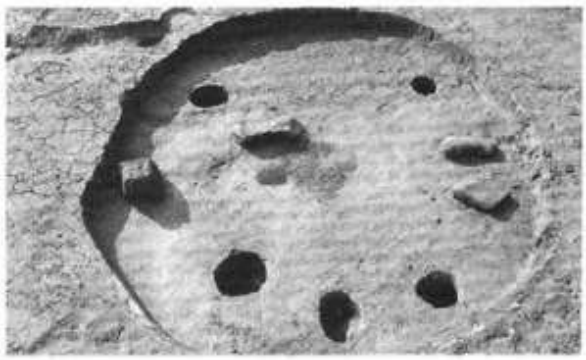
第39号住居址



第41号住居址　埋甕炉

同　埋甕炉半割状況

同　遺物出土状況



第41号住居址

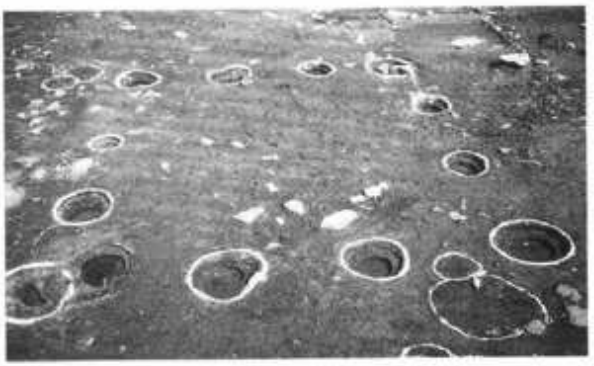
第 7 図版　塩辛遺跡(7)

第42号住居址　埋甕炉

同　埋甕

第 2 号建物址

第 4 号建物址



第 5 号建物址

第 6 号建物址

第 7 号建物址

第 8 号建物址

第 8 図版　塩辛遺跡(8)

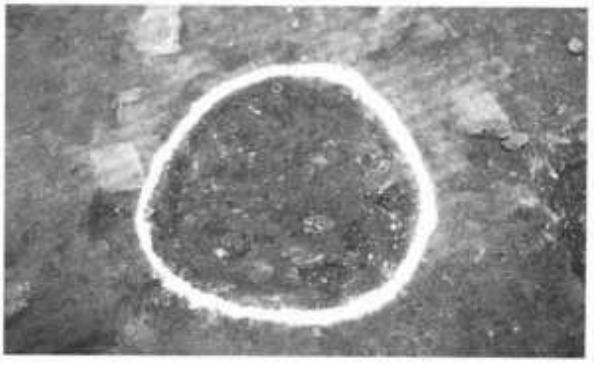
第13号建物址

第 6 号竪穴状遺構

第 7 号竪穴状遺構　遺物出土状況

第 7 号竪穴状遺構

第 1 号火葬墓



P 456

第 4 号溝址

第 5 号溝址

第 9 図版　塩辛遺跡(9)

1

8

18

27

第10図版　塩辛遺跡出土土器（縄文時代１）

28

29

31

32

第11図版　塩辛遺跡出土土器（縄文時代２）

35

41

51

56

第12図版　塩辛遺跡出土土器（縄文時代３）

57

60

62

同（内面）

103

102

第13図版　塩辛遺跡出土土器（縄文時代４）

1

4

12

13

17

19

第14図版　塩辛遺跡出土土器（古墳時代以降１）

27

32

33

46

77

79

81

82

第15図版　塩辛遺跡出土土器（古墳時代以降２）

83

87

109

110

112

124

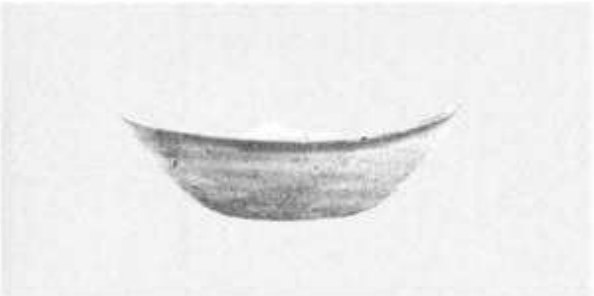
127

144

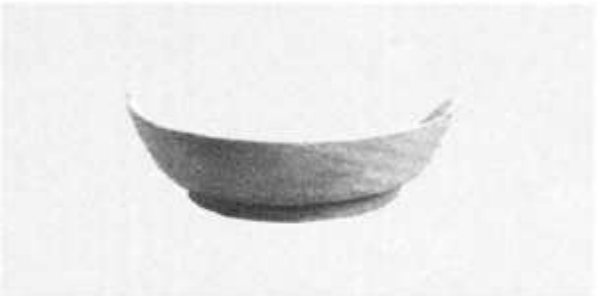
第16図版　塩辛遺跡出土土器（古墳時代以降３）

145

147



150



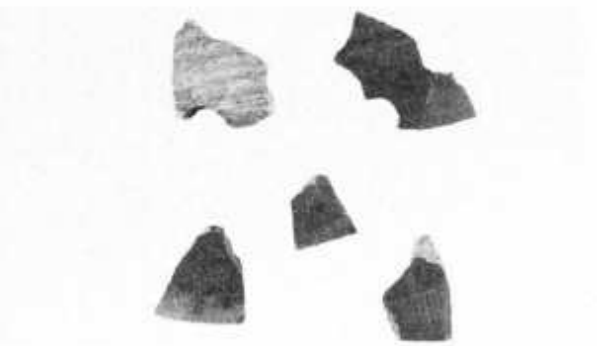
153

155

157

170

165

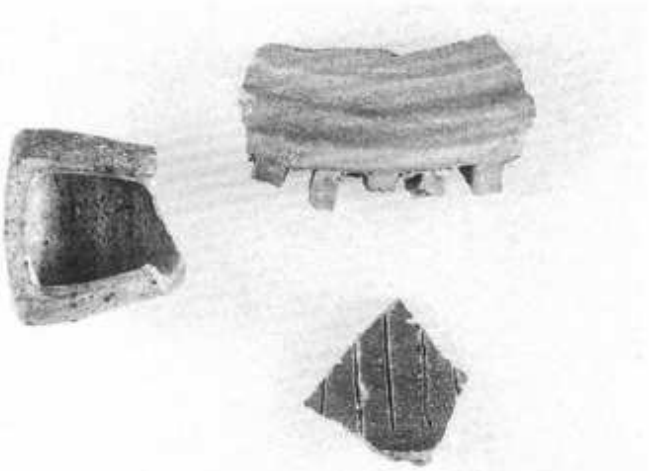


岡田地区出土須恵器器台　2

第17図版　塩辛遺跡出土土器（古墳時代以降４）

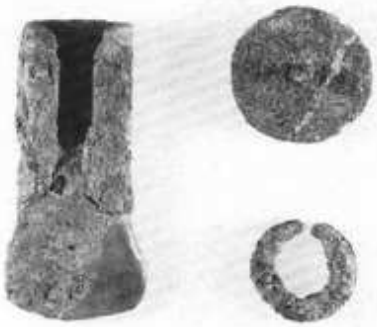
土製品（縄文時代）

土製品（古墳時代以降）



硯

提瓶形硯　200

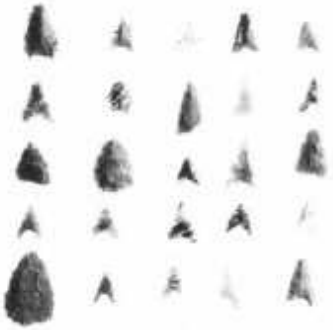


鉄器

瓦　1

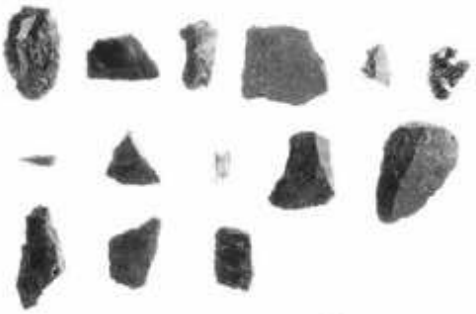
第18図版　塩辛遺跡出土土製品・硯・鉄器・瓦

石製品



石鏃

石錐，ピエス・エスキーユ



スクレイパー

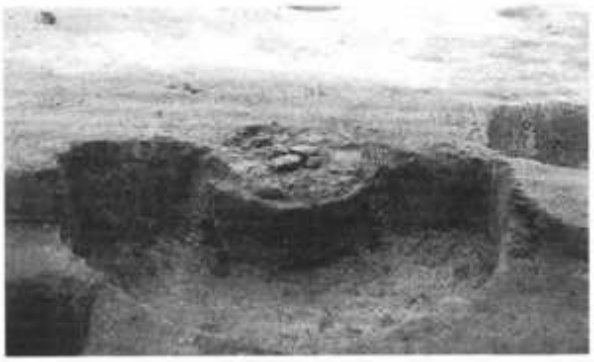
打製石斧

打製石斧

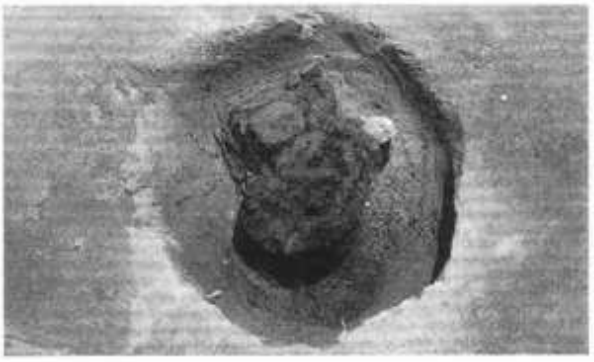
凹・敲・磨石

凹・敲・磨石

第19図版　塩辛遺跡出土石器・石製品



第１号住居址　埋甕



同

第１号住居址

第２号住居址

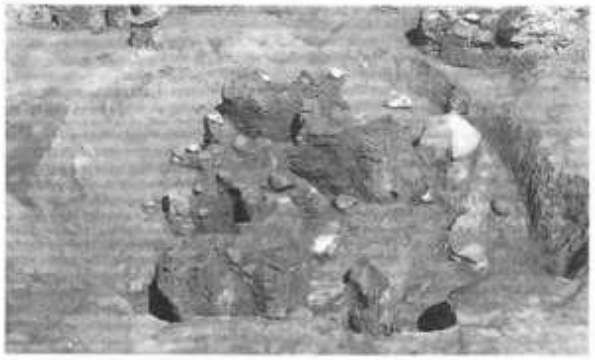
第３号住居址　遺物出土状況

第３号住居址

第４号住居址　遺物出土状況

第４号住居址

第20図版　矢作遺跡(1)



第５号住居址　遺物出土状況

第５号住居址

第６号住居址

第７号住居址

第１号建物址

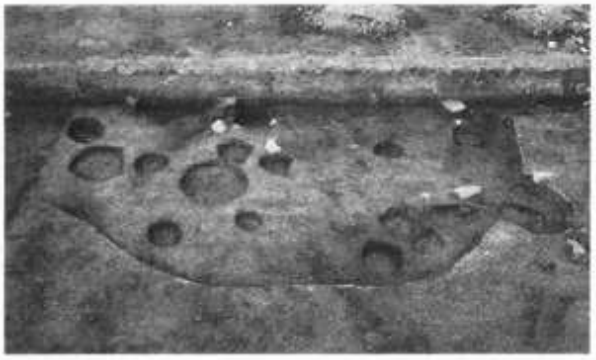
第１・２号竪穴状遺構

第４号竪穴状遺構

第５号竪穴状遺構

第21図版　矢作遺跡(2)

第７号竪穴状遺構



第８号竪穴状遺構

第９号竪穴状遺構

第１号土坑

第10号土坑　遺物出土状況

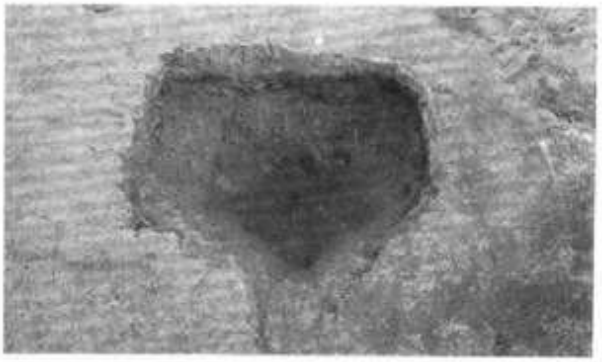
第10号土坑

第21号土坑　遺物出土状況

第39号土坑

第22図版　矢作遺跡(3)

第63号土坑　遺物出土状況



第63号土坑

第72号土坑

第１号溝址

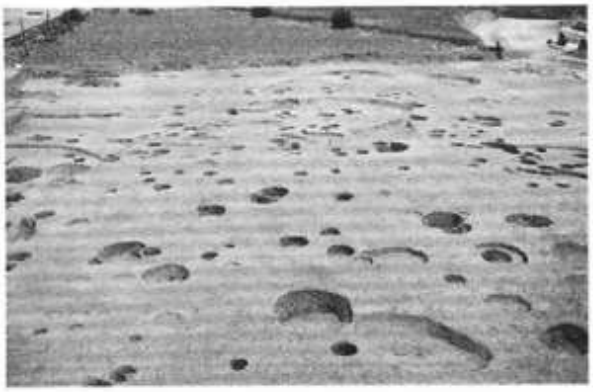
第１号溝址

第２号溝址

第23図版　矢作遺跡(4)

第3号溝・第8号竪穴状遺構

A地区調査終了



同

D地区調査終了

C地区調査終了

D地区調査終了

作業風景

記念撮影

第24図版　矢作遺跡(5)

1

4

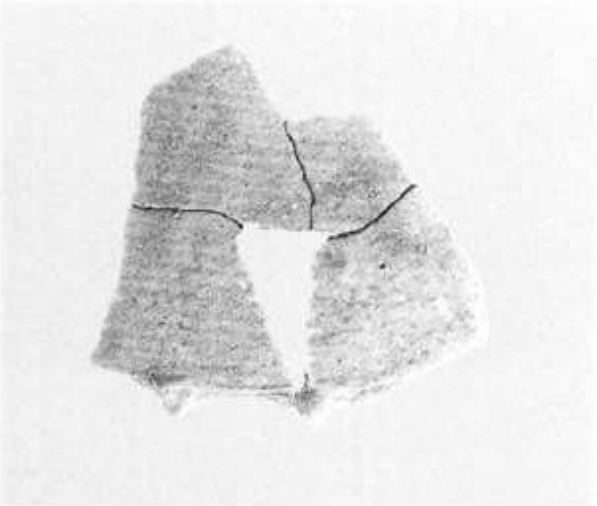
5

6

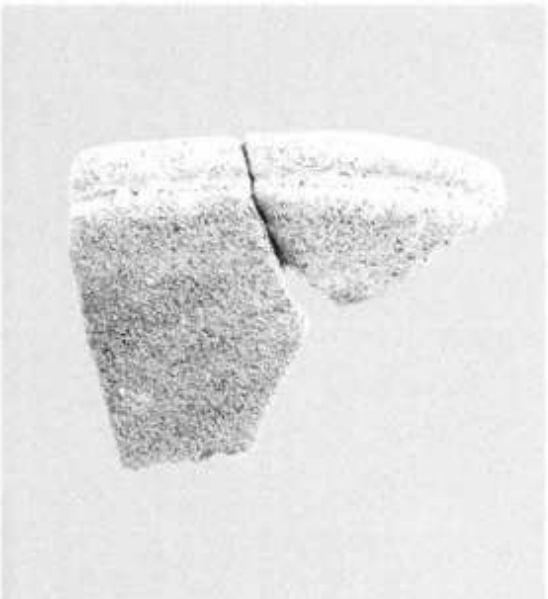
7

第25図版　矢作遺跡出土土器(1)

8



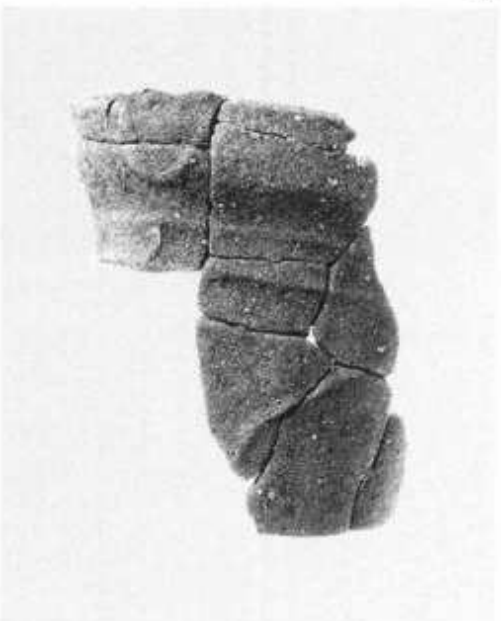
9



11

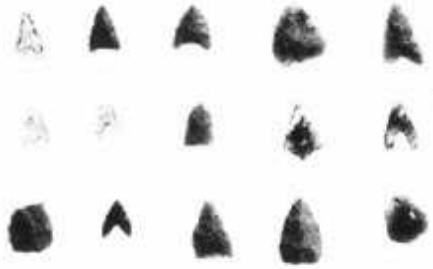
13

14



15

第26図版　矢作遺跡出土土器(2)



石鏃

ピエス・エスキーユ　石錐

石匙

スクレイパー

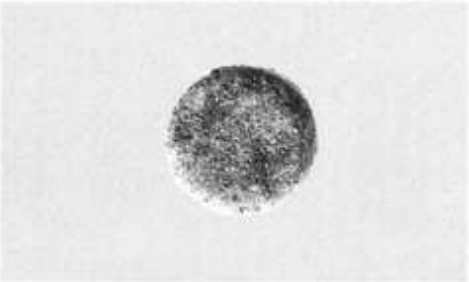
打製石斧

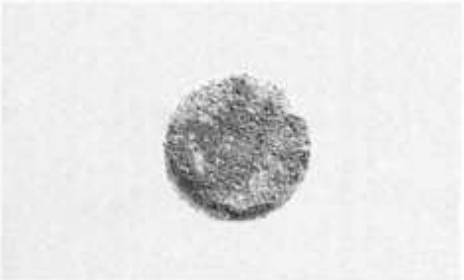
磨製石斧

凹・敲・磨石

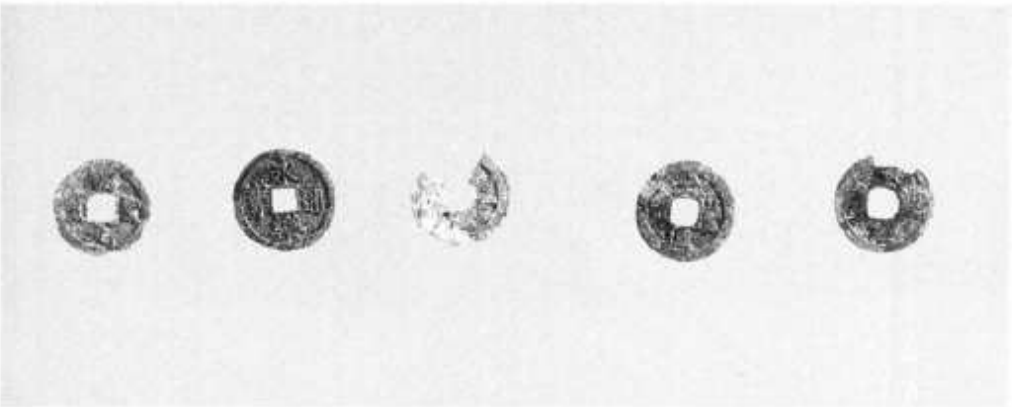
第27図版　矢作遺跡出土石器

土偶





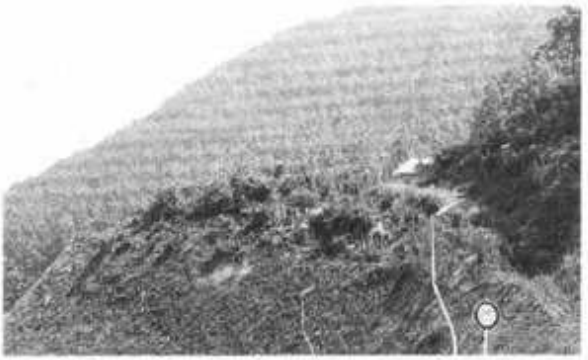
耳栓



銭貨

第28図版　矢作遺跡出土土製品・銭貨

調査前の状況（北から）



同（南から）

調査地全景

作業風景

石囲い（遠景）

同（近景）

松蔭寺廃寺跡

松蔭寺廃寺跡に残る石仏

第29図版　松蔭寺遺跡(1)

石仏出土状況

同

同

石仏

同

同

同

同

第30図版　松蔭寺遺跡(2)

A地区南側

同

同

同　作業風景

A地区北側

同　トレンチ調査

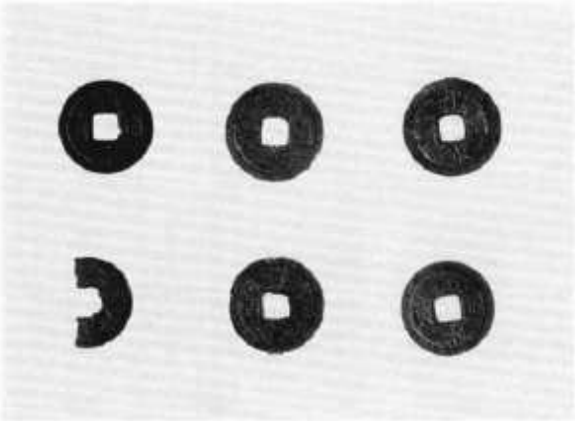
A地区北端

同

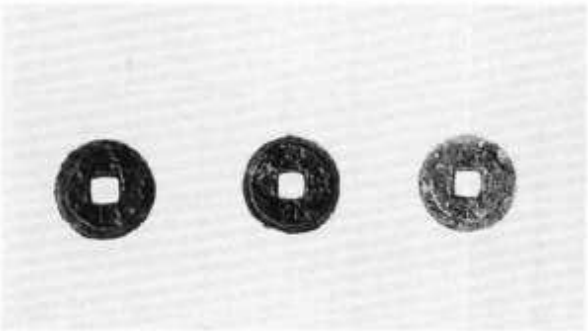
第31図版　泣坂古墳群付近の調査

陶器　1

鉄器　2　3



松蔭寺遺跡　出土銭貨



泣坂古墳群付近の調査出土銭貨

第32図版　松蔭寺遺跡・泣坂古墳群付近の調査出土遺物

松本市文化財調査報告　No.105

松本市

塩辛遺跡Ⅱ・Ⅲ
矢作遺跡
松蔭寺遺跡

平成5年3月22日　印刷
平成5年3月22日　発行
編集　松本市教育委員会
〒390 長野県松本市丸の内3－7
TEL0263 (34) 3000
発行　松本市教育委員会
印刷　中信凸版印刷株式会社